

田中克彦

ソビエト・エトノス科学論

——その動機と展開——

目次	2
序	5
第一章 カール・カウツキーと国家語	7
1 「民族問題」と言語 (7)	
2 レーニンにおける民族自決論の限界 (8)	
3 レーニンの祖型としてのカウツキー (11)	
4 スターリンの一步 (17)	
5 言語と民族の理論のために (21)	
第二章 ソ連邦における民族理論の展開——脱スターリン体制下の国家と言語——	28
1 民族の定義はなぜ必要か (28)	
2 「接近と融合」の課題 (31)	
3 民族の条件 (33)	
4 エトノスについて (38)	
5 単一国家と「族際語」を求めて (41)	
6 「ソ連邦語」へむかって (43)	
第三章 国家語イデオロギーと言語の規範	48
1 生物的言語観と社会的言語観 (48)	
2 言語は民族を決定するか (50)	
3 言語は形式か (54)	
4 民族語から世界語へ (56)	
5 言語から意識へ (58)	
6 エトノスと言語 (61)	
7 国家語イデオロギー (64)	
第四章 ソビエト・エトノス科学の挑戦と挫折	70
1 過渡から解体へ? ——はじめに (70)	
2 超国家としての連邦 (70)	
3 「民族自決」の脅威 (71)	
4 やむを得ずの連邦制 (73)	
5 エトノス論のはじまり (74)	
6 すべては『アンティ・デューリング論』から (75)	
7 スターリンにおける「言語」と「東方」 (76)	
8 「ソビエト人」論の水面下で (78)	
9 ロシア革命におけるエトノス——むすび (79)	
第五章 「ソビエト連邦」の文明論——社会主義と「民族」論のゆくえ——	81
1 ソビエト連邦とは何であったか (81)	
2 ヨーロッパ文明の担い手、マルクス主義 (83)	
3 「歴史」と「発展」のイデオロギー (86)	
4 逸脱としてのソビエト連邦の貢献 (87)	

第六章 「宗主国家語」をこえて——日本語の「国際化」をめぐるイデオロギー状況	91
1 「日本(人)の国際化」から「日本語の国際化」へ (91)	
2 母語ペシミズムの伝統 (93)	
3 言語改革と保守化 (94)	
4 「簡約日本語」の二つの面 (96)	
5 外国語を学ぶとは (98)	
第七章 「スターリン言語学」精読	101
はじめに	101
1 「民族」の定義の構造	103
(1) 予備的考察 (103)	
(2) 文明語の普遍性 (104)	
(3) エンゲルスの「歴史なき民族」の言語 (105)	
(4) カウツキーに学んだスターリン (110)	
(5) スターリンに見る母語の尊厳 (112)	
(6) 民族の定義における「言語」と「地域」 (114)	
(7) 「心理状態」とは? (117)	
(8) 母語 (119)	
2 一九二〇年代のスターリン	121
(1) 少数言語の解放者 (121)	
(2) 民族の自決と言語の自決 (123)	
(3) 言語の増大への恐怖——アントワヌ・メイエのばあい (126)	
(4) 形式においては民族的、内容においては社会主義的 (129)	
(5) 未来の言語 (132)	
3 一九五〇年マルクス主義と言語学の諸問題	134
(1) 動機—背景——一九二〇、三〇年代のソビエト言語学 (134)	
(2) 「スターリン論文」はいかにして発表の運びとなったか (138)	
(3) 解放の儀式としての「カテキズム」 (140)	
(4) 言語は上部構造ではない (142)	
(5) 言語の脱イデオロギー化 (144)	
(6) 言語は階級的ではなく、「全人民的」 (147)	
(7) 意味論の研究は有害か (150)	
(8) 「未来の言語」の現代性 (153)	
4 スターリン言語学と日本	158
(1) 『思想』、『文学』、民主主義科学者協会言語科学部会 (158)	
(2) 注目すべき時枝誠記の「感想」 (160)	
(3) スターリン言語学に力を得た保守主義 (164)	
(4) 読みつかれるマル (166)	
おわりに スターリン論文とは何であったか	169

自然は民族を創らずただ個々の人間を創るのみであり、個々の人間が言語、法律ならびに風習の相違によってはじめて民族に区別されるのである。

スピノザ『神学・政治論』（畠中尚志訳、岩波文庫版）

序

ロシアのマルクス主義者が革命の舞台として立たされていたのは、二〇〇に近い多様な、さまざまな発展段階にある民族を擁する状況であったから、被抑圧階級の解放のみならず、被抑圧民族の解放という課題とも対決しなければならなかった。

その課題は西欧のマルクス主義にとっては中心的な問題ではなかった。民族の解放は、階級の解放の中に含まれるか、それに従属するものであって、民族それじたいが、固有の価値をもたない、やがて消滅すべきネガティブな存在であった。

したがって、西欧マルクス主義に求めても得られない、民族問題、民族政策の土台となるべき民族理論は、ロシアという状況の中から、自前で作り出さなければならなかった。その政治的解答が、西欧マルクス主義が排した連邦制（その拡大としての「ソユーズ＝同盟」制）原理にもとづく「ソビエト同盟」という国家形態であった。

そのための理論と政策の構築にたずさわったのがレーニンととりわけスターリンであった。

レーニンの期待をうけて著わされた一九一三年の「マルクス主義と民族問題」は、非西欧の「後進地帯」においては、頼ることのできる、マルクス主義にもとづく民族理論として、いわば古典的地位を占めるに至り、とりわけ日本では一九五六年、フルシチョフが暴露的スターリン批判を行うまでは、疑問が生ずると、そこへさかのぼって議論をたてなおすための原基としての性格を帯びるに至った。奇妙なことは、それが政治のレベルにとどまらず、学界的レベルにまで及んだことである。

スターリンの民族理論なるものが、どのような理論史の文脈の中で、どのような先行理論を材料として編みあげられたかを検討する試みはほとんどなかった。つまり、それは「教条」としてのみ扱われたために、ソビエト民族理論の特質そのものも明らかにされなかった。本書に収録された一連の論文は、この問題に挑んだものである。

第一章「カール・カウツキーと国家語」は、スターリンの民族理論、したがってソ連邦の民族理論なるものは、オットー・バウアーに代表されるオーストロ・マルクス主義の民族理論に対するカール・カウツキーの批判をモデルとして生まれたものであることを示す。そこでは、カウツキーにならって民族の特徴づけとしての「民族的性格」を排して「言語」が強調され、文化的自治原理 (Personalitätsprinzip) に対して、地域原理 (Territorialprinzip) の優位が強調される。

その一方では、オーストリア社会民主党のブリュン綱領が大いに参照され、それがレーニンによる「国家語 (Staatsprache) 制定の排除」という原則となって残る。この原則は、ソビエト崩壊の時点にまで至る、全ソビエト期を通じて、言語・民族政策をしばることになる。

第二章「ソ連邦における民族理論の展開——脱スターリン体制下の国家と言語」は、フルシチョフ、ブレジネフ期に入ってから、ソ連邦諸民族の脱エトノスと一体化の時代にあわせて、それにふさわしい理論を作るために、「ソビエト人」概念の構築のために民族学が動員されて、脱スターリン理論が形成されて行く過程を示す。

第三章「国家語イデオロギーと言語の規範」は、ソ連を舞台とする「言語と国家」の問題を、フランス革命にさかのぼり、また、レーニンが言語的民主主義の典型例として引いたスイスの問題を取りあげながら、より普遍的視野のもとに考察した。

ソ連邦における言語・民族の問題が、政策のレベルにとどまらなかったことは言うまでもない。そこでは民族形成の中心概念をなす「エトノス」についてのアカデミックな議論が積み重ねられた。そして、このエトノス形成と不可分に結びついているのが「言語」であるという観点から、ソビエト独自のマルクス主義的言語学の構築が求められたのである。

言語の起源と形成、言語の親縁関係などの基本概念を作ったのが十九世紀における「印欧語比較言語学」であったから、ソビエト言語学の課題は、印欧語比較言語学における言語の系譜観を破壊することだった。その役割を引きうけたのが N.Ya.マルであった。

ところが、マルとその仲間が心血を注いで構築した「ソビエト言語学」を全否定したのが、スターリンの「マルクス主義と言語学の諸問題」（一九五〇）であった。本書の第7章『スターリン言語学』精読は、言語・民族に関するソビエト・イデオロギーの全史と核心をおさえながら、その本質を明らかにしようとしたものである。

このスターリンの論文は、言語については階級性の観点をとることが誤りであり、民族語の復権を主張したものであるが、それをほさむ前後の時代に行われたソビエト学界における論戦を、単にマルクス主義の枠内にとどめず、ひろく人類史の理解のための意義という点から論じようと試みたのが、第五章『ソビエト連邦』の文明論」と、第四章「ソビエト・エトノス科学の挑戦と挫折」である。

従来、ソビエトで行われてきた、言語・民族を人類の未来への展望のもとに考察する「ソビエト・エトノス科学」は、単にソビエト・マルクス主義の枠内でしかとりあげられてこなかったし、甚だしい場合には、単に権力闘争の構図としがみなされてこなかった。ましてや正統の言語学は、そこにはいかなる学問的な価値もないものとして無視してきた。本書のなかで著者はこのようなソビエト・エトノス科学をアカデミックな研究史のコンテキストをも参照しつつ、人類史を展望におさめたその営みと政治的・学問的な意義を明らかにしようとした。

## 第一章 カール・カウツキーと国家語

### 1 「民族問題」と言語

社会科学のたちばから見ると、「民族問題」はマルクス主義にとってのアキレス腱だということである(1)。この指摘を行った著者は、さらに続けて「民族はマルクスにとって、あるときは後向きで、あるときは前向きなものとして評価された」と述べた後、もつと直截に、問題を「ナショナリズムの進歩性と反動性」という形で要約した。

「民族問題」は、マルクス主義にとって主要な関心とはなり得ないテーマであったとか、あるいは理論の構築にとって不都合な要素を含むとか、何かそのたぐいの理由のために、アキレス腱——我が民族の表現により近く言い換えれば泣きどころ——になっているらしいという前半の認定は、専門的知識を欠く素朴な読者にもわかるような気がする。だが、後半部はほとんど理解を絶しており、また科学の認定としては意味がないように思われる。というのは、民族そのものは、それがいかに「後向き」だと評定され、「反動的」だときめつけられようとも、その存在をやめるわけには行かないからである。こういう言い方を許していただくなれば、民族はマルクス主義の好みにかかわらず存在しているのであるから、社会科学にとっても架空ではないところの、むしろ人間の基本的な存在形式であるとも言える民族の「前向き後向き」を論ずることは、科学が研究対象の存在を嘆いたり、喜んだりするという奇妙なことになる。だが、社会科学が理論の場から戦術の場にうつされるとき——このときなおそれを科学と称びつづけるのは矛盾であるが——ある特定民族の存在の「進歩性、反動性」を論じる必要が生ずることは理解できる。

レーニンはユダヤ人が民族であることをやめて、周囲の優勢な民族に吸収、同化されるのは進歩的であり、アメリカ合衆国内で民族が「磨滅」しているのもまた進歩であると説いた。「大ロシア人の民族的誇り」について語るレーニンは、みずからがやめさせられる民族の側に立つことをほとんど思いつかなかったと思われるふしがある。

「民族問題」が単に学問や理論のレベルでの問題であるとするならば、劣勢な民族としてもそれほど心痛するには及ばないが、それを「問題」と称するかぎり、革命期においては戦術上の、安定期においては行政上の課題となる。そして、マルクス主義の戦術、行政はとりわけ科学的、学問的論拠を要求する。じじつレーニンは、ユダヤ人を民族と認めること、すなわち「ユダヤ民族という思想」そのものが「学問上の点でまったくなりたらず」、「政治的意義からいって反動的」である（「党内におけるブンドの地位」25。レーニン、スターリンの著作からの引用はすべて国民文庫から行い、引用論文のあとに数字を添え、ページ数を示す。以下同様）と述べて、「学問」の権威を援用している。これはこれでいいでしょう。しかし「学問上なりたつた上で、政治的にはなお反動的」であると判断をくだされるような民族の存在権主張はどうなるのだろうか。先まわりして言うならば、「学問上なりたつたかどうかは本題にとってむしろつけ足し」というのが、じじつはレーニンが「民族問題」に接するときの態度であり、「民族問題」というとらえ方の本質でもあろう。

いまここで問題になっているような型の民族問題の源流は、一九世紀のオーストリア・ハンガリー帝国内の多民族構成の中に根があり、そのマルクス主義的解決としてカール・カウツキーが提示した基本的な構図が、じじつはほとんどそのままの形でレーニンの民族理論として援用あるいは借用された。こうして東欧という政治的・文化的範囲の中にとどま

って、そこで形成された民族の理論は、ヨーロッパ文化圏の枠を出て、いまや中央アジア、カフカス、シベリアにまで対象を拡げることによって、新たな現実からの試練を受けることになった。十月革命は、まさにロシアの地に起きたことによって、被圧迫民族解放運動の上に新しい局面をひらいた——これが民族のたちばから見た、十月革命の要約である。十月革命によって「お上品な社会主義者」が「視野のそとにとり残して」いた「非文化的奴隷」も、「文化的奴隷」と同列に置かれることになったというスターリンの指摘は、このことをよく言いあらわしており、この認識こそはスターリンをレーニンから、明瞭に浮き立たせているのである。

一方では民族の自決権を保障するととなえ、他方で、民族の利益はひとえに階級的利益に従属すべきであると説いたレーニンの思想は、カウツキーの「国際主義」の原則、言語の面では「世界語」主義のややしなびた形における踏襲であった。スターリンはこのカウツキー=レーニン型民族観の長所を受けつぎながら、ソビエトの言語的、民族的現実処理に行政官として当面しつつ、かれらのヨーロッパ型国際主義の枠から一步を踏み出すかに見えながらそれを果しえず、みずからプロクルステスの轍を踏んだ。「一方にはマルクス主義者の義務があり、他方には種々の階級からなる民族の権利がある」というスターリンのアンビヴァレントな発言には、民族についての、深い苦悩さえ感じられる。だがスターリンも民族問題に関するかぎり結局のところはカウツキストとして生きた。

カウツキーの視野にのぼる民族はヨーロッパに限定されていたとはいえ、かれがオットー・バウアーとの論争を通じて到達したところの、言語を指標とし、言語の原理による民族の概念規定は、マルクス主義のたちばから得られた、単に戦術的でない民族の理論として、その意義は今日もなおうすれてはいない。

民族の存在様式は決して国際的、普遍的ではないように、民族観、民族理論の視点もまた普遍的ではない。カウツキーの民族理論は、この点でドイツ的言語観、民族観の申し子という限定の中にある。しかし、マルクス主義、一般に社会科学が、民族と文化とのかかわりについて考察を深めながら、これほど言語の社会的側面に肉迫した例は稀である。エドワード・サピアが言語の性格にふれて、「人間にとって歩行と同じくらい自然であって、ただ呼吸よりは自然でないように思われる」と述べたこのことばは、いまあらためて、言語の社会的機能という側面に関しても想起されなければならない。なぜなら、社会科学にとって、言語はあらためて問いなおすまでもない既定の事実であるし——民族の進歩性反動性を論じても、(ある)言語の進歩性反動性を論じようとは誰も企てないように——、他方、近代の言語学にとっても、言語を言語たらしめ、同時に言語によって成立する言語共同体はやはり既定項であって、それ以上問うべき価値をもたないからである。民族問題の中にこそ、言語と社会の関係への新たな接近の鍵がかくされていると言うべきである。

## 2 レーニンにおける民族自決論の限界

社会科学者、なかんずくマルクス主義者たちは、民族の問題を論じるにあたって、民族の社会科学的定義をもとめて、まず手はじめはマルクス主義的著作の中に分け入って行くのがならわしのようである。マルクス主義の古典的著作は、今日のように多様な民族問題に対して、おそらくは図式すらも提供していないだろうし、いわんや特殊かつ焦眉の問題に直接答えることもしないだろう。マルクス文献の解釈作業はマルクス主義の理解には役

立つとしても、現実の民族問題を理解する上ではほとんど効力を発揮しない。「民族」と称ばれるものは、歴史的、文化的状況が異なればその内容も異なり、したがって民族ごとに問題のあり方も異なる。少なくとも、民族の何がどういう現実の状況の中で問題になっているかをはっきりさせておかないと、議論は確かな足場を手に入れることができない。

ロシアの革命運動の中で、レーニンの視野に入ってきた民族問題とは、ほとんどヨーロッパ文化圏において生じたものであり、なかんずくユダヤ人労働者の組織、ブンドに対する批判を契機にとりあげられたユダヤ人の問題であった。

ふつう、レーニンの民族問題に対する基本的態度は「民族自決権」というスローガンによってややロマンチックに理解されている。この自決とは、文化的自決ではなく「政治的自決」を指しているのであるから、彼の著作においては必然的に「分離の自由」、「独立国家、民族国家形成の自由」を意味するものであることが明快に示されている（「民族自決権について」93）。ここに見るような一九一四年のレーニンの基本的態度に関するかぎり、すべては明晰であって、何ら疑問の余地はないように見える。いまやレーニン生誕百年をむかえたソ連邦においては、民族学と言語学の側から行った学術的な著作をも含めて、レーニンの「民族自決」の原則をたたえ、その注釈と解説に熱心な努力が払われている。

だが他方では、右のような一見、疑問の余地のないほど明快な「自決」の保障には重大な留保条件がついていることを、公平のために見落してはならない。この点を見過すならば、「民族自決」のレーニンの原則と言われるものと、ソビエトが、内外の民族に対して行ってきた一連の行政的対応との関連がほとんどつかめなくなってしまうからである。すなわち、一九〇三年の日付けをもつレーニンの論文には、「民族の自決ではなく、各民族内のプロレタリアートの自決」が問題なのであるから「プロレタリアートの階級的闘争の利益に民族自決の要求を従属させなければならない」（「われわれの綱領における民族問題」）という主張がとどめられている。ここから引き出される結論とは、「連邦主義および民族自治を宣伝することはプロレタリアートのなすべきことではない」（「アルメニア社会民主主義者の宣言について」10）ということになる。

さらに一九一三年の「民族問題にかんする批判的覚書」（以下、「批判的覚書」と略す）という、おそらくこの点におけるレーニンのたちばを知るに最も重要と思われる論文にあらわれる次の発言は、特に記憶にとどめておきたい。

マルクス主義者は連邦制と地方分権制に反対の態度をとる……階級意識あるプロレタリアートはつねに、より大きな国家を主張する。（94）

このような、「より大きな国家」は、社会主義革命においてどのような意義をもっているのだろうか。

いろいろの民族が単一の国家を構成しているあいだは……マルクス主義者は、どんなばあいにも、連邦制の原則をも、地方分権制をも、宣伝しないであろう。中央集権的大国家は……社会主義的統一へむかう歴史的な巨歩を、一步ふみだしたものである。このような国家を通じる以外には、社会主義への道はない。（95）

ここには民族の政治的自決の結果を謙虚に受け入れる「連邦」主義者ではなく、原則的に「中央集権的大国家」主義者としての、レーニンの揺ぎない確信があらわれている。民族自決権に関するレーニンの考えかたには時代と状況による揺れが跡づけられるのかもしれない。すでにその方面の研究もあることと思うが、それについてはレーニン学者にまかせておきたい。

だがたしかなのは、レーニンにとって民族問題に関する最大の関心は、ブンドおよびそれに同調する、いっさいの分離的傾向をくいとめることであった。このような組織上の折りにふれての戦術的考慮とは別に、そもそも「民族」なるものは、レーニンにおいては、いずれは解消されるべき遅れた存在ととらえられており、それは、かれの著作の中にいたるところで表明されている。レーニンにおいて民族は「アキレス腱」どころか、社会主義の達成によって消滅へと導かれるべき、進歩にとっての阻止要因だったのである。それを次のような発言に見る。「社会主義の目的とするところは、小国家への人類の細分状態をなくし、諸民族のいっさいの孤立性をなくし、諸民族の接近をはかるばかりでなく、さらに諸民族を融合させることである」（「社会主義革命と民族自決権」17）。したがって、「アメリカにおける諸民族の磨滅」も当然「進歩的」なのである（「批判的覚書」75）。このことから、資本主義から社会主義への発展と、そこに置かれた民族との関係は次のように定式化される。「民族の隔壁を破壊し、民族的差異をぬぐいさり、諸民族を同化する資本主義の世界史的な傾向……この傾向は、資本主義を社会主義へ転化させるもっとも大きな原動力の一つ」（「批判的覚書」71）なのである。「磨滅」させられ、「融合」させられ、「同化」させられる側の民族は、アメリカにおいては白人渡来以前の先住民民族であり、日本列島においてはアイヌ人であって日本人ではなく、ソビエト連邦においてはシベリアの土着民であって大ロシア人ではない。レーニンの「同化」がそのような方向で考えられていることは言うまでもない。

諸民族の同化、具体的には優勢民族の大海の中の劣勢民族が、民族としての存在をやめること——この過程について、レーニンは資本主義的同化と社会主義的同化との区別も不必要と考えていたらしい。だから、最終的に民族の壁を取り除く同化という「進歩的」過程をすすめるのに、必ずしもプロレタリアートの力を必要とはしなかったのである。レーニンもスターリンもこの点では同じであった。かれらはそろって、多民族を擁しながら、いっさいの民族問題から免かれているスイスを、理想的な模範として引きあいに出している。スイスがブルジョア国家であることと、そこにおける民族問題の解決とは全く関係がないのである。スイスに理想的な状態を獲得させているところのものは、「一貫した民主主義」（レーニン）あるいは「ブルジョア的なものであるとはいえ、高度の民主主義」（スターリン）のおかげであるという。レーニンはその上さらに、「小国スイスは、そのなかに一つの全国家的な言語がなく、ドイツ語、フランス語、イタリア語という、まる三つもの言語があることによって、損をせず、得をしている」とまで言う（「批判的覚書」60——なお他の個所では、この三つの言語のほかに、「二つのロマンス系方言（2）」があることを忘れずにつけ加えている）。三つの言語があることによって、なぜ「損をせず、得をしている」かは、レーニン自身は説明していない。この指摘は、あとで述べるようにカウツキーからの、そのままのひきうつしだから、レーニンから、必然的に出てきたものではないのである。しかも五つの言語（レト・ロマン諸語を含めると）の存在を知りながら、

何故ことさらに三つ——言うまでもなく、独・仏・伊語——としたかは、言語に対する優劣の価値意識がはたらいているからであり、これもカウツキーからの浅はかで、無反省な受容によるものである。

以上のところから明らかなように、民族問題は、プロレタリアートにとって特別な意味をもつ問題でも、中心的な問題でもなく、「高度な民主主義」のみが解決できる問題であるとレーニンにおいては理解されていた。このような認識の結果から、「民族の自由は、市民的自由一般のうちの一つにすぎない」（「アルメニア社会民主主義者の宣言について」9）ものとして、市民的自由一般の中に解消されているのである。ここには、民族とは、人間が人間として存在するための積極的な基本形式であるという視点が全く欠けていると言わなければならない。「民族」などというものはレーニンにとって、最初から虚構にすぎないのであるから、「民族の文化的統一」は、当然のこと、「ありもしない幻影」だったのである（「民族問題」30）。だが、この幻影はブンドのたくらみによって、組織を揺がす破壊力を発動するかと思えるばかりの实在性を帯びてきた。レーニンはやむをえず、カウツキーの民族理論に助けを求め、それでまにあわせをした。ブンド退治には、ユダヤ人が所有する見込みのない、共通の地域、すなわち領土を持ち出してやりこめることのできる、カウツキーの属地主義 *Territorialprinzip* は打ってつけだったのである。

### 3 レーニンの祖型としてのカウツキー

#### (a) 言語と地域の原則

民族問題に対する以上のようなレーニンのかかわりかたからするならば、かれの議論の中に、何か手ごたえのある、民族把握のための原則、あるいは、民族の概念の特徴づけを見出そうとしても、ほとんど無益であることは言うまでもない。しかし、ユダヤ人は一つの独立した民族であるという前提を存立基盤としているブンドの、その前提の無効を宣言する必要から、レーニンは民族たる資格に一応の基準を示す必要にせまられた。レーニンは言う、「民族はそこで、それが発展してきた地域をもたなければならない。つぎに、すくなくとも現代では、世界連盟がまだこの土台をひろげないあいだは、民族は共通の言語をもたなければならない。ユダヤ人はすでに地域も共通の言語ももっていない」（「党内におけるブンドの地位」25）。ここに見るかぎりでは民族の規定としては、まず最初に地域の共有が、第二に言語の共有が挙げられている。この二つの項目の列挙の順序に、レーニン自身はほとんど必然的な意味をもたせなかったことは明らかだ。ユダヤ人が民族であることを否定するには、かれらがまず、共通のまとまった地域を持たないと述べるのが最も説得的であったからにほかならない。じつは、レーニンに先だつてこの二つの項目の欠如を理由に、ユダヤ人を民族であると認めなかったのはカウツキーであった。オットー・パウアー、カール・レンナーといった、地域ぬきの民族の規定を行なった、いわゆる文化的民族自治もしくは *Personalitätsprinzip* の主張に対して、カウツキーは地域の原則を強調したのである。レーニンのみならずスターリンも、この点ではカウツキーを引きあいに出して、全面的にその理由づけによりかかりながら民族としてのユダヤ人を否定したくんだり、この二人の著作の中にくり返しあらわれるので、カウツキーの所説をあらためて解説する労はいまははぶくことにする。ただ、ここでつけ加えておきたいのは、民族から言語を奪うことは容易ではないが、民族から居住地域を奪って分散させ、あるいは逆にそれに地域

を与えて集中させるなどの措置は、行政的強権に訴えれば必ずしも不可能ではないという事実である。既成事実を作り出した上で、この原則をあてはめ、民族の資格を剥奪するといった強行策はスターリンの言う「高度の民主主義」が保障してくれないかぎり全く起り得ないことではないのである。ところが、この高度の民主主義は現実には求めて得られないものと考えた方がよい。ソビエトのある民族は、第二次大戦中、利敵行為のかどで強制移住させられたことがあったらしいし、近い例ではミクロネシアの住民は核実験のために居住地を追われた。しかしこれらの民族あるいは部族は、このような措置にもかかわらずなお民族的紐帯を失うことはなかったのである (3)。

民族を成立せしめる要因としての地域と言語の順位は、他方スターリンのばあいには逆転させられている。「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあられる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である」というかれの規定において、冒頭の二つの項目の順序には、何か意味があるのだろうか。

この点で、スターリンの民族規定をなす四つの項目がどのような内的関係に結ばれているかを明らかにしなければならないとする高島氏の指摘はまったく正しい (4)。しかし、「民族概念を作り上げている諸要素の相互の関連をつかむ論理がスターリンにはまったく欠けている」という断定は検討を要する。さらに「素朴でプラグマティックな性格の持主スターリンにとっては、それは不必要であったかもしれない (5)」と感想をもらされても、素朴な読者としては、スターリンの性格が事実そのようなものであったのかどうか、また素朴でプラグマティックな性格の持ち主には、民族を論じる資格がないのだろうかなどと考え込まざるを得ない。言語と民族という、この基本的テーマはいまそのままにしておいて、次に言語と、それに関連して登場する地域との関係について述べれば、言語地理学の知識を待つまでもなく、地域の自然的あるいは人為的な分離は、言語の分裂をひきおこすのである。したがって、言語の共通性——したがって民族の一体性——を保障するためにこそ、地域の共通性が必要となるのであって、決してその逆ではない。

民族を成立させるための決定的な要因として、民族的性格 (バウアー) ではなくまず言語を挙げ、民族と言語に関する統一的な理論を、マルクス主義のたちばから構築できた唯一の人物は、おそらくカウツキーが最初であり、この人以外には求めることができない。「スターリンはバウアーの規定に、一方では土地を付加し、他方では経済生活を付加した。……スターリンはまだバウアーの文化主義的方法から十分にぬけきっていないといえる」という高島氏の断定は、単なる学説史の事実にてらしても誤っている。レーニン論争のために必要なかぎりにおいてのみ、カウツキーにすぎた。ところがカウツキーの出した問題を、それに則して理解を深め、オットー・バウアーとの論争の過程で形成されたカウツキーの地域原則を体得したうえ、レーニンよりはるかに深くカウツキーに入り込んだスターリンは、時には、言語に関するかぎり、カウツキーをしのぐ深い認識に到達したことを、かれの著作は示している。

レーニンがそれを不十分にしか理解せず、スターリンがレーニンをしのぐほどの理解に達したという、カウツキーの民族に関する理論の核心は何かとさえ、民族の指標として、言語こそが基本的で決定的であるとした点である。では、カウツキーにおいて、どうして言語がこのような位置を占めるに至ったかと言え、バウアーが民族の規定に用いた、「民

族的性格」という、とりとめのない観念的な要因を排除しようという理論的要請と結びついている。

人は自分が得意とし、最もよく身についた言語の取りかえによるのでなければ、いったい他の何によって自己の民族性をとりかえることができようか。性格の取りかえによるなどとはよもや言えまい (6)。

言語こそが民族を民族たらしめる原理であるとするれば、民族共同体 (nationale Gemeinschaft) とは言語共同体 (Sprachgemeinschaft) にほかならないという結論が出てくる。だがこの両者の関係は一對一の単純なものではなく、カウツキー自身、後者は複数の民族共同体を含み得るという留保をつけている (この問題はまたあとでふれるように G・フォン・デア・ガーベレンツの関心でもあった)。言語共同体は共通の地域を要求し、そこに成立する経済交通圏にとって言語は不可欠の用具となる (7)。言語、地域の次に経済生活の共通をあげたスターリンは、ここでもカウツキーの弟子であるが、スターリンは、言語の本質そのものとのらえ方において一九五〇年においてもなおカウツキーの弟子であったことを以下に示したいと思う。それは「マルクス主義と言語学の諸問題」の中で明示された、言語の非階級性という特徴づけに関してである。

#### (b) 言語の非階級性

言語が、あるいは言語共同体が——したがって民族共同体が——階級を超えた概念であることを説明するためにカウツキーは次のような状景を持ち出している。

ここに一人のドイツ人労働者があって、ひとこともフランス語を知らないままにフランスへやって来たとする。そのとき、そばにドイツ語を話せる同じ階級の仲間がいなかったら、フランス人のプロレタリアの、国際的、階級的意識に培われた心根がいかにあつたであろうとも、やはり居心地すこぶるよろしくなく、また心細くも感じるだろう。そして、かれはドイツ人とあらば誰であれ、最初に話しかけてくれた男に喜んであいさつするだろう。相手が自分のくにでだったら歯をむいてやったかもしれないような搾取者であったにせよである (8)。

言語が階級を超えて、ある民族をひとつにまとめるこのはたらきについて、スターリンはずっと後、「言語の非階級性」をもち出しても、もはやイデオロギー論争において致命的な事態が生じる時代は過ぎ去ったと思われた頃、言語の本質を「搾取者にも、また被搾取者にも同じように奉仕できる」という陳腐な表現で解説し、「言語は、この点で上部構造と原則的にちがっているが、生産用具、たとえば機械とはちがわない (9)」と一步をすすめて、創造性のない、経文解きを業とする社会学者たちから絶賛を浴びたことはまだ記憶に新しい。

当時このスターリン論文は、スターリンの知識ではとても生まれるはずのない著作であると判断されるという理由から、専門家たちによる代筆にちがいないという、反共学者たちからの憶測がもたらされた。だが、これは、この論文を不当に高く評価しすぎた点で誤っている。スターリンはかつて取りくんだことのある、カウツキーの、言語の超階級性理論をそのまま引き出してくるだけでよかったのである。

しかし、このことは、一九五〇年までの間に、スターリンの民族と階級に関する思想がいかなる展開をも見せなかったということにはならない。一般にデマゴグの著作におい

ては、かれらの冷静な認識と、政治的、行政的な場での発言とが全く一致するものと考えてとり組むのは言うまでもなく楽観である。

今日のソビエト連邦における、最終的な民族的配置を決定する地位にあったスターリンにとって、民族問題は単なる理論をこえた行政上の中心問題の一つであったからである。

### (c) 国家語の排除

階級の外にある、あるいは諸階級をひとしくつらぬく道具としての言語という認識は、またレーニンのものであり、かれにとって、諸民族が持つ多様な言語は、そのまま、有効な宣伝の道具に利用できるという、目先きの必要としてしか関心になかった。「民族文化ではなく国際文化を」（「民族問題にかんするテーゼ」48）と主張したレーニン——これもまた、一二四ページの引用で示したカウツキーの要求とそっくり同じである——において、ほとんどただひとつ、言語問題について表明された積極的スローガンは「強制的国家語の排除」であった。この方針は、「どの言語にたいしても、絶対にどのような特権もあたえてはならない」（「批判的覚書」62）という原則から出ている。そしてこのばあいにも忘れずに付言しておかねばならないのは、「国家語」の問題も「言語的特権」の問題も、いずれもカウツキーが提示したそのままの原則であるということである。

国家の言語、すなわち国家語という概念のために、カウツキーは *Staatsprache* という語を用いている。民族語 *Nationalsprache* ——ここでは、意識して「国語」とは訳さないでおく——は民族という文化単位の形成すなわち文化の次元とのかかわりにのみとどまって、権力との関係をぼかすものであるのに対し、国家語とは、義務教育その他の、国家権力の行使によって行政的に採用されて課される場所の、政治的特権を与えられた特定民族語を指す。したがって、民族語は共存的、競合的であるのに対し、国家語は排他的独占的な地位を要求するのである。多民族を擁する国家において、被支配（劣勢）民族が支配（優勢）民族から分離・独立を求める動機の多くは、国家語の強制のもとに、かれらの民族語、したがって、民族としての精神・文化活動がこうむる致命的な不利益の予感、あるいは実感から生ずる。階級的利害が基本的には物質生活にかかわるだけであるのに反し、民族的利害は精神活動の全域、すなわち言語的不利益にかかわるという点において、民族解放闘争のおおむね範囲は広くまた深い。

あらゆる近代的国家は潜在的に、一国家一言語への志向をもち、支配的な民族語、支配的な方言を学校を通じて普及する。軍隊、官僚=行政機構もまた、国家語を要求し、全土にそれを課する。

複数の民族から成る国家において、どの民族語が国家語の地位を獲得するかという問題は階級の別を問わず、すべての民族の熱狂的な関心のまこととなる。この問題を論じながら、カウツキーの言語と文化についての深い洞察が展開される。

民族語の規模、支配範囲については、たしかにその民族のあらゆる階級を通じて、共通の利害が感じとられる。プロレタリアートにとっても資本家にとっても、自分の母語の通用範囲が大きければ大きい程都合である。統一された強力な国家語は、拡大された統一市場を求める近代資本主義の要求であると、これまで型のごとく言われてきた。カウツキーはしかし、民族語に関するかぎり、資本家、労働者のあずかる利害といえども知識人の利益の強さには遠く及ばないだろうと指摘する。自分の母語を通じることなしには、読者

や聴衆を獲得できない、詩人、作家、ジャーナリスト、政治家、演説家、弁護士、教師などが、自分の母語が民族語として、どのような規模の通用範囲あるいは支配範囲をもつかに深い関心を抱かざるを得ないのは、かれらの生業の基礎が民族語の使用にあるからだ。今をときめく流行作家も、母語の言語共同体を奪われ、あるいは強制的に引き離されて、異なる言語共同体に移り住めば、異なる言語によって、自己の「知的生産物」に形を与えることは極度に困難となる。どのような民族にあっても、民族語の運命に対して最も敏感なのは、したがって、言語による（商品）生産に依存する知識人であるとカウツキーは述べる。レーニンもスターリンも指摘しているように民族運動の主体はブルジョアジーであってプロレタリアートではないという。この意味では、プロレタリアートが民族の利益を階級的利益に優先させてはならないというレーニンの教訓はいわば論理的帰結でもある。この帰結は、ふたたび言いかえると、固有の言語、すなわち母語の擁護と民族的特質の強調は本来ブルジョア的であるということになる。しかし言語共同体の利益を誰よりも敏感に感じとる、民族の触角とも言うべき知識人が、言語共同体の防衛にたちあがらざるを得ないという事実を非難することはむつかしいのである。モンゴル人民共和国憲法の第一条が、この国を、「労働者、牧民、働らく知識人の」社会主義国家であると規定して知識人に特別の言及をしているのは偶然ではない（10）。

国家語の座を競う諸民族語の問題として、民族問題に対するとき、社会主義政党がとるべき態度は、一八九九年のブリュン（ブルノー）民族綱領に次のように表現されている。我々はいかなる民族的な特権も認めない。したがって国家語（*Staatssprache*）の要求は放棄する。媒介語（*Vermittlungssprache*）が必要とあらば、それは帝国議会が決定するであろう（11）。

明治政府発足当時もともと複数の民族語をもたなかった日本においては、あらためて、基本法によって国家語の規定をする必要はなかった。多民族あるいは多言語国家であって、特定民族の言語的特権を排除するために、たとえばスイスの憲法（一一六条）、ソビエト憲法（四〇、一一〇条（12））、ウクライナ憲法（九〇、一〇一条）は、それぞれ民族語の使用を保障している。

民族問題に関するかぎり、カウツキーの忠実な弟子であったレーニンは、「強制的な国家語は必要か？」という一篇においてその排除を説き、ここでもまたカウツキーになっている。

ところがいまここで傍点を附した国家語という用語は、我が国の日本語訳レーニン文献のどこにも現われない。この語は国民文庫本においては「国定語」であり、全集版では「公用語」と訳されている。前者はまだ認められるとしても、全集版の「公用語」という訳語は、ことの本質をほとんど伝え得ていない。国家権力を背景とする特権的な言語という意味で *Staats-sprache* と称したカウツキーの表現を、レーニンは忠実にロシア語に移して *государственный язык* と表現したのである。「国家語」はカウツキーがかれの言語論において固有の内容を盛った術語として用いたのであり、レーニンがそれをロシア語にして用いたとき、すでに翻訳借用であった。国家語には、たとえば *Landessprache* とは異なり、どこまでも *Staat* の強制的、排除的、画一的な力がはたらいっているのである。

この語はもともと、一九世紀末のオーストリア・ハンガリー帝国の言語政策を背景として生まれた。諸民族の言語を対等に公用語とするにしても、やはり中央官庁の用語として

は「国家語」が必要ではないだろうか。しかし「国家語」の実際の内容はドイツ語にほかならないから、それはかえって、国家規模でのドイツ語化に法的根拠を与えるものだと、社会民主党は予見したのである。こうして「国家語を定めない」方針が、ブリュン綱領の中で確認され、それはカウツキーを経てレーニンに受容され、今日に至るまで、ソ連邦の言語政策をしばり続けたのである。

#### (d) 民族性と国際性

民族語が民族存立基底的な要因であるとするカウツキーにとって、言語は民族の原理にまで高められる。

古い民族が消滅するのは、それが死に絶えるとか、あるいはその文化が亡びるからではない。ただ、その民族が別のことばを話す方が都合がよいと考えて、自分の言語を話すのをやめるからにすぎない(13)。

しかし、カウツキーは言語を民族の原理にまで高めたからと言って民族語に、「民族精神」形成といった、言語にひそむ何か特有の神秘性を付与することはしなかった。かれにとっては、古い土地ことばにしがみついた農民に比べ、異郷人と交わる必要から、すばやく外国語をとり込む都市住民、特に商人は、国際化のさきがけとして、ずっと前向きだったのである。

カウツキーにとって、言語の多様性、したがって民族と文化の多様性は、国際化、すなわち進歩の方向にとっては重大な阻止要因であって、社会主義の進歩的役割の一つは、大衆に多言語獲得の機会を与え、次第に民族語の分立に起因する言語的困難をとり除くことができるという点に存するのである。とあって、カウツキーのこの願望、構想は、言語が人間の生活と文化の中で、単なる道具の役割しか果たしていないという、言語の機能に対する過小評価から出ているのでもない。全く逆である。

カウツキーによれば、文化には言語的文化(sprachliche Kultur)と技術的文化(technische Kultur)とが区別される。前者は言語そのものによって与えられているのに対し、後者は言語に依存しないか、あるいはずっと低い依存度でもって他の民族にも伝授され得る。したがって、同一の技術的文化共同体の中には、複数の言語共同体が含まれる。すなわち、技術文化は国際的(14)であるが言語的文化は非国際的であり民族的なのである。ところで、ある技術文化を生み出す場所は、具体的には民族であって、経済活動を含む先進的な技術文化を生み出した民族の文化は、国際化されて、他の民族のもとにとどけられなければならない。ここにおいて、これら先進的な技術文化、科学を生み出した民族の言語に、他の民族の言語も接近しなければならないことになる。カウツキーは、このような先進文化の担い手である民族の言語を世界語(Weltsprache)と称び、このような世界語に数えられる言語として、古典古代においてはギリシャ語とラテン語、イスラム世界においてはアラビア語、キリスト教世界においては独、英、仏語を挙げた。中でも英語には万能語(Universalsprache)という別格の地位をあてがった(15)。カウツキーにとっては民族文化よりも国際的文化が、民族語よりも世界語(=国際語)が問題だったのである。そしてこのばあいの世界語の候補には、どのような具体的な歴史的言語からも可能なかぎりの距離を保つよう心がけた人工語がのぼらなかったのは、カウツキーの言語観、文化観を明らかにしている。つまりカウツキーにとって言語とは単なる道具ではなかったのである。文化

を創造し得るのは、歴史的言語において他にないという暗黙の前提をかれのもとに見ることが出来る (16)。カウツキーは言う。「こうした文化は国際的である。しかし一つの言語しか知らない大衆にとっては、かれの言語的文化が民族の衣裳をまとうかぎりにおいてのみ、そのような文化に参加することができるのである (17)」。カウツキーはこの前提から、母語によってのみ教育を行う、「純粋に民族的な学校」の必要を説くのである (いずれも強調は原文)。これは、いわば「国際的な文化」に到達すべき予備的手段にすぎないとはいえ、このような民族語教育を行う、特に小学校では、教師みずからが民族語を母語とする者でなければならないし、医師、弁護士などもまた当然、民族出身者であるべきだと言う。かりにそれを理論と呼べるとしての話であるが、レーニンの民族理論はそのほとんどすべてをカウツキーに負っていると言ったが、この学校教育に関するかぎり対蹠的なひらきを見せている。レーニンは、民族別の学校という構想に、くり返し反対を表明した。特権的な国家語の強制による言語の国家管理を禁じたその同じレーニンが、「学校事業を国家の手から除外して、それを各民族それぞれの手にうつす案」の「あやまり」を指摘している。レーニンにとって民族(語)学校は、文化的民族自治の陰謀であり、ユダヤ人が一般学校で学ぶための門戸を閉じることにつながり、労働者の団結を弱めることにつながるのである (18)。学校教育の取り扱いで、カウツキーとレーニンにたちばの相違が見られるとしても、両者は、ともに、民族的、言語的細分状態を廃絶して、国際化へ向かうみちを選んでいる点では同じである。ただカウツキーは、国際的文化の獲得に至る過程では、民族的衣裳 (nationales Gewand) をまとわざるをえないと考えて、それを保障したのである。ここで思いあわされるのは、ソビエト建設の過程で、厳として存在する民族と階級原則との矛盾の板ばさみになったスターリンが生みだし、百十数の民族語に翻訳されて、ソビエト連邦の内外にひろめられ、社会主義多民族国家における、諸民族の文化活動の原則となった一つの巧みなスローガンである。いわく、「形式においては民族的、内容においては社会主義的」なソビエト文化の建設——というのがそれであった。発想そのものはカウツキーと同じであって、ただ「国際主義」が「社会主義」と呼びかえられただけのものである。しかも、スターリンにおいて、カウツキーの発想が定式化されたなどというものではなく、定式そのものもカウツキーにあることを次の文章をもって示そう。

……言語的文化の要求は、形式的には民族文化の要求という形をとりはするが、その内容は、なおいっそう国際的な性質をとらなければならないので (19) (強調は原文)。……社会主義的プロパガンダとその組織化は、内容からすれば国際的であっても形式においては民族的でなければならない (20)。

「民族性と国際性」と題してカウツキーがとりくんだ問題の政策上の解決と結論は、まさにこのことであったのである。カウツキーの作業仮説と結論は半世紀を経てもほとんど不動のまま、世界で最も多言語地域の一つであるソビエトの土壌の上に、スターリンの手で現実の場面に移される機会を得たのである。

#### 4 スターリンの一步

以上において、いわゆる「レーニン、スターリン民族理論」の祖型の主要部分がほぼカ

ウツキーに由来することは明らかになったであろう。ではレーニンとスターリンの、この問題への対しかたの相違は、我が国の社会学者によってどう評価されてきたであろうか。ここでふたたび、民族と階級の問題で考察を深めてきた老練な社会学者のことばを聞こう。

同じ民族という言葉を用いながら、レーニンとスターリンの間には一つの質的な差異に近いものがあったのではあるまいか。……一見すると、民族理論の定式化に関するかぎり、スターリンはレーニンの忠実な弟子であるように思われる。……しかしレーニンがスターリンがやったように、……まるで形式論理学者か裁判官のいいそうな口調で判決を下しているのではない。これでは生きた個体としての民族がたちまち死物と化する。レーニンのみた民族はそんなものではなかった。この点に関してレーニンの言説を私はいまいちいち収録することはできないけれども、レーニン自身が典型的なロシア人であり、ロシアとロシア人というものを彼ほどよく知っていた人は稀であったといわれることからおしても、民族についてのレーニンの思想の深さというものが想像されるであろう（スターリンはこの思想の深みにまで沈潜していくことのできる人柄ではなかった(21)）。（傍点は引用者）

長い引用を取ってしたわけは、いわゆるスターリンの死後、レーニンをたたえスターリンをおとしめるというそれ自体は学問的ではない政治的モードが、学問をもとらえることがあってはならないと思うからである。しろうととしては次のような素朴な質問を許されたい。少なくとも「典型的なロシア人」であることが、民族についての思想を深めるための保証になるとはかぎらないと思われるし、スターリンがこの問題で、思想を深める人柄であったかなかったか、著者はその人柄までたしかめられるたちばにはなかったと思うのだが。人柄という個人的な要因よりも、より社会的な要因である民族的出身という点で考えるならばむしろ、「ペテルブルクの学生四万八〇七六人のうちの一人のグルジア人の子供の利益を保障することができるだろうか？ ……特別なグルジア人学校をもうけることは不可能であり、このようなプランを宣伝することは有害な思想を人民大衆のなかにもちこむものである」（レーニン「ロシアの学校における学生の民族的構成」51—52、強調は原文）という、そのグルジア民族出身者のスターリンにおいて、レーニン以上に民族の問題に沈潜する素質がなかったと断言することの方がむつかしいように思われる。

自分の本来の母語ではなかったロシア語、いわば外国語による政治、論評活動が、スターリンにとって決して容易でなかったろうことは、かれの言語生活史を調べるまでもなく想像のつくことである。少なくとも、かれの論著の初期のものは、グルジア語で書かれていた。言語体系は個人的なものではないから、グルジア語からロシア語への転換のかれの経験もまたしたがって、個人的ではない。だからこの問題は専門的にはバイリンガリズム、特殊には「生きたスブストラート」のテーマになる(22)。が、それはおくとしても、言語を単なる手段、形式をこえた、個人の精神形成にかかわるところの内面化された問題としてとりあげたのは、非ヨーロッパ語を母語とする体験を身に負ったスターリンにしてはじめて指摘できたのである。

……言語圧迫、学校の縮小、その他の圧迫手段は、ブルジョアジー以上ではないとしても

(23)、それにおとらず労働者をいからせる。このような状態は、従属民族のプロレタリアートの精神的能力が自由に発展するのをさまたげうるだけである。集会や演説会で母語をつかうことがゆるされず、学校が彼らにたいしてとどされているとすれば、タタール人あるいはユダヤ人の労働者の精神的才能の完全な発展などということを、まじめに論じることはできない。(「マルクス主義と民族問題」65、傍点は引用者)

母語の教育と、それが精神的能力の発達に与える影響については、やがてレオ・ヴァイスゲルバーが *Muttersprache und Geistesbildung* (1929) という、象徴的な題名をもつ古典的著作の中でとりあげることになるのであるが、スターリンはそれに先立ってこの問題を指摘した。私は偏見なしに、この指摘はスターリンによる非ロシア諸民族の民族的代弁であると思いたい。また、ここに言う学校が、母語による学校を指しているとすれば、スターリンはユダヤ人の母語を、タタール人の母語と同じ資格で民族語と認める態度をとっている点でレーニンと立場を異にしている。そしてスターリンはじじつ、ブンドの「ユダヤ語(イディシュ)の権利」の要求にあたっては、それが「母語」であることを認めているのである。スターリンがユダヤ人の母語であると思なしたところの言語を、レーニンはどう考えていたのであろうか。

ヨーロッパのどこでも、中世紀の崩壊と政治的自由の発展とは、ユダヤ人の政治的解放、ユダヤ人がジャルゴンから彼らがそのなかで生活している民族(ナロード)の言語へうつることと、さらに、一般的にいて周囲の住民とのユダヤ人の同化のうたがない進歩と手をたずさえてすすんだ。(「党内におけるブンドの地位」25)

ここには、ユダヤ人が母語を失うことを、臆することなく進歩と呼ぶ、おそれるべき独善があり、もっと重大なことは、ユダヤ人の母語を「ジャルゴン」と呼んでいることである。ユダヤ民族主義者たちは、たしかに、みずからイディシュを「ジャルゴン」と呼んでいたこともあったようだ(24)。しかし、レーニンがイディシュをジャルゴンと呼ぶとき、イディシュはまともな言語ではなく、「くずれたドイツ語」(verdorbene Deutsch)にすぎないという、カウツキーだけではなくバウアーの所説がそのまま深い考えもなくくり返されているだけだ(25)。さらに、レーニンはことあるごとに、ユダヤ人は「民族というよりはカースト」であると強調している。社会主義というものが、カースト、すなわち被差別賤民の存在を認めて、それを特別区に封じ込めるという政策を原理としてとらないものだとすれば、一九三四年ピロビジャンにユダヤ人の自治区が設けられ、イディシュの出版事業をいま現にソビエト政府が助成していることは、事実の問題として、現実のソビエト連邦はユダヤ人カースト論を否定していると言えるだろう。

カウツキーはオーストリア・ハンガリー帝国内の十一の言語のうち、世界語はただドイツ語のみであるのに、スイスは同じ多言語でも、三つまでが世界語ないしはそれに準ずるものであり、この事情がオーストリアに民族問題を沸騰させてスイスにそれを免かれさせていることの原因であるとした。そして、スイスにおいてこれは「負担であるというよりは利益である」(keine Last, sondern ein Gewinn)と言い、レーニンはそれを受けて、「損をせず得をしている」(не теряет, а выигрывает)と述べたのだ(本書一〇八ページ参照)。カ

ウツキーの国際化とは、ヨーロッパの世界文化への合流ということにほかならず、レーニンには非ヨーロッパの多民族をかかえながらも、この点についての批判はほとんどなかったのである。この安直な国際化の基準を批判し決定的な転換を求めたのは、たとえば一九二一年の「民族問題の提起によせて」と題するスターリンの論文であり、スターリンにこれを書かせたのはソビエトの各地でめざめた民族のたたかいという現実であったにちがいない。

第二インターナショナルの時代には、民族問題は通常、もっぱら「文明」民族にだけ関係のある諸問題の狭い範囲にかぎられていた。アイルランド人、チェコ人、ポーランド人、フィンランド人、セルビア人、アルメニア人、ユダヤ人、その他二・三のヨーロッパの民族体、——これが、第二インターナショナルがその運命に関心をしめした完全な権利のない民族（ナツィヤ）の範囲である。もっとも粗野な残酷な形で民族的圧迫をうけている数千万、数億のアジアとアフリカの諸民族（ナロード）は、いつも「社会主義者」の視野のそとにとりのこされていた。（197—198）

この批判は単に第二インターのみならず、ヨーロッパ的な民族問題に限定した問題としてしか扱えなかった、あらゆる理論——レーニンをも含めて——に抗する力をもっていた。カウツキーは「国家語」を認めない方針をブリュン綱領の中に入れながらも、じつはオーストリアにおけるドイツ語の絶対的優位という考えを出ることはできなかったのである。文化的価値の相対化という思想と全く無縁なところで、カウツキー、したがってレーニンの、言語における「国際主義」は生まれたのである。

ここで引用に示したスターリンの発言をもう一度注意深く見るならば、民族を指す用語にも、彼は慎重な使いわけをしているのに気付く。そこでは、ヨーロッパの文明諸民族を西欧語起源のナツィヤということばで呼び、アジア・アフリカ諸民族を呼ぶには、泥くさい純ロシア語のナロードを用いたのである（26）。今やスターリンにとっては、民族一般の問題ではなく、「白人と黒人、帝国主義の「文化的奴隷」と「非文化的奴隷」とをへだてる壁」を取り払うことが問題となったのである。

ここではすでに、文化語を他のいわば非文化語から区別して、特殊な地位を与えるカウツキーらの、せまい西欧文明中心主義はすでに克服されている。この意味でマルクス主義の民族問題に、アジア・アフリカの、ヨーロッパとは異質な問題を含む真の世界的な視野を導入したのはスターリンの功績であるという事実を、学問外的な予断をもつてくもらせてはならない。だが、民族問題はあくまで「問題」であって、机上の図式にとどまらない。階級的利益の優先という原則を認めない少数民族のごくささやかな要求が、国家の維持に致命的打撃を与えるという事態が生じうる。マルクス主義にとっての民族問題を研究するということは、ナツィヤやネーションのあれこれの定義を比べてみるのではなく、身近かな、われわれ自身の民族問題——たとえば明治初年において日本の熱心な欧化主義者は、「日本の国語」を英語にとりかえてはどうかと本気で提案した——や、社会主義多民族国家の現実が提供する、驚くほど豊富な素材の中から、言語と民族と国家との間の緊張関係における具体的な問題を見出すことであろう。

## 5 言語と民族の理論のために

カウツキーが到達した認識——民族を形成し、維持する窮極の原理としての言語——この認識が、七十年を経た今日の社会学者たちの趣味にも合うかどうかはわからない。それは半世紀以上も昔の古めかしい提言であるからというだけではなく、特に、民族と言語の緊張関係がそれとして意識される条件を欠く日本の国がらのせいでもある。近代日本の社会科学は、じつはことばとの格闘のさ中にありながら、意識としてはことばをす通りした彼方に脱け出ているように思われる。日本の社会科学が「日本語をおいてきぼりにして発展してきたかの観がある (27)」という社会学者の感慨は、深い共感をもって我々とらえる。

マルクス主義者としてのカウツキーの評価がどのようなものであれ、民族と言語の問題に迫ったかれのはったりではない考察は、レーニンとスターリンに踏台を提供し、みずからは舞台のかげに退いた。一般的に言って、民族とその文化の形成の基礎に言語を置いて考える思想、いわば言語観は、ドイツの思想的系譜と深い関係がある。民族性を言語によって説明するカウツキーが、こうした思想的伝統の申し子であると言った（本書一〇三ページ参照）のはこの意味においてである。

かれの言う「言語共同体」(Sprachgemeinschaft) が、現代のドイツ言語学（新フンボルト学派）においても基礎概念の一つであるだけでなく、ソシュールの言語理論の形成子ともなった (28)、G・フォン・デア・ガーベレンツにおいても、言語と民族の関係についてカウツキーが考えめぐらしたのと同じテーマがこの用語のもとにとりあげられていることは、言語学史の上からも見逃してはならない。

それぞれの言語は、いまここでかりに民族（フォルク）と称ぶところの、ある数の人々の共有財である。ふつうは言語共同体と民族共同体とは一致するからである。だがこの通則には多くの例外があることがわかっているので、不適當なばあいには、この表現に誤解が起きないようにするのがよい。たとえば Sprachgemeinde という言い方が適切であろう。それは外国人であっても、我々の母語で我々に話しかけてくるすべての人々をも当然含んでいる (29)。

カウツキーが、この近代言語学の予言的先駆者であるガーベレンツと共通のテーマを持っていたことは、当時の言語学と社会科学、あるいはその思想とが共通の基盤に根をおろしていたことを示唆している。

カウツキーはさらにすすんで、文化一般の中から「言語文化」という側面を発見して、言語の文化理論へのいとぐちを開くとともに、他方では民族語に対立する「国家語」の概念を言語化し、言語の社会理論への道をもさし示した。

言語のマルクス主義的理論を求めて人々は、マルクス、エンゲルスの著作の中に片言隻句をさぐりあて、あれこれと解釈を試みたが、そのむくいは乏しかった (30)。ただソビエトだけでは、言語の階級性に立脚した上部構造論構築の努力が行なわれているさ中、カウツキーで裏打ちされたスターリンの陳腐な言語論があらわれて、言語上部構造論がしりぞけられたとき、このいわゆるスターリン論文のみがマルクス主義言語論の財産目録の主要綱目となった。そして今、スターリンの政治的権威がといえ去ったとき、カウツキー言語論の、より中途半端な理解者のもとに人々は移ることになったのだ。

言語を水や空気と同じように、社会にとって自明の前提と考えていた日本の社会科学は、

スターリンによって、「言語はいずれの階級にも同じように奉仕するところの道具である」と教えられて、それでもわずかに前進したのかもしれない。言語が伝達の道具であり、したがってテクニクに属するかぎりでは、言語はそれ自体としての閉じられた体系として、もっぱらそのテクニクのしくみを究明するための一つの専門領域にゆだねることができよう。その任にあたるにふさわしい近代言語学への道は、今世紀はじめ、フェルディナン・ド・ソシュールの明晰で印象深い定式化をもって確立された。それは人文科学の近代的精密科学への偉大な出発であるとともに、たずねあてられるべき、もう一つの言語学の終焉でもあった。マルクス主義者をも含む代表的な理論家たちによる、社会と民族からの言語学の解放は、近代言語学に、不可侵の安住の地を保障することになった。

だがこれらマルクス主義者を含む理論家たちが、言語は道具であると説くとき、かれらはこの道具についての認識に致命的な欠陥があることに気がつかなかった。この伝達の道具、テクニクたるや、異なる言語共同体の中に移し入れられると、たちまち用をなさなくなるのである。しかもこの道具は、それを用いて創り出した製作物すなわち文化とも、ほとんど切り離せないという性質をもっている。移転不可能、交換不可能、代替不可能な、通常の道具の観念から非常に遠い、この非物質的な何かをなおも道具と称びつづけることには無理がある。この理論家たちは、日本人やエスキモーやアメリカ・インディアンに自分たちの道具を使わせることは考えても、自分たちが言語共同体としてこれらの人たちの道具を使うなどとは考えてみもしなかったであろう。二〇世紀近代言語学が、記号の体系としての言語に自らを限定することによって自律的な科学を要求し得たのは、この領域にたずさわる人たちが、言語をもっぱらこのような道具の面にかぎって解明することに関心を向けてきたからにはほかならない。したがって、この線に沿った言語研究の展開は、主としてフランス語、英語といった、カウツキーの言う *Weltsprache* さらに *Universalsprache* を母語とする人たちによって担われてきたことは偶然ではなかった。しかし、別の状況のもとでは人が言語に向うとき、道具やテクニクは、むしろ背後に呑みこまれてしまうであろう。

日本人、すなわち日本語を母語とする一つの民族は、朝鮮語とフランス語に全く同一の平面では接しないであろうし、日本人が見る朝鮮語と、朝鮮人が見る日本語は、それぞれ道具という点で同じであると言ってみても、問題の本質に多少なりとも迫ったと言う実感は得られないだろう。ここでは、体系としての言語、言語一般を超えたその彼方でこそ、自らの存在の決定にあずかるものとしての言語の存在様式、社会的な機能の問題と対し得ることになるろう。

体系やテクニクではなく、母語や個々の民族語に対する意識を問題とするとき、たとえば、ドイツの「戦闘的観念論者」とやや皮肉をこめて称されるカール・フォスラーのことばに耳を傾けなければならない。「我々が民族の言語を大切と思う気持が我々の民族感情であり……この感情は、ただひたすら、言語に向って噴出する」。このような民族感情、言いかえれば共属意識の源泉となる言語は、「いとうべき外国支配の下に入った我らのドイツの兄弟たちにとって、かれらの民族的追憶と希望の、最も大切に優しい窮極の保障である (31)」(強調は原文)。ことわるまでもなく「ドイツの」兄弟とは、人種や国籍から見たドイツ人ではなく、ドイツ語によって、一つの精神的運命に結ばれた人々をさす。そしてここでは、第一次大戦の結果失った、エルザス=ロートリンゲン、オイペン=マルメ

ディの「ドイツ語を話す」兄弟のことを言っていることは明らかである。

社会科学において、革命とは生産力と生産関係の矛盾から生ずる階級闘争の結果であるという。だが人は、その生存を規定する物質的窮乏が深まれば必ず決起するというわけではない。いかなる進歩的階級といえども、母語と引きかえに物質的利益を手に入れることで満足はしないのである。ひとつの言語で結ばれたところの、精神生活を共有する文化的世界、すなわち言語共同体の存立にとっての危機が感知されたとき、民族は直接間接に言語の防衛にたちあがるのである。ヨーロッパ、非ヨーロッパを問わず、世界の各地ですすめられる政治闘争は多かれ少なかれ、階級のカテゴリーによる把握をこえたところにある民族語のたたかひを含んでいる。そのばあい、言語は受動的な手段にとどまらず、民族を介して強力な政治的形成力となるのである。

(1) 高島善哉『民族と階級——現代ナショナリズム批判の展開』一九七四年（第八刷）。

(2) 今日、スイスに行なわれている諸言語について語るばあい、独仏伊の三言語のほかに、ロマンス系のレト・ロマン語を一つ加えるのが普通である。ところがここで二つとなっているのは、方言的分化のはげしい、むしろ方言の集合体とでも言うべきこの言語が、グラウビュンデン州西部のライン河流域一帯と、東部のエンガディン溪谷との二地域を中心に統合されつつあった段階を示すものと思われる。レーニンの知識はこの段階に対応している。その後、一九一九年に至って、両方言をさらに統合するための組織が設立された。後、一九三八年に至ってレト・ロマン語が第四の国家語に認知されるための条件を作りだしたわけである。

(3) オットー・バウアーは、民族の一部が分離されて異郷にあるばあい、かれらを民族として維持するものは、その本地、故土における同胞の民族的発展の力であると指摘している（Otto Bauer, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, Wien 1924, SS. 374・375）。在日朝鮮人にとっての祖国の意味が、まさにこのばあいにあたる。

(4) 高島前掲書、一四五ページ。

(5) 同、一四六ページ。

(6) K. Kautsky, *Nationalität und Internationalität*, Stuttgart 1908, S. 6.

(7) 同、八ページ。

(8) 同、七一八ページ。

(9) スターリン「マルクス主義と言語学の諸問題」一九五三年、ポリチズダート版、九ページ。

(10) モンゴル民族の独立国家形成におよぼした知識人の役割については、拙著『草原の革命家たち』（中公新書）の、特にジャムツァラーノとボドーの活動とその運命を参照していただきたい。ボドーは革命直後、首相の現職のまま粛清され、党綱領の起草者でもあったジャムツァラーノは一九三七年、レニングラードで研究中消息を断った。現行の党史は、二人はいずれもが民族主義者であったと述べている。

(11) カウツキー前掲書、二九ページより引用。

(12) 一九七七年十月七日採択の新憲法では、この趣旨は三六、一五九条で表現されている。

(13) カウツキー前掲書、一四ページ。

(14) 日本語の「国際的」という語は言うまでもなく international の訳語であるが、ロシア語は международный すなわち「民(族)(ナロード)際的」としてとりいれた。nation を「国家」と解釈するか「民族」と解釈するかは政治・文化的背景によって異なるが、「国際」という日本語においては、文化が常に政治に圧倒されている。ここでの用例は言うまでもなく、文化に関するものであって、国際というのはふさわしくない。カウツキーにおける Internationalität とは Nationalität (民族性) を超えて、それと対立する概念であるから、「国際性」というのは不正確な、一時しのぎの訳にすぎない。

(15) 私がいまここで Weltsprache, Universalsprache に、それぞれ世界語、万能語という訳語をあてたのは機械的にすぎる。今日の日本語の語感からすれば、前者を国際語、後者を世界語とすべきであろう。歴史的には少なくともライプニッツに lingua universalis の用法があるが、具体的に自民族の言語に langue universelle の肩書きを要求したのは一八世紀のフランスであった(ビュルネー『国際語概説』クセジュ文庫、二二ページ以下)。だが多様な民族語の主張が乱立した一九世紀末になると、既存の歴史言語によらない、人工語の提案が試みられるようになった。そのさきがけとなった、ドイツ人牧師シュライヤーの提唱する新言語は、その名も volapük (世界語) と銘うたれていた。vol は当時のドイツのはやりことばであった Welt に手を加えたものである(この時代の雰囲気は R. Kleinpaul, *Sprache ohne Worte*, Leipzig 1888, S. 4 f. が伝えている)。重要なことは、カウツキーがこれら人工の「世界語」には目もくれなかったことである。

(16) この点で、カウツキーの考え方は、論敵のオットー・バウアーに酷似している。「ユダヤ語で授業する、専用の学校で学ぶユダヤ人の子供を考えても見たまえ! いかなる精神がこうした学校を支配するだろうか?……〔ヨーロッパ文化とは異なるユダヤ人の文化とは〕歴史のない民族の文化、ヨーロッパ語民族の良風美俗の外に立つ人々の文化である」(オットー・バウアー前掲書、三七九ページ)として、「歴史を欠く民族」の言語は教育に向かないことを明瞭に述べている。ユダヤ人専用の学校を否定した点では、レーニンとバウアーの立場は異ならない。

(17) カウツキー前掲書、一八ページ。

(18) レーニンの攻撃目標となった文化的自治の提唱者バウアー自身に、この点でレーニンは大変近いと言わなければならない。バウアーは「すべての民族に同権を付与することが大切なのではなく、すべての民族の労働者を文化的に高め、かれらすべてを闘うプロレタリアートの大いなる国際的戦列に引き込むことが大切なのである」(前掲書、三八〇ページ)と述べているからである。

(19) カウツキー前掲書、一八ページ。

(20) 同、二七ページ。

(21) 高島前掲書、一五七—一五八ページ。

(22) 言語に関するスターリン論文が、ソビエトの言語学界に虚脱と意欲のいりまじった雰囲気をかもしだしていた一九五五年はじめ、レニングラードでマルの言語「交叉」理論の再検討のため、スブストラートに関するシンポジウムが開かれた。その席上、ソビエト言語学の長老であるアバエフは、カフカス地方のオセツト語(約四十万の話し手をもつ)を母語とするかれがロシア語を用いる際に、母語の「よくなじんだ意味論的関連や連想を断ちきるのが、いかにむつかしいか」についてこう述べている。「私は幼いときにロシア

語を身につけ、過去三十年、ほとんど常にロシア語の中で暮している。だが今に至るもなお、私は自分が母語のオセツ語で考えつづけているのに、はっと気がつくことが稀ではない。たとえば、ロシア語でコップを「立てる」(поставить) と言うべきところを「置く」(положить) と言ってしまふことがあるのだ。何故か。オセツ語ではそれを言うのに一つの語しか無いからだ」(В. И. Абасв, А, О языковом субстрате, Доклады и сообщения института языкознания АН СССР, No. 9, Москва 1956)。

(23) 言語文化的抑圧に最も敏感なのは労働者ではなく知識人であるというカウツキーの指摘と考えあわせていただきたい。

(24) 一八九五年、ヴィルニュスにユダヤ民族主義者が、イディッシュによる翻訳活動を行うために設立した機関の名は Zhargonishe Komitet であった(原暉之「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」『愛知県立大学外国語学部紀要』第八号、一九七三・一二、四九ページ)。

(25) カウツキー前掲書、七ページ。またバウアー前掲書、三七二ページ。「くずれた」ことばという考え方は、比較言語学的、系統論的分類主義の標準意識の影響によるものであって、真に「民族語」を共時論のたちばから考えるならば、そのような基準は消失するはずである。言語と言語を隔てるか近づけるかは言語の系統論的、あるいは方言学的分類基準とは別のものである。この点については Ф. П. Филин, Заметки о состоянии и перспективах советского языкознания, Вопросы языкознания, 1965, No. 2, стр. 24 を参照。

そして、「民族語の原理」をめざす系統論的言語観からの解放に、フランス語で言う *idiome* という共時言語学的概念は寄与している。この点では、「民族語の原理」は歴史を拒否するものである。

(26) スターリンの論文にあらわれるこのナロードと、またナロードノスチ(民族体と訳される)という語について、高島氏は、奇想天外な方向に議論を展開させている。「ナロードノスチを一つの民族体として、民族の潜在的な可能性として、母体としての民族のエネルギーとして把握するならば、民族というものはもっとその生きた個性において現われてくるであろう。民族の個性を無理に抽象化して、これを体制の発展段階に機械的に照応させ組み合わせる必要もなくなるであろう。民族というものは、もっと血のかよった、生きた、自然的で歴史的社会的な個体なのである」(前掲書、一四三ページ)。ナロードノスチであれ民族であれ、「血のかよった、生きた」ものであるという主張に関してはまったくその通りだ。では誰がいったいそれを「無理に抽象化」してしまったのだろうか。日本語でロシア語の接辞 *-ность* を翻訳の習慣で「体」と訳したために、ナロードノスチは高島氏によって、血の通わぬものと受けとられてしまったのだ。高島氏は、ナロードノスチを「ナーツィヤより一つ前の段階の民族とみることもできる」(一四二ページ)と、一度は正しい解釈を示しているにもかかわらずである。ナロードノスチという造語は、言語学で言う、いわゆるカルク (*calque*) であって、ドイツ語の Volk — Völkerschaft ないしは Nation — Nationalität をモデルとしている。スターリンはこれを言語の面からは、「文字体系を所有するに至らぬ言語共同体に属する民族」とでもとらえられそうな意味に用いていたと私は経験的に受けとっている。ソビエト民族学の文献において、「北方のナロードノスチ(複数)」と言われるとき、パレオ・アジア的少数民族が意味されているのである。

驚いたことに高島氏は、「ナロードノスチというロシア語の意義はどのようにもあ

れ、私はこの言葉をこのような角度から捉えることによって、マルクス主義の民族理論に新たな息吹きを与える」(前掲書、一四三ページ)のだと言う。外国人のちょっとした思いつきなどで、簡単に意味をかえられないのが、民族の言語の本質である。このようなやり方で、理論が自在に息吹きを与えられたりしてはたまらない。

(27) 内田義彦『社会認識の歩み』(岩波新書)四〇ページ。

(28) Eugenio Coseriu, Georg von der Gabelentz et la linguistique synchronique, *Word*, vol. 23, Nr. 1・2・3, 1967.

(29) G. v. d. Gabelentz, *Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*, Leipzig 21901, S. 8.

(30) マルクス、エンゲルスの著作の中に、言語に関する重大な考察がなされているばかりがあっても、もともとそれが言語などという非階級的現象に関するものであるためか、注意深く読み込まれておらず、時には創造的誤解に導かれかねないケースがある。次に示すのは、邦訳全集版『ドイツ・イデオロギー』からの一節である。

サンチョがドイツ語を話してフランス語を話さないのは、けっして種属(Gattung)のおかげではなくて、環境のおかげである。そのうえ言語の自然成長性(Naturwüchsigkeit)は、近代のどの発達した言語においても、あるいはロマン語やゲルマン語の場合のようにもとからあった材料からの言語発展の歴史によって、あるいは英語におけるように諸民族の混血と融合によって、あるいはまた経済的および政治的な集中にもとづいて一国民の内部で諸方言が国語(Nationalsprache)に集中することによってなくされている。(『第三巻』四六一ページ)

引用を節約したためにこの一節の意味は多少とりにくくなっているかもしれないが、「近代的言語が種属の所産」であること、種属と一体になっていることを否定しようというのがここでの著者の意図である。そこで、引用の中の第二の文章の骨は「言語の自然成長性は、(歴史によって、民族の融合によって、方言の集中によって)なくされている」ということになる。言語の自然成長性がなくなるということはどういうことなのであろうか。言語が自然成長性なるものをまだ保持していた時代と、それを失った時代との区分がここで問題になっているのであろうか。とすれば、これはマルクス主義から言語発展について提出された、まれに見る具体的図式だということになろう。だが、「誤解が新しい理論を生む」機会をここで未然に防ぐために、この文章の別の読み方を示しておかねばならない。

ここに言う Naturwüchsigkeit der Sprache とは、「言語が生まれたままのすがた」、あるいは「野生のなまのままのすがた」といえるかもしれない状態をさしている。この「生まれたままのすがた」は歴史によって、融合によって、あるいは「経済的、政治的な集中にもとづく、一民族内の諸方言の集中によって、民族語へと高められ(解消される)」のである。すなわちこの論旨は民族語(国語ではない)のどれ一つをとってみても、種属の中で生まれたままの形を受けついでいるものは一つもないということになる。

我々はこの引用を通して、マルクス主義的言語学というものがあるとすれば、言語の存在形態を、言語共同体の存在形態との対応関係において明らかにして行くのを中心的な課題としていることを知るのである。

(31) Karl Vossler, *Geist und Kultur in der Sprache*, Heidelberg 1925, S. 135.



### 1 民族の定義はなぜ必要か

一九一三年にその基礎が置かれて後、表現上のわずかな変更が加わったのみで、一九二九年、一九四六年にも大綱はそのままくり返された、スターリンによる「民族（ナーツィヤ）」に関する定義は、永きにわたって、マルクス主義の立場から「民族」に付与された権威ある概念として、いわば古典的な地位を保ちつづけてきた。そしてこの定義に対する批判的な見解、あるいは補足を要するという批判があらわれはじめたのは、「スターリン批判」という政治的カンパニヤ以後のことであるから、このばあい、学問は政治の先導を必要としたのであった。

民族は人間の社会的集団の諸形態の中でも、最も基本的なものであると同時に、民族ほど様々に異なった政治的、歴史的条件のもとで多様なあらわれかたを示すものはまれであろう。基本的であると同時に、常に特殊化された形態をとって現われる——なぜならこの地上に同じ民族は一つとしてないのであるから——ところの、これほど定義にとってふさわしくない対象にむかって、一般的、抽象的な規定を与えることに、いったいどんな意味があり、動機があるのだろうか。定義の行為は、たしかに知的なよろこびを人に与えてくれる。また辞書の編さん者にとって、定義の動機をあらためて問うのはやばなわざである。

いまここで、あえて偏見をもってのぞむならば、民族という概念には、階級概念にそなわっているような、首尾一貫した原理によって一義的におさえるにはあまりにも質のちがう諸要因が付着しているため、理論に偏愛を抱く社会学者ならば、こうした概念を設けること自体に一種の忿懣を覚えないではられないような、そのような性質があるのではないかと思われる。現実よりも理論を重んじるたちばかりならば、民族の概念の存在自体がじゃまものであって、本来ならば階級の概念で一元的にとらえやすいよう、民族の実体はともかく、すくなくともその概念だけでも、社会科学の目的にかなうよう切りととのえておかれるべきなのであろう。

ところが、民族がそのものとしてとり出され、それにマルクス主義的な定義がまとまったかたちで付与されたのは、他のどこでもなく、先ずオーストリアにおいて、次には、多民族を擁し、それらが相互の間でさまざまな緊張をはらみつづけるソ連邦においてであった。この事情は、ソ連邦における民族論が観念的な図式の世界に飛翔することを抑え、現実におろして絶えざる検証を求める作業を課したのであった。と同時に、この同じ事情は、民族の定義づけが、単に理論的関心からのみ生まれて、理論の次元にのみとどまるような、抽象的定義でありつづけることを許さなかったそのわけを説明している。

つまりソ連のような多民族国家——より理論的に言えば、多民族の国家的諸形態からなる結合体(1)——において、ある民族的集団をナーツィヤ（民族）とかナロードノスチ（民族体）とかと称ぶのは、その集団の資格づけのためであって、民族の定義は、現実にはある集団の資格を認定したり否認したりするための行政上の基準とも言うべき役割をはたすことになる。もっと具体的に言いかえるならば、「民族」の認定を受けた民族的集団は、国家あるいはそれに準ずる体制をとるにたる資格、あるいは潜在的な権利を認められたことになる。国家あるいはそれに準ずる単位というまわりくどい表現は、ロシア語の「国家（ガスダールストヴォ）」（государство）から派生させられた государственность ガスダー

ルストヴェンノスチをかりにくだいて言いかえたところのものである。ナロードーナロードノスチという対（つい）を民族—民族体と訳す我が国の習慣に従えば、この派生語は、さしずめ「国家体」と言っても許されるであろう。

ソ連邦では民族（ナーツイヤ）は国家あるいは準国家を形成し得るが、ナロードノスチはかなり低位の自治に甘んじなければならない。このようなナロードノスチの外的指標としては、通常数千から数万の規模の人口が挙げられるが、必ずしもそれのみによっては決定されない。たとえばダゲスタン自治共和国のアヴァール族の人口は四十万近くもあってなおナロードノスチにとどまるのに反し、カルムク人は十万程度ですでに民族をなしている（と認定されている）。カルムク人が間違いなく民族であると言い得るのは、論理をさかさにして、かれらが自治共和国を所有しているという現実の方から説明するのがてっとり早い方法である。シベリアから極北にかけての気の遠くなるほどの広大な地域には、二十種のいわゆる「北方ナロードノスチ」が数えられるが、中でも大きく目立つエヴェンキ族にして二万四七〇人（一九五九年の統計）にすぎない。このようなナロードノスチはひっくるめてソ連邦総人口の〇・〇六%を占めるにとどまる。ナロードノスチとは、このような前民族的集団をよぶために、ソ連では欠かせない用語として登場してきた。この概念はもちろんソ連邦以外の国についても流用できる。たとえば、日本ではアイヌ民族という用例があるが、これはロシア語に訳すとすればナロードノスチになるだろう。また東ドイツの人口約十万人の斯拉ヴ系少数民族ゾルベン（ルジツァ）もまたナロードノスチである。

ソ連邦内の民族的単位は、このようなナロードノスチを加えてほぼ一三〇にのぼる。この数自体は、インドやアフリカの状況に比べれば、あまり大きくはないとは言え、言語系統論的には、比類のない多様さを示していると言えよう。この点から見ると、ロシア革命の特質は、人類の階級的解放と並んで、あるいはそれにも増して、深く人類の存在様式の根源にふれる、民族的解放という課題の前に立たされていたという点に求めることができる。

こうした状況のもとで、レーニンは少なくとも一九一七年までの著作について見るかぎり、民族の原理を優先させるところの、民族の分離と連邦制を原則として許さず、それを階級の原理に従属させることによって、ロシアがプロレタリアートの独裁による、「巨大な中央集権国家」となるべきことを主張しつづけた。しかしその後のレーニンが連邦制の容認へと態度を変更したことは、一九二二年のソ連邦憲法制定という結果に見られるとおりである。しかも、連邦からの分離権すら保持したウクライナ、白ロシアなどの共和国の地位は、「巨大な中央集権国家」構想からの思いきった譲歩ではあったが、それはあくまで譲歩であって、基本的には「連邦制というのは、いろいろな民族の勤労者が完全に統一されるまでの過渡的形態である」（「民族および植民地問題にかんするテーゼ原案」）という見解に変更はなかった。

ソ連邦の民族問題は、ごく単純化して言えば、一方に民族の主権拡大の希求と、他方に単一国家への願望という、それぞれいずれも道理のある対極の間での動揺であった。レーニンがあくまで過渡的移行形態としてのみ採用した連邦制構想は、連邦内での低次の自治からより高度な自治を求める運動となつてあらわれ、その成果を固定することがのぞまれた。たとえば一九二四年には自治州であったキルギスは、二六年には自治共和国に、三六年には連邦構成共和国の地位へと上昇した。二八年には民族管区（национальный округ）

でしかなかったモルドヴィンは一九三〇年には自治州に、三四年には自治共和国となった。このような上昇の動きはモルダヴィア自治共和国が連邦構成共和国となった一九四〇年頃まで、大きな流れとして続行された。他方、この上昇への動きとは逆に下降の例もある。たとえば一九二一年には共和国であったアブハズは、一九三〇年にはグルジア共和国の中に吸収されたという例がそれである。片手間では簡単な鳥瞰すら手に入れにくい、ソビエトの諸族のガスダールストヴェンノスチ（国家体）の消長の歴史から、我々は、スターリンの「民族とは……」ではじまるあの定義が、それぞれの民族の存亡そのものを左右する行政上の原基として機能したことを、まず忘れずに念頭に置いておかねばならない。しかもこの原基たるや、「異なる歴史的条件を考慮して」かなりの伸縮を見せたのである。

国家体の分離、吸収の過程は、連邦内部で行われただけでなく、特殊なケースとして、連邦外の形式的には完全な独立国家にもおよんだのである。たとえば一九六一年以後に刊行されたソ連邦の地図ならば、モンゴル人民共和国の西北方に隣接する部分にトゥバ自治共和国という国名が見られるであろう。手もとにある、戦時中日本で印刷された簡単な地図でも、この同じ場所にはトゥバ人民共和国と記入されている。この地域は伝統的に外モンゴルの一部であるとモンゴル人たちは考えていたのであるが、一九二一年、モンゴルとほとんど同時に独立を宣言して人民共和国となった。モンゴルの革命家たちはこの地域を返還するようくり返しソビエト当局に要求し、トゥバの人民もそれを望んだと言われるが、ソビエト当局は検討を約束しながら遂に実行にうつさなかった（『草原の革命家たち』中公新書、一二四ページ以下参照）。こうしてモンゴルとトゥバの二つの人民共和国は二十年間にもわたって併存しつづけたのであるが、一九四四年、突然、トゥバは自らの「申請によって」ロシア連邦共和国に吸収された。その時、人口十万に満たないこの民族に与えられた地位は自治州であった。そして六一年には先に述べたように自治共和国に昇格した。つまり、もと独立の人民共和国が、ソ連邦に加わったとき自治州にとどめられたということは、理論的にはどちらかの地位に誤りがあったということにはほかならない。言いかえれば、トゥバは、人民共和国としてのナーツィヤの資格を一度は失って自治州のなかでナロードノスチとなり、六一年には自治共和国としてナーツィヤ、すなわち「民族」としての地位を回復したということになる。

このようにソビエトの現実には、スターリンが民族を規定した四つの要因、すなわち言語、地域、経済、文化（心理状態）に加えて、国家（体）の問題をとりあげざるを得なくさせた。「近代民族は国家を形成する」という通念、および、ソ連邦内における多様な諸民族と、かれらにあてがわれた国家体との間の不一致、さらにソ連邦内で自治度を低落させる一方である国家体のうつろさは、ソビエト体制の現実の擁護のために、ふたたび民族の定義を、特に国家体との関係でおちどのないものにくみかえざるを得ない状況をつくり出した。

ソビエト体制の現実というばあい、とりわけ顕著な現象は、共和国間相互の激しい移住である。我々はたとえば、カザフ共和国といえば、カザフ語を話すカザフ人が基幹住民をなす共和国であるとふつうは考える。しかし、すでに古くなってしまった一九五九年の統計によってさえ、共和国人口九三一人のうちカザフ人は二八〇万人であり、それに対するロシア人は三八〇万人である。ウクライナ、白ロシアなどスラヴ系住民を加えれば、その数は当のカザフ族の倍近くにも達する（バジエフーイサエフ『言語と民族』八三ページ）。

中央アジアの工業化がいつそう促進されている今日では、この傾向はもっと鋭く現われているだろう。これをロシア人の高級官僚、高級技術者の居住する都市部について見ると、驚くべき現実がうきあがってくる。

たとえばウズベク共和国の首都タシケント市内の第九四中学校について見よう。ここでは生徒総数一一六六人のうち九二二人までがロシア人で、ウズベク人は五四人でしかない（一九六〇—一九六一年の統計）。市内の他の中学校もほぼ同様の状態である（ハナザロフ『ソ連邦における諸民族の接近と諸民族語』一九六ページ）。教室内で5%のウズベク人はいまや民族共和国たる祖国においてさえすでに少数民族である。ブリヤート自治共和国の首都ウラン・ウデの人口は一七万五〇〇〇人で、うちブリヤート人は四万一八八三人でしかない（ダルベーエワ『ソビエト時代におけるモンゴル系諸語の社会的機能の発展』五八ページ）。つまりブリヤート族の首都で出あう市民四人のうち、三人までがロシア人である。国家体は、このような移住現象——具体的にはロシア人の民族国家体への任意あるいは強制的移住（2）によって、ほとんど実体のないものになっている。多民族の自決による、多様な自治体からなる任意の結合体としてのソ連邦という美しいメルヘンは、こうした現実の前にすでに色あせており、いまや根本的に改訂をほどこされるべき段階に立ち至っている。だが、ここで我々は公平のために中華人民共和国のことも忘れずに考えあわせておこう。もともと分離権や連邦制は問題にもならず、極度に低い国家体しか与えられていない内モンゴルやチベットの自治区において、デモグラフィー的のどのような事態が進行しているかといえ、それはもはやソ連邦の比ではないのである。いずれの国家においても、民族の解消、民族語の国家語への譲歩という歴史的発展が絶え間なく進行しつつある。

## 2「接近と融合」の課題

ソ連における、スターリンの民族規定の再検討のうごきは、一方において、スターリン信仰批判というモードのあらわれとして、他方においては、さきに一端を見たような、ソビエトの現実があらわにした、社会主義体制下での民族と国家の不整合な対応関係という二つの面からはじまった。ところで、批判さるべきスターリンの提示した民族の規定は、ほかならぬレーニン自身の賛同と称讃をすでに受けたものであったし、他方レーニンの民族に対するとりくみかた自体、一九一七年の前後では、連邦主義の原則的否認から容認へと大きな転換をとげるなどの動揺が見られるため、スターリンとの間にくっきりとしたコントラストを浮き上らせて、スターリンの規定を他のものによって置きかえるという所までは直線的にすすみ得ないという事情があった。この議論をすすめれば、レーニンにおける民族のとらえかたに一貫性のなかったことをますます明らかにし、その動揺のあとを見ることによってレーニンの思想からカノン性を奪い去り、その相対化に道を開くおそれは充分にあった。

民族の問題はスターリンからではなく、レーニンにさかのぼってそこから出なおすべきであるという主張は、たとえばカルタハチャンにおいて集約的に見られる（「「民族」概念に関する問題によせて」三五ページ）。そして典拠をレーニンとするばあい、少数民族の自治をできるかぎり高度な形で維持しようとする者と、それを解消することによって単一ソビエト国家を求める者とは、それぞれ自己の主張に好都合なことばを、レーニンの著

作のなかから引き出そうとした。前者の立場をとる者は、レーニンがすでに十月革命以前において、民族たる要件の一つに国家の所有を数えていたという主張の裏づけのために、たとえば一九一四年の「民族自決権について」から次のような一節を引用するのがならわしである。「民族の自決とは、ある民族が、他民族の集合体から国家的に分離することを意味しており、独立の民族国家を形成することを意味している、という結論にたっせざるをえない」。また、いわゆるオットー・バウアーの「文化的自治」に対立するところの、「マルクス主義者の綱領における「民族の自決」とは、歴史的=経済的見地からいって、政治的自決、国家的独立、民族国家の形成以外のどんな意味をももちえないということである」と述べたくだりが引用される。この期のレーニンの民族自決論は、カウツキーの地域原則、あるいは領土原則 *Territorialprinzip* へのほとんど全面的な共感と、それへの肉づけとして生まれたことは記憶さるべきである。

こうしてレーニンへの依拠の道が探索されるとともに、スターリンの掲げた四項目——言語、地域、経済、文化（心理状態）——の精査がすすめられた。はじめの三項目は、すでにレーニンの著作にふれられているため了解ずみのこととして、第四の項目があいまいさが問題として残された。だが大切なことは、これら四項目とはべつに民族の属性としての国家の所有の問題が、あらたな重要性をもって登場してきたことである。というのは、すでにふれたように、現実に進行しつつあるソビエトという国家の中の諸国家の存在およびその境界の事実上の解消と、民族国家の概念との間には、おおうことのできない矛盾が深まっているのである。ここから、「資本主義的民族」に対立するところの「社会主義的民族」という概念が生み出され、国家の所有との関係で大きな意味を帯びてくることは、あとで述べるであろう。

移住の強化と民族領域相互間の境界の事実上の消失が招いた現象は、かつて多民族国家ソ連邦の民族的自決に見あうソ連邦諸民族の文化的特徴づけとして機能していた「形式においては民族的、内容においては社会主義的」というスローガンにかわって、「諸民族の *сближение*（接近）と *слияние*（融合）」という常套語があらわれたことである。このことばは一九六二年頃から広く普及しはじめ、一九六三年にはタンケントで『ソ連邦における諸民族の接近と諸民族語』という著作の題名にさえなつて登場するに至った。「接近と融合」という表現の出典は、これまたレーニンの著作であつて、「自決にかんする討論の決算」（一九一六年）にはくり返し登場する（3）。民族の理論に関してはスターリンの貢献が大きかったという根強い印象をぬぐい去り、レーニンに出発点を求めるかたちで、過去における民族政策の歴史を形づくってきた、重要な一こま一こまをいっさい御破算にしようという志向は、民族文化の自立ではなく、その融合を促進しつつある現実にあわせて、それにふさわしいキャッチフレーズをレーニンの著作から引用したのであるが、この巧みな引用学者の榮譽が誰に帰せられるのかはあきらかでない。いずれにせよ、ソビエト社会の現実には、もはや民族の自立ではなく、「接近と融合」が当面の話題になつてもいい状況へと大きな変化、跳躍をとげたのである。ソビエトにおける状況に対する批判としてではなく、その正当性のあかし立てのための目的にかなつた、レーニンの著作からの発言の引用をあれこれとつじつまをつけてまとめあげる仕事は、民族問題の研究でもなければ、レーニン研究でもないことはあらためて言うまでもない。圧倒的多数の論著がこうした傾向をとっているとはいえ、他方においては、やはりソビエトならではの、豊富な民族誌的資

料からの知識を背景にした議論も登場してきた。このテーマに、最も深い関心を寄せて、数々の論者を登場させて発言の場を与えたのはとりわけ『歴史学の諸問題』誌であった。

同誌編集委員会は一九六六年の第一号にまずログACHEF、スヴェルドリンの共同執筆になる「民族」の概念について」を掲載することによって誌上の討論を開始し、六八年の十一月号、レヴァンドフスキーの「中世ナロードノスチの発生と没落の問題によせて」を以てこの企画を閉じた。この二年間にわたる討論のまとめは、一九七〇年八月号に掲載された。編集者は言う、「二年間にわたって二七編の論文が寄せられ、寄稿者のうち二三人は歴史家、一六人は哲学者、民族学者五、法学者三、言語学者二、経済学者一名であった」。

じつは『歴史学の諸問題』がこのテーマにとり組むきっかけを作ったのは、『哲学の諸問題』誌であって、一九六四、六五年に、かなり内容の充実した議論が展開された。このように「民族の問題」に広い関心が向けられる具体的なきっかけは、「共産主義の物質的・技術的基盤の確立」のために諸共和国間の緊密な相互協力が必要だと説いた一九六一年の第二二回ソビエト共産党大会を機としてはじまったと見られる。のちに『歴史学の諸問題』にも寄稿したП・Г・セミョーノフは、一九六一年の『ソビエト国家と法』をはじめ、六三年にタジク共和国の首都ドゥシャンベで刊行された著作の中で、ソビエト連邦では、単に自治共和国のみならず、連邦構成共和国さえも денационализация（脱民族化）が進行しており、ソ連邦における民族的境界はすでにかつての意味を失ってしまったと述べて（タデヴォシャン「民族問題の社会主義的解決のための国家的形態をレーニンはどう考えたか」三七ページ）、大きな議論のたねをまいた。後に『歴史学の諸問題』誌に民族にとって国家の保持が必要であることを説いたカルタハチャン、ムナツァカニャンなどの名が、いずれもロシア人ではなくアルメニア出身を思わせるのは興味深い。こうした議論の場に、常に民族定義をめぐる論争と、レーニンの著作からの引用とその解釈がくりひろげられることは言うまでもない。議論が、きわどいものになればなるほど、レーニンからの引用はソビエト体制への忠誠のあかしとなり、身を護るタテになるからである。ところで、レーニンの考えは、さきに述べたように時代によって大きな転換を示しているのみならず、同じ時代相をとってみても、必ずしも均質であるわけではない。このことが、全く対立しあう論者に、同じように論拠をあたえるという結果になる。

いずれにせよ、「諸民族の接近と融合」をテーマにするソビエトにおける民族概念の論争は、一九六一年頃から明確な方向をとってあらわれ、七〇年頃には、レーニンの著作（とソビエト当局）が許す範囲内での様々な解釈が出そろった。それについての詳細な文献一覧と、そのいちいちの要約とは、試みしてみるだけのねうちはある。しかしここでは特に問題となるいくつかの論点だけをえらび出し、それを、ソ連邦における具体的な状況とつきあわせながらたどって行くという方法をとることにする。

### 3 民族の条件

民族の問題をスターリンからではなくレーニンからとらえなおそうとしても、そこには、スターリンにおけるような、まとまった定義づけは見当らない。それに対してスターリンは、民族たるべき条件を四つの項目で示すという素朴な明晰さと断定的直截さによって、広汎で、また限定された議論への足場を提供したという点で、その功績は無視できない。したがって今日のソ連邦で、民族を論じる者の多くが、スターリンの掲げた項目の

一つ一つをあげつらって検討し、その表現にわずかな修正を加え、項目をとりかえ、あるいは新たな項目をつけ加えるなどの方法をとっているところを見ると、スターリンの定義づけは、良くも悪くもまだ影響力を失ってはいない。

もともと、スターリンの示した四つの項目は、特に異論をよび起す目新しいものを含んでいなかった。それが、オットー・バウアーに対するカウツキーの批判の中から生まれてきた、よく洗練され考えぬかれた先行者たちの遺産の継承であることはすでに前の章で示しておいた。ところで四つの項目のうちの最初の三つ——言語、地域、経済関係の共有——は、レーニンの著作の中でもおりにふれて指摘されている。しかし最後の項目でスターリンに特有の、「文化の共通性のうちにあらわれる心理状態」は、それがレーニンのことばの中に見出されないだけに、スターリンを攻撃しようとする者にとっては最も手ぢかな標的になった。

ところで、この項目を批判的に検討しようとするばあい、誤解を招きやすい「心理状態」という邦訳の形からとりかかってはならない。ことばのおとしあなに足をすくわれた無駄な議論を未然に防ぐために、まずはスターリン自身のことばにもどしてみよう。「心理状態」のもとのことばは *психический склад* である。状態と訳された *склад* の意味論的なせんさくを省く手段として、さしあたってスミルニツキーの露英辞典にあたって見ることにする。対応の訳語には *constitution, mind, mentality* などが与えられていると共に、ロシア語の同義語として *характер* (性格) があげられている。またオジェゴフをはじめ他のほとんどの現代ロシア語の辞典は、*склад* を *характер* と同義のものとして扱っている。ではスターリンはなぜ *характер* と言わず *склад* を選んだのであろうか。たしかに *склад* は純ロシア語であるのに対し、*характер* はおそらくポーランド語を介して借用されたドイツ語の *Charakter* にさかのぼる外来語である。だからといってスターリンは外来語を拒んで純ロシア語を選んだのだと結論してしまうのはせつかにすぎるであろう。もしそうなら、なぜ *психический* などというかたい外来語をためらいなく用いているのだろうか。だから *характер* (性格) を避けた理由は、もっと内容的にさぐらなければならない。レーニンとスターリンは民族理論に関してはカウツキーの忠実な弟子であったことをいま想起するならば、次のことに注意する必要がある。すなわちカウツキーはオットー・バウアーの *Nationalcharakter* の存在を否定し、この伝統はレーニン、スターリンによって継承されたのであるから、*характер* = *Charakter* は正統マルクス主義にとっては禁句の一つである。スターリンはこの禁句の使用を注意深く避けながらめざす対象にやっとなどついた、その苦心の作がこの「心理状態」であったというのが私の解釈である。だから、このもってまわった表現の、そのまたまわりくどい日本語の訳は、内容的には「気質」とほとんど等価と見てよいのである。こうした問題はロシア語文体論、あるいは社会科学文献用文体論の興味あるテーマとなりうるが、いまここでの話題ではない。ただ注目したいのは、表現は変わったとしても、「民族的性格」にやや近い概念がスターリンの定義の中には含まれていたという事実である。

こうした、ソ連邦での民族論議が、常にレーニンを基準にして、そのわくから外に出なかったわけではない。そのもっともラジカルな例として、レーニンとスターリンがそろって指摘したところの、言語および地域の共有さえ欠きながら、なお民族的一体性を保ちうるというアガエフの主張がある。ダゲスタン自治共和国の首都マハチカラに住むアガエ

フにとっては、身近かなところからいくつもそのような例をあげることができるのであろうが、かれはたとえば、総人口の四分の三以上がすでに英語を母語としながらアイルランド人としての意識を失わないアイルランドの例を出す。またエヴェンキ人は、コンパクトな地域的まとまりを持たず、シベリアの広大な地域に拡散していても、なおナロードノスチたることを失っていないという。

言語と地域の共通を失っても民族が維持されるのは何故か、この問いに答えるにあたって、アガエフは従来の伝統的な、外的項目による民族の定義という方法を最初から断念して、「民族意識」あるいは「民族的自覚」に民族形成のよりどころを見出しているのである。言語と地域の共有は、アガエフにとっても、すくなくとも、民族意識の形成に参与する有力な要因である。しかし、一度び形成された「意識」は他の項目が消滅した後もひきつづき維持されるという。

ところでここでもまた、マルクシズムにとって禁句に近い、観念的な「民族意識」が登場し得た理由についてことわっておかねばならない。じつはここに仮に日本語にうつしたもとの語は этническое (народное) самосознание、つまり英語に移すと、ほぼ ethnic consciousness ということになる。このエスニック、すなわちエトニーチェスコエ (すなわちエトノス) の概念は、ソビエトの民族論争において、特に重要な意味を帯びることになる。とにかくこの場では、エトノスに代替させることによって、национальный「民族的」という、あぶないことばは一応避けることができたのであった。そしてアガエフは、この「エスニックな一体感」なくして、他にどのような共有物であろうとも民族的結合は維持されないし、逆に、この「意識」は領土の分断をも乗り越えて、民族あるいは民族体の統合に寄与すると説いた。

社会現象を意識によって説明するという、非唯物論的方法が、ソビエトの官製学界誌に発表されるということは、ソビエト科学の理論上の乱脈さを示しているというよりは、むしろその寛容さのあらわれであると見るべきものであるが、問題は、やはり民族の本質とは単に外的な基準だけではとらえきれず、このような、意識の世界の中まで踏み込んで行かざるを得ないという、その対象自体の性格にもとづくものであろう。

アガエフは「民族 (エスニック) 意識」という用語を、「特定のエスニックな共同体への所属の意識」とパラフレイズし、この意識の発生は、「地域特有の言語、実際上のあるいは虚構された共通の起源、文化の制度、宗教的信仰の共通性」(「社会的共同体としてのナロードノスチ」二八ページ)にもとづくが、しかし、ひとたび定着した民族意識は、これらの項目のどれかが消え去った後も生きつづけるというのが、その論点である。

アガエフの「民族意識」は、その二か月後、一九六六年一月号の『歴史学の諸問題』に掲載されたログACHEフとスヴェルドリンの論文に引きついでとりあげられ、これがさきに述べた二年間にわたる「民族」論争のきっかけになった。

この論文は、レーニン、スターリンの著作をそのまま踏襲して——言うまでもなく、スターリンの民族の「心理状態」に対する批判をつけ加えることは忘れずに——経済生活、地域、言語の共有をあげた後、やはり民族的 (エスニック) 帰属意識 (сознание этнической принадлежности) をつけ加えた。「ナショナル」に対し、「エスニック」は、様々な段階の前民族的集団に関して、一般的に用いる利点がある。しかし「民族意識」が、決して национальное самосознание でないことを特にことわる必要をこの著者たちは認めているの

であるが、национальное самосознание は、革命の後しばらくは公認の語であったことが知られている。

ロガチェフとスヴェルドリンによれば、一九二〇年の国勢調査には、「あなたはどの民族 (национальность [= nationality] に属するか」という質問項目があり、そこに添えられた調査指導要綱には、ここに言う「民族」とは、「民族意識 (национальное самосознание) の共有によって結ばれた住民群と解すべきであり、国籍 (гражданство, подданство) と混同してはならない」と注意書きがあるという (三九ページ)。すなわち、一九二〇年のソビエト政権は、かれらの民族政策立案の基礎を作るための調査において、民族の帰属を決定する方法として、「意識」をよりどころにしたのである。そして、そのばあいの民族意識という用語においては一九六〇年代の論者たちが慎重に避けた、「ナショナル」ということばを無造作に用いていたのである。だから、革命後のソ連邦において национальный ナショナルという語の用法と語感がどのように変化したかをあとづけてみる必要はあるわけである。そこで、ある文献から、このナショナルという用語そのものが、革命ロシアの新語として導入されたことを間接的に知ることができる。

『革命期の言語』(モスクワ、一九二八年刊)にとどめられたセリシチェフの次のような観察は我々にとって有益である。すなわち、革命前、ロシアでは、非ロシア人のことを инородец と称んでいた。直訳すれば「異族」であり、背景的語感を盛りこんだ、適切な対応の日本語を、いま即座に思いつかないのであるが、差別の語であったとセリシチェフは言う (4)。このような差別感に汚されぬ語として национальное меньшинство (民族的少数者) が登場し、ほどなくその縮約形 нацмен (ナツィオナリノエ・メニシNSTVO) ナツメンが登場した。このナツメン出身の文化活動家は национал (5) で、かれらの民族の言語は национальный язык (民族語) であった (二一九—三〇〇ページ)。セリシチェフのこの観察は、民族差別と言語の問題を考えるばあいのためにとっておこう。

帰属意識は意識である以上言うまでもなく主観的である。ロガチェフとスヴェルドリンはパミール近くのある少数のエスニックな集団についての例を引いている。一九三九年の国勢調査当時、この人たちは自分たちがタジック民族ではないと述べたことによって、独立の項目がたてられたが、二十年を経た五九年にはこの民族の名はもはや調査書に登録されなかった。なぜならかれらはこの時、自分たちはタジック民族であると答えたからだという。こうした考慮からもロガチェフとスヴェルドリンの新しい定義には、「民族意識」が加わることになったのである。

民族とは、経済生活 (労働者階級が存在するばあい)、地域、言語 (特に文章語)、民族的帰属意識、更に若干の心理的特質、習俗の伝統、文化、解放闘争、これらの堅固な共通性を特徴とする、歴史的に形成された、人々の集団である。(四五ページ)

ここに言う「若干の心理的特質」 некоторые особенности психологии とは、言うまでもなくスターリンの「心理状態」 психический склад の言いかえにほかならない。それ以下の項目についての論議はいくつもあるとして、この定義において言語が「特に文章語 (литературный язык)」と精密になったことは、ソビエト社会言語学の成果の反映とみてよいだろう。この語の概念の有用性については別に述べるとして、さきへすすもう。

ロガチェフ・スヴェルドリンによる新しい民族の定義は、それに続く論者たちにとって、民族の定義のしかたのモデルとなった。その影響を『歴史学の諸問題』が、ロガチェフ・スヴェルドリンの次に登場させたジュヌソフの定義に見る。

民族とは、資本主義だと社会主義だとを問わず、その経済関係の成立過程で発達したところの、言語、民族的（エスニック）領土、民族意識、文化と性格（ハラクテル）の特有な民族的特質の堅固な共通性を特徴とする人々の大きな群である。（「社会・エスニックな人間の共同体としての民族」二四ページ）

この定義において、ロガチェフとスヴェルドリンの「伝統」は除外された。また、冒頭の部分は、いわゆる資本主義的民族と社会主義的民族の類別を排除する目的をもっている。さらに「民族意識」は、もはやおぼろげとではなく定義に加えられただけでなく、スターリンが苦心して言いかえた *характер*（性格）すらも、「民族的」の形容詞をはずしてではあるが、いまやはばかることなく登場してきた。「性格」という観念的用語もまた偏見から解放されるようになった背景を、その前年にあたる一九六五年、『ソ連邦共産党史講義』が採用したことに筆者は見たい。この『党史講義』にいわく、

民族とは経済生活、地域、言語、さらに民族文化の共通性に現われた民族的性格（*национальный характер*）の共通性を基盤として発生したところの、様々な種族（*племя*）や人種（*раса*）から歴史的に形成された、人々の堅固な共同体である。

この定義においては、民族がナロードノスチ的な結合体の、そのままの膨張によって単線的に到達されるのではなく、質的に異なる「様々な種族や人種」の統合の上に形成されるものであるという点が強調されている。だが、何といても特徴的なことは、ここにオットー・バウアーの悪名高い「民族的性格」が、党の公式理論の中で市民権を得たという事実である。

以上見てきたように、かつてのマルクス主義が、民族論議を観念論の泥沼におちこませないよう、自ら禁欲を課していたいくつかの、いわば手ずれした用語への抵抗感はしだいに薄れてきた。なるほどブルミストロワも言うように、「マルクス・レーニン主義的理論の一部としての民族の定義は不変ではなくして、人類の現実の新しい資料、世界革命運動の経験、社会主義と共産主義の建設などによって自らを富ませながら発展している」のである（「民族理論のいくつかの論点」一〇九ページ）。

それにもかかわらず、スターリンの批判としてあらわれたこれらの新しい定義が、そのスタイルやことば使いに至るまでスターリンの鋳型から脱け出していないのは興味深いことである。したがって、バジエフとイサエフのように、民族に関するスターリンの定義はまだその意味を失っていないという見解があるのも当然なことである（八九ページ）。

しかし、ソビエトの論者たちが、おそらく意識的に避けている問題が一つある。それは、民族の理論においてスターリンを批判するということは、間接的にレーニンをも批判することではなければならない、なかんずく、レーニンに祖型を与えたカウツキーとの関係を再検討しなければならないということの意味する。レーニン全集第五版第二四巻には、オット

一・バウアーとカウツキーを対照させながらレーニンが取った読書ノートが収められている。しかし、それには決して視線をとどめようとはせず、レーニンからカウツキーへの遡行という作業には決して踏み出そうともせぬこと、ここにソビエトのレーニン引用学者たちの限界がある。

#### 4 エトノスについて

定義は、その目的がはっきりしていないとたいていはむなしい議論として終る。しかも定義の道具は言語をおいて他に頼るものはなく、その上、この道具は民族をこえて共通ではないから、とりわけ民族を話題にするとき、人々は、実体を伝え得ない訳語から、連想によって、ありもしない概念を作り出す、ことばの錬金術師へと変身しかねない危険にさらされている。この危険からまもってくれるものは、何といても、エンピリカルな民族誌的資料である。ソビエトの学者たちの、一見定義あさりの空論とも思われる議論にまじってときおり聞かれる、地味な民族学者たちの発言には耳を傾けねばならないのであって、まさにこの点にこそ、我々がソビエトの論争から学ぶべきものが宿されている。

ソビエトにおける民族の定義には二つのアプローチの観点がある。一つはいわば共時的観点と称すべきもので、現時点において、さまざまな異なる状況におかれた諸「民族」から、その共通項を引き出そうとする試みである。民族が民族として成立しているモメントの洗い出しがこのばあいの課題である。

第二の観点は、近代的な「民族」が成立する以前の段階の様々の民族的結合体の、歴史的な比較研究から生まれてくる。これら前民族的結合体のあるものが、ナロードノスチと称ばれる。そしてソ連の北方には二〇のナロードノスチが、ダゲスタンには一〇のナロードノスチが登録されている。

こうしたナロードノスチは発展段階の尺度の上に位置づけられるとともにナーツィヤとナロードノスチとの区別は行政上の処遇、資格づけに対応してもいる。したがって、あるエスニックな集団をナーツィヤと称ぶか、ナロードノスチと称ぶかは単なる理論的関心をこえてその集団に属する個人にとって運命を決する議論となる。だから「民族」の定義は、同じ資格で並ぶA民族とB民族とを区別する基準であると同時に、ある具体的なエスニックな集団に「民族ではない」という資格剥奪の判定を与える基準にもなる。

ところでソ連が帝政ロシアの異族征服の遺産として持つ、これら前民族的エスニック集団の多様さは、他のどの国家にも類を見ない。そして、これらのエスニック集団は、低次の自治から国家に至るまでのさまざまなガスダールストヴェンノスチ（国家体）を要求することになる。

こうした状況において、国家とは、「資本主義への移行期に誕生した」体制であるという、近代国家のばあいをモデルとした解釈では対応できないことになる。

ソ連の学問のうちでも、最も豊かさを誇れる民族誌学（と言語学の一部の領域）は、引用学と解釈学の不毛な議論のどうどうめぐりを、エンピリカルな資料を携えて断ちきるべき使命を客観的には帯びているといえよう。したがって、ジュヌソフが「民族というものを、人間の共同体の前民族的なエスニックな諸類型との類似と差異という点から研究するならば、民族の理論に新しい観点を見出すことができるはずである」（二一ページ）と言うとき、これはとりもなおさず民族学への期待の表明にほかならない。

この期待に応ずる一つの例は、『哲学の諸問題』に寄せられた、トーカーレフの「民族的（エスニック）共同体の諸類型の問題」である。「エスニック」の語に対して、たとえ一時しのぎであれ「民族的」の訳語を添えざるを得ないのは何とももどかしい。ここでは、まさに「エトノス」こそが問題になっているからである。

「民族誌学の方法論的諸問題によせて」という副題を添えたトーカーレフのこの論文には、エンゲルスとレーニンへの言及がそれぞれ一個所あるだけで、非学術的マルクス主義文献によって論点をぼかすことなく、民族誌の資料にもとづいている点で、きわ立った印象を与える。その民族誌的資料が生み出す当然の結果として、トーカーレフの関心は民族（ナーツィヤ）ではなく、民族的（エスニック）共同体 *этническая общность* という、より包括的な概念の方に向っている。かれが「純形式的で、まだ暫定的なものにすぎない」と、ひかえ目なことわりをつけて提出した定義は、したがって民族的共同体の定義として述べられている。

そこでトーカーレフはエトノゲネシスの研究に深い関心を抱くソビエトの民族学者らしく、従来提唱されていた諸項目に「共通の起源」と「政治的統一」をつけ加え、さらに宗教までも加える。それぞれの項目は民族的共同体の成立にいつでもすべて関与しているわけではなく、その重要度の順位も状況によって変化があると説く。たとえばユダヤ人やカライム人は言語や地域の共有を失っても、なお宗教の共有を基礎にして、一つの共同体たることを失わないなど（6）。

こうして民族的（エスニック）共同体とは、「起源、言語、地域、国家的帰属、経済関係、文化の制度、宗教（もしこの最後のものが残っているばあい）といったような社会的諸関係の共有のしかたのうち、一つあるいはいくつものものを基礎にしたところの人間の共同体である」と定義される。トーカーレフはこの定義に注して言う。これらの項目のうちに「心理状態 *психический склад* あるいは民族的性格 *национальный характер* の共有を意識してあげなかった。それを持ちこむことは問題を混乱させるだけである」と述べているのは、明らかにスターリンの定義への批判であり、「心理状態」は要するに「民族的性格」の言いかえにすぎないという解釈を暗にほめかしているのである。

これらの項目の重要度あるいは強調度の相違は、現存の諸族のあいだで異なるだけでなく、歴史的発展段階によっても異なる。たとえばエスニックな最古の集団である *племя*（種族）においてこそ血縁すなわち同一起源の記憶が根本的な役割を演ずるが、ナロードノスチからナーツィヤの段階を上るごとに、地域的、政治的統一の原理が優位に出てくる。そのある段階においてはまた、民族意識というものも登場してくる。こうした、よく図式化された整理の背景には、もちろんエンゲルスが下敷きになっている。

トーカーレフの定義の特徴は、民族の問題を、国家を所有するに至った国民国家的民族にかぎるのではなく、エスニックな共同体として一般化した点にあり、現実の民族問題、すくなくとも民族主義にはエスニックな動因がはたらいていることを考慮に入れるならば、このような観点は、ソビエトの状況にもよく照応していると言えるであろう。

一般に「民族」と言われるとき、このことばでじつは次の二つのことが問題にされている。一つは国家単位の民族、すなわち、国民の概念と部分的に重なりあうような単位としてであり、いま一つは、一国家内で、いわゆる多民族的状況のもとで相互に緊張関係におかれている、さまざまな段階のエスニックな諸単位のことである。そして、日本の社会科

学が、学問の用語として「民族」と言うばあいは、たいていは前者の国民国家的民族のことを指しているようである。しかしソ連邦の民族問題というときの民族は、国民国家的民族だけが視野の中にあるのではない。社会科学の概念で言うところの民族ならざる、前民族的集団、すなわちナロードノスチ、あるいはそれよりもより低次の段階のものも含まれている。したがって、これらをひとしく「民族」と称び、「民族問題」の中に含めたとすれば、「民族」の社会科学的慣用に反した用法と言うことになるであろう。

民族を学問的にとりあげようとするとき、日本では、ミンゾクというこのことばの、日本語の事実に即した慣用の意味から出発するのではなく、nation という語と等価の訳語として考え、nation という外国語について定義された概念をそのままミンゾクという語に移し入れて考える。このことから、ミンゾクの日常語としての慣用と、社会科学としての用語との間に裂け目があらわれる。この裂け目を学問のために裂け目としてそのまま残しておくやりかたは、ネイションという語を別に導入することである。ミンゾクを考えるにあたって、nation のわくで問題をくみだてることは、我々がインターナショナルな議論の中に加わって行く上で有利であるとともに、日本人のとらえた「ミンゾク」の概念を無視したところで、民族問題を考えることになる。

日本で民族を研究する学問領域はミンゾク学と称ばれ、その対象は、近代国民国家の民族であるフランス「民族」やイギリス「民族」ではない。すなわち「民族」学の研究対象は「民族」ではなく、社会科学的な意味における民族をなす以前の民族的結合の諸形式、すなわちナロードノスチ的集団の研究である。国民的民族から原始社会における民族的集団に至るまでのさまざまな段階をまとめて、トーカーレフがエスニック共同体と称んだこのことばこそ、日本語のミンゾク＝民族にほぼ照応するものである。そして、じじつ日本語はエスニックな共同体を研究対象とする ethnology (エスノロジー) を「民族」学と称んでいるのである。では、エスニック共同体の本質をなすものは何かといえば、それは言うまでもなくエトノスである。このギリシャ語がどのような起源と形成の過程をもっていたかというせんさくは、いまさして重要ではない(7)。大切なことは、スターリン後の新しい、ソビエトのエスニックな状況は、「民族」の定義にあたって、エスニックな共同体という特徴づけを欠かせぬ手段として要請しているという事実である。アガエフは民族を形成し、維持する因子として「エスニック(民族的)な自覚」を挙げ、民族を成立させるに必要な領土、地域は、単に地理的空間としての地域ではなく「エスニックな地域」(этническая территория = ethnic territory)として領有されると述べた(二七ページ)。エスニックに領有された地域空間とそれを領有する集団のエスニックな自覚は、エトノニム ЭТНОНИМ(民族の呼称)を生み出すのである。

ロガチェフとスヴェルドリンによって「エスニックな帰属意識」が民族の定義の項目としてとりあげられたことはすでに述べた。それに続くジュヌソフ、カルタハチャン、ブルミストロワ、タワカリヤンの寄稿はすべてそれを当然のこととして定義の項目に採用した。コズロフは「民族(ナーツィヤ)」の概念を定義するには、ナーツィヤと、エスニックな共同体あるいはナロードという概念との関係を究明する必要がある」「(民族理論のいくつかの問題」九九ページ)と提案した。いずれにせよ、エスニック共同体の概念は一般的な承認を受けた。

しかし、極めて印象的なことは、この語で示される概念は、ソビエト民族誌の比類のな

い成果として生まれてきたと述べたトーカレフ自身が、「だがいったい、エスニックな共同体は、人間の他の共同体形式と何によって区別されるのであろうか。この問いに我々は今のところ答えられないでいる」と率直に告白していることである（四六ページ）。

一見して、ソビエトの学界は、「エトノスとは何か」という、古めかしい設問をむしかえて、ふり出しにもどったかの観がある。しかし、「諸民族の接近と融合」に直面して、窮極のところではエトノスが問題として残ったということを教えたソビエト民族誌学の成果に我々としては深い共感と満足感をおぼえても許されるであろう。ところで刊行中のソビエト大百科は、「エスニックな特徴」を手短かに言いかえて、「言語的および文化・習俗的」特徴としている。ここには定義のどうどうめぐりにおちいるおそれが充分にあることを認めた上で、民族的なものの窮極はエトノスであり、その背後に言語があることを認めるならば、かりに民族を、遅れた、反動的な存在として、その解消あるいは消滅を願うものは、みずからの言語をすてて、他の大言語につく決心のできる者でなければならないということになる。いわばこうした「理論的帰結」は現実にソ連邦内で実行にうつされようとしている。一九七〇年代のソ連邦では、連邦内での国際化すなわちロシア化の線にそって、五三にのぼるガスダールストヴェンノスチ（国家体あるいは準国家）の境界の撤廃と、諸民族語の連邦内国際化が話題となりはじめていることは次節において見るであろう。

#### 5 単一国家と「族際語」を求めて

六〇年代のソ連邦における「民族」についての継続的な討論の結果が、どのような形をとって定着したかを知るために、目下刊行中のソビエト大百科辞典第三版の記述を参照することにしよう。

民族—ナーツィヤの項はカルタハチャンの執筆でこうまとめられている。「地域、経済関係、文章語、その民族の特徴をなす文化と性格のいくつかの特質などの共通性が形成される過程で定着した、人間の歴史的共同体である」（傍点は引用者）。

民族に対置して、同じ大百科に見るナロードノスチの定義は「民族に先行するところの、歴史的に形成された言語的、地域的、経済的、文化的な人間の共同体」と記述されている。

民族の定義においては、単に言語ではなく文章語とすることによって、ソビエト言語学の成果をとり入れたほか、「性格」もつけ加えた。また、スターリンの定義と異なって、言語の地位が、冒頭からずらされたのは、レーニンの論著にあらわれる、これらの項目の順序に従ったまでのことであろう。

「エスニックな」特徴や「民族意識」は、大百科の記述の中に補足的にあらわれるが、定義の中には採用されなかった。それはともかく、一九七四年におけるソ連邦の公式見解を反映した定義の中で、民族とナロードノスチとを決定的に区別するめじるしは文章語を除いては他に無いことになる。

そもそも伝統的なマルクス主義の見解にしたがえば、近代的な民族の形成と、かれらによる国家の形成とは不可分の関係にあったはずである。大百科の民族の定義には反映されなかった、国家と民族という、ソ連邦にとっては、なかなか手ごわい問題を『哲学の諸問題』誌に寄せたのはタデヴォシヤンであった。「民族問題の社会主義的解決のための国家的形態をレーニンはどう考えたか」と題するこの論文の執筆意図は、一九一七年以前のレーニンの著作の中に、すでに高度の独立性、自治権をともなった諸民族の連邦という構想

があったことを証拠立てるところにあった。ユガイによれば一九一八年まで、ヤクボフスカヤによれば一九二二年まで、レーニンには、分離権までそなえた諸共和国の結合体としての連邦制という国家体制を思いつくことがなかった等々の理解は、レーニンの真意をぼかし、誤まった解釈に導いたスターリンにわざわざされているのだとタデヴォシヤンは言いたかったのである。

タデヴォシヤンの発言をそそり、それと対極の立場を表明したのは、その前年にあらわれたセミョーノフの著作であったが、その中でセミョーノフは自治共和国のみならず連邦共和国ですら、ともに急激な脱民族化（デナツィオナリザーツィヤ）の道を経ており、民族的境界はすでに意味を失ったと説いたのである。同じ年にあらわれたある言語学的著作は、諸民族の言語は急速な接近にむかっており、межнациональный языкの成立の遠くないことを説いた。このロシア語は日本語の国際語という造語法をそっくりまねれば族際語ということになる。この族際語が具体的に何を意味するかは後で述べよう。

タデヴォシヤンは民族国家体の現状を擁護するために、スターリンを批判してレーニンをたて、その中に連邦制への積極的肯定を見出そうと試みたのであった。タデヴォシヤンの線に、正面からこたえて立ったのはロガチェフスヴェルドリンであった。その際、かれらの論拠には資本主義的民族と異なる社会主義的民族の概念がすえられた。一般的な民族とは別に定義されたこの概念は次のとおりである。

社会主義的民族（複数）とは、社会的均質性、経済的利害の共通性、民族的国家体（национальные государственности）、運命の共有、文化と精神的風貌の単一性、あらゆる社会的階層の国際主義的世界観を特徴とするところの民族である。（四七ページ、傍点は引用者）

この定義からは、社会主義体制は、諸民族に対し国家、準国家の所有を保障すべきであるという主張を読みとることが重要である。この主張を受けついで、再び「社会主義的民族」を定義しなおしたカルタハチャンは次のように述べる。

社会主義的民族（単数）とは、社会主義の勝利の結果形成されたところの、単一の言語、領土を所有し、経済的利害、国家（государство）、文化、さらに国際主義的世界観および経済的、文化的、社会的、政治的生活の国際主義的共通性の発展しつつある特徴と結びついた精神的風貌などの共通性を所有する人々の共同体である。（四三ページ、傍点は引用者）

ここには民族が単数で定義され、国家体ではなくもっぱら国家に限定されている点で微妙な問題が残されているが、いまはそれにふれない。「社会主義的民族」にとって、国家あるいは準国家の所有が不可欠の特徴であるという考え方は、別にウクライナのルードネフによっても表明されたという（セミョーノフ、七二ページ）。さらにムナツァカニヤンが、「社会主義的民族」にかぎらず、民族一般の定義に「国家体」の項目を加えたことはすでに述べた。

ソ連邦の諸民族とナロードノスチの完全な一体化の目標をレーニンに読みとるセミョー

ノフの立場に同調するブルミストロフは「ソ連邦においては、民族国家体がなくとも、社会主義的民族の存在は原理的に可能である」と述べた(8)(七七ページ)。

ここで我々は再び、国家内部における国家体の存在を許さず、民族自治区を不可分の領土であると規定した中華人民共和国を想起してみよう。ソ連邦はいまや、レーニンが過渡的な形態としてやむを得ず採用した連邦制から、一大単一国家への移行のための理論的準備を終えたと言ってよいのである。

## 6 「ソ連邦語」へむかって

「諸民族の接近と融合」(сближение и слияние наций)が、レーニンの著作の中から引き出され、いまあらためてソビエト国家の到達すべき目標にかかげられた。だが反体制知識人たちの告発を待つまでもなく、融合は理論的ではなく、さまざまな行政的手段によってすすめられたことが、ソビエト史の上で明らかにされている。その際、強制的融合は、民族の解消という形で、ソビエト政権に反逆した民族に加えられる懲罰として、逆に民族の復活は忠誠に対する褒賞として行われた。その顕著な例の一つ引いておこう。ボルガ河口に居住するモンゴル系民族であるカルムク人は、一九四二年、沿ボルガ一帯がドイツ軍の占領下に入ったとき、ドイツ軍の支援を得て、ソ連邦からの分離と独立を達しようと夢みたらしい。そのむくい翌四三年、ソビエト軍による解放後、この民族に認められていた自治共和国は解消された。ほぼ十万にのぼるカルムク人は貨車に積まれて中央アジアやシベリアの各地に移住させられて分散させられたという西側の情報は、最近では、ソビエト自身の出版物が裏書きしている。ソビエト政権が、これら各地のカルムク人に再び故郷への帰還を許して自治共和国を回復してやったのは、やっと一九五八年のことであった。その時、かれらの人口が大幅に減少していたことは言うまでもない。レーニン、スターリンが民族の定義としてあげた「地域の共通性」は、このような行政措置によって剥奪された以上、その期間は、カルムク人がすでに民族たることを失ったことに疑問の余地はないのである。

ナロードノスチではなく、民族であるためには文章語を所有していなければならないという。一九二〇年代末から三〇年代初にかけてほとんどの少数民族は可能なかぎり、ラテン文字による正書法を持ち、文章語を発展させ、民族の地位に登る道がひらかれた。ところが一九三〇—四〇年の間に、これらのうちから少なくとも十一の民族的集団は、母語を書き表わすための「文字を失った」(バジエフとイサエフ、一二—ページ)。ある民族が生物的に消失することなく文字を失うという現象が、数年間のうちに、いわば瞬間的に自然消滅するとは法外なはなしである。文章語の消滅は、その民族の印刷手段を破壊し、印刷用紙の供給を断つことによっても不可能ではない。

ソ連邦における非ロシア語は、そうでなくても不利な立場に置かれているのである。弱い少数民族の言語に自立の力を吹き込もうという試みの一つは、方言的關係にある諸言語を糾合し、文章語で統一することである。テュルク系、モンゴル系諸族に見られたこの種の言語運動は小ブルジョア民族主義と非難され、指導者は罰せられた。言語の計画的細分化が行なわれたという具体例は決して少なくはない。

民族語の自立のために、ロシア語を介して流入したヨーロッパ諸語の民族的言い換えの努力は、初期のソビエトの民族インテリに特徴的であったが、この努力は「民族主義的純

化主義」 национальный пуризм の悪罵の前にかき消された（ダルベーエワ、七五ページ）。それは「族際語」化、すなわち言語面での「接近と融合」の流れに反逆する、言語上の民族主義であった。

ここで再び、多民族国家としてのソ連邦の将来をさし示している「族際語」の問題をたち入って検討してみよう。このばあいにもスターリンは激しい非難の対象になったのである。

よく知られているように、スターリンは全世界的規模で社会主義が勝利し、プロレタリアートの全世界的独裁が完成した遠い将来においては、ロシア語とかドイツ語とかの既存の特定言語ではなく、全く新しい諸民族共通語が出現すると説いた。このロマンティックで観念的な理想は、脱スターリン時代の現実主義によって打ち破られた。「スターリンの誤りは単に個々の民族語の発展を考えるにとどまり、同時に生じる「族際語」——（連邦内）諸民族共通語——の選出（выделение）という過程を考えなかった」（ハナザロフ、一〇ページ）。この過程は「諸民族の自由意志にもとづいて、同権的諸民族語の中から一つを選出して諸民族の共通語とし、それを次第に「第一の母語」 первый родной язык に転換させる」ことである（ハナザロフ、二二七ページ）という。したがって「ソビエト社会の言語的一体性の一層の発展を阻害することになる」エスペラントの大衆宣伝を行い学習することは正しくないことになるのである（ハナザロフ、二二四ページ）。既存の有力な特定民族言語による「族際化」はそのまま忠実に国際化の路線と一致する。英仏独語を中枢とする「共通科学語」 общенаучный язык に対する、最近の強い関心がそれを物語っている。

では、ソ連邦における「族際語」化過程の現状はどのようなであろうか。ここに、一九六〇年の統計で、ソ連邦で刊行された全出版物（点数）のうち、「族際語」（民族共通語すなわちロシア語）による割合を、部門別にしらべた表がある（ハナザロフ、二〇七ページ）。全体の平均は七二・七％、すなわち全ソ連邦出版物総点数のうち約七割がロシア語で占められている。部門別の最高点数は軍事関係であって九五・七％、技術・工業・運輸関係が九一・九％である。すなわちこれらの部門は容易に「族際語」で一本化できる性質をもっていることになる。もっと正確に言うならば、近代兵器や工業の技術はもともとロシア語によって供給されたのであるから、この部門には本来族際語しか無かったのである。それに比して、ロシア語が最も低い割合を占めるのは非ロシア諸民族の文学であって、一九・七％にすぎない。たいせつなことは、これら非ロシア諸民族にとって文学というのは、かれらの思想であり、生活であり、民族文化そのものであるということである。人文科学の中でも最も先進的な（すなわち欧米的に技術化のすすんだ）言語学ですらも三八・一％のみが「族際化」（すなわちロシア化）されているにすぎない。

くり返すが、ソ連邦における諸言語の「族際化」とは相互滲透によってではなく、ロシア語を、そのままの形で「族際語」へと選び出し（выделить）、これを諸民族共通に「第一母語」の地位を与える過程によって行なわれることになっている。したがって、ソ連邦における族際化とは、非ロシア諸民族の思想、生活、文化全般にわたるロシア化であることは言うまでもない。だがこのような族際化を貫徹するには長い道程が必要である。だから、さしあたっては「言語機能の社会的分業」が必要だとされる。すなわち公的生活はロシア語で、家庭内での決して書かれることのない口頭談話は民族語によってというぐあいである。

このような措置が民族の解放（＝解消）に役立つプラス面は大いに評価しなければならない。非ロシア民族、特に知られることのまれな少数民族の作家は、母語としてロシア語を授けられることによって、民族語によっては考えも及ばない大量の読者を獲得する可能性を持つだろう。しかし、その時は、かれの文学がどこまで民族文学であるかを問うてみる必要はある。

レーニン、オットー・バウアーの民族概念における混乱を解くものとしてのカウツキーを読みながら、「Нация — не Kultur-, не Schicksal-, а Sprachgemeinschaft”（民族とは文化共同体でもなければ運命共同体でもない。それは言語共同体である）と書き記した（レーニン全集第五版第二四巻 Тезисы реферата по национальному вопросу）。「族際語」の選定は言語共同体を単一にする企てにはほかならない。こうして民族は解消され、единый советский народ（単一のソビエト人）が出現する。

一九五〇年以前スターリンの支持を得て国教的地位にまで上っていたマルの言語上部構造論はスターリン自身の介入によって否定された。言語はイデオロギーとは接点をもたない、単なるコミュニケーション技術の体系であるという言語観は、たとえば新フンボルト学派の、言語と思考との密接な関係を説くたちばよりも、諸言語の異なる形式を超えたユニヴァーサルな面に注目するチョムスキーにずっと近い。ここに、チョムスキーが大した抵抗もなくあるいはむしろ積極的に歓迎されてソ連邦の地に根をおろし得る思想的な背景があったのである。ユニヴァーサリストにとって、言語の乗りかえはほとんど問題の余地を残さぬ自明のことである。

かつてオットー・バウアーは、「民族の個性は、その民族の社会主義に、己れの個性を刻みつける」、したがって「いかなる民族の労働者党といえども、特定民族の労働者党の独裁に服してはならない」と説いた（Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, Wien 1924, SS. xxvii-xxviii）。それからわずか半世紀の後に、最も多くの民族からなるソ連邦で、人類のはるか遠い将来の彼方に夢想としてほのみえていただけの民族の解消への方途が具体化の道にすすみはじめていることは、単にソビエト史のみならず人類史の視野から注目されなければならない。そして、ソビエトにおける民族概念をめぐる論争そのものが、今日の状況におけるソビエトの民族問題の反映にほかならない。

(1) РСФСР = ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国に対し、СССР を等しくソ連邦と呼ぶのは、慣用とはいえ好ましくないが、本稿ではやはり慣用に従っておく。「ソ同盟」はずっとましであるが、偏見をもって受けとられるおそれがある。ここにたまたま結合体という表現をとったが、一九三四年刊平凡社の『大辞典』には「結合国」という見出しが登録されている。ソビエト結合国は союз の訳語として極めてふさわしいと思う。

(2) このことばは筆者の恣意から出たものではなく、ソビエトで公刊された文献に用いられているものである。

(3) スターリンにもたとえばその『レーニン主義の基礎』（一九二四年）に「経済の接近」という用例があることを指摘しておこう。

(4) たとえば蛮族とかドジンとかに置きかえてみてはどうであろうか。

(5) このナツィオナールが、インテルナツィオナール（インターナショナル）との関係でどのような連想を生んだかは興味がある。

(6) 「民族的 (エスニック) 共同体」の概念を介して「民族」にかかわっているトールカレフのこのような解釈が、いかにラジカルな意味を帯びてくるかを知るためには次のことを想起すれば足りる。

まず第一にレーニンの言——「民族はそこで、それが発展してきた地域をもたなければならない。つぎに、すくなくとも現代では、世界連盟がまだこの土台をひろげないあいだは、民族は共通の言語をもたなければならない。ユダヤ人はすでに地域も共通の言語ももっていない」(「党内におけるブンドの地位」)——に対立している。レーニンのこの断定的な発言は、「もっともすぐれたマルクス主義理論家のひとりであるカール・カウツキー」(前掲論文)のそのままのなぞりであるが、このカウツキー理論は、オットー・バウアーの次のような主張と鋭く対立している。

「ユダヤ人は領土を持っていないから民族たり得ないという、あの言い古されたことばが正しいかどうか、いまいちど調べてみたい。まとまった居住地域が民族を維持する前提であるとよく言われるのだが、これは正しくない。幾世紀もの間、固有の領土を所有することなく、自分が民族だと言い続けているユダヤ人の歴史そのものが、こうした見解の反証となっている」(バウアー前掲書、三七三ページ)。バウアーのこの個所は、ユダヤ人について「全く土地も国家も持たないままで二千年にわたり民族としてのアイデンティティを守り続けて来た民族」であるという、ハナ・アーレントによっても言及されている(大島訳『全体主義の起源』2、一九一、一九三ページ)。

(7) エスニックという語は筆者をして奇妙な回想に導く。かつて、モンゴル学者N・ポッペの論文の紹介文の中に、次のように翻訳された引用に出くわしたことがある。「陳バルグとは異なり、新バルグ人は人種学的に見て(ethnischer「異教の」はロシア語の etničeskii「人種の、人種上の」の音的類似より来た誤で、ethnologischer とあるべきもの)単一の集団をなしてある」(服部四郎『蒙古とその言語』七九ページ、一九四三年刊)。日本人が外国人の外国語、しかも学問上の用語に訂正を加えるのにあつぱれという気持がしたが、これは訂正の方がまちがっていた。今日ではかけ出しの民族学者、文化人類学者であっても、エスニックとかエトニッシュということばを知らぬ者はないであろう。それが「異教の」でないことは、すでにヴァーリヒのドイツ語辞典においても、ethnischの項から heidnischの意味が取り去られていることから明らかである。エトニッシュ、エスニックという語は、ことばにうるさいはずの言語学者がその市民権すら認めなかったほど、それほど当時の日本の学問になじみがうすかったのであろう。

(8) 国家がなくとも民族の存立は失なわれないと説くブルミストロワの発言の意図は、「接近と融合」をめざす単一国家という、当局の構想に賛意を表することにあつた。だが、同じ内容をハナ・アーレントが、「ユダヤ人はそもそも国家なるものは不要であり、極度に発展した種族意識にとっては共通の言語さえ不可欠ではないということを示していた」(前掲書、一九一ページ)と述べる時、いい知れぬすご味がこもっている。「極度に発展した種族意識」にとって、当局が国家を恵んでくれるか否かは、もはや問題ではないというのであるから。

#### 引用文献

Агаев, А. Г., Народность как социальная общность, Вопросы философии, 1965/11.

- Ахманов, О. С., Глушко, М. М., Функциональный стиль общенаучного языка и методы его исследования, Москва 1975.
- Базисев, А. Т., Исаев, М. И., Язык и нация, Москва 1973.
- Бурмистрова, Т. Ю., Некоторые вопросы теории нации, Вопросы истории, 1966/12.
- Дарбесва, А. А., Развитие общественных функций монгольских языков в советскую эпоху, Москва 1969.
- Джунусов, М. С., Нация как социально-этническая общность людей, Вопросы истории, 1966/4.
- Калтагчаң, С. Т., К вопросу о понятии <нация>, Вопросы истории, 1966/6.
- Козлов, В. И., Некоторые проблемы теории нации, Вопросы истории, 1967/1.
- Рогачев, П. М., Свердлин, М. А., О понятии <нация>, Вопросы истории, 1966/1.
- Селицев, А. М., Язык революционной эпохи, Москва<sup>2</sup> 1928, Leipzig<sup>3</sup> 1974.
- Семенов, П. Г., Вопросы государства и права в трудах В. И. Ленина, Душанбе 1963.
- , Нация и национальная государственность в СССР, Вопросы истории, 1966/7.
- Тавакалян, Н. А., Некоторые вопросы понятия <нация>, Вопросы истории, 1967/2.
- Тадевосян, Э. В., В. И. Ленин о государственных формах социалистического решения национального вопроса, Вопросы философии, 1964/4.
- Токарев, С. А., Проблема типов этнических общностей, Вопросы философии, 1964/11.
- Ханазаров, К. Х., Сближение наций и национальные языки в СССР, Ташкент 1963.

### 第三章 国家語イデオロギーと言語の規範

我々は、公共的思考の要具で革命の最もたしかな推進力である同一言語を市民に課すべきである。自由な国民のもとでは、言語は単一であり、万人にとって等しくなければならない。

——フランス革命暦二年（一七九四年）雨月八日、公安委員会におけるバレールの発言——

さればとって、統一は劃一ではないのであります。……私たちはこの土地、この過去、この歴史、この家族の伝統を愛します。私たち自身には、国語のほかに、何百年の間、私たちのもとに伝わってきた、私たちのことばがあるのです。

——一九六一年、ストラスブールの司教がクリスマスに行ったあいさつのことば——

#### 1 生物的言語観と社会的言語観

ことばは「話す」という人間行動があるかぎり、人の住むところ、どこにでも存在する。だが、「〇〇語」「〇〇方言」と呼ばれる、そのような意味での現にある言語は、民族とか国家とか、少なくとも発生的には経済・政治・文化の生活を共にする一定の地域の存在なしには成立しない。そして現実には、話し手集団に限定されない単なる「ことば」はどこにも存在せず、具体的に存在するのは、その「〇〇語」「〇〇方言」だけである。そもそもある言語が「〇〇語」であることを決定するのは言語学的手続きによるのではなく、話し手集団が帯びている固有名詞である。つまり簡単に言えば、ある言語の名称を決定する動機は言語そのものの中にはなく、民族や国家の側から、外的につけられているのである（1）。

我々が、「人間はことばを話す動物である」というふうに、いわば生物としてのホモ・サピエンスというシュ（種）に固有の行動としてことばをみるのではなく——そのばあいの言語はいささかも文化に属する必要はない——、正しいことば、よこしまなことば、すぐれたことば、いやしいことばというように、単なる伝達機能をこえて、人間社会内部で、あれこれと評価をまぬかれないものとして考えるときには、動物対人類というかたちにおいてではなく、人間相互間の、いいかえれば共同体間の問題としてことばに接することになる。

そこで、いま、人間というシュ全体の問題として、ことばがしゃべれるという一般的な生物的能力としてことばの問題をとらえるならば、このたちばは生物（学）的言語観と呼ぶのがふさわしいし、他方、シュ内部での集団形成とその維持にかかわる点でことばをとらえれば、それは社会（科学）的言語観ということになる。

この両者のたちばはかなりちがっている。いわゆる近代科学としての言語学は、人間というシュに固有の記号体系としての言語のしくみを解明することに主たる意義を認めてきた点で、おしなべて生物的言語観に立つと言ってよい。たとえば、言語学を記号学（セミオロジー）の一分野と構想したときのソシュールがそうであるし、表現の相違をこえて普遍的なことばする能力の機構を解明しようとするチョムスキーのばあいはもっとはっきりしている。

しかしソシュールは、セミオロジーとしての言語学の体系化に没頭していたからといって、一つの共時的な記号体系、すなわちある特定のラングがおさえる社会的な領域、つまり民族や、時に国家に類する共同体のことが念頭になかったわけではない。ソシュールは特に定義を与えることはしなかったが、その『一般言語学講義』の中で、言語共同体と、人類、民族などとの関係についても言及している。それはことば少なではあるが、ソシュールの他の行文と同様、むだなく適切この上ない表現をとっている。

ソシュール理論に関する知識が我が国にひろく行きわたっているのは、そのゆきとどいた理解に裏打ちされた、小林英夫の簡潔で歯ぎれのいい文体による翻訳に負うところが多い。しかし残念なことに、ソシュールのこの個所は、『一般言語学講義』の中核部分ではないと見なされたせいか、すこぶる安易に訳されていて、そのために、理解の道がまったく閉ざされている。その一つ、

人種の統一は、それじたいでは、言語共通性の二次的要因でしかなく、毫も必然のそれではない。(傍点は引用者。次も同様)

何を言っているのか、さっぱり見当のつかないこの文章を真に理解するには、傍点の部分言語共同体と読みかえねばならないし、また、

逆に、あるていど民族的統一を成り立たせるものは、言語の共通性である。いっばんに言語共通性を説明するには、そのみでつねに充分である。

というところも、さきの文章同様よくわからないのであるが、そのうち、二番目の傍点個所をやはり言語共同体と読みかえ、「それ」を「民族的統一」で置きかえるならば、ソシュールの言わんとするところがよりはっきりしてくるだろう。

小林訳のしくじりは、*communauté linguistique* と *communauté de linguistique* の二つの用語のうち、「言語共同体」と訳されるべき前者を「言語共通性」と片づけてしまったところにある。また後者は、訳書のはしがきにあるように、小林の訳出の原則は「等量の移植」であったから、原文の《de》を等量に「の」に移して、言語と共通の間に割りこませただけのことである。ところが、ソシュールのこの二つの用語は、機械的な等量の移植によっては、日本語による理解の圏内にまでは移植が達せられなかったのである。

以上のことを指摘したのは、誤訳摘発マニヤ的関心からではなく、この部分が、小林のような慎重な訳者によってすら、無理解のまま放置されたということであり、それどころか過去数十年もの間、せんさく好きの言語学者たちの目をのがれて読まれ続けていたということを示すためであった。このことは、ソシュールの論述がこの部分に関するかぎり、まったく無視されたことを物語っている。一般に専門家というものは、傑出した古典的著作を読むばあい、あらかじめここは味わって読みなさいと指摘された個所以外のところに、どんなにすぐれた原鉱がかくされていても、そこへはわき見がそれて行かないように訓練されているものだからである。そして、誤訳に陥らないために小林が傍ら用いたはずの、ロンメルの独訳が、この二つの用語を、いずれもひとしく *Sprachgemeinschaft* と訳していたのも運が悪かった。

このようなわけで、『一般言語学講義』のかんじんの部分についてはふさわしい日本語がないので、以下にそれに代る試訳を示しながら、ソシュールの次のような考察に注目することにしよう。

だが〔人種の〕他にもう一つの単位があって、それは遙かにずっと重要で、これだけが本質的な単位であり、社会的なつながりによって成り立っている。それを民族（エトニムス）（体）と呼んでおこう。（略） 民族と言語との間には、すでに四〇ページで述べておいたような、たがいにたがいを規定しあう関係がうちたてられる。つまり、社会的なつながりは言語の共有を生み出しやすく、またおそらくは、このようにして現われた共有の言語の上に、ある性格を刻みつけるものだ。逆に、民族的単位（ユニテ・エトニック）を作り出すのは、ある程度まで言語の共有である。一般に言語共同体がなにものであるかを言おうとするならば、この民族的単位（ユニテ・エトニック）を持ち出せば十分に説明がつく。（三〇五一三〇六ページ）

ここでは、社会的単位とそれに共有される言語との関係がしっかりと把握され、次いで言語を共有する社会的単位はたいてい民族に類するものであることが示唆され、言語と民族との一対一の対応関係が明瞭に示されている。

さて、ソシュールにおいては、対象として民族ではなく言語が問題であったから、まず民族（的単位）を説明するのに言語の共有を手がかりとし、次いで言語共同体を説明するのに民族をもち出すという方法が用いられている。そしてこれがかれの言う、「たがいにたがいを規定しあう関係」（rapport de réciprocité）ということばのなかみであった。

## 2 言語は民族を決定するか

民族という概念を明らかにするために言語が援用される機会はずらしくはないとしても、逆に言語という概念に向って、民族を手がかりにして迫って行く試みはほとんどなかったと言ってよい。その理由は、民族という、この語の使用の様々なレベルで副次的意味を伴う不透明な概念を、より分명한言語によって規定しようという方向は理にかなっているのに対し、逆に言語を、あいまいな民族という概念でとらえることは、はっきりしているものをかえってあいまいにするという、道理に逆行した企てになるからである。ところが、単位としての言語は、いったいそれほど了解ずみのことがらであろうか。

一九世紀から二〇世紀にかけて、数多くの民族がその存在を明らかにし、独立国家の所有権を主張したのであったが、それは同時に、周辺の民族や国家の言語とは区別される、独自の言語の存在をも明らかにするものであった。すなわち、国家のかけには国家語としての資格を主張する新たな言語の予備軍が、めじろ押しにひかえていたのである。

言いかえれば、いかなる少数者の言語であっても、ことによると方言と呼ばれる言語でさえも、すべて潜在的には国家語に通ずる道をもっているのであるから、国家民族の増大とともに、民族語の数も増大する。国家となった民族、すなわち国家民族は、その言語のうちから、特定地域の特定階層のことばに規範としての地位をあたえて国家語とし、さらに国家語は常に単一であることを求めるようになる。この意味で、言語が階級的性格をもたないというスターリンの主張は、生物的言語観からするならばともかく、社会的観点に

たてば正しくない。言語規範は、特定の階層を言語的に有利にし、他の階層を言語的に追撃する機会を常に保証するからである。

次に、国家的規模による言語の統一が伝達の便宜の必要から生じたという説明は、国家語の本性をまだ充分には語っていない。国家語は万人に服従を求める規範であり、それへの服従は、国家とその体制イデオロギーへの恭順、尊敬、忠誠のあかしである。

また規範はいつも単一で排他的であるから、スイスのように、四つの言語に対等に国家語の地位をあたえ、単一のスイス国家語を求めない、いわば「複数国語制」には、それ自体形容矛盾の感じがつきまとっている。この感じのことを柴田武は、「スイスには四つの公用語があるが、このことを、「スイスには国語が四つある」と表現すると、多少異様な感じがする」(『岩波講座 日本語』1) という言いかたであらわしている。柴田が四つの国語を「多少異様」と感じたのは、国語は一つにして一つにかぎるという通念、いいかえれば、国語は原理として単一であるのを正態と見る感覚に照らしてのことであった。そして、この「多少異様な感じ」は、政治学的にはスイスという国家の組織原理の理解のしかたに、言語学的には公用語と国語との混同もしくは同一視に原因があるように思われる。

じつはスイス連邦憲法が認めているのは四つの国語(=国家語 Nationalsprache)と三つの公用語(Amtssprache)であって、話し手が総人口の1%に達しないレト・ロマン語は国語ではあっても公用語ではない。連邦的な構成をとる国家においては、中央原理と地域原理との二重構造が一致しないばあい、必然的に、多かれ少なかれこのような欺瞞的な二重帳簿の採用を強いられるのである(2)。それが公用語ではないままに国家語の地位を得たのはやっと一九三八年のことであった。このことから、国家語は、実用と便宜のための公用語に比して、より理念的で象徴的な性格を帯びていることが理解されるだろう。よりくわしく説明すれば、実用のためである公用語は、ことによると外国語であってもいいばあいさえある。たとえば八四五にのぼる(一九五一年の統計)言語や方言に分裂しているインドでは、英語がそれらの間をとりもつ国家レベルでの公用語として用いられているし、また、土着のマルタ文章語の形成のおくれたマルタ島では、イギリスからの独立(一九六四年)以降も、まだ英語が公用語の地位を失ってはいない。このように、外来の公用語の通用力がいかに強力であろうとも、土着の民族語は、国家的威信の象徴として、他に代替を求めることはできないのである。つまり、時として実用度の低い国家語が、有力な公用語を理念においてしのぐのは、国家語が、土着語としての民族語と一致するからである。レト・ロマン語は、この意味における民族語=国家語を極限のすがたにおいて示しているものと言える。なぜなら、それは、他のいかなる国家の国家語でもない、スイス独自のものだからである。

以上のような、国家語と公用語とのあいだのするどい亀裂を見たあとで、こうした概念の境界線をいっさい消し去り、言語と国家権力の関係を見えなくさせる効果をもった「国語」という慣用の正体をながめてみることは有意義であろうと思われる。わが日本国の「国語」は、国語審議会が扱うレベルでは合理的によそおい、技術の価値を中心とみなしているらしく思われる点で、ひたすら公用語としての姿をあらわす一方、国家的威信の象徴としての側面は、かつて上田万年が言いあらわした「帝室の藩屏」としての国家語であることをほとんどやめていない。

いま、日本語の、ぼんやりしているところがとりえである「国語」の中に含まれている、

実用と理念の二つの側面は「公用語」と「国家語」の二つの概念を用いることによって分明なものとなる。というのは、規範としての国語は、規範としての国旗、国歌、元号、天皇などの諸項目が作り出す連合——もっとしゃれて構造と呼んでもいい——の中に埋め込まれている。したがって、少なくとも「書かれた国語」の根本的改革は、これらの連合そのものの変革を伴わずには生じ得ない。見た目には表記技術の問題という形をとる「国語国字問題」は、じつは技術をはるかにこえた、言語外的な要因をも含む規範イデオロギーと深くかかわっており、ローマ字・カナモジ運動が体制の座に接近し得ないのもまた、単に技術の理由からだけではなく、それ自体が「国語」規範イデオロギーへの反逆を示しているからにほかならない。

したがって、言語ごとの分離が国家の解体すら触発しかねない多言語の——多民族のではない——存在を国内に許す国家は、そのこと自体によって寛容で民主主義的な姿勢を示しているように思われる。しかし、国家語の原理は、このような寛容をほとんど許すことがない。その原理は、模範的な言語的寛容で知られるスイス連邦においてすら連邦内構成体の内部においては貫徹しているのである。たとえばベルン州（カントン）において言語的少数者を構成するジュラ地方のフランス語住民は、州議会選挙において、フランス語を母語とする代議員を当選させたにもかかわらず、言語上の理由によって、この当選は無効とされた。ベルン州からのジュラの分離は、一九七四年六月二三日の住民投票ではじめて公的な議論の場にのぼったのである。ここに見られるのは、州のレベルに投影された国家語の原理である(3)。国家、民族と言語との関係は、たとえばデーシイが示したように、ヨーロッパ五五か国のうち四八国家までが、その固有の言語を国家的存立の基盤としている(4)ことから見てとれるように、その関係は前理論的、直観的に把握されていただけでなく、やがて民族理論の構築の上で、決定的な主題となってくる。

さきに見たソシュールによる、エトニズムと言語との相互規定的関係の把握は、正統言語学のわくの中では、その後の展開へと引きつがれなかった。言語学と言語学者は、むしろ、この両者の間の危険な関係に手を出し、うっかり火中の栗をひろってやけどをすることがないようにこころしていたにちがいないことは、二〇世紀のヨーロッパ史をいろいろ、国家という政治体と、民族という文化体との間のはげしい葛藤を見れば、なっとくのいくところがある。

民族的自立の解体による国家への吸収と、国家内民族の国家的自立への熱望という、これら拮抗しあう二つの流れの中で、言語学者としてはめずらしくあからさまな感想をもらった人にアントワーヌ・メイエがある。

アリア世界、ゲルマン世界、ケルト世界は、[かつて]インド・ヨーロッパ世界が分解したのと同様に分解してしまった。人はこのようにして、ほとんど各々の国がその「共通語」を所有するところの、あるいはこの共通語が地域的な話しことばを消し去って行くところの近代世界に到達したのである。そこにはとても永続きはしそうな新しい事態がある。すなわち、根底のところでは物質的および知的な文明の統一をとどめている今日のヨーロッパでの「共通語」の増殖とは一つの異常事態である(5)。

メイエのこのことばは、オスロに新たに開設された比較文化研究所に招かれて行った講

演の中にあらわれるのだが、序文には一九二四年の日付とともに、クリスチアニアとオスロの二つの地名が併記されている。一七世紀以来、デンマーク王クリスチャン一世の支配を刻印した都市の名が、ちょうどこの年、ノルウェーの独立の確認として改称されたのである。つまりヨーロッパを分解させる「共通語の増殖」は、メイエの滞在地の名そのものを取りかえるような形で進行していたのである。

ノルウェー語がデンマーク語から独立し、ウクライナ語がロシア語から分離することなどを快く思わず、「言語的バルカン化」に反対のたちばをとっていた（デーシイ、一八五ページ）メイエにとって、ヨーロッパの言語は文献以前にさかのぼって単一であるか、やむをえないばあい、少なれば少ないほどよかったのである。その際のメイエのたちばというのは、ヨーロッパ文明の統一であり、そこでは言語よりも民族や国家を超えた「文明」（civilisation）に主体が与えられている。その歴史的な根拠は仮設されたインド・ヨーロッパ共通基語であった。比較言語学による共通基語の再構という作業は、背景に、言語と文明との同一起源という見通しがあったのである。

ところで、言語と民族との相互依存関係は、一般にはドイツ・ロマンティックの思想的系譜とむすびつけて強調されており、そのことにたとえばソンメルフェルトは諸国家の平和を乱す危険思想を認め、その源流を「中部ヨーロッパ、なかんずくドイツ」に想定している（6）。それだけに、さきに述べた中欧的でないソシュールのことばの鮮明さには人の心を打つものがあった。言語と民族との関係を論じることは言語学における異端思想と言うより、むしろ暗黙の共通認識でありながら、理論上の潔癖さが、深入りをさしとめただけのことであった。たとえばH・シューハルトのような冷静で批判的な言語学者もこの問題をさけてはおらず、ことばは短いが、ぬきさしならない明快さを以て、そのたちばを表明している。

民族性（Nationalität）という、揺れ動く概念は、言語の共通という概念にだけ、たしかな拠りどころをもっている（7）。

あるいはまた、

「民族」（Nation）という表現の、くっきりとした定義は不可能である。私はこの語によって——また„Volk”という語においても同様に——一つの言語共同体というものを考える。それはたいていのばあい、同時に文化共同体でもある（8）。

以上によってソシュールの理解が、正統派言語学の中で、決して孤立したものでなかったことは明らかである。

言語が民族の形成と存立にとって決定的な要因として作用するという考え方は、また、大多数のマルクス主義者のたちばをも代表している。それは、ソンメルフェルトの表現に従うならば、マルクス主義の発生の舞台が「中部ヨーロッパ、なかんずくドイツ」であったことと深いかわりがあるだろう。そしてこの「中欧的」言語・民族観に、簡潔で、明快な表現を与えたのはカール・カウツキーであり、そのカウツキーのことばは、レーニンによって、「民族とは文化共同体でも運命共同体でもなくして、言語共同体である」と抜き書

きされて、そのままマルクス・レーニン主義の基本的經典の中に引きつがれた(9)。レーニンにあっては、こうした把握が、カウツキーのもとですでにできあがっていた定式の単なる借用、くりかえし、あるいは再確認にとどまっていたのであるが、スターリンにおいては、さらに多面的な考察と資料にもとづいて、一つの決定版的な意味を帯びる定式に仕上げられて普及した。その際、スターリンがレーニンの水準をはるかに抜いてすぐれていたのは、ある民族の言語的な危機は、そのまま、その民族に所属する人間の知的活動に破壊的に作用するところまで目がとどき、言語を思考の単なる手段、乗りものとは考えていなかった点にある(本書一二七ページ以下参照)。

こうして、ソンメルフェルトのいう「中欧的」あるいは「ドイツ的」言語観、言語イデオロギーは、中欧の外に出てスラヴのものとなり、さらにカフカス、中央アジア、シベリアの多数の少数民族の文化的指導者の言語観ともなったのである。のみならず、社会主義、マルクス主義が支配したすべての領域において、言語＝民族同一視のイデオロギーは深く滲透してしまったのである。ただ、人はこの定式が、このような背景をもつことに思い至らず、またそれへの手がかりが示されていないために、レーニンの独創になるものと思いきこんできただけである。

そうであるとすれば、さらに背景をひろげて、この際、ソシュールの「民族的単位(ユニテ・エトニック)を作り出すのは、ある程度まで言語の共有である」という、中欧ではなく、西欧の知的代表者の考察を思い起こしてみるのはますます有意義である。だが、正統マルクス主義の民族理論として、うっかり採用されてしまった民族と言語の相互依存関係の理論は、今日の段階のソビエト社会の中で重い荷物となって、ソビエト的發展の前途にのしかかっている。同時に、この状況はまた、結果として言語と民族の本質を具体的な場面でおお一層あかみに出してくれるための実験的な過程にもなっている。言うまでもなく、こうした状況を先導し、あるいは跡づけるための理論の改訂の苦心そのものが語ってくれるものも決して少なくはないのである。

革命の当初から多民族国家として出発せざるを得なかったソ連邦では、民族の概念を、行政のレベルにおいても充分有効であるような形で規定し、特徴づける作業が要求された。それは、単に理論的な関心からだけではなく、具体的に、民族という資格づけを要求する様々な民族体に対して、その基準を提供しなければならなかったからである。一般に社会主義の運動は、ばあいによって民族の解放と自決を支持する方向を示しているとしても、もともと民族の解放はプロレタリアートの解放を通じて得ることもできる副次的なものとしてとらえるにとどまり、目標は何よりも階級的な解放の方にある。そのことをたとえばレーニンは「民族の自決ではなく、各民族内のプロレタリアートの自決」が問題であり、「プロレタリアートの階級闘争の利益に民族自決の要求を従属させなければならない」(「われわれの綱領における民族問題」)と述べている。レーニンはまた、民族に対する社会主義的な施策の到達点を、「諸民族の接近(сближение)と融合(слияние)」という表現で示したが、民族の消極的否定は、ソビエト政権の確立期に入って、いまや積極的否定の表現をとりはじめてきたのである。

### 3 言語は形式か

一九五〇年代までの、ソビエト民族政策の一般原則が、連邦内における諸民族の民族的

地位とその固有の発展の保障であったとすれば、六〇年代は、民族的自立ではなく、全ソビエト的の一体化を目指し、それを正当化するための理論的整備が求められるようになった。現実のソビエトでは連邦構成共和国間の国境はほとんど名のみのもとなり、共和国の連邦からの分離権も、完全に実感を失ってしまった。ソビエト全土にわたる経済開発のための技術・労働力の大量移動にともない、非ロシア語民族居住区の伝統的言語生活の解体も急速に進行しつつある。こうした現実の中で、ソビエトの民族理論をマルクス主義的と言おうが、社会主義的と性格づけようが、とにかく、民族の一九世紀的な把握は、現下の進行しつつあるソビエトの状況に即応していないだけでなく、その過程にとって阻止的な役割を演じるようにさえなっている。

とりわけ、民族という単位の基本的な決定要因に言語を掲げたことは、ソビエトの民族理論にとって、とりかえしのつかない誤算であった。そのまず第一は、言語に対して、民族の生存を保障する神聖不可侵の地位を与えることになるからである。そして第二に、上部構造からはずされた、あるいははずされざるを得なかった言語は、まさにそのことによって宗教、風俗などの文化とはちがった、変革の全く及ばぬもの、変革の対象とはならない、いわば自然現象の一つ——安全地帯——へと追いやられてしまったのである。言語は特定の階級に奉仕するものではなく、すべての階級に等しく奉仕する点で、誰に使われても同じ能力を発揮するものだと言ったのは、ほかでもない、ソビエト言語学をイデオロギーの束縛から解き放った、一九五〇年のスターリンであった。このように変革の及ばぬ、いわば生物的に賦与された、不可侵の言語という概念の上に民族が存立の場をもつのであれば、民族もまた言語と同様に変革の及ばぬ不可侵の聖域の中に座を占めることができる。ところが、現実のソ連邦にとっては、民族は相互に特徴を失って近づき合い、終局的には融合しなければならない、そのようなものとして理解される必要がある。

私たちはここでマルクス主義民族理論の、解きがたい二律背反の中に身を置くことになる。すなわち、カウツキーが、民族的「性格」によって民族を定義しようと試みたオットー・バウアーへの批判を通じて、この「性格」という観念的要因を言語によってとりかえ（本書一二ページ以下参照）、ここに理論的な飛躍をとげたことの代償が、まさにこの改変を許さぬ言語の性質から引き出される困難である。スターリンの民族の定義が廃棄され、再定義の必要が生じた、本質的な理由の一つはここにある。スターリンもまた、言語に不当に高い地位を与えるという、中欧の狂信的言語神秘主義思想の悪しき影響のもとで、そのとりこになっていたということになるだろう。

こうしてソビエトの現実が要請する理論とは言語が民族の文化にとって積極的意味をもつことを否定し、その単なる道具性に言語の機能を局限しておくことになる。そこで、現代ソビエトの公式的立場を代表する民族理論イデオログのカルタハチャンは、「多様な言語のもたらす豊かさによって、人類の力は増大するのではなく、減少する(10)」と述べて、多言語の悪にあらためて注意を喚起した。このことは、新しい段階に入ったソビエト国家が、言語的寛容に対して従来知られているのとは異なる態度を示したものとして注目される。いまや多言語の容認は、民主主義のあかしではなく、おくれ——少なくとも社会主義的発展の——として受けとられるに至ったのである。

カルタハチャンはまた、「言語は民族的感覚(национальное чувство)において、決定的な役割を演ずるものではない(11)」として、カウツキーにはじまり、レーニン、スター

リンへとまもり伝えられてきた、マルクス主義的民族理論の伝統にとって、決定的な転換の第一歩をしるしたのである。

こうして、言語の相違が越えがたい壁であると思わせるような方向をもつ、いっさいの理論はソビエトの状況から見て有害であり、とりわけ、言語は実在世界に対して言語ごとに異なる分節を行い、異なる認識の世界を構築するものと考え、いわゆる言語相対主義と親縁な意味論もまた有害である。

もともとソ連の学界では、意味論はイデオロギー的に気やすく近づいてはならぬ分野であると思われてきた。一九五〇年にスターリンとの間に言語学の問題で一問一答が交された際にも、クラシェニンニコワは、はれものにさわるといふようなしかたで、意味論を研究することが許されるか否かとうかがいをたてたのであるが、スターリンはそれにこたえて、「言語学のもっとも重要な部分の一つである」「意味論には、言語学上で適当な地位を保証しなければならない」と述べるとともに、「その意義を過大に評価してはいけないし、これを濫用することはなおさらいけない」とつけ加えた(12)。当時のソ連で言う意味論(セマンチカ)とは、「意味論(セマンチカ)の過大評価とその濫用が、エヌ・ヤ・マルを観念論にみちびいたのである」という意味における意味論であったが、もともと言語の意味は観念への冒険をおそれては、その正体にふれることすらできない性質をそなえている。言語的意味論は、つねに言語的観念論の温床でもあった。

「民族語を、その担い手である民族の精神にとってインマネントであると見なしている一般意味論」はさらに危険である(13)。「世界にはいかに多様な民族(および種族)語があろうとも、人間の言語はその本質においては単一である」という主張の基礎は、思考と論理の普遍性への確信である。したがって「思考はその論理形式から見れば普遍人類的でありながらも、民族的言語形式によって表現される。このようにして、形式をもつ言語と内容をもつ思考とは相互に形式と内容としてかかわりあう(14)」。言語は形式、思考は内容という、このような機械的な振り当ては、一方においては、例の、ソビエト諸民族の文化を特徴づけるのに用いられた、「形式においては民族的、内容においては社会主義的」というなじみぶかいスターリンのスローガンの、いまだ変らぬ踏襲であり、他方では、深層構造の設定を通じて、あらゆる形式を人類普遍言語という内容に還元するところの、チョムスキーの「生物的」言語論と親縁であり、それと呼応しあっている。

ソビエト言語学史の記憶をよびさますならば、言語の系譜的多元起源を否定したマルによる一元的起源論と、一元的な発展段階説もまた、諸言語の形式の相違の彼方に仮定された普遍という理念を、時間の軸に沿って具体化しようとする試みであった。したがって、ソビエトの理論が言語に示したその折り折りの態度には、いくつかの大転換点が識別されるようであっても、じつは言語を社会と文化にとってあくまでも外的な、交信の道具の位置に追いやっておこうとした点では一致している。

#### 4 民族語から世界語へ

このように、民族にとって本質的ではなく、内在的な価値を持たぬ言語の存在意義はひとえに伝達にあることになるのだから、効率の悪い「いままで発達してきた現存の諸言語は世界語(単数)にその地位をあげわたすであろう」という予測に至るのは意外ではない。こうした架空の到達点から見おろすならば、「人類は多くの言語に分れているという事態

から利益を得ているとか、またいつまでもそれを維持するであろうなどと考えるのは全くの空想」ということになる(15)。

多言語状態の克服の運動は、国家をこえる時、理想主義的となり、一つの宗教運動にも似たすがたをとりさえする。しかしそれが、ひとたび国家内のことになると、もはや運動とは言いがたく、行政の圧力が担う作業となる。国家語モデルに発想の基盤を置く世界語は、現存の大言語から可能なかぎり等距離を保つように配慮された、中立の人工的世界語を夢想したりはしない。そこで諸民族の多様な言語が、まずいくつかの世界語に収斂し、次いで単一の言語へという現実味のある図式は、それがレーニンの考えでもあるということによって充分正当づけられる。

「言語の問題は、次の二つの面のいずれかにおいて解決される。つまり、巨大な文化民族(ナーツィヤ)の諸言語のうちの一つが、あらゆる民族(ナロード)にとって共通語となるか、あるいは、あらゆる民族が三つか四つかのことばを身につけて使いこなせるようになるかである(16)」(レーニン)。第一の道も第二の道も、既存の言語から中立の、いわゆる人工語のアイデアに道を閉している点では同じであって、今日の欧州共同体が構想する欧州共通語の発想とも一致している(17)。

こうした「文化民族の文化語すなわち世界語」(мировые языки)という発想も、「言語の進化」というものさしにあててその構造上の優劣を判断し、信じた一九世紀マルクス主義のものであり、カウツキーやレーニンが「小国スイスは三つの言語を持っているために損をせずに、かえって得をしている」と考えたのは、その独、仏、伊語がほかならぬ「世界語」に属していたからである。

『民族問題に関する報告の論題』にレーニンが書きつけたおぼえ書き「世界語にはたぶん英語がなるだろうし、ひょっとして、プラス、ロシア語……(18)」は、レーニンがスターリンに比べてはるかに素朴に「文化的な世界語」に信頼を寄せていたことがわかる。

レーニンにおいては、文化語は「多数者の言語」に一致する。「ロシア語の運命」がたしかである理由を「一国家内に生活する諸民族は、つねに経済取引の必要にせまられて多数者の言語をいやおうなしにまなぶからである」とレーニンがいうときの「いやおうなしに」のプロセスは、現代ソビエトでは「言語の社会的機能範囲」という、より客観的な用語で示されるようになっていく。たとえば、「諸民族語の社会的機能範囲は、世界語の使用領域の拡大につれて、絶え間なく縮小されて行くだろうことは明らかである(19)」というぐあいに。

こうして、個々の民族語の社会的機能(общественные функции)の縮小過程の研究は、現代ソビエトにおける社会言語学的研究の最も顕著な分野になっている。民族語が、学校、職場、集会、放送、出版等の公的領域から撤退し、みずからの「社会的機能」を「家族内のコミュニケーションの場」に局限しつつ、これらの場における社会的機能をほとんど全面的にロシア語にゆだねて行くプロセスは、ソビエトの言語状況の「発展」と理解され、その克明な研究を我々は手にすることさえできるのである(20)。

もしマルクス主義的な言語政策ということばで、諸民族語に固有の権利と尊厳がいつまでも保証されることだという通念が存在するとすれば、それは一九二〇年代の一時期だけに栄えた短命な理念の化石でしかない。少なくとも今日のソビエトでは、言語は絶えず、強力で単一で大きいことが求められている。

こうした状況を背景において考えるとき、ソビエトの言語に関する著作の学問的なものにおいても通俗的なものにおいても、たえずくりかえして引用される、「言語は人間の最も重要な伝達手段である」というレーニンのことばが、一見すこぶる陳腐であるように見えて、じつはそうでないことがわかってくる。このことばは、言語に伝達にまさる大きな役割を認めるたちばを排除するとともに、言語じたいは決して目的そのものにはなり得ず、手段にとどまるものだと声明しているのである。それは言語を仮象とし、その背後に人類共通の論理と思考という実体をとっておくことを意味する。

だが、こうした言語の把握のしかたには、文化における言語の地位、集団形成における言語の役割といういずれの面をとって見ても、言語のより深い本質にきり込んで行くための手がかりは与えられていない。そのかぎを得るためには、必要とあらば現行の正統マルクス主義が許した範囲の外に出て行かねばならない。そして、言語そのものが内に秘める、その本質的な性格としての否定面にも目をふさいではならないのである。ことによると、言語の研究にたずさわること自体が本質的に反マルクス主義的で反動的な側面を持たざるを得ないというばあいもあり得よう。人間に見出されるあらゆる反動的性向は、すべて言語の中に前もってやどされているかもしれないからである。

もともと、言語が人間的活動のけだかい所産であるという讚美には、そらぞらしいひびきや、学界商業主義的で低俗な野心すらが感じられる。言語はすでにルソーがほのめかしているように、人間社会の最も差別的な原理をなし、差別の根源をやどしていて、潜在的に告発の対象である。こうした認識に根ざしたヨーロッパの言語批判 Sprachkritik の伝統は、それが、ことば使いの良し悪しを論ずる文体批判にとどまることがないかぎり、学問から排除されながら、あるいは排除されることそのことによって学問に反映されつづけてきた。言語学が言語の起源論を排除したのも、そのような現象の一つである。

このように言語学は、じつは教科書的に記述される以前のところで、潜在的に言語批判を内蔵しているのであるから、言語告発を予想せず、それを内蔵しないマルクス主義にとって、時に危険な存在として姿をあらわすことがある。ソビエトの理論史において、言語の理論が、他の国には見られないほど大きなうねりを示しつつ政治の構図の中に深くはめ込まれているのはそのためである。そこは、言語をめぐる基本問題が絶え間なくはげしく論争されている場所であり、民族に関する理論もまた、それとの関連において、この論争の不可欠の部分となしている。

## 5 言語から意識へ

言語がもはや民族を決定し、特徴づける要因であることをやめ、普遍論理の表層に浮遊する仮象にすぎないものであるということになれば、言語から言語への乗りかえもまた、民族の生活の決定的な変化をひきおこすことなく実行され得るはずである。それはたとえば、生活の実情にあわなくなったために、伝統的な服装を脱いで洋服に着替える程度の外的変化にとどまるものと受けとるに等しい。その乗りかえの根拠は、より遅れた言語からよりすすんだ文明語への、質的な乗りかえと考えるにせよ、また少数から多数への量的な乗りかえと考えるにせよ、結果としては同じである。カウツキーであれバウアーであれ、一九世紀のマルクス主義者が進化主義の影響下に、言語の優劣をあからさまに表面に出していたとすれば（たとえばカウツキーの言う「博物館行きの」言語や、「くずれた」

言語)、現代のソビエトでは、優劣の観点をとり入れることが時にあるとしても、主要な問題点はもっと客観的に多数者言語の流通力の強調に重みがかかっている。そこには明らかに近代言語学の記述主義的公平さというイデオロギーの反映を見てとることができる。

だが言語において、少なくとも話されている現代語においては、その価値を内面的な質にかかわるものと、量的な流通勢力に由来するものとに区別することは、ほとんど不可能である。ある言語の威信とは、結果において権威づけられた領域における流通力のことである。そして流通という点から見れば、言語の社会的本質は規格性にあり、この意味で度量衡の単位にひとしく、他方では党、国家、社会に対する忠誠のあかしであり、その度合を計る尺度ともなる。

言語はそれが民族のやどりの場所である以上、いまや、「単一のソビエト国民」という概念を脅かす、理論構築上の桎梏となっているため、変革や操作の可能な意識が、それにとって変らねばならなくなっている。そこで言語に代るべき自覚や意識に関する理論は、現代ソビエトでにわかには高い地位を与えられはじめた。それは、民族誌の対象としてのエスニックな自覚から、より高度に観念的なパトリオチズム、祖国愛に至るまでの段階を含んでいて、あたかも、種族語から国家語に至るまでの言語機能の段階に対応しているかの如くである。

すでに述べたように、言語は質的な改変を許さない、単純なとりかえだけが可能な、一種の自然要因に似ているのに対し、意識は変革・形成可能な、つまり、理論的な操作が許容される余地を残した領域だからである。そのため、一見奇異に思われるかもしれないが、民族の定義にあたって、意識ほど理論に適した項目は他に求めがたいというのは逆説ではない。言語、地域、文化、経済生活など、さまざまな項目の共通性をあげたとしても、それですべてが言いつくせないところに民族の定義のむつかしさがあるのだが、論理的にたしかなことは、その集団のメンバーたちが、民族の要件として掲げられてきた項目のいずれかを欠こうとも、自らが民族であるという共属意識を持てば民族であり、そうでなければ民族ではないということである。げんに一九二〇年頃のソビエト政権は、民族政策立案のための基礎調査において、調査項目に被調査者の「意識」をとり入れていた(本書第2章3を参照)。行政は調査の客観性のために、基準を必要とし、そのために「法典」としての定義が要請される。しかし、調査される個人にとって最もたしかなことは、調査項目への合否にかかわらず、自分自身がどう思っているかという意識が決定する。民族とは、このように個人の主観においては意識にほかならない。個人における意識を扱うかぎりにおいて、ここでもまた、地域の共通原則(Territorialprinzip)を破る個人原則(Personalitätsprinzip)が先行することによって、カウツキー以前に逆もどりする結果となる。

オーストリア・マルクス主義者たちの論争の後およそ一世紀をへだてて、言語を代償として復活してきた「民族意識」すなわちエトノス意識は、今日のソビエトで、最も期待されると同時に多面的な検討を要している概念である。

こうした問題をめぐって一九六〇年代に、ソビエトの学界が、『歴史の諸問題』誌で民族の定義に再検討を加えはじめたとき、直接問題になった語が、ナーツィヤやナロードノスチであったとすれば、そこでの討論が一段落ついて、次に『ソビエト民族誌』に場所が移されたときの問題の中心は、エトノスの概念に移っていた。

ナーツィヤ、つまりネイションやナシオンが、近代国家の成立という、政治的次元の要

因を含む概念であり、またナロードノスチが前国家的段階にとどまり、あるいは国家への道を阻止されてナツィヤの支配に服した国家内少数者であるという意味で、これまた政治的概念たらざるを得ないのに反し、エトノスは、こうした集団のヒエラルキーという要因を排除して、純文化的概念の探求に移行するための拠りどころとなった。

民族、あるいはそれに類する用語につきまとう学問外的な感情価値は、日本語のみならずヨーロッパ諸語にあっても絶えず議論のたねを宿してきた。あるいはことによると、むしろヨーロッパ諸語の方に日本語もしくは漢語表現よりも、はるかに神経のゆきとどいた配慮のおよんでいることがある。たとえば、漢語の「少数民族」にあたる *nationale Minderheiten* は、ドイツ語圏ではかなり早くから避けるべき表現であったし、とりわけスイスでは、多数 (*Mehrheit*) とか少数 (*Minderheit*) とかは決して口にしてはならないことばであるという。そこでは、人口四万ばかりのレト・ロマン語が国家語の地位を得ていることに象徴されているように、「小さな村々に至るまで、民主的な原則が行きわたっているからである (21)」。そもそも「故郷では誰も少数者ではない」(ファイター) のであって、民族的、すなわちエスニックな集団の本拠には、本来は少数者という概念は存在しないはずだという。こうして、少数民族は、第一次大戦後に起きた、相次ぐ民族的主権の回復によって、より中立的な *Nationalität* へと呼びかえられた。ロシア語のナロードノスチは、おそらく、*Nation* — *Nationalität* をモデルに、ナロードから派生して作られた語であって、この語の慣用化は、おそらく、このような第一次大戦前後のヨーロッパの民族的状況を反映していると思われる。

ソビエトの初期には、今日めったに用いられることのない、「少数民族」の省略形にあたるいわば「少民」とでも訳せる語ナツメン *нацмен* (← *национальное меньшинство*) が登場したのであるが (22)、これもまた差別感から自由ではなかった。

第二次大戦後は、さらに *Nationalität* すらも不適當な語と考えられるに至り、ドイツ語圏では、*Volksgruppe* を、より望ましいと考えるようになっていくという (23)。

こうした用語の変化、あるいはとりかえは、国家から疎外された民族的集団が、国家の中核にある支配民族に対して、目にみえる圧力を及ぼし得るまでにその地位を高めたことのあらわれであり、その背後には、言語をたてにとって同化への道を阻む、あのいまわしい、中欧起源の言語神秘主義のけしかけがあったからである。しかし、言いかえの動機はいつも学問外的であるとは限らない。国家、準国家への振り当てを暗示し、政治的ヒエラルキーを示す *Nation* の概念は、民族性の本質にせまろうとする民族学者にとっては学問的に不適當である。少なくとも、民族にとって、それが国家を所有しているか否かは、いわば、政治的な運、不運の問題でしかない。ソビエトの民族学者たちの中で、「民族」の問題がエトノスの概念で語られるようになったのは、一つには学問的な公平さのあらわれであり、他方では、政治的地位を含意しないことによって、連邦内国家の存否という、行政の問題を避けて通ることができるからである。

この点で注目すべきは、フランス語にはエトノスの語としての使用が早くから一般化していることで、それは、*communauté ethnique* という好ましい表現として定着し、ヨーロッパ諸語にも影響を及ぼしつつある。

そして、エトノスに由来するエトニスムが学問の用語として導入されたのも、ソーシャルによるフランス語のかたちであった (だが一九七二年版プティ・ロベールはこの語を登

録していない)。ソシュール自身は、この語の概念を自覚的に、その『講義』の中で用いたわけではなかったかもしれないが、やがて、ツングースに関するいくつかの著作で知られる亡命ロシア人のシロコゴロフによって、あらためて学問的議論の正面にすえられた。このように、エトノスの議論の出発点にシロコゴロフが位置していたことは、まずミュールマン (24) が学界の注意を喚起し、次いでソビエト民族学の理論家、ブロムレイが言及するところとなった (25)。ではシロコゴロフ自身が、この語の使用のヒントをどこから得たかといえ、それがソシュールの『講義』からであったと明記しているにもかかわらず、言語学の領域では、この面でのソシュールにはほとんど注意が向けられてはいないのである (26)。しかもそれが我が国では、『講義』のその個所が、訳者自身の無理解を露呈したまま今日におよんでいることは、さきに述べたとおりである。

## 6 エトノスと言語

エトノスをめぐるソビエトの学界の議論の深まりは、エスニックな自覚における言語の役割を解明しようとしたチストフの「エトノス共同体、エスニックな自覚と精神文化のいくつかの問題 (27)」に見ることができる。この論文はソビエトの学界が、人間的所産としての文化を物質的基盤から説明するという従来のしきたりから飛躍して、意識、自覚をはじめとする観念の世界へと大胆な肉迫を試みるようになった全般的な潮流を代表しているものと見ていい。

チストフによれば、ソビエトの学界で民族論がにぎわっているにもかかわらず、いまだに用語や概念の使用に一致が見られず、もっと大きな欠陥は、「ほとんどの論文が精神文化の問題を避けて通っている」ことだという。ソビエト民族学の全体をいろどるこうした欠陥の源流を、かれは一九五〇年前後に決定的な影響力を及ぼし続けてきたクーシネルの方法であったと見ている。その影響力の強さは、たとえば現代の代表的なエトノス理論家ブロムレイが、これをソビエトのエトノス論の出発点に置いていることからもうかがえるが (28)、クーシネルは、精神文化の諸領域にかかわる現象は物質的基礎を欠き、不安定で証明力を欠くとして、それへの考察を怠ったとチストフは指摘する。

ここでチストフは、クーシネルに抗して、文化の規定要因としての物質文化と精神文化の地位を入れかえようというのではなく、エスニックな自覚において特有の役割を帯びる、「物質文化のイデオロギー化」の過程に注意を向けようとするのである。民族的自覚は、まず精神文化の領域にはたらきかけた後、それを介して物質文化そのものをもイデオロギー化する。こうして、意識や自覚の前に、物質も精神も相互の区別を必要としなくなる。

いろいろな角度から経験的にとり出される民族の特徴的な項目、すなわちエスニックな諸特徴は、ある特定の歴史的な状況のもとに、隣接民族との弁別的な特徴としていわば賦活されるのであって、その特徴はコンスタントにはたらいているのではない。それらは、潜在的に弁別的要因であるとしても、現実の弁別的要因として、選択的に賦活させるのは、主観的には意識である。チストフは、従来のすじみちを逆転させて、意識に民族概念のイニシアティブを与えようと試みた。

エスニックな自覚は、他の何よりも先に、まず精神文化にはたらきかけて、その周辺をイデオロギー化し、それによってさらに物質文化にさえ、イデオロギー的な価値を与える。

我々は、宗教もまたエスニックな自覚の触発者であり、その宿りの場所であることを知っているが、その祭式・儀礼の用具、服装などの物質文化にはたらきかけ、やがては住居、衣服、食器や味覚などの日常的な物質文化がすみずみまでもイデオロギー化されることを理解する。ここには「物質的なものが、精神的な領域へと転化される」過程がある。こうして、エスニックな自覚そのものは、精神文化の一部ではあるが、文化の全域にわたって影響力を及ぼす作用因となる。文化の全体は、このイデオロギーによって再検討され、伝統的なものに改新を加えるか固持するかの評価を加えて選択的に取捨が行われる。つまり、「エスニックな自覚とは、単に結果ではなく、精神文化の領域におけるエスニック・プロセスに作用する動因の一つである (29)」。

このようにチストフはソビエトの学問的伝統に反して、民族論の中心を精神文化の領域に移した上で、次には、この精神文化と言語との関係に考察の焦点をあわせる。

言語と文化との関係は、それらが「緊密にむすびついている」などというありきたりの表現ではすまされないところがある。そこはチストフとしてはやはり、一層困難な問題に道をひらくかもしれないが、次のような確認をしておかねばならない。

言語はエスニックな特徴の最も強固なものに数えられる反面、社会・経済的、あるいは政治的要因に左右されること最も少ないものである (30)。

言語についての様々な性格づけがある中で、これは、問題の困難さを臆せず一気に前面に押し出した点できわだっている。

この把握の中には、先ず言語とエトニスムの相互関係を述べたソシュールのたちばが含まれており、次には、言語が上部構造に属していない——「社会・経済的、政治的要因に左右されない」というのは、そのことを具体的に表現したものにすぎない——とした点ではスターリンのたちばも含んでいる。そのばあい、「エスニックな単位を作り出すのは、ある程度まで言語の共有である」と簡潔に表現したソシュールにおいては、ここで言語とエトノスとの関係の解明という作業が放棄されてしまったし（あるいは、完結したものとして封じ込められたと言ってもよい）、スターリンにおいては、言語の社会性を論じる道すじが断たれてしまったのである。チストフの右のことばは、ソシュールの観点も、スターリンのそれをも同時に含み、それを対照的に示した貪欲な試みであると言わねばならない。

だがチストフは言語に比類のない地位をあてがってしまったために、エトノスとエトノスとの間を媒介できなくするという結果をもたらした。そして、このこと自体がことの本質を臆することなく言いあてたことのむくいである。ここからは、楽観的な普遍主義に通ずる道はかたく閉ざされている。少なくとも、異なるエトノス間の文化を「内容においては社会主義的で、形式においては民族的」であるというように、言語を形式に追いやったうえで、言語ぬきの内容の普遍を説くわけには行かなくなってしまったのである。このままでは、エトノスとエトノスとの間が媒介できないと同様に、言語と言語との間もまた容易には媒介できない。この議論は、論理の深いところでスターリンとつながっている。

このような前提、言いかえれば、異なる言語が相互に影響を与えながらも、一つに融け合うことなく併存しなければならないように、異なる文化も、異なるエトノスも相ならん

で存在しつづけなければならないという前提にたつかぎり、多民族国家が言語と言語、民族と民族との間を媒介する方法は二言語併用（バイリンガリズム）であるから、その重要性は強調しすぎることはない。民族と民族との間の媒介は、チストフのことばを用いれば「文化的バイリンガリズム」の存続としてとらえられることになる。ここに社会言語学は、言語のバイリンガリズムから文化のバイリンガリズムの問題に接近する道を開くべく、特別の任務を帯びることになる。

以上のチストフの議論を検討しながら、我々は次のことも決して忘れてはならない。それは、通俗的であって、自覚はしないが、ときに信念にまでなっている、もとは漠たる言語観から、理論的に意図された、手のこんだ言語観に至るまで、それらは決してそれ自体として自由の空間を泳いでいるのではないということだ。言語の理論は、その抽象性を保持したまま、国家や行政が欲すれば、政治的なイデオロギーと結びあう。

たとえばチストフの考えるバイリンガリズムは、多言語状態でやむなくとらざるを得ないところの必要であって、一種の言語的寛容の態度のあらわれである。しかし他方では、いかなる国家であれ、それが国家であるかぎり、それへの誘惑を断念することはほとんど不可能であるところの単一排他的国家語所有への願望が生ずるとき、寛容なバイリンガリズムは不寛容な特権的国家語への予備的段階としての性格を帯びる。こうして二言語併用の研究は「単一のソビエト国民」創出の段階にあって、特別の意義をもちはじめた。

民族の相違をこえた、「ソビエト国民」という概念は、「新しい型の歴史的人間共同体」ということばで言い換えられる。このスローガンの表現は、ソ連邦成立五十周年記念行事挙行を決定した、一九七二年二月の党中央委員会の報告書に採用されて以来、公式の性格を帯びるようになったものと思われる（31）。

連邦内諸民族の各共和国ではなく、単一のソビエト国家、単一のソビエト国民の実現のための言語的基礎は、それに応ずるソビエト国家語、すなわちソビエト語の出現でなければならない。そして、ソビエト国家語の地位にあたいする最もふさわしい既存の言語はロシア語である。

しかし、よく知られているように、レーニンは特定の言語に特権的地位を与えて「コクゴ」を設けることを排した。「強制的国家語は必要か」という論文は、それが発表されてから六十年たった後、いま「単一のソビエト人」誕生のこの時点においてこそ、個々のソビエト諸民族の言語的権利をまもるにあたって最もたよりになる拠りどころを提供しているのである。原則として連邦制に反対し、完全な中央集権国家を主張したのがレーニンならば、「国家語」の制定に反対したのもレーニンである。量においてはささやかな、かれの短い「国語論」は、じつは言語の面から「単一のソビエト人」の完全な実現をはばんでいるおそろべき遺書となったのである。将来起こり得るかもしれない、共和国そのものの解消による連邦制の廃止、その結果としての単一のソビエト国家は、少なくとも、このレーニンの「国語論」にしたがうかぎり、国語は所有できないことになっているのである。

そこで、たてまえとして国家語所有への道を閉ざされたソビエト国家にとって案出されたのは、межнациональный язык つまり諸民族間〔共通〕語、いいかえれば、国際語に対応する国内族際語を設け、ロシア語にその役割を負わせることである。族際語としてのロシア語は、また第二の母語（второй родной язык）とも呼ばれる。しかし、たとえば常にたとえでしかないように、母語は二つとはなく相互に排除しあうものである。族際語の実

体は、国家語への予備段階か、あるいはもしかして国家語そのものである。

## 7 国家語イデオロギー

近代国家としての日本は、国体、国民、国語など、コクとくみあわさった一連の政治用語をそなえるにいたったが、「国語」は小学校の教科の名として定着させられて以来、すでに日常語化している。そのため、単に、言語、ことばという意味で「コクゴ」が日常的に使用されるに至った。その結果、国家を所有しない民族の言語についても、人はこれを「国語」と言い「外国語」と言うのである。このような慣用は、アイヌやオロッコのように、日本国民でありながら非日本語を話す人たちの言語をどう呼ぶかというときに、はたと困ってしまう。アイヌ語は日本人の理解しない言語ではあるが、外国語ではない。ところが、「アイヌ語を母国語として自在に話す」とか、「オロッコの母国語による訴え」（いずれも『朝日新聞』一九七七・一・七、一九七八・二・四）という表現に、ほとんどの日本人が矛盾を感じていないようである。そこで私は日常化のために埋没させられてしまった「国語」の本来のニュアンスを見落さないために、「国家語」という、強調された表現の方をえらぶのである。

また他方では、日本語における「国語」が政治的な意味を失って日常化してしまったために、「国語」は日本語特有の表現であって、漢字使用圏以外には、国際的な流通力のない、かたよった概念であると思われるようになった。そのため、最近では、「国語」とほとんど等価に「日本語」が用いられ、言いかえの習慣も、学校の教科以外では確立されはじめている。

しかし、どのような用語であれ、そこには成立と使用の背景があるはずであって、それを考慮に入れない、単なる機械的なとりかえは、ものの正体をつきとめる精神をくもらせるものでしかない。そこでたとえば、

自国語のことを *national language* なんかと称している国は……世界中にないのではないか (32)。(木下順二)

というふうな、一般に流布している通念にしたがって「国語」を「日本語」に模様がえすれば、この一くせも二くせもあるコクゴは、そのニュアンスごと見えないうところにとじ込めておけると考えるのも安易すぎるようである。いま、コクゴを一定の歴史的概念を帯びたものとして、社会科学の対象としてとりあげるためにも、「国語の祖国」はフランスであって、しかも、それがフランス革命のさなかに生まれたことばであるらしいことをここに記しておく必要がある。その徴証は国民公会 (*la Convention nationale*) における、いくつかの重要な発言である。たとえば一七九二年には次のような記録がある。

共和国の利害は、今日、そのすべての成員に知られていなければならない。だがそのような、しかるべき状態は、国語 (*la langue nationale*) を全員にすっかりなじませることによってもたらすことができる。世にもてはやされるところが全くなく、前世紀の野蛮の名残りでしかない〔各地の〕ばらばらのことば (*les idiomes particuliers*) によって人々の交流 (*les communications*) が妨げられているところではどこでも、こうしたことばをできるだけ早

く消滅させるために、あらゆる必要な手段をとらざるを得ない (33)。(ロトマの発言)

ここでは、ラング・ナシオナル、つまり国家語の必要な根拠として、全土にわたる、とどこおりのないコミュニケーションという、実際の必要が前面に押し出されている。それと同時に、国語以外のことばや方言は野蛮だときめつけられてはいるが、フランス国家語そのものを、まだ、美しさや明晰さでたたえあげることにはしていない。だが、翌一七九三年の国民公会文部委員会には、フランス国家語の質的高さそのものが強調されることになる。

有用な知識は甘き露のように、この国民 (la nation) を構成する個人のすべてにひろまるであろう。かくて国語 (la langue nationale) を話すことのない、フランスの六〇〇万人の地域的ジャルゴンやいなかことばは次第に消え去るであろう (34)。(グレゴワールの発言)

国民公会が行った調査によれば、一八世紀末当時、一二〇〇万のフランス人口のうち半数はフランス語を話すことができず、わずか三〇〇万人だけが「正しい」フランス語が話せたという (35)。ここに言う、半数にあたる六〇〇万人とはラングドック、プロヴァンス、ブルターニュなどの、かれらとしては、正しい母語を話していた人々を含んだ数である。二百年後の今日でも、全フランス人口のうち、まだ三〇パーセント近くはフランス語を母語としてはいない。

この状態を指して桑原武夫は、「文化の面においても、国語尊重の念がなお乏しく、フランス語の普及がナシヨンの精神的覚醒と密接な関係があることが理解されず、国家も教会もこれに協力しなかった。フランス語はヨーロッパ中に普及しつつあったにもかかわらず、これが教育語としてラテン語に代ったのは一七六三年にすぎない」として、フランス語の国家語への野心のめばえがおくてであったかのような見解を示している (36)。しかし、ラテン語の排除と国内少数言語の消滅を意図した、国家的決定はすでに一五三九年、ヴィレール・コトレ (Villers-Cotterêts) の勅令に現われている。その一一〇条と一一一条は、フランス語以外の言語によって裁判記録が作成されることを禁じた。

南仏の諸言語に発展への道を閉ざし、フランス語に独占的な地位を与える志向は、こうして、フランス革命をはるかにさかのぼって存在した。フランス語の国家管理のためにアカデミー・フランセーズが誕生するに至ったのは、この勅令が現われた一世紀後、一六三五年のことであった。フランス語史の上から見るかぎり、フランス革命は絶対王制の延長線上にあり、しかも、その遺産をそっくり継承したのである。ただ規範の原基が王のことばから国家のことばへと移っただけのちがいがあただけである。そして、「国家のことば」、「国民のことば」(la langue nationale) の理念は、さきに引いたロトマの発言——共和国の利害は、そのすべての成員に知られている必要がある——から見てとられるように、平等の理念に発している。統一された領土と、その上に成立した統一経済圏に応ずべきは、万人に対してひとしく機能する法律であり、その法律は万人に対して同等の効力を持ち得るためには同じ言語で書かれていなければならない。つまり、法の平等の前提は単一の言語である。単一のフランス語は万人にとって、平等と民主主義の言語となるのである。こう

して、フランス共和国内の非フランス語の話し手が、フランス語を排他的に用いることは、もはや道義の要求でもあった。

「ことばの統一は革命にとって必須の要因である」というグレゴワールの発言の意味は、こうした背景にてらしてみたとときに、一層深い意味を伴って理解されるだろう。そのグレゴワールのことばも精神も、ほとんどそのままのかたちで今日のソビエトにあらわれている。特定の言語に特定の使命が付与されるとき、その言語そのものが、たとえば自由、平等、友愛の象徴となり、そのスローガンに忠誠を示す必要のある者は、また、その言語にも忠誠でなくてはならない。

こうして、フランス語に付与された象徴的な使命は、一七九四年の国民公会公安委員会におけるバレールの発言によって一つのモデルが与えられる。すなわち、

封建主義と迷蒙は低地ブルトン語のものであり、同様に反革命はイタリア語で話し、狂信者はバスク語を使う (37)。

これらのことばを使うものは、そのこと自体で、おしなべてフランス革命の理念への反逆者である。

我々はフランス革命期における、特定言語への忠誠の要求、特定言語を用いる者への疑いの目が、二〇世紀のロシア革命においてもあったことを知る。一九一七年から二六年までの革命期のロシア語を克明に観察したセリシチェフは、フランス革命がローマ共和制を手本としたように、ロシア革命はロシア民衆語とは無縁なフランス革命期の用語を好んで導入したと述べているが、こうした、言語上のフランス革命とロシア革命との類推は、現実の国家語志向に反映されている。そして、言語的にはるかに多様なロシアのばあい、特定言語の反革命性ととどまらず、特定文字までがその反革命性を問われたのである。一九二〇年代に相次いで廃止された、テュルク系諸族のアラビア文字は反革命の象徴とされていた (38)。一九七〇年代に入ってから、ソビエト語を演ずべきロシア語にも、単なる量的な力だけではなく、様々な美質が数えあげられることになった。

私の個人的見聞からすると、日本ではフランス語の国家管理を讃美し、美化し、知識人はおおむねそれを模範とあおぎ、この神話を拡大再生産する方向にのみ協力してきたように思われる。それは、この神話の強化が、同時に日本における「国語」管理の一層の強化に人々の同意を得る点で役立ったからでもある。だがその中で、言語の優劣、美醜の観点を全く加えることなく、「国民一般の進歩のために、一小部分の利益は、棄てねばならぬ」と、冷静な態度で地方語に犠牲を要求した例があることを知った。この人は、日本語の一小部分である地方語を毒蛇にたとえて、学問上保存の意義はあるとしても、「日本国全体の利害から顧ては、どうしても其撲殺を謀らねばならぬ。地方語の保存も……之を保存しておけば一般の人人に迷惑がかかる。……所謂方言の取調と云ふことを盛に行ひ、将来繁殖の道がないか、又は繁殖させてはならぬかと認め方言の滅却を謀るにある」(岡倉由三郎『応用言語学十回講話』明治三五年 (39))。

その冷静さと無慈悲さにおいて一種のさわやかさをたたえているこの発言は、そのまま富国強兵時代に照応する言語イデオロギーの精髓である。

フランス革命は歴史上のエポックとして完結したが、フランス革命が果たそうとした言

語的専制の方はまだ完成していないようである。グレゴワールがその消滅を予言したジャルゴン、つまりブルトン、バスク、オクシタンの諸言語は、二百年のうちに、自然消滅から攻勢に転ずるきざしを見せはじめている。

直接間接に国家語のモデルとなったフランス語はまた、国家語の規範というものがどのような性質をもっているかを我々に教えている。言うまでもなく規範は、平等の概念と表裏一体であった。しかし、規範から除外された——それは個人の出生による——言語の話し手にとって、ことばは自ら作り出すことができず、いつも規範言語から一方的に借り受け、それに合わせる以外に公的コミュニケーションに参加する方法がない。それはたとえば、「労働力の売買が自由であるというのがいつわりであると同様、表現手段の平等な共有というのもまたいつわりである (40)」。

国家語のイデオロギーとは、手段としての言語の共通、共有による国民的平等という理念によって、現実の言語的不平等をおおいかくし、こうして生まれた単一独占言語を神聖化することによって、単に言語的な多様性を許さないだけでなく、やがては文化の多様性にも敵対するものである。経験的に、いかなる国家語も単一であろうとするかぎり、この軌道からはずれたことはないように思われる。

(1) 「歴史的対象」は言語表現としては固有名詞を帯びるという興味深い指摘をした後、コセリウは、言語と民族の名称の関係について、私とは逆の見解を示している。「言語 (lengua) は民族 (pueblo) の名称によって名づけられると反論するむきもあるかもしれないが、常にそうであるとは確言できない。また、起源的に言えば、言語は民族の名で示されるのではなく、その逆である」(Coseriu, E., *Sincronia, diacronia, e historia*, Montevideo 1958, pp.12-13, 注 27)。だが、この脆弱な立論は数々の事例によって反論される。たとえば、ある種のドイツ語が、それが他のドイツ語とは異なるものとして *jüdisch* (のち一九世紀末になって *Jiddisch* と表記されるようになる) の名を帯びるのは、その話し手が *Jude* (ユダヤ人) だったからである。同様にモンゴル語の一方言がブリヤート語と呼ばれるのは、その話し手がブリヤート人だからであって、イディシュとかブリヤートとかの方言の名称がさきにあったのではない。

(2) ここで *Nationalsprache* を国語もしくは国家語と訳すのは、簡便のためとはいえ、思いきった短絡を含んでいることを念頭に置いておかねばならない。いまかりに、このナツィオンということばが、独、仏、伊、レト・ロマン語を母語とするそれぞれの民族 (ナツィオン) を指すものとすれば、この語は「民族語」とも訳せる。しかし、民族とその言語は、国家権力の承認を待たずして、あるいは、国家権力にさきだって存在するのであるから、一九三八年に、突如としてスイスの中に第四の民族とその民族語が出現すると考えるのは民族の定義に反している。だから、第四の言語が、国家権力の承認を経て、あらためて憲法の中に明記されたということは、それがまさしく国家の言語という性質を帯びていることを示している。それにもかかわらず、「国家の言語」を誤解の余地なく伝え得る、たとえば *Staatssprache* を避けて、*Nationalsprache* をとったことから生ずる混乱と奇妙さを、デーシイは次のように引用符を用いて浮きだたせている。Allerdings in der Schweiz Deutsch, Französisch, Italienisch und Romansch gleichermaßen als "Nationalsprachen" auf Staatsebene. (とにかくスイスでは、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レト・ロマン語は同等に、国家

レベルにおける民族語として用いられている。) とにかく、ナツィオンということばに含まれる文化性と政治性との境界の不分明さは、日本語における「コクゴ」と同様の効果を発揮している。国家語と公用語との二重構造は、レト・ロマン語を公用語ではないままに国家語としてしまったことであり、この二重構造を生じさせない唯一の矛盾のない方法は、レト・ロマン語を同時に「公用語」としてしまうことであった。その時、「公用語」という概念そのものの需要は消滅するであろうから。

(3) Jura — Die Rebellen der Freiberge, in Elsaß : *Kolonie in Europa*, Berlin 1976 ; Schwander, M., Das Juraproblem in der Schweiz, in *Tintenfisch* 10, Berlin 1976.

(4) Décsy, G., *Die linguistische Struktur Europas*, Wiesbaden 1973, S. 159.

(5) Meillet, A., *La méthode comparative en linguistique historique*, Paris 1954, p. 20.

(6) Sommerfelt, A., Les questions linguistiques et la paix, *Word*, vol. 1, Nr. 1, 1945. なお田中『言語の思想——国家と民族のことば』三六ページ以下を参照。

(7) *Hugo Schuchardt-Brevier*, Halle 2 1928, S. 347.

(8) 同、三四八ページ。

(9) 田中前掲書、九八ページおよび本書一八七ページ参照。

(10) Калтахчан, С. Т., Ленинизм о сущности нации и пути образования интернациональной общности людей, Москва 1976, стр. 405.

(11) 同、一七八ページ。

(12) 『プラウダ』一九五〇・七・四。

(13) Калтахчан 前掲書、一七八ページ。

(14) 同、一七九ページ。

(15) 同、四〇五ページ。

(16) 同、四〇四ページより引用

(17) Naarmann, H., *Soziologie und Politik der Sprachen Europas*, München 1975, S. 136 ff.

(18) 全集第二四卷 (第四版)、三八七ページ。

(19) Калтахчан 前掲書、四〇四ページ。

(20) 田中前掲書、一六六ページ以下参照。

(21) Veiter, T., Volkstod durch Unterwanderung, *Europa Ethnica* I/1958.

(22) Селищев, А. М., Язык революционной эпохи, Москва 1928.

(23) Veiter 前掲論文。

(24) Mühlmann, W., *Rassen, Ethnien, Kulturen*, Neuwied und Berlin 1964, SS. 43-44.

(25) Бромлей, Ю. В., Этнос и этнография, Москва 1973, стр.22.

(26) Shirokogoroff, S. M., *Ethnological and Linguistical Aspects of the Ural-Altai Hypothesis*, Peiping 1931, p.13.

(27) Чистов, К. В. Этническая общность, этническое сознание и некоторые проблемы духовной культуры, Советская Этнография, 1972/3.

(28) Бромлей 前掲書。

(29) Чистов 前掲論文、七八ページ。

(30) 同、八〇ページ。

(31) Советский народ — новая историческая общность людей, Москва 1975. は、このスロ

ーガンをそのまま表題にした論文集である。言語に関係した部分を執筆している L・I・イサエフは、国際人工語を論じた別の論文集 Проблемы интерлингвистики, Москва 1976.では、ソ連のエスペランチスト、ボカレフの見解をかりて、人工語と天然語との本質的な区別はないと述べている。つまり、あらゆる歴史的言語は多かれ少なかれ人工語であって、問題は程度の差でしかないという。この論を進めて行くと、別の重大な問題につきあたるのであるが、ここでは、この観点が、ソビエト族際語として、人工語の採用の可能性を原理としては含んでいることを意味している。

(32) 『朝日ジャーナル』一九七六・七・一六。

(33) Haarmann, H., *Die Sprachen Frankreichs. Soziologische und politische Aspekte ihrer Entwicklung*, *Festschrift Wilhelm Giese*, Hamburg 1972, S. 322.

(34) 同、三二三ページ。

(35) Balibar, R., Laporte, D., *Le français national*, Paris 1974, p. 32.

(36) 「ナショナリズムの展開」『桑原武夫全集 2』四六四ページ。

(37) Balibar, R., Laporte, D. 前掲書、七〇ページ。

(38) Базисев, А. Т., Исаев, М. И., Язык и нация, Москва 1973, стр. 114.

(39) W・A・グロータース『日本の方言地理学のために』平凡社、一九七六年刊、二二三ページより引用。

(40) Balibar, R., Laporte, D. 前掲書。

## 第四章 ソビエト・エトノス科学の挑戦と挫折

### 1 過渡から解体へ? —はじめに

ソビエト連邦という、二〇世紀最大の現象、絶えざる注視のまどであり続けた巨大な政治体が、かつてない危機に見舞われている。それは、人題史のすべての過程を展望におさめた上で、計画的に組織された国家であった。それが掲げたさまざまな課題の中でも、この、他に例を見ない多様なエトノス単位——民族や民族的集団——の固有性を保障しながら、しかも統合に導くという課題のために、政治的・実践的にだけでなく、理論的・科学論的にも多大のエネルギーが投入された。その結果ソビエトの学問全体の中で、エトノスにかかわる諸科学——人類学、民族学、言語学には、特別の注意が払われ、高い威信を帯びることになった。いったい、最高の権力の地位にある政治家が、言語と民族についての抽象的な議論に介入してくるというようなことが、他のどの国において生じたであろうか。

諸民族の統合は、一九七七年のブレジネフ憲法において、高度な段階に到達したと明記された。そこでは「人類の新しい歴史的共同体——ソビエト人（ナロード）」が成立したと言明されている。ところが、憲法が、「ソビエト人」の成立を宣言したそのさ中に、連邦を抑圧だと感じる諸民族からの抵抗が伝えはじめられた。ペレストロイカは、それを一挙に表面化させた。こうしてソビエト連邦は、解体を予兆する相次ぐ要求の前に立ちつくすことになったのである。

革命の初期、レーニンはエンゲルスにならって、連邦制は、単一の中央集権国家に到達するための過渡的な段階でしかない、くりかえし強調したが、この過渡は、ついに過渡のまま解体へ移るのだろうか。

民族の自決と統合、連邦制と中央集権国家への願望——こうした拮抗しあう政治目標の中で、エトノスをめぐる政治と学問がどのような使命をみずからに課していたかを今こそふりかえってみる必要があるだろう。エトノスという、人間の基本的な存在様式そのものへの問いかけが、ほかでもない、ソビエト連邦という場で、二〇世紀のほとんどの時間をかけて深められてきたからである。

### 2 超国家としての連邦

ソビエト国家の性格を知る手はじめに、単純なことがらだが、まずこの慣れ親しんだ国名のことから考えてみたい。

現存する、世界中の国家のほとんどすべては、自らの国を呼ぶ名として、その国の基幹民族の名、あるいはその民族の起源や歴史と深くかかわる土地の名を用いるのが常である。そのばあい、地名もまた深く民族（エトノス）化されている。すなわち、現在のところ、国家はエトノス単位そのものか、あるいはその拡大したものとしてとらえられている。

もちろん、アメリカ、カナダ、オーストラリアのような、移住や植民によって生じた新しい国家は、特定のエトニズムを土台にはしていないが、これらの名称もまた、擬似民族化の過程を歩んでいると言えるだろう。

こうした視点がどのような問題を提起するか、その意外な広さを知るために、たとえば中華人民共和国という名称の奇異さに気づいておく必要がある。漢字を用いない言語では、この国の名を決して「セントラル・フラワー」などとはせず、シナとかキタイとかのエ

スニックな固有名詞を用いて翻訳する。それぞれに、「秦」とか「契丹」に由来する名称を用いるのであるが、そうするとかえって、たちまちに漢族以外の民族の存在が浮かび上がってくるのである。

こうした、エスニックな、あるいは擬似エスニックな呼称を断乎として拒否し、特定の民族、特定の名によらない、完全に脱エスニックな名称を、はじめて採用したのがソビエト連邦である。すなわち、プロレタリアートという普遍的な階級概念によって、民族の差異は克服しなければならないという理想をたかくかかげたのが、ソビエト連邦という、空前絶後の超国家であった。

ロシア帝国をおそったのは、社会主義という普遍思想ではあったが、そこは「諸民族の牢獄」と呼ばれる、世界でも最も多種多様な諸民族を含み込んだ領域であったため、同時に、ヨーロッパの全土をおおい、そこから押し寄せてくる「民族自決」の波の直撃を受けることになった。ロシアの革命において強調されなければならないのは、西から押し寄せてきた、一つづきの「民族自決」のうねりの東端をなしていたということである。すなわち、ソビエト連邦とは、同じく一九世紀に生じ、相たずさえて世界をおおった二つの解放運動——社会主義とナショナリズムという相矛盾する政治目的を同時に引き受け、両立させねばならなかった、そのような舞台であった。スターリンには、この矛盾の板ばさみを悩み、まことに率直に真情を吐露したことばがある。いわく、「一方にはマルクス主義者の義務があり、他方には種々の階級から成る民族の権利がある」と（一九一三年「マルクス主義と民族問題」。強調は原文の通り）。

ソ連邦とは、エトノスの問題を中心にすえ、一九世紀から引きついだ文化理論と政治理論の整合性をはかりながら編み上げられた一つの巨大なテキストであった。このテキストを読むためには、眼前に生起する時事の問題を追うにとどまらず、理論史のドラマを味わうような深いかまえが必要となろう。本稿では、そのための、いくつかの予備的キーワードに注目することにしよう。

### 3 「民族自決」の脅威

「民族自決」権の主張は、社会主義の本質部分に深く突きささったとげであった。しかし、社会主義はこのとげを抜けば、社会主義そのものの運動基盤を失いかねなかった、そのような関係に両者はあった。それはまた、一九世紀後半期のヨーロッパの、最も特徴的な相を示す政治表現であった。このことを特に強調しなければならないわけは、その前の世紀のフランス革命と比較すればよくわかる。そこでは革命の担い手には、「民族自決」という着想すらなく、内容の点でこの語にあたるセパラチスム（分離主義）は、反革命を示す非難の用語であった。フランス革命は国民（ナシオン）の成立を求めたものであって、フランス民族以外のエトノス要素はすべてナシオンの名のもとにかき消されるべきものであったから、それらの自立などは問題にもならなかったのである。したがって、ロシア革命の風俗は多くの点でフランス革命をモデルとして学び、革命期のロシア語の語彙の面にもそれが反映したという、セリシチェフの興味深い指摘がある（『革命期の言語』一九二八年）。

ところが「民族自決」にかぎってはそうは行かなかった。「民族自決」は決して先進地帯のイデオロギーではなく、後進地帯のドイツ語圏からやってきた。ちなみにプチ・ロベ

ール辞典によると、政治学的意味での *autodétermination* という語の用例は、やっと一九五五年になって登場するということだ。もちろん、一語に熟さぬ *le droit des peuples à disposer d'eux-mêmes* (諸民族が自ら処する権利) というような、まわりくどい言い方はあったかもしれないが、くり返し訴えられる政治スローガンに結晶するには至らなかった。

フランス革命が無視するか圧殺した民族問題は、よりおくれて出発したドイツとスラブ人のもとに登場し、*Selbstbestimmung* という言語表現として定着した。ディレクタント趣味のためではなく、政治概念としてのこの語の出現を、手近かなところで調べてみると、まずグリムの辞典は一八五九年の用例を登録しており、また『シュターツ・レキシコン』は、一八六七年のオーストリア基本法に現われたのが、国家機関の法規定として実際に用いられた最初であるとしている。くり返していえば、民族自決権は、一九世紀後半以来、多民族国において、その国家の基盤をゆさぶりつづけてきた危険な着想だったのである。

ロシアのマルクシストとしては、たとえばスターリンが、一九一三年にウィーンで書きあげた論文の中でこの語を用い、一九一四年にはレーニンが「民族自決権について」と、この語を題名にした論文を発表した。かれらが当時用い、そのままロシア語に定着して今日に至った *самоопределение* (サモ・オブレデレーニエ) はドイツ語そのままの翻訳である。

レーニンがこの著作の中で、一八九六年のインターナショナル・ロンドン大会の、ドイツ語による公式報告書から引用しつつ、この問題を論じてくれたことは、このロシア語の語彙史を研究する上で大変有益な手がかりになる。かれは *Selbstbestimmungsrecht* というドイツ語を紹介し、そのロシア語訳が「自治」となっているのは「誤訳」だと、読者の注意を喚起しているのである。

では、「自治」とは異なる「自決」を、かれらはどう理解していたのだろうか。たとえばレーニンは、「ある民族が、他民族の集合体から国家的に分離することを意味しており」、この「分離の自由、独立民族国家形成の自由より以上に、そのようなものとしてのもっと大きい自由があるだろうか」(一九一四年)と述べ、スターリンもまた、「民族にとって自決権とは、完全に分離する権利である」(一九一三年)と、ごまかしなく理解している。

ところがかれらは、理論上でも戦術においても、民族自決権に絶対的な価値を与えてはいない。レーニンは、この同じ論文の中で、「労働問題とくらべれば、民族主義は従属的意義しかもたないことは、マルクス主義にとっては疑問の余地がない」と述べ、スターリンはソビエト連邦が実現した後、もっとはっきりと、「自決権は労働者階級が自分の独裁の権利を実現するのに妨げとなることはできないし、またそうなるはならない。前者は後者にゆずらなければならない」(一九二三年「第十二回党大会における報告」)と述べた。ソビエト連邦は、「諸民族の牢獄」の囚人たちを解放するどころか、ロシア帝国の遺産を一つたりともとりこぼすことなく、かえって牢獄の扉を固く閉ざしただけではない。一九四〇年には、バルト三国、ルーマニアのベッサラビアなどを暴力的に獲得し、牢獄をいっそう拡げたことはよく知られた事実である。

このように、自決は現実には全く許されなかったにもかかわらず、一九二四年、三六年、七七年のすべての憲法を通じて、「連邦からの自由な脱退権」は常に保障され、維持されているのである。ソ連邦は、少なくとも憲法の上で一九世紀末の、東・中欧的ロマンチズムをそのまま維持したのである。

#### 4 やむを得ずの連邦制

諸民族に自決権を与え、なおかつ分離へと向かわせないための窮余の策は、連邦制による統合であった。しかしレーニンは連邦制をとることを一貫して否認してきた。たとえば、「我々は無条件に中央集権化に賛成であり、連邦的關係という素町人〔俗物〕的な理想に反対である」（一九一四年）と述べ、一九一七年の『国家と革命』では、「アナーキストの小ブルジョア的見解からは、原理的に連邦主義が出てくる。マルクスは中央集権主義者である」と、始祖のさし示した教条を掲げて、自説の根拠とした。

それでは連邦制があり得るとすれば、どのようなばあいなのか。『国家と革命』は次のように言う。「マルクスもそうであるが、エンゲルスは、プロレタリアートとプロレタリア革命の見地から、民主主義的中央集権制、単一不可分の共和国を主張している。かれは連邦制を例外で発展の障害物であるか、さもなければ君主制から中央集権的共和制への過渡であると見ている。」

こうした主張の下敷きになったのは、一八九一年のドイツ社会民主党綱領草案、いわゆるエルフルト綱領草案に加えたエンゲルスの批判文である。そこにはこう書かれている。「プロレタリアートが用いることができるのは、単一不可分の共和国の形態だけである。……小国スイスでは、それはすでに久しい以前から障害物になっている。……だいたい我々の『連邦国家』そのものが、すでに統一国家への過渡なのである」と。引用にあたっては傍点を附しておいた。このようにすると、レーニンがエンゲルスから重要なキーワードをすべてとり込んだことがよくわかるからである。私たちが知らねばならないのは、プロイセンという全く異なった状況における発言を、イスラムや仏教徒すらもかかえたロシア帝国の版図にそのまま引きうつそうとしたことだ。

しかしこのまったく独創性を欠く教条の写しとりにもかかわらず、ロシアの地に現実に実現を見たのは連邦制であった。それは、「民族自決」権を背景にした、強い圧力のもたらした結果である。一九一八年には、ウクライナ、モルダビア、白ロシア、ザカフカスが相ついで独立を宣言し、二〇年に入ると、ブハラ、ホレズムなど、今日では消滅した人民共和国が誕生した。これら、分離のきざしを見せた独立国家をその自決権にふれることなく統合し得る唯一の方法は連邦制でしかなかった。

民族自決権を保障する理論上の根拠は、レーニンもふれている、例の一八九六年のインターナショナル・ロンドン大会の、「あらゆる民族の完全な自決権を支持する」という決定であった。この決定の影響力は絶大であった。すなわち、その二年後に開かれた第一回党大会に引きつがれ、それは遂にソビエト連邦成立後の第十二回党大会のスターリン報告で確認されて、不動の原則になったのである。それは、エンゲルスの示した原則からすれば許されてはならないはずの、連邦からの自由な脱退権が保障された宗主国家を構成単位とし、その自由意志による加盟が、ソビエト連邦の組織原理となった。現実には全く無意味になったこの原理は、レーニンのことば通り、「過渡」のものとして清算されるべきであったにもかかわらず、現行憲法に至るまで維持されたのである。

ロシアのマルクス主義者たちは、すでに見たように、その始祖たちの教条を想起し、それから逸脱しないように注意を払ってきた。しかし少なくとも民族問題に関しては、教条に求めても求めることができず、自前の工夫が必要になった。その際何よりも頼りになっ

たのは、多民族のオーストリアのマルクス主義者たちの経験と、かれらとの論争の中でくつきりと姿をあらわしてきた、カウツキーの民族、言語論であった。レーニンがノートをとりながらカウツキーに学び、それをそっくり受け入れたことはここではくり返すまい。

おそらくレーニンにカウツキーを教えたのはスターリンであったにちがいない。かれは、レーニンが通りいっぺんで放置しておいたこのテーマについて、一九一三年、ウィーン亡命中に、おそらくかつてマルクス主義者によって書かれた、最も質のいい民族論を書いた。しかもスターリンは、オーストリアの社会主義者やカウツキーを乗り越えようと試みた。かれには、ヨーロッパ製の民族論だけではどうにもならないということが、十分に気づかれていた。

一九二一年の「民族問題の提起によせて」には、スターリンのこうした考えがかなりあらわに表われている。

もっとも粗野な残酷な形で民族的圧迫をうけている数千万、数億のアジアとアフリカの諸民族は、いつも「社会主義者」の視野のそとに取り残されていた。白人と黒人、「非文化的」ニグロと「文明化された」アイルランド人、「おくれた」ヒンドゥー人と「開化した」ポーランド人、——これらの民族を同列におく決心がつきかねたのである。

スターリンはこのような社会主義者を「お上品な社会主義者」と呼んでいるが、ここには、アジア・アフリカに向って呼びかける、かれの自負と抱負があらわれている。マルクシズムの民族論（そのようなものがあるとして）が、ヨーロッパを出て、はじめてアジアで論じられなければならないという、ソビエト連邦固有のたちばをかれは表明したのである。かれの自負と抱負は、第十二回党大会で、よりいっそう高らかに歌いあげられた。

全東方はわが共和国同盟を実験農場と見ている。われわれがこの同盟のわく内で民族問題を実践的に正しく解決するかどうかと……

そのときには、全東方は、わが連邦こそ彼らの解放の旗じるしであり、その例にならわなければならない前衛部隊であることを見てとるであろう。そして、それは世界帝国主義の崩壊の発端になるであろう。それとも、われわれが誤りをおかして、かつての被圧迫民族がロシアのプロレタリアートに寄せていた信頼をそこない、共和国同盟から、それが東方にたいしてもっている魅力を取り去ってしまうか、——そのときには、帝国主義が勝ち、われわれは負けるであろう。ここに民族問題の国際的意義がある。（ロシア共産党第十二回大会における報告）

ソ連邦における社会主義が、被抑圧民族に対して高い威信を維持しつづけていた時代があるとすれば、それは当時のソ連の指導者たちのこうした発言に期待と信頼が寄せられていたからである。それは第二次大戦が近づくとともに、様相を一変してしまうのであるが。

## 5 エトノス論のはじまり

ソ連邦における民族問題、そのいわば派生としての国家組織の立案などが、マルクス主義の古典を常に注意深く参照されながら行われていることを上に見てきた。一層興味をそそられるのは、生物学、遺伝学、言語学といった基礎的な学問領域までが一元的な整合性、体系性を保つように努められたことである。整合性はそれ自体としての学問領域にと

どまらず、政策理論との整合性もくずしてはならなかった。

このような観点からすると、民族、したがって国家の問題に深くかかわる「エトノス」の概念の「マルクス主義的」な解明が、ソビエト科学の最大の課題にならなければならぬのは当然のことであった。

私はここまで、ソ連邦の学界で用いられている、ギリシャ語からの転用である「エトノス」というそのままの形を用いてきた。エトノスとは〇〇民族を、〇〇民族たらしめている、あるいは〇〇族が〇〇族からそれによって区別されるものにして目じるしの内容のことを指すと言っていた方がいいと思う。一九六〇年まで、ナロード（民族）、ナロードノスチ（準民族）、ナーツィアなどの概念についてくり返し論じられたあとで、これらの語が帯びている政治的な外被をはぎとって、最後に残ったのがこのエトノスという概念であった。エトノスはいかに形成されるのか、それは歴史的概念か、普遍的概念であるかと、さかんに論じられるようになったのは一九六〇年代からである。一九七〇年代のエトノス論を担った Yu・V・ブロムレイは、ロシアの学問の伝統の中でこの語を用いた人としては、亡命したツングース学者のシロコゴロフにさかのぼっている。

エトノスがかりに不変の質を表わすものだとすれば、マルクス主義にとってはすこぶるぐあいが悪い。それが生物的な要因を含んでいると解釈されれば、人種主義に道を開く、一層危険な反動思想とされるであろう。生物的な質をもち出すことは、血に結びつく神秘主義の温床になるからである。だからこそカウツキーは、オーストリアのマルクス主義者 O・バウアーのかなり生物種的なものにする「民族的性格」を排し、「言語」をはじめとする、よりマテリアルな要素にもとづく説明に置きかえたのである。これはレーニンにとってもスターリンにとっても民族論の迷路から脱出するための救いだった。

ブロムレイは七〇年代には、エトノスの社会的側面を強調しながら、おずおずとこの語を持ち出した。それと同時に東アジア、中央アジアの古代民族について、いくつもの博学なモノグラフを書いていた L・N・グミリョフが、大胆極まりない方法で、エトノスが社会的現象であることを否定し、生物的な側面を前に押し出してきた。タブーを犯したかれの主著は八九年になってはじめて公刊された。この年の暮、私はたまたまウランバートルに滞在していたが、モンゴルの民族学者が、私を前にして、熱に浮かされたようにグミリョフへの帰依を吐露したあの姿を今も忘れることができない。

「封建制のもとであれ、資本主義のもとであれ、フランス人はフランス人だ」といった印象ぶかいことばをまじえながら人々をとらえるかれのエトノス論は、ペレストロイカがはじまって、はじめて陽の目を見ることができるようになった。レーニンの指示したスローガン、諸民族の「接近と融合」は、それを迫られる側の少数者にとっては、かれらをおそるべき喪失と同化へとかりたてることであったが、グミリョフはいまや理論的にそれを取り去ったのである。グミリョフは、ときおりマルクスの著作についての教養も示しながら、多方面にわたる知識によって読者を圧倒する。しかしいまは、こうした異端者ではなく、三〇年代の正統の流れにもどらなければならない。

## 6 すべては『アンティ・デューリング論』から

スターリン時代の科学が、単に権力者の恣意のままに、無原則に操作されたと思うのは正しくない。異なる領域で、異なる対象が研究されていても、それらは共通の願望と方向

性でつらぬかれていた。今日では、そのいずれもが、科学的な検証に耐えられない、荒唐無稽なものだったとされる、三つの典型例を見ると、そのことがよくわかる。

まず、「獲得形質は遺伝する」として、遺伝子の概念そのものを否定したルイセンコである。この理論は第一に、生物進化の過程における属から属へ、種から種への転換が可能だとする主張の上に立っている。この理論のより重要な実践上の意味は、人種概念が相対的なものであることを示すにあった。遺伝学における理論構築は、言語学の領域においても、それに呼応する対応物を必要とした。

人種概念と、言語系統論とがいかに深い関係にあるか、相互がたがいに依存しあい、補強しあっているさまは、我が国でも翻訳された、L・ポリャコフの『アーリア神話』（法政大学出版局）が、その学説史的背景を明晰に述べている。一九世紀の比較言語学は、人類学——当時の用語に即して人種学と言うべきだろう——よりも、はるかに高い精度で「純粋な人種」という概念を公準化した（フィルヒョウ）のである。

ヒトラーのアーリア人種の純血概念にもとづく反ユダヤ主義をささえたのは、純粋言語のモデルから出発したインド・ヨーロッパ語比較言語学であった。悪名高いマルの言語理論は、言語の純粋性を否定し、したがって言語におけるエトノス性を否定し、言語と人種との関係を断ち切ろうとしたものであった。言語が帯びるエトノス性を否定するためにマルが導入したのは、言語の階級性であった。言語の純粋性神話に挑戦し、あらゆる言語は交叉しあうことによって生じた雑種であるとしたマルの理論は、最近になって持てはやされているクレオール学の、一九三〇年代の早いさきがけであった。

この二人の名前ほどには日本では有名にならなかったが、ソビエト科学の理論構築のパターンの特徴をよく示しているものとして、レペシンスカヤの生命物質論をあげておかねばならない。それは卵黄のような蛋白質の中から細胞が「自然発生」することを実験的に証明したとするものであり、生物と無生物との境界線をとりはずす決定的な一歩であった。

ルイセンコ、マルのいずれにおいても、種と種の間、したがって人種間はもちろん、たがいに「系統」を異にする言語間にある越えがたい障壁を打ち破ろうとしたものであることは明らかである。

しかしレペシンスカヤは、他にぬきんでて、マルクス主義を、もっと具体的に言えばエンゲルスを、生命理論の中に、そのまま移し入れようとした、その直訳性においてきわだっている。

こうした理論の祖述や解説は戦後十数年間ほどの日本をも大いににぎわせ、数多くの著作があらわれたので、これ以上はたち入らないが、次のことだけは指摘しておく必要がある。それは、このようなアイディアの一般的モデルのほとんどすべては、エンゲルスの『アンティ・デューリング論』から出ているということだ。「生命とは蛋白質の存在様式である。」「生命が見いだされるところではどこでも、それが何らかの蛋白体に結びついていることが見いだされる。」そこで、「われわれに知られている最下等の生物はまさに単純な蛋白小塊にほかならぬものであって、それらはすでにあらゆる本質的な生命現象を示している」といったような、『アンティ・デューリング論』の一節を思い起すだけで充分である。

## 7 スターリンにおける「言語」と「東方」

レペシンスカヤには、一九四九年、スターリン賞の生物部門第一等が授与された。しかし、極めて奇妙なことだが、その翌年の五〇年には、こうしたカテゴリー間の乗りこえを企てた研究の極めて重要な支柱となっていたマルの言語学説を、スターリン自身が身をのり出して全否定してしまったのである。私はこれを一九三〇年代からスターリンが励まして育成してきたソビエト製の個性的な理論に、自らの手でとどめをさした、スターリンの敗北宣言だと見ている。言語を分けるのは階級ではなく民族であり、したがって言語の親縁関係＝系統論を扱う研究は正しいとしたのであるから。ソビエトの科学はこれによって自らの目標を失ってしまったのである。スターリンは他の研究部門ではこのような手続きをとることなく世を去ったが、マルの学説の否定は、かれの最後で最大の贈り物であり、イデオロギーのしばりからの解放の鐘の音であった。ソ連邦の理論史の流れから言えば、この時すでに、ペレストロイカの端緒は用意されたのである。パンフレットにしてわずか五十数ページのこの短い論文のために、いくつもの研究部門から代表が参加して学術的な討論会が行われた。特に、日本語にも翻訳された東ドイツでの大がかりな理論会議は、突然のスターリンの論文にとまどう科学者たちの動揺がいかに大きかったかをよく示している。

マルが生物学の「種」のアナロジーの流用だとして否定しようとした語族の概念、それを前提にした印欧語比較言語学の体系は、最近になってクレオール学からのラジカルな挑戦を受けるに至っているが、その際、クレオール語研究の古典期を作ったものとして常に回顧されるフーゴー・シューハルトは、世界中の正統学問から完全に無視されたマルにとって、たよりとす唯一の例外であった。

マルが扱ったテーマの中で、最も大衆性を得たのは、社会主義の未来の言語はどうなるのかという問題であった。スターリンもまたくり返しこの問題にふれている。「封建的・坊主的・官僚的なオーストリア」でこそ「いっさいの社会的、政治的生活が、言語をめぐるあさましい、くだらないいさかいでとどまっている」（一九一三年『『文化的=民族』自治制について』）として、言語問題に周辺の意味しか与えなかったレーニンにたいして、スターリンは、かれの政治生活の最初から最後まで、言語をめぐる問題に一通りでない、深い執着を示しつづけた。

言語と民族の現状と未来についてのスターリンの態度は、興味深い軌跡を示している。とりわけ一九二五年五月十八日の、クートヴー—「東方勤労者共産主義大学」の学生集会の演説は、注目すべき内容のものである。それは、カウツキーが、社会主義時代に入れば、一つだけの人類共通言語が生き残り、他の言語は消滅するだろうと述べたのに対し、スターリンは、ロシアにおける社会主義革命は逆に「言語の数を減らさずに増加させている」と述べているからである。なぜなら、「いままで知られていなかったか、あるいはほとんど知られていなかった新しい民族をよみがえらせたからである」と。のちにカール・ドイチュが、ヨーロッパ規模での具体的な数字をあげながら、一九世紀から現代までに、いかに多くの言語が生まれたかを指摘した、一九四二年の有名な論文があるが、みずから言語の数を増やした、当事者スターリンの発言として興味ぶかい。

しかし、多言語状態は解放のしるしであると、言語の数の増大を手ばなしで誇示できる状態は、あまり永くは続かなかった。一九二九年の「民族主義とレーニン主義」では、特に「民族の将来と民族語の将来」の項目を設け、かつてのクートヴーでの演説で示した見解

の補完として、「民族の融合と単一共用語の形成」について述べている。それぞれの民族語とならんで、単一の共通の族際語（日本語訳では「国際語」となっているがこれは正しくない）とが並存するようになるであろうと。

スターリンはこの同じ論文の中で、くり返し「大ロシア・ショーヴィニズム」を排撃している。このことからみて、単一の族際語として、既成のどれかの民族語、たとえばロシア語を念頭に置いていたとは思われない。具体的な「単一の族際語」として、スターリンはエスペラント語を考えていた可能性が最も高い。というのは、当時のスターリンは、同じグルジア出身のマルの強い影響下にあったからである。

一九二八年、ソ連のエスペランチスト、ドレーゼンは「全世界共用語のために」と題する書物を出版したが、マルはそれに序文を寄せて、言語は自然に属さず、社会に属する以上、原理として自然物ではなく人工のものであるという持論から、エスペラント語の正当性を擁護したのである。十年を経ずして、容赦のない弾圧にさらされるエスペラント語は、マルの支持を得ることによって、スターリンにもいくぶん積極的に迎え入れられていた時代があったのである。

次の年、一九三〇年の第十六回党大会におけるスターリンの報告は、特定のエトノス言語だけに共用語という特権的な位置を与えることを排した、理想主義をしっかりと保持している。それは、まず一国におけるプロレタリアートの勝利のもとで、諸民族の文化（とその諸言語）が開花する。次いで全世界規模における社会主義の勝利の時期に入ると共に、それらは消滅し、一つの共通の社会主義文化（と一つの共通の言語）へと融合するであろうとするものだ。これはマルの言語論の応用である。ただしマルが全人類史の数万年という時間の中で考えたことを、スターリンは比較的近い未来の、短い時間の中にちぢめて押し込んだのである。当時、正統派言語学が、あり得ない暴論だとして一笑に付したのは、ほかでもない、言語の融合——異なる言語がまじりあう——という考えかたであった。しかし世はうつりかわり、いまや「クレオール化」の概念のもとに、英語、フランス語をはじめ、すべての言語は混成的起源をもつと考えられるようになった。したがって、この、よりモダンな流行のことばを用いれば、全世界的規模の普遍的な社会主義は、諸言語の全地球的なクレオール化をひきおこすだろうと述べたことになる。

スターリンは、マルを全否定した一九五〇年の文章においても、カウツキーやレーニンが考えた、英語、ロシア語などの特定のエトノス言語が「一つの共通の国際語」になるとは言わなかった。そのような単一国際語は、ドイツ語、ロシア語、英語というような既成の言語ではないと断言している。この点だけはマルの混成言語論を維持しつづけたのである。

## 8 「ソビエト人」論の水面下で

スターリンの死後三年目に、その権威のすべてが剥ぎとられたために生じた理論的空白を埋めるものは、レーニンしかなかった。レーニンの著作には一九一三年頃から、諸民族の「接近と融合」ということばが登場する。「社会主義革命と民族自決権」からとり出された、「社会主義の目的は、小国家への人類の細分状態をなくし、諸民族のいっさいの孤立性をなくし、諸民族の接近をはかるばかりでなく、さらに諸民族を融合することでもある」という、まことに古めかしい、同化主義的な一句が議論の出発点に置かれたのである。

「接近と融合」のこのスローガンをさまざまにパラフレイズしてふくらませ、その根拠づけを行うことによって、一九六〇―七〇年代の民族・言語論を担った代表的人物はカルタハチャンであった。かれが一九七三年に出版した「レーニンの民族理論とその偽造者」は、一九七六年に、東ドイツで独訳された。その第四章は、第二四回党大会（一九七一年）でブレジネフが示した、「人類の新しい歴史的共同体――ソビエト人」の形成という目標をそのまま題名にしている。紙の上だけでみると、一九七〇年代、ペレストロイカの前夜の時期には脱エトノスの新人類――「ソビエト人」、あるいは「ソビエト族」がまさに到来しそうな気配がただよった。それは七七年に発表されることになるブレジネフ憲法のための下準備であり、また他方では憲法の中に「ソビエト族」の確認をすることによって、このスローガンの理論的な定着をいっそう強化するねらいがあったにちがいない。

七七年憲法の前文には、「人類の新しい歴史的な共同体――ソビエト人が形成された」と明記され、また第三六条には、「ソ連邦のすべての民族と少数民族（ナロードノスチ）の接近」政策によって、諸民族の同権が保障されると述べられている。これらのことは、スターリン時代にソ連が経験した、緊張に満ちた理論上の試練を、スターリンの名とともに歴史の記憶から根こそぎ消去しようとする努力の一つであった。それはまた、一九一〇年代の、ほとんど無内容で凡庸なレーニンの民族論を、そのまま一九七〇年代へとつなげることを意味した。だが、この政治理論としては不毛な無風状態が支配していたその水面下では、強制移住させられたクリミヤ・タタール、チェチェン＝イングシなどの故郷復帰運動、カザフにおける反ロシア蜂起など、エトノスに起因する緊張がたかまっていた。そうしてまさにこの時期に、知的な世界では、ブロムレイ、グミリョフなどのエトノスについての思索が深められていたのである。

そして遂にペレストロイカは、脱エトノスの「ソビエト人」が文字の上でだけの、まったくの作りものであることを明らかにしたのであった。

## 9 ロシア革命におけるエトノス――むすび

ロシア革命は、西欧の社会主義者たちが予想もしなかった、多様なエトノスを含んだ地域に起きた。ロシアのマルクス主義者たちは、エトノス論に関するかぎり、極めて貧弱な、一九世紀マルクス主義の教条を守り、現実が求めるその都度、必要な解釈を加えて折りあいをつけなければならなかった。

ソビエト連邦は、上からおおいかぶさってくる、一九世紀ヨーロッパ的マルクス主義の教条と、現実のエトノスの解放の要求とのたたかいの場であった。いったいマルクス主義の始祖たちの誰が、イスラム教徒のみならず、仏教徒や、それどころかシャマン信徒までも相手にしなければならないと考えただろうか。

そこでは当然ながら教条からの数多くの逸脱が生じた。そもそも、この「連邦制」そのものが逸脱であった。ソビエト連邦、ソビエト文化、ソビエト科学の中に見出すべき固有の価値と独創は、むしろこの逸脱の方であったのである。

ソビエト科学は、ヨーロッパのマルクス主義が予想もできなかったエトノスの大海の中で、指針にもなりえない貧弱な教条の圧力のもと、社会主義的普遍主義対エトノスという、現代の未踏の問題に挑戦した。それは、政治的な無効宣言にもかかわらず、理論的な豊かさを失ってはいない。新しく芽生えつつあるエトノス論も、肯定的であれ否定的であれ、

この泉に蓋をおおってしまうことはないだろう。

教条はマルクス主義だけではなく、正統科学の方にもある。ソビエト科学を人々が期待の眼で見守ったのは、それが、新しい地平を切りひらくことによって正統の枠を破ってくれないだろうかと期待したからである。この方面での成果の検討は、十分にきわめられているとは言いがたいのである。

二〇世紀というわれわれの世紀をかざったソビエト連邦の成立と解体の過程は、他のばあいであれば、人類学者の研究室の中でしか話題にならないエトノスの問題が、かつてない巨大な時間と空間の中で、その人間存在にとっての意味を、さまざまな側面からあらわにして示すできごとであった。

### 1 ソビエト連邦とは何であったか

人類は異なる言語、異なる由来によってさまざまな民族にわかれ、さらに国家によってへだてられている。民族や国家の境界は、一方では固く閉ざされ、保持されようと望まれるが、他方では、それを乗り越えていこうとする、強い衝動につき動かされている。十九世紀以来、この境界の撤去を最も強く望んでいたのは、興味深いことに、拮抗しあう二つの勢力、すなわち資本主義と社会主義であった。資本主義は、いわゆる帝国主義というかたちをとって、経済的な後進地帯を植民地化することによって、その欲望を満たしてきた。社会主義の側もまた、経済的・政治的に抑圧された階層に革命を起こさせることによって、その勢力圏を拡げていった。これら敵対する二つの陣営がねらった地域はいずれも政治的にも経済的にも脆弱な後進地帯であった。

その際、資本主義は、その正当性を主張するためのこれといった論理や理想をかかげてのぞんだのではなかった。すくなくとも、かれらの教義を体系的に示すことはほとんどなかった。それに比べて社会主義は、じつに歴大な量の——今ふうに言う——ディスクールを生産し、蓄積したのである。二十世紀に入って、特に入念に仕上げられたのが、ソビエト連邦による、ソビエト連邦のためのものであった。

いま特に、「二十世紀に入って」とことわりをつけたわけは、ソビエト連邦の形成と維持に深くかかわったレーニンとスターリンがソ連邦特有の重要問題として強調した「民族自決」の権利は、十九世紀のマルクス主義の始祖たち、とりわけエンゲルスにおいては、ほとんど関心が払われることなく、それを強調することは社会主義においては有害だとさえ考えられていたからである。ソ連邦の指導者たちは、マルクス主義の正統教義と、ロシアの現実との間に理論上のつじつまを合わせながら、革命後ほぼ七〇年目に、ついにほんものの「民族自決」を実現してしまったのである。ほかでもないソビエト連邦の解体というかたちで。連邦の解体は民族の解放であった。原因と結果のより正しい順序に従って言うならば、民族の解放のためには、連邦の解体が必要だった。ということは、民族にとって、この連邦は桎梏だったということになる。

しかしこういう議論をすすめるにあたって、人は、いったい民族の解放とは何かという、政治的というよりは、人間存在の本質についての観点から考えないわけにはいかないだろう。私はソビエト連邦という、数々の問題を提示した、我々の世紀の現象を、単に権力や政治の問題としてだけでなく、こうした関心を背景に持ちながら、考察を深めていくための足場を構築したいと考えている。

ソビエト連邦の解体を、今世紀最大のできごととしてあげることに、ほとんどの人は異存があるまい。もちろん解体の前に形成があり、それもまた、この同じ世紀のはじめに演じられたが、解体の方がより劇的であった。なぜなら、最も権威ある政治体として、ゆるぎない地位を保持していたかに見えたにもかかわらず、自らすすんで解体を宣言し、実際にそのための作業に乗り出したからである。こういう例は歴史の上に見出すことはできない。

もつとも、ゴルバチョフが、はじめ、ペレストロイカの施策を発表したとき、それが連

は十九世紀の、ロシア帝国とはまったく事情の異なる、西・中欧、とくにドイツで作りあげられたものであった。ソビエトの指導者たちは、マルクスとエンゲルスのこのドイツ製の理論を、アジアをも含む新しい舞台で適用したのだった。したがって、ソビエト連邦の真の意味を理解するには、ソビエトだけを切りはなして見ることはできず、十九世紀ヨーロッパの歴史イデオロギー、別のことばで言えば、その時代精神の総決算として見なければならぬだろう。

## 2 ヨーロッパ文明の担い手、マルクス主義

戦後の日本では、マルクス主義との関係において「民族問題」がとりあげられる機会が多かった。このばあいの民族問題とは、今日はやりの、いわゆるエスニックな問題ではなかった。むしろ、日本の占領者として現われたアメリカ、そのアメリカ文化との関係が意識にのぼっていたからであって、そのかぎりではナショナルな問題であった。そういう状況の中で、より客観的に、社会科学的に問題に対することができるようにと、マルクス主義の文献が頼りにされたのであろう。

その際のマルクス主義文献といえば、何よりもさきに、スターリンの「マルクス主義と民族問題」（一九一三年）と、レーニンの「民族自決権について」（一九一四年）が想い出された。いずれもソ連邦成立以前に書かれたこれらの文献は、かなりの量が刷られ、ひろく読まれたらしいが、読者はいったいそこから何を学びとったかは大いに問題である。これらの著作のうち、最も多く言及され、引用されたのが、スターリンの論文であって、そこには何よりも、民族の定義が示されていたので、そこから話を起こすことが大衆的な便宜であったからだ。

この定義は、一九五六年のいわゆるスターリン批判の後には、引用されることがまったくなくなったが、しかしそれはスターリンの名に言及しないという淳風美俗に従ったまでであって、内的必然の理由があったわけではない。当のソ連の学界においても、フルシチョフ時代以降、スターリンの定義にかわる、より科学的な定義を編み出すために、哲学、国家法学、歴史学、民族学、言語学の領域で大規模な討論がたたかわされた（このいきさつについては本書の第二章「ソ連邦における民族理論の展開」を参照のこと）。その結果、復権されて登場してきたのが、「民族（エスニック）意識」という、まことに観念論的な紋切り型の項目であった。ここでの評価すべき成果は、スターリンがまず最初にあげた「言語」の項目を、さらにこまかく検討して、「書きことばの所有」に特別の意味を与えたことであった。

スターリンの提示した定義は、オーストリアの社会主義者、オットー・バウアーを批判した、K・カウツキーにもとづいているものであった。レーニンは、いっそう強くカウツキーに密着している。数年後には、カウツキーに「背教者」のレッテルを貼りつけたレーニンとしては、ついでに民族問題でのカウツキーへの依拠もとりさげた方がよかったはずなのに、そうはしなかったのは、民族の概念を規定したマルクス主義者で、カウツキーを出る者が他にいなかったからである。

「マルクス主義と民族問題」というような題名を帯びた著作が数多く現われ、またそれがマルクス主義者によって論じられる機会があまりにも多かったため、人は、マルクス主義が民族の問題を解明し、解決するのに他にぬきんでて貢献したかのような印象を抱くよ

うになったかもしれないが、マルクス主義の始祖たちにおけるそのような貢献は皆無なのである。というのも、マルクス主義にとって民族は解消されるべきものでこそあれ、民族のアイデンティティーの確立などとは、歴史の発展に逆行するものと考えられていたからだ。

民族の問題を主として論じたのはマルクスではなくエンゲルスの方だった。民族の問題を考える際に、エンゲルスにとって基本的に重要なキーワードは、「文明 (Zivilisation)」と「発展 (Entwicklung あるいは Fortschritt)」と「歴史 (Geschichte)」であった。文明は低次の段階 (Stufe) から高次の段階へと発展していく。ところが諸民族は同じように一斉に同時にその段階をのぼるのではなくて、他の劣勢な民族よりも先に発展した民族だけが「歴史を担う」ことのできる民族であって、その民族のプロレタリアートは革命的である。このような民族は「歴史を所有する」民族であり、他方その発展からとり残されて、ばらばらの「断片」となった民族は、「歴史を担う能力」を欠いた、「歴史のない民族」である。このような「歴史なき民族」は、歴史ある民族に吸収されなければならない。そうすることによって、これらの民族の反動性が克服されるというのである (この問題については、良知力『向う岸からの世界史』未来社を参照)。

エンゲルスは、こうしたいわば民族論を、独立の論文として書いたのではない。それは、中・東欧の諸民族の動きについて折にふれて書いたものの中に現われるのであるが、とりわけ、一八四八年の革命の折に、『新ライン新聞』に発表された論評の中に注目すべきものが多い。たとえば次の文章を見よう。

固有の歴史を一度ももったことのない民族、最初の最も未開な文明段階を登りつめた瞬間に、もう異族の支配下に入ってしまったたり、あるいは異族のくびきのもとではじめて、文明らしき段階にむりやり引きずりこまれたといったような諸民族は生存能力をもたないし、決して独立なんかできないであろう。(下線部の強調は原文どおり。以下同様)

生存能力をもたないから、他民族の支配下ではじめてまともな文明民族になれる民族という概念は、抽象的に考えられているのではなく、具体的な事例から出発している。それはどんな民族だろうか。エンゲルスは続ける。「オーストリアのスラヴ諸族がこのようなばあいにあたり、チェコ人は歴史というものをもったことは一度もない」と。エンゲルスによれば、「歴史のない民族」は生存の権利がないのである。それを、「かつて歴史的に存在したことがないこの民族が独立を要求するのだって?」とさえ述べている。エンゲルスにとって、スラヴ民族一般が「歴史のない民族」であることを次のように説明してみせる。

ポーランド人とロシア人、それにせいぜいのところ、トルコのスラヴ人を除いては、スラヴ民族に未来はない。それは次のような簡単な理由による。上にあげた以外のスラヴ人には、独立と生存のための、何よりも必要な歴史、地理、政治、産業の条件が欠けているからだ。

地理、政治、産業の条件はともかく、「歴史的な条件」とは何か、そのイデオロギー的

うになったかもしれないが、マルクス主義の始祖たちにおけるそのような貢献は皆無なのである。というのも、マルクス主義にとって民族は解消されるべきものでこそあれ、民族のアイデンティティーの確立などとは、歴史の発展に逆行するものと考えられていたからだ。

民族の問題を主として論じたのはマルクスではなくエンゲルスの方だった。民族の問題を考える際に、エンゲルスにとって基本的に重要なキーワードは、「文明 (Zivilisation)」と「発展 (Entwicklung あるいは Fortschritt)」と「歴史 (Geschichte)」であった。文明は低次の段階 (Stufe) から高次の段階へと発展していく。ところが諸民族は同じように一斉に同時にその段階をのぼるのではなくて、他の劣勢な民族よりも先に発展した民族だけが「歴史を担う」ことのできる民族であって、その民族のプロレタリアートは革命的である。このような民族は「歴史を所有する」民族であり、他方その発展からとり残されて、ばらばらの「断片」となった民族は、「歴史を担う能力」を欠いた、「歴史のない民族」である。このような「歴史なき民族」は、歴史ある民族に吸収されなければならない。そうすることによって、これらの民族の反動性が克服されるというのである (この問題については、良知力『向う岸からの世界史』未来社を参照)。

エンゲルスは、こうしたいわば民族論を、独立の論文として書いたのではない。それは、中・東欧の諸民族の動きについて折にふれて書いたものの中に現われるのであるが、とりわけ、一八四八年の革命の折に、『新ライン新聞』に発表された論評の中に注目すべきものが多い。たとえば次の文章を見よう。

固有の歴史を一度ももったことのない民族、最初の最も未開な文明段階を登りつめた瞬間に、もう異族の支配下に入ってしまったたり、あるいは異族のくびきのもとではじめて、文明らしき段階にむりやり引きずりこまれたといったような諸民族は生存能力をもたないし、決して独立なんかできないであろう。(下線部の強調は原文どおり。以下同様)

生存能力をもたないから、他民族の支配下ではじめてまともな文明民族になれる民族という概念は、抽象的に考えられているのではなく、具体的な実例から出発している。それはどんな民族だろうか。エンゲルスは続ける。「オーストリアのスラヴ諸族がこのようなばあいにあたり、チェコ人は歴史というものをもったことは一度もない」と。エンゲルスによれば、「歴史のない民族」は生存の権利がないのである。それを、「かつて歴史的に存在したことがないこの民族が独立を要求するのだって?」とさえ述べている。エンゲルスにとって、スラヴ民族一般が「歴史のない民族」であることを次のように説明してみせる。

ポーランド人とロシア人、それにせいぜいのところ、トルコのスラヴ人を除いては、スラヴ民族に未来はない。それは次のような簡単な理由による。上にあげた以外のスラヴ人には、独立と生存のための、何よりも必要な歴史、地理、政治、産業の条件が欠けているからだ。

地理、政治、産業の条件はともかく、「歴史的な条件」とは何か、そのイデオロギー的

な背景は大いに考えてみる必要があるだろう。では、こうした出おくれた、まともな文明民族になる機会を失った民族はどうしたらいいのだろうか。引用が多くなりすぎるのをおそれてひかえたいところだが、次の一節は節約できない。

ヨーロッパには、自分の国のどこかの片すみに、一つくらいは滅亡民族の残骸をかかえていない国は一つもない。これらはかつての先住民族の残党であって、後に歴史の発展の担い手となった国民（ナツイオン）によって追いたてられ、制圧された。ヘーゲルの言うように、歴史の歩みによって、無慈悲に踏みつぶされたこれら国民（ナツイオン）の残骸、民族の屑は、完全に根絶やしになるか民族のぬけがらになるまでは、反革命の狂言的な担い手であることをやめない。というのも、そもそもその存在そのものが、偉大な歴史的革命に対する反抗だからである。

こうした反革命の役割を担った「民族のごみくず」は、スコットランドでは一六四〇年から一七四五年にかけて、スチュアート朝を支えたゲール人であり、フランスでは一七九二年から一八〇〇年までブルボン朝を支えたブルトン人であり、スペインではドン・カルロスを支えたバスク人である。そして現在のオーストリアでは南スラヴ人だが、これらの民族をまとめあげて、歴史的発展の道に参加できるようにしてやったのは、ドイツ人とマジャール人であるという。エンゲルスはこうした南スラヴ人はドイツ化されなければならないと説いている。

ところがロシア革命は諸民族の同権すら説いた。もしエンゲルスが十月革命まで生きていて、意見を求められたならば、必ずや、そのような考えは、無定見なユートピア主義かアナーキズムだと非難したにちがいない。

のちにその一部が共産党となるロシア社会民主労働党が、一九〇三年の綱領で「あらゆる民族に自決権」を保障すると述べたとき、私が右に引いたようなエンゲルスのたちばを、忠実に代弁して、くわしく批判したのはローザ・ルクセンブルクだった。さきに掲げた一九一四年のレーニンの論文は、ローザのこの攻撃から、ロシアの党のたちばを防禦することを直接の目的として書かれたのである。この論争を虚心に読めば、ローザの方が正統のたちばを守っており、レーニンはそれからの逸脱だったことがよくわかる。しかし、この逸脱の中にこそ、のちに形成されるソビエト連邦の固有の姿があったのである。

今日、人がマルクス主義の民族政策として理解しているものは、したがってロシア、ソビエトの変形を受けたものであって、本来のマルクス主義——民族問題に関しては、むしろエンゲルス主義と言うべきである——には、決して人が期待するような、今日の文化相対主義のかけらもなかったのである。

こうしたゲルマン文化中心主義、ヨーロッパ文明による同化主義は、決してエンゲルス、あるいはマルクス主義に固有のものではなく、十九世紀後半の、ドイツ全般に特有なイデオロギーの表現であった。それは生物学、歴史学、さらに極めて重要な意味をもつ言語学などの近代的諸科学が共有するものであって、マルクス主義は当時の全体的な学問の流れの一部であるから、そのかぎりでは、特別に突出したものではなかったと言うことができるであろう。

### 3「歴史」と「発展」のイデオロギー

民族問題を論ずるマルクス主義のキーワード、「文明」「発展」「歴史」などは、十九世紀の、ダーウィンに代表される生物主義的進化論を背景として、一つの構造をなしている概念である。ダーウィン主義が、いかにドイツの近代学問を深いところまでとらえたかを示す記念碑的な例が、言語学の領域で見られた。それはアウグスト・シュライヒャーが一八六三年に、ダーウィニストのエルンスト・ヘッケルに宛てて、公開書簡という形で発表した一種の学問的な信仰告白の書、『ダーウィン理論と言語学』であった。

シュライヒャーはすでに一八四八年に、『比較言語史』を、五〇年には『ヨーロッパ諸言語の体系的概観』を刊行して、諸言語の系譜的な親縁関係とその歴史的発展について一つの見通しを示した。そこで用いられている、単音節語クラス、膠着語クラス、屈折語クラスなどの類型論のタイプは、すでに W・フォン・フンボルトが、有名な大著『人間の言語構造の多様性と、それが人類の精神的発達に及ぼす影響について』（一八三六年）の中で確立していた。しかしフンボルトには、まだ、これらの類型論的なちがいを、発展段階のちがいに結びつけるような考えは明確にあらわれていなかった。それを、確信をもって発展段階の上に並べるヒントを与えたのは、ダーウィンの進化論であった。

シュライヒャーが、言語は、それをを用いる人間の意志から独立して、それ自体が有機体として、固有の内的法則にしたがって発展するという考えを打ち出したのは、まさしく、言語を、それ自体の法則によって進化する生物と同じように見たからである。こうして言語は人間の意志から切りはなされて自立した。このことによって、それは自然科学の法則性を得ることができ、人文科学の中で最初の、最先端の科学になり得たのである。

今日でもなお、言語学にとっての、おそらく最大の財産と考えられている、インド・ヨーロッパ語比較言語学は、この期のイデオロギーの産物である。この学問が権威をもち得たのは、言語変化という、一般には恣意的と思われる現象が、じつは厳密な法則にゆだねられているというテーゼの上に着目されたからである。それは、青年文法学派によって、音韻法則の無例外性、その盲目的、自然必然的な貫徹として定式化された。このマニフェスト的な表現は、一八七八年のオストホフとブルークマンの論文『インドゲルマン諸語の分野における形態論研究』によって、ひろく知られている。

ここでわざわざ、年代を入れたのは、こうした考えかたが、言語学という、限定された領域にとどまらないことを示すためである。マルクス主義では、社会の発展法則ということ強く印象づけ、人間はこの法則に逆らうことができない、したがって、歴史の歯車を逆転させることはできないと説く。こうした人間の意志によっては抗しがたい歴史の法則という考え方は、まさに、オストホフとブルークマンの言語学の論文が現われたこの同じ年に刊行された、エンゲルスの『アンティ・デューリング』の中に見出されるのである。ここでエンゲルスが、この同じ必然の法則の適用の場を見出したのは、商品生産においてである。その法則は、「生産者の意志に反して、盲目的に作用するところの自然法則として貫徹する」と。

エンゲルスの著作を見ると、かれが、当時の最先端の言語研究の著作にも目を通していたことがよくわかる。といて、かれがグローバルな社会の発展法則を、言語学から学んだというのでは決してない。それは当時の、生物進化論がもたらした「発展」モデルが、あらゆる知的領域をおおっていたことを意味する。それは、知的な領域にだけとどまるこ

とはできず、結局は卑俗化されて日常的な偏見を創り出したり、政治的な煽動にも転化することになる。

シュライヒャーはすでに一八五〇年の著作において、「屈折語、すなわちインド・ゲルマン語とセム語だけが、今日まで世界史の担い手であった。これらの言語が、言語の領域でそうであるように、それを話す諸民族は、他の民族と比べてみると、段ちがいに最高の発展段階に立っているのである」と述べている。こうした言語についての価値観は、ソシユールの共時言語学以来、構造主義、記述主義、文化相対主義によって克服されたかに見えるが、俗物的教養世界の中には根強く生き残っているのである。

エンゲルスは、民族の発展段階を、その言語の発展段階と、明示的に結びつけることはしなかったが、おそらくかれの言う「文明」の中には、言語のそのような面も暗黙のうちに含まれていたであろう。言語のかわりに、エンゲルスにとって重要なのは「歴史」の概念であった。この「歴史」は、我々が考えるように、あらゆる民族に平等に訪れる等質的な時間の産物ではなく、「文明の発達」概念と深く結びついている。だからこそ、「歴史を担い得る民族」と「歴史のない民族」とのちがいが現われるのである。

この基準は二十世紀になっても、ヨーロッパのマルクス主義の中にはくり返し現われる。

たとえばオーストリアの社会民主主義者オットー・バウアーは、『民族問題と社会民主主義』（一九二四年第二版）の中で、「十九世紀はじめ、オーストリアには三つの歴史的民族がいた。ドイツ人、イタリア人とポーランド人がいた。チェコ人、ルテニア人〔ウクライナ人〕、スロヴェニア人は、我々が言う意味では、まだ歴史のない民族であった」と。こうした民族が目覚めるのはどういう機会か、それは、「資本主義とそれに伴う近代国家が、大衆をして、強力な伝統のきずなから解放して、民族文化の改造に協力させる」ことによって生じるのだという。このようにして、「歴史なき民族」は、「歴史ある民族」の文明に感化されて、はじめて歴史に参加する資格を得るのである。

「歴史なき民族」の下には、さらに「蛮族」がいた。ヨーロッパで、歴史上ただちに想起されるのは、モンゴル人とトルコ人である。モンゴル人は「全ヨーロッパの発展を脅かし」、トルコ人もまた、ヨーロッパ文明への挑戦者であった。エンゲルスは言う。「ドイツ人と、とりわけマジャール人がいなければ、南スラヴ人は、げんにボスニア人がそうなってしまったようにトルコ化されて、マホメット教徒になってしまっただろう」と。

エンゲルスだけでなく、十九世紀ヨーロッパのマルクス主義者たちが、トルコやモンゴルだけでなく、アジア、非ヨーロッパをどのような目で見ているかについては特別に研究してみる必要があるだろう。しかし、アジアはヨーロッパ的に文明化されないうえ、反革命的で、歴史を担うことはできないと考えられていたことはまちがいない。だがこれも、マルクス主義に特有ということではなく、ヨーロッパにおける全般的な、当然の諒解事項だったのである。マルクス主義はヨーロッパ文明の一部、しかも、その本質的な一部分を代表していたのである。

#### 4 逸脱としてのソビエト連邦の貢献

マルクス主義がヨーロッパを出て、その政治的実現の場を見出したロシア帝国は、中央アジア、カフカス、シベリアと、さらに太平洋に達する極東に至るまでの、本来のマルクス主義がまったく視野におさめなかった、歴大な未開、野蛮の地を含んでいた。いったい

マルクス主義の開祖たちは、その全歴史を通じて、一度も文字で書かれたことのない言語で話し、蒙昧のシャマニズムに己をゆだねたトナカイ飼いの民たちがかれらの教義の布教の対象になると考えたことがあるだろうか。エンゲルスが言う、「民族の断片や屑」などという概念を、かれらははるかに超えていたのである。これらの「文明」以前の民を、ソビエト・ロシアは帝政ロシア同様、決して手放そうとはせず、引き続き教化のきずなの下に置いたのである。

たしかにこれらの少数の民族は、アメリカ・インディアン同様、圧倒的な「文明力」の差によって、おさえつけることもできよう。しかし、ヨーロッパ文明とはっきりと覇を競うことのできる、中央アジアとカフカスのイスラム教徒たちはどうすればいいのだろうか。さらにまた、ウクライナを先頭とするスラヴ諸族の間には、十九世紀中ごろから強い連邦主義への傾向が見られた。

こうした現実を前にしながらも、ロシアのマルクス主義者たちは、一八九一年、エンゲルスがエルフルト綱領草案を批判して、「プロレタリアートが用いることのできるのは、単一不可分の共和国の形態だけである」と書いた教条を、忠実にそのままくりかえした。ロシアの指導者、レーニンとスターリンは、「強力な中央集権国家」の主張をするとき、かならずこのエンゲルスの一文を引きながら、たとえば「我々は無条件に中央集権化に賛成であり、連邦的關係という俗物的な理想には反対である」（レーニン）のように、くり返し宣言したのである。

しかしかれらは、それとまったく同時に、同じ論文、演説の中で、ある民族がそれを望むならば、所属する国家から完全に分離する権利、すなわち「民族自決権」の基本的な重要性もまた認めたのである。民族の自決によって得られるはずの、完全な分離への代償的な形として選ばれるのが連邦制であろう。その連邦制はしかし、エンゲルスが、たとえばスイスにとっては「障害物」になっており、ドイツにとっては、「統一国家へ向かう過渡」としてしか認めなかったにもかかわらず、ロシアの地では、結局は、連邦制がえらばれた。それは三次にわたるソビエト憲法において、その連邦構成共和国に対し、連邦への自由な加入と自由な脱退の権利が、不変の原則として保障された連邦制であった。それはかつてソ連邦の歴史の上で、実際には一度も行使されたことのない権利であったが、一九九〇年に至って、リトアニア共和国以下、次々にこの権利を行使し、独立宣言を行ったのである。今日我々は、こうした過程を自ら見とどけているのである。

エンゲルスが、単に「過渡」だと考えた連邦制は、ソ連邦においては、制度としては完全に定着し、それを犯すことは誰もくわだてなかったのである。一九三六年の、新しい、いわゆるスターリン憲法の草案作製にあたって、共和国の連邦からの自由な脱退権をきめた条項はいまや無用であり、削除すべきではないかとの提案があったとき、スターリンは「現実にはたといそれを希望する共和国が一つもなくとも、連邦加入への自発的性格を傷つけてはならない」として、その提案をしりぞけたのである。

一九三六年当時、完全な中央集権国家への「過渡」としての時期はすでに終わっていたはずであるが、スターリンが、連邦制の維持を主張したことは、マルクス主義の正統からの逸脱の一つと考えていいだろう。

それを、ソビエト連邦の逸脱とするか独自性とするか、いずれにせよ、スターリンの口からは、すでに早い時期から、ヨーロッパのマルクス主義者たちの、ヨーロッパ文明中心

的な考えに対する批判的な言辭がするどく発せられていた。これがスターリンに、アジア後進民族の解放者を見出す上で大いに貢献したと思われる。たとえば、「第二インタナショナルの時代には、民族問題は通常、もっぱら"文明"民族にだけ関係のある諸問題の狭い範囲にかぎられていた。アイルランド人、チェコ人、ポーランド人、フィンランド人、セルビア人、アルメニア人、ユダヤ人、その他二、三のヨーロッパの民族体……」だけが視野にあったと。それに続く次のスターリンのことばには、ユーラシア国家、ソビエト連邦の指導者としての固有の主張があらわれている。

もっとも粗野な残酷な形で民族的圧迫をうけている数千万、数億のアジアとアフリカの諸民族は、いつも「社会主義者」の視野のそとにとりのこされていた。白人と黒人、「非文化的」ネグロと「文明化された」アイルランド人、「おくれた」インド人と「開化した」ポーランド人、——これらの民族を同列におく決心がつきかねたのである。ヨーロッパの完全な権利のない民族を解放するためにたたかう必要はあるにしても、「文明」を「維持」するために「必要な」植民地の解放をまじめに論じるのは、「お上品な社会主義者たち」にとってまったく不似合いなことだと暗黙のうちに考えられていたのである。

「文明民族」すなわち「歴史を担い得る民族」と、「遅れた」、「歴史なき民族」との対比はエンゲルスのものであった。そしてエンゲルスは、まさしくこの二種類の民族を同列には置かず、一方は他方に従属すべきだと説いたのである。スターリンが「お上品な社会主義者たち」と呼んだ人の筆頭には、まずエンゲルスが思い浮かべられていたかも知れない。スターリンは続けてこう言う。「これらの社会主義者たちは、ヨーロッパにおける民族的圧迫の廃止は、帝国主義の圧迫からアジアとアフリカの植民地諸民族を解放しないでは考えられないこと、前者が有機的に後者とむすびついていることを考えてもみなかった。共産主義者がはじめて民族問題と植民地問題との結びつきをあきらかにし、それを理論的に基礎づけ、これをその革命的実践の基礎にすえたのである。まさにこうすることによって、白人と黒人、帝国主義の"文化的"奴隷と"非文化的"奴隷とをへだてる壁はとり除かれた」と。

この最後の一句は、十九世紀ヨーロッパの社会主義とは異なる、ソビエト連邦の社会主義がもつ特有の意味を表明したものである。

私は以上のように述べてきながら、大いに気がかりなことがある。それは、最近、私がスターリンをできるだけ客観的に評価しようとして、ときにプラスの評価を与えることがあると、それを「意外だ」と感じる人が多いことである（新日本文学会編『いま国家を超えて』御茶の水書房を参照）。かつてはスターリンには、かならずプラスの符号がついて、かれをほめることは当然のことであり、けなせば「意外」だったのである。いまは、けなすことが当然になったから、プラスの評価をすることは「意外」になったのである。日本では、こういう議論のパターンから逃れることができないのは困ったことである。

右のスターリンの文章は、一九二一年五月のプラウダ紙に発表された。この年の七月には、中国共産党が生まれ、外モンゴルが独立を宣言した。スターリンはこうした情勢の中でソビエト連邦が果たすべき役割を十分に理解していたであろう。その十数年後、スターリンが陰惨な政治闘争に入ってからとはまた別の面がここには現われているのである。

さて、いま、私たちの前には、解体しつつあるソビエト連邦と、部分的には再編しつつある「主権」連邦がある。しかし原理的には、わざわざ「主権」連邦と称するのは奇妙なことであって、連邦構成共和国は、たてまえとして、はじめから「スヴェレニテート（主権）」が認められている。だからこそ、ウクライナと白ロシアとは、それを根拠に、ソ連邦とは別の議席を国連内でもっているのである。

このソビエト連邦の「連邦」は、エンゲルスの言うように、たしかに七〇年続いた「過渡」のものであった。そうしていま遂に、帝政ロシアという「民族の牢獄」を、「民族の自決」の原則の完全実施によって解放するところまで到達したのである。

ソビエト連邦は、ユーラシアの巨大な舞台の上に、人類の普遍性と民族性の問題を、歴史、文明などの価値を座標軸にすえて検証してきたと一言えるだろう。そのばあいの大きな特徴は、現実にとられた政策はともかく、理論的な整合性を追求した点では、他の国家にぬきん出ている。その結果の最も重大な帰結は、十九世紀の始祖たちの考えたようには、人類史は、単純に一元的な図式に収斂させることはできず、民族の問題を、エコロジカルな観点からとらえなければならぬということであろう。人類そのものが、わけても民族は、普遍の「文明」によっては容易に解消できない、エコロジカルな存在だからである。

民族は、ソビエト・マルクス主義が説き続けてきたような、専ら社会的、歴史的要因に依存する形成物ではない、いな、それはむしろ自然の一部と考えるべきものであり、人類の自然環境への適応の過程で必然のものとして生まれたのだとするレフ・グミリョフの理論は、反マルクスの異端思想として久しく禁じられてきた。それがいまペレストロイカの開始によって禁が解けるとともに、人々に強い共感を与えつつあるのは、脱エトノスをねらう社会主義による民族の破壊は、同時にまた、自然の破壊でもあることが、経験の中で、ひろく気づかれはじめたからである。

エコロジカルな観点を欠いた一元的発展論が人類の生活に破滅的影響をもたらすことは、中央アジアやシベリアの、非ヨーロッパ文明の諸民族のもとで証明された。社会主義的文明化がアラル海を死の湖と化するような悲惨をもたらすなどと十九世紀マルクス主義者のいったい誰が予想したであろうか。

ソビエト連邦の解体は、一つのドラマの終わりではなく、これによって新たな、より困難な課題を人類全体に向かって提示した、文明史の問題として理解すべきであろう。

## 第六章 「宗主国家語」をこえて——日本語の「国際化」をめぐるイデオロギー状況

### 1 「日本(人)の国際化」から「日本語の国際化」へ

かつてフランスの言語学者マトレは、十八世紀末フランス社会の相貌を読みとる鍵として、その時代を「証言することば」*mots-témoins*を選び出してきて、時代状況を語らせた。その二百年後の今日の日本は、はるかに流動が大きく、そのような証人を喚び出していたらきりが無いが、いまあえて一つを選ぶならば、「日本(人)の国際化」をあげることができよう。一九八〇年代の前半にはこのテーマをかかげた講演会やセミナーが、全国の各地で開かれた。

私が招かれたこの種の講演会のうち、最も遠くは四国の松山市であったが、ちょうど花の季節で、外国人の観光客が市内のあちこちに見られた。かつて同市からアメリカへ渡った移住者の二世たちも少なくなかったようだが、こうした里帰りの人たちのすべてが英語しか解さなかった。「国際化」とは、一般に、そのような、英語しか話さない外国人に対し、ものおじしないですむように、なにかんずく、英語が話せるようになることを意味した。昔は英語を話すのは外交官や学者や貿易会社の高級社員だけでよかったが、いまや、日本全国のどこにでも英語しか話せない人たちが現われるようになった。だからいまは、普通の市民でも英語が必要な時代です——市の職員は、だいたいこんなふうに講演会の趣旨を説明した。日本、あるいは日本人の「国際化」とは、具体的には「英語の会話ができるようになる」ことと同義なのだ。

じっさい、「英語のできる国際人」になるために、人々がいかに熱い願望を抱いているかは、低迷すると言われる出版界の中でも、目立った話題となり、結構な売れ行きを見せているという、岩波新書の『日本人の英語』の例を見てもわかる。しかし、これはいまに始まった新しい現象ではなく、流れとしてはすでにあった「古典的」な現象の、より密にあらわれた形である。日本の国際化は、一時的な中断はあったにせよ、過去一世紀にわたって持続したテーマであるが、いまや国際化は、国家が自らの器官として必要とする、少数の選ばれた国際要員だけではなく、一人一人の個人にまで及んできたのである。

つい先ほどまでは、国語ができない割には英語ができるという子供たちは、「日本語もできないくせに」と、国文先生から非国民をなじるような目で見られたが、今は、国語ができなくても英語が得意という子供たちは、もはや国家への裏切り者であるどころか、むしろ英雄である。これも「国際化」がもたらした意識の変化である。

さて、注目すべきは、そしてマトレ大先生よりはもっとダイナミックなとらえ方をするならば、八十年代の後半には「日本」の国際化ではなく、こんどは「日本語」の国際化が主張されるようになってきたことである。この変化は、ことばの上では小さなちがいのように思われるが、じつは流れの方向が逆転したのである。前者のばあい、日本あるいは日本人は自ら課題を引き受け、自らを変えなければならなかったのだが、後者のばあいは、自ら学ばず、変えないままに、外に向って身を乗り出そうとしているのである。

しかし「日本語の国際化」もまた、決して今にはじまった新しい問題ではない。日本文が外国人にも読みやすく書きやすいことばであるようにと望むことは、日本人にとってもまた読みやすく、書きやすいことばであれかしと望むのと一致する。したがって、日本語が国際化する資格を得るためには、日本人自身のためにもまた、その表記に改革を要した

のである。言文一致と並んで、「国語改革」「国語国字問題」は、近代日本に常につきまとい、いまもまだつきまとっている問題である。漢字全廃・制限、ローマ字化、カナモジ化の改革運動は、日本語が侵略によって、その支配地に進出して行くときの経験を、むしろ国語改革のために利用したくらいであった。

古典の研究で生計をたてている国語・国文学者とは異なって、現実の日本語教育の現場にあつた人たちの大部分は、日本語の現状がそのままではいいとは思っておらず、むしろ日本語は近代の言語生活にとっては「遅れた」言語であって、多くの点で改革を要すると考えていた。日本人自らが修得に困難であると思っている、混乱に満ちた日本語の書記体系を、被征服者たちが、いかなる強制をもってしても、短期間のうちに使いこなすようにはならないと誰もが感じていた。かつての国語教育の指導者たちにとっては、日本語は「海外進出」のための準備が整わないままに、戦争の進捗によってやむなく人前に立たされてしまったのである。

ヨーロッパにおける多言語地帯、多言語国家の言語行政について、当時第一級の知識を持っていた保科孝一は、「かくのごとき（日本語の発展普及の成果に遺憾な点が多いこと）は、土壌の罪でなくして、種子の不良に帰することを思わざるを得ない」（『大東亜共栄圏と国語政策』一九四二年刊）と、かなり自嘲的に述べていた。柳田国男はさらにすすんで、「仮字なりローマ字なりに書き改めて見せれば、日本語はむしろ世界中のやさしい国語の一つである」にもかかわらず、「学ぶべき何物をも含まぬ。」日本語による学問には「新しい発見が無く」それで「他国を指導し得ぬのは当り前」（『フィンランドの学問』一九三五年）と、学問の批判にまで及んだのである。

それに対して、国語は——日本語は、とは彼らは言わなかった——国体の神聖さと不可分に結びついた日本精神の発露であって、外国人に対し一歩もゆずれぬとするのが、世間知らず、「唯我独尊」の国学者たちであった。それはたとえば、山田孝雄の「外国人に日本語を教える為に、言葉をわかりいいようにしてやる、そういう思想」は、「自ら国語を破壊するものである」（『国語の本質』一九四二年刊）のような発言に代表される。「英語や独逸語や仏蘭西語などはわれわれ日本人には随分むつかしいものであるが、何時彼等がわれわれのためにその国語をやさしくしてくれたであらう」（「日本語の純粋性」一九三八年）と述べ、日本語がこのように「軽んぜられ、尊厳を害せられた」のは、「明治の時代に西洋から移植した言語学を悪用した」（同上）せいだと、言語学のイデオロギー性を指摘するところは、今日、流行学問の輸入にいそしむ人たちからは失われてしまった鋭さをもっている。ことばの使いよさよりは、ことばそのものの伝統性に価値を置く「唯我独尊」の主張は、いくぶんうすめられた形で、戦後も福田恒存、近くは丸谷才一の諸氏のもとにくり返しあらわれる。「唯我独尊」型の主張は困ったことに、じつは外国人に対してのみならず、日本人に対しても「唯我独尊」であるのを特徴とする。かれらは伝統に操をたてて、便利さのためには一歩も譲らないのだが、言うまでもなくことばはこの人たちだけの所有ではない。

日本語の海外普及によって痛感される改革への必要と、それに足枷をはめようとする保守主義者との抗争は、大東亜共栄圏とその前夜の時代に、普及事業の上にも奇妙な折衷的で矛盾に満ちた表現をとった。

たとえばここに、一九三九年に外務省文化事業部が出したパンフレット『世界に伸びゆ

く日本語』がある。それは、英、独、仏などのヨーロッパ諸国からはじめて、アメリカ、アジアの順に、諸外国における日本語教授の状況を概観したものであるが、そこでは、「国際文化事業の根本精神は人類文化の創造的発展に協力寄与しようとする」「理想主義の精神」であるから、「国家主義」的ではなく「他国文化の吸収や文化交換」も「第二義的」ではないと、いま読んでも共感できる高い理想が表明されている。それにもかかわらず、別の個所では保守主義者の口ぐせをそのままくり返し、「日本の様な世界無比の国体と国民精神とを持つ国の言葉」を普及させることによって、「我々と同じ精神を持ち、同じ国民性を持ち得るよう」にするのだと述べているのは、やむを得ぬ時流との妥協であったのだろう。このことは、日本語普及事業がその基本方針を十分に練る余裕をもたなかったことを示している。

## 2 母語ペシミズムの伝統

日本語が世界に比類のない独得の言語であるという主張において、その比類のなさは、近代化の過程で、長所ではなく短所として考えられていた。日本語は近代生活にとって、むしろ負の特徴をもち、多くの点で改革を必要としている遅れた言語であるという認識は、知識人の一部に変わらず持ち継がれてきた。この認識は、いっそ日本語を放棄して、英語を採用すべきであるという、森有礼に見られるようなラジカルな提案になって現われ、それはさきに保科孝一のばあいに見たように、大東亜共栄圏の時代になってさえ、日本語は「種そのものが悪い」という、打ち消しがたい自覚をかくすことができなかつたのである。

森有礼が日本を英語文化に同化させようと考えたのは、日本語が質的に劣った言語だという認識によってではなく、それが、世界の文明に伍して行く上に有効で便利だからという、機能主義的な面が強く現われていた。その証拠に、森は、あるがままの英語の、そっくりそのままの採用ではなく、文法上の不規則や混乱を整理した、「改良型英語」の採用を提案していた。森から感想を求められた、アメリカの言語学者ホイットニー（最近の研究によって、ソシュールが言語理論を構築するにあたって、直接の源泉の一人になったことが明らかにされている）は、日本語の放棄は、それぞれの民族が独自の言語を求める潮流に逆行すること、また英語の改良、すなわち「簡略英語」*simplified English* は、結局は純正英語の話し手から劣等視されるであろうと指摘して反対したが、このばあい森の方がより理想主義的で、ホイットニーの方がより現実的であった。森の簡略英語というアイデアは、ザメンホフのエスペラントに十年以上もさきだっていたのである。

森が、日本語に対して英語の方がよりすぐれていると考えたのは、度量衡の切りかえのように、文明の主流に合致させようと考えたからにすぎなかったが、後に生物学的進化論にとりつかれた印欧語比較言語学の知識が知られて来るにおよんで、日本語のおくれは、質的なものだという認識が生れてきた。たとえばアウグスト・シュライヒャーの代表的著作の一つには、次のような見解が見られる。「屈折言語すなわち、インド・ゲルマン系言語とセム系言語のみが、今日まで世界史の担い手であった。言語の領域において、これらの言語がそうであると同様に、これらの言語を話す諸国民が、人類の他の部分と比較して最高の段階にある」（『体系的に概観したヨーロッパの諸言語』一八五〇年刊、三七頁）。こうした見方はシュライヒャーにはじまったものではなく、すでにフンボルトの言語研究の主要モチーフの一つであったが、シュライヒャーによってさらに進化論的に秩序づけら

れた。すなわち言語間の生存競争において、印欧系屈折言語はその質的優位によって、適者生存の原理に基づき、他の言語を圧して生き残ったのであるという。

日本における西欧言語学の受容史の中で明らかにしなければならないのだが、こうした考え方は、シュライヒャーなどの著作の忠実な祖述によって直接もたらされたというよりも、他のより通俗化された言語学教養書の影響のもとに、印欧屈折諸語の持つ、複雑に分岐した形態論への讃嘆から生まれたものであろう。ラテン語、ギリシャ語の学習が、より厳密な思考を好む精神の陶冶に資するという信仰は、欧米においてのみならず、西洋文化に親しんだ日本の知識人の心をいまでも強くとらえている

たしかに、「世界史における屈折語の勝利」は、これらの言語の文法の見事さ、したがって、これらの言語を用いる人の論理と思考力の優越と見ることができる反面、現実には、その屈折性を最も退化させた英語が、最も成功した言語であるという現実をも見なければならなかった。シュライヒャーもこの点の説明には苦慮しているのである。ここでは、屈折性のより一層の喪失こそが、英語をより国際的にさせたのだという、その後の解釈のあることも忘れないでおこう。

日本の敗戦は、日本語の表記体系が、ことばの民主主義、したがって日本社会の民主主義への大きなさまたげになっているという認識をいっそう深めただけでなく、知識人の中に暗黙のうちに受け継がれてきた母語ペシズムをいまいちどよみがえらせた。この時期を代表する象徴的な例として、一九四六年の志賀直哉の発言をとりあげてみよう。

「国語問題」と題する、わずか四ページの短い随想の冒頭部分で、この高名な作家は、「一番不安なのは食糧問題である」と述べながら、ありがたいのは「云いたい事が云えるようになった事」だという。こうした食うや食わずの生活の中で、日本の百年先を考えながら、「日本の国語程、不完全で不便なものはない」という悲痛な思いをあきらかにした。しかもその不完全さたるや、「造り変えて」もどうにもならないほどのものであるという。そこで、「私は此際、日本は思い切って世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとって、その儘、国語に採用してはどうかと考えている。それにはフランス語が最もいいのではないか」と提案した。それは「百年二百年後の子孫の為め」であった。志賀は当時六十三歳であった。

志賀はこの随想の中で、「六十年前に森有礼が考えた事」を想起しているが、こんどは英語ではなく、フランス語であった。そこには「フランス語は世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん強い言葉だ」（岩波文庫版）という、「最後の授業」でドーデの語るアメル先生のことばが下敷きになっているらしいさまが見られる。これが、「小説の神様」と呼ばれた日本語の達人のことばであることに驚くとともに、その、言語への欲求の大きさに胸を突かれる思いがするのである。それは、日本語ではやれないことがフランス語ではやれるかもしれないという、母語への絶望というよりも、未知の、あるいは十分には知らない言語への期待の表明である。知識人の一部に伝わってきた、母語ペシズムは、絶えざる改革の思いと期待の、別の現われであった。

### 3 言語改革と保守化

敗戦後の日本では、伝統的国語問題としての表記法の改革だけでなく、政治的・社会的変革と並行して、その変革に応ずるための、言語表現それ自体の変革もまた考えられた。

身分の差別や、支配・被支配の関係を言語的に固定して規範とした敬語表現、女にだけ要求される特別のことば使いも、封建的遺制であり、非民主的な日本社会と不可分な現象と見なされた。

当時のこの雰囲気をよく示しているのは、一九五一年にタカクラ・テルが書いた次のような文章である。

どーして女が男のことばお使ってわいけないのだろー？ こんどのあたらしい憲法でも、法律的に、社会的に、家庭的に、いっさいの点で、女わ、男と、まったく同じ地位おしめ、まったく同じ権利おもてることになっている。それに、どーして、ことばだけ、男とちがうものを使わなければならないのだろー？(『ニッポンの女』)

タカクラ氏は、ヨーロッパ、アメリカのより進んだ社会の言語と、「小アンチール諸島の言語」「バントゥー語」「ボリビアのチキトー」などの「やばん人」の言語とを対比し、これら「やばん人」の言語は「進化するにつれて、おのずから、消えてしまう」「多くのそーいうわずらわしい形式をもっていた」と説く。

社会の発展が言語を変えするという、この社会と言語との不可分な関係を説くのに、タカクラは「ソ同盟の言語学者でヤフェチート言語学の創立者である、マルの研究」をたてにとっている。だが、タカクラがこう書いているちょうどその頃、ソ連ではスターリンが自ら支えたマルの理論を、自らの手で全否定し、なかんずく「言語における階級性」を否定して、言語理論の非社会化に道を開きつつあった。このことによって、左翼の言語改革論者たちは致命的な打撃を受けた。スターリンは、言語におけるあらゆる理想主義的な改革の試みに冷笑を浴びせかけ、改革運動の土台を取り去ったのである。

戦後間もないこの頃は、言語の実用面だけでなく、言語理論における新しい認識が人々の意識を変えつつあった。それは英語教育を通じて、アメリカから入って来た言語学的記述主義である。記述主義に先だって、言語学の専門家には、戦前からすでに構造主義が知られていたが、それは、手順化された記述主義となっはじめて大衆化への道を見出したのである。これらの思想は、言語を伝統のくびきからきりはなし、あるがままの姿のもとに見えるように、くもりなまなこを与えてくれたのだが、とりわけ貴重だったのは、それらの背景をなしている相対主義的な観点であった。すなわち、それぞれの言語は、それぞれ固有の原理によって組織されているゆえに、他の言語の持つ価値のものさし、たとえばラテン語の文法のめがねを通して、別の言語を見るのは誤りだという観点であった。

言語について論ずる知識人、なかんずく、この方面についての多少のわきまえがあると自らたのむ知識人たちは、たいていは十九世紀に確立し、近年まで欧米世界を支配していた、進化主義、発展段階主義、歴史・伝統・純血主義の、あらゆる俗物化された偏見によって自分がもの知りだと思い込んでいた。日本に導入された、あらゆる外来の理論についてそうであるように、構造主義もまた、ファッションナブルな話題の項目を一つ増やしただけにすぎなかったが、言語学は、文化人類学の導入とあいまって、エスノセントリズム、文化的専制の価値判断からの解放に、目に見えないところで役割をはたした。

しかし、この解放思想としての文化的相対主義は、価値の相対化によって、批判を批判として成立させなくするのではないかと、私が構造主義のはやりはじめに漠然と感じた不

安は、いまや現実のものとなった。あらゆる対象は、それぞれの構造的必然によってそのような姿をとり、そのような機能を演じている。すなわち、相対化は絶対化を産み、外からの対比による批判を許さなくなったのである。

戦後日本の保守的な復元力はまたたくうちに勢いを得た。日本文化についても日本語についても同様であった。いまや、日本語ほど「不完全で不便なものはない」という母語ペシミズムは、ほとんどあとかたもなくかき消され、かわって、日本語の弱点と考えられていたものが長所として讃美されるようになり、人々の愛国的虚栄心をおおいにくすぐつた。保守化された相対主義は文化への批判を学問的に封じたのである。こうしてたとえば、外国人の学習者を非常に悩まし、日本人にとっても大きな負担と考えられてきた、漢字の多様な読みかたは、一九七五年にはこう評価された。いわく「日本語が漢字を豊富に使い、しかもそれを音と訓の二通りに読むという習慣を確立したことが、高級な概念や、難しい言葉を一部特権階級の独占物にしないですんでいる大きな原因なのである」（鈴木孝夫）と。野村雅昭氏の『漢字の未来』によると、このアイディアは、すでに一九六八年に、森岡健二氏の「文字形態素論」によって学問的なよそおいが与えられ、一九八六年には、「ほとんどの日本人は（英語の綴りを覚えるような）地獄の苦しみなどを意識しないままに自然に漢字を覚え、煩雑に見える形態素交換の表を物にして日本語を駆使している」（『日本語と漢字』）というところにまで至ってしまったという。

日本の言語的反動化という点で、どうやら一九七五年というのは記念すべき年であった。さきの鈴木氏の弁に呼応するようにして、大野晋氏は「どうしてこんなに早く日本が東南アジアや中近東の国々と比べてヨーロッパ文明を受け入れることができたかといえば、やっぱり漢語という媒体を使っ」たからだと言っている（『朝日ジャーナル』五月二日号）。これは、それより二〇年前、一九五五年頃の同じ人の発言（たとえば、漢語からやまとことばへの可能なかぎりの言いかえの主張）を知っている者にとっては同一の人の口から出たとは考えられないほどの変りようである。時代の状況の変化とともに、人々の思想は本人も気づかぬままに、確実にそれを写し出して進化して行ったのである。

日本語はいまや全く改革の余地のない言語どころか、かつてない経済的成功を可能にしてくれた、ありがたい言語となった。誰にも読みやすく書きやすく心がけ、絶えざる自己反省を背景にもっていた、批判の学としての日本の言語学は、威丈高な自己讃美、自己弁護の学になろうとしている。ことばの民主主義などという問題はいつのまにか念頭から消え去り、主体のない学問となったのである。

いわゆる「日本語ブーム」が訪れたのは、まさにこのような状況のもとにおいてであった。日本語はいまや、ほっておいても、自分で金を出して外国人が学びにやって来る尊大な言語になった。かつて不意に植民地や占領地をかかえ込んだときの軍国日本の時代には、「種の悪さ」にとまどいを感じる人もいたが、今度はちがう。ただ教材や教員などの資材の不足を嘆くのみで、日本語そのものへの反省や批判としてははねかえって来なかった。いまや、「日本の国際化」から「日本語の国際化」へと時代は転換したのである。

#### 4 「簡約日本語」の二つの面

「日本語の国際化」ということばから二つの問題を考えることができる。一つは日本語が国際的に、すなわち、日本人以外の人たちにも使いやすいように、日本語を閉じ込めて

いる文化的なせまさを破って、より普遍的で広いコミュニケーションの場で使えるように工夫するか、あるいは今ある日本語をそのままに、威信ある言語として、外国人に丸呑みさせるかである。あとのばあい、外国人の使用によって生ずる汚染から守り、厳重な管理体制をしく必要が生じる。じじつ知識人たちは、外国人の使用によって生ずる「おぞましき日本語」をどこまで許すかという議論をはじめた。日本語にとっておぞましさが最も強く感じられるのは、おそらく作法だの礼儀だのに関わる部分であろう。

言葉にはコミュニケーションの具として、より知的な情報伝達の面と、より倫理に関する面とがある。日本人がこれまで、英、仏などの言語を学んだのは、英、仏語を話す人たちの言語に反映したエチケットや礼儀を知るためではなかった。そのような点はある程度無視して、科学技術を修得したり、人間をより自由にするための思想や文学を知るためであった。儀礼的な語法を知る必要があったのは、目的に接近するための、あるいは社交のためのやむを得ざる手段でしかなかった。いったい、その国の作法を知らない者には、その国の言語は使わせないなどという国がどこにあるか。

ところが、日本語においてはそうはいかないのである。日本語の教師もまた、そのような教授内容の型に自らを従わせているらしく、その儀礼的な部分を教えることに非常に熱心である。ある人は、そこにこそ、日本文化を理解する鍵があり、日本語をやる意味もそこにあると考えているらしく、敬語の用いかたは、たとえば私が使えるのよりも、はるかに精密に教えられ、その通りに使う外国人が多い。日本の各地の方言をみると、日本の標準言語のように込み入ってはおらず、ずっと単純な敬語の体系が用いられている。よく、外国人の方がはるかに礼儀正しい日本語を使うことがあると言われるが、それは、かれらの母語ではないからであり、教え込まれ、人工的に礼儀正しく作られた規格日本語しか知らないからである。外国人にはむしろ、生きた、教えられない子供のことばの方がむつかしい。

しかし日本語を教える教師たちはやはりそこを避けるわけには行かない。というのは、日本語の儀礼にしたがわないことによって生ずる、致命的な失敗も現実にあるらしいのである。

中国に建設された日本の工場にはたらく中国人が、その工場長だか、現場の上役に、「あなたは…」と話しかけたために、生いきだと、クビにされたというエピソードがある。こういう事件を引き起さないためにも、日本語の教師は、「あなた」という二人称の代名詞があるが、目上の人、権力者、自分を支配するたちばの人間にむかっては、それは存在しないのと同然であって「先生」だの「課長」だのと呼ばなければならないと教える必要があるのである。私は実際しばしば、かなりの年輩の外国人から、私の引きうけた学生でもないのに、「先生」と呼ばれて気持の悪くなることがある。それほど「先生」日本語は規格化されているのである。「先生」の使用に上達することが、日本語を学ぶ目的でないことは言うまでもない。

「日本語の国際化」はいまのところ、こうして作りあげられた規格儀礼日本語の普及にあるのであって、日本語がより使いよくなるという方向にはすすまない。すなわち、その普遍性のある機能の面がより開拓され、より洗練されて行くのではなくて、儀礼的、固有文化的側面がいつそう強調されるのである。そうなると、言語教育の領域へ踏み込んでしまうことになる。外国人にとっては大変迷惑なことだ。

日本語それ自体を、国際的使用に便利のように改変するという試みが、最近、「簡約日本語」というかたちで現われた。この構想は、日本語の構造のより単純化という言語それ自体にせまく限定したかぎりでは、間違っていない。それは、日本語の文法と語彙はどこまで単純化し得るかという試みとしてはたいへん意義がある。しかし、問題は、純正日本語をそのままにしておいて、二流の予備日本語を作るというところにあり、方言がすでにそう扱われているように、そのことばを話すだけで話し手は烙印を押されるという、日本の社会言語学的状況を考えに入れていないという点で、この構想は批判を免れないであろう。「二流」とは、言語自体にかかわるものではなく、社会がそう見なすということにほかならない。大切なことは、別の日本語を作るのではなく、今げんにある日本語を使いやすくすることである。

そのことよりも、この案が発表されたときに表明された、外国人たちの反応は興味深い。外国人の中には、漢字も平均的日本人よりもはるかによく知っていて、微に入り細にわたり、蘊蓄を披露する人がいて、その驚嘆すべき知識によって、当の日本人を圧倒する。この人たちは、申しあわせたように、簡約日本語におそいかかった。しかし誤解をしてはいけない。かれらはここを先途と、とてつもない執念と時間をかけて日本語を修業した例外的な人たちであって、その人たちの議論にごまかされてはならないのである。

かれらは、もちろん讃嘆すべき努力をもってであるが、普通の外国人にとっては、目のくらむような文字体系を身につけた、いわば日本語について特権的な持てる階級の人たちである。かれらにとっては、日本語が、その修得に手間のかかるしろものそのままである方が、かれらの特権的な地位を一層安全にしてくれるから都合がいいのである。こういうガイジンたちの意見を引用して、日本語を現状のまま保持せよと主張するのは根本的な誤りである。かれらは、いわば珍奇な骨とうや高価な宝石として日本語の知識を所有して見せびらかしているのであるが、それは、ふつうの日本語の学習者の意識とはずっと離れたところにある。日本人にとっても迷惑な話だ。

ある留学生は、私にこういうことを言った。私たちは、日本語そのものの学習が目的でそこで終るのではなく、日本語をとおして、なるべく多くのものを日本から学びたいのです。日本語にかかる時間が少なければ少ないほど私たちは助かるのですと。

日本語が国際化するためには、それがもはや、国体意識や日本精神の注入の道具や、日本文化特有の繊細さを学ぶためのものであってはならない。「日本語だけ」を専門的に教える教師の役割、かれらが、かかわる時間は、なるべく短い方が、日本で学ぶ人たちにとっては好都合なのである。とって、私は日本語教師の役割を決して過小に見ようとするものではない。それはあたかも、医者が患者とつきあう時間が短ければ短い方がよいと言ったとて、それが、医者不要を説いたことにならないのと同様である。

## 5 外国語を学ぶとは

私は、外国人が日本語を学ぶばあいにかぎらず、一般に外国語を学ぶばあいの外国語というものは、どういうものであればいいのだろうかを考える。理想的に言えば、誰しもそう望むように、その言語を母語とする話し手と同じように読み書き話すようになることであろう。しかし、そうなれることはめったになく、あったとしても、その言語の話される国で、比較的若いうちに、長期にわたる実生活が必要であろう。

こうした寸分ちがわぬ、写しとり外国語学習のモデルは、まずヨーロッパの後進貴族社会に生まれ、ついで帝国主義時代の植民地文化のもとでひろまった、完全同化主義のあらわれではないかと思う。しかもそのばあい、相手のことばは、どちらか一方だけによって完全に写しとられるだけであって、もう一方は、相手のことばを全く知らないし、知ろうともしない。これが、言語学習における典型的な植民地主義である。

これは、地方語と中央語との間にも存在する関係である。このような関係から何が生ずるか。「日本人の英語」はどこまでも戯画化されたままで、なぜ、そのような日本人の英語が生まれるかを全く考えない英語人を許しつづける関係である。日本人が英語について知っているほどに、英語人は、日本語のみならず、たとえばフィンランド語やロシア語のように、ヨーロッパにさえも冠詞のない言語があることも、いまよりはもっと多く知るべきである。

たとえばまた日本人は、朝鮮語人が「時間」を「痴漢」、「地図」を「チーズ」、「韓国」を「監獄」と同じにしてしまうのはなぜか、また同時に朝鮮語人は、日本人が朝鮮語を話すときに、なぜ「私」を「妻」と、「お金」を「ウンコ」と一諸くたにしてしまうかを知っているべきであろう。

帝国主義的寸分たがわぬ、一方通行の写しとり外国語教育モデルは、言語を通じての偏見と人種差別を解消することに役立たないばかりか、それを、一層強調させる方向を助けるであろう。

かつて中央は地方に対して、「国語」の威圧をもってのぞみ、大民族は少数民族に対して「国家語」をもって圧した。そして、帝国主義の時代には、国語や国家語は、心理的な言語的服従者に対して「宗主国家語」 *sovereign state language* をもってのぞんだのである。この語は昨年(一九八八年)九月、一橋大学社会学部が主催した国際シンポジウム「転換期世界の文化変容」において私が提唱したものであるが、その意図は次のようなところにある。すなわち一八六〇年代、プロイセン国家において生じた「国家語」 *Staatsprache* という語は、機能的には単に国家内多言語間を媒介し、国家業務を集約するための「業務語」 *Geschäftssprache* と同義にすぎなかったのに、「宗主国家語」は、その言語の宗主国における社会的儀礼、倫理規範をも受容するよう迫るからである。単なる「国語」や「国家語」ではおおいつくせない「宗主国家語」の内容は、新しい社会言語学的概念として今後検討されなければならない。宗主国家語は、たとえばその言語能力の認定基準の中にも、これらの倫理規範を要求する。日本語教育が単なる言語体系の教育にとどまらず、そのまま日本精神や皇道精神の注入の一方法と考えられたのはそのためである。

ある言語が豊かさを獲得するのは、小さな村落や島に、純粹に保存されることによってではなく、できるだけ多くの異なる背景をもった人たちによって、できるだけ多くの異なる場面で、多様な目的のために用いられることによってである。そうでなければ、ことばは閉じられた村落語、部族語にとどまるのみである。

日本語を永遠に日本文化や日本精神の権化にとどめておきたいと思うならば、日本語は決して外国人にしゃべらせてはならず、国外に輸出して「国際化」などを認めてはならないのである。

「日本語の国際化」という問題は、単なる教授法の向上だの、要員・資材の養成だの整備だのの技術の問題をこえて、日本語とその使用者である我々自身とを羽がいじめにして

きた、いっさいの言語イデオロギー、とりわけ「宗主国家語」イデオロギーを、そのまま放置しておかないだろう。この問題を考えることは、日本語もその列の端にやっと並ぼうとしている、欧米有力言語の学び方、教え方にも当然、影響を及ぼさないではおかないであろう。そのことはまた、我が国の言語学者と呼ばれる人たちが、いとも無邪気に受け売りしてきた、様々な言語理論が、暗黙のうちに、あるいはそれと気づかぬままに前提としている、理論以前のイデオロギーとのあらためての出会いを可能にしてくれるだろうと思う。

## 第七章 「スターリン言語学」精読

はじめに

世に「スターリン言語学」と言われているものがある。スターリンは、さまざまな機会に、言語について論じることがあった。しかしそれは、言語の本質そのものや、ましてやその研究方法つまり、「言語学」について論じたのではなくて、民族問題にかかわって間接的に述べたものである。それは当然のことで、民族問題について語ろうとすれば、必然的に言語についてふれないわけには行かなかったからである。

スターリンは、他のマルクス主義者とはちがって、最も多く、また深く、言語の問題に関心を注いできた人だった。その意味では言語問題の専門家だったと言って誤りではないだろう。しかしだからと言って、一九五〇年までは、それらの言説を、人は「スターリン言語学」と呼んだことは一度もなかった。

「スターリン言語学」という言いかたが登場するのは、一九五〇年に、『マルクス主義と言語学の諸問題』という、かれの著作——その形式から言えば問答集——があらわれてからのことである。何しろ、その表題には、「言語学」の名が冠せられているのであるから。

一国の政治指導者が、「国語」について論じることが時々起きる——何しろ、最近では日本の首相だつてうた（国歌）を論じるのだから——としても、言語学という学問について論じるなどというできごとは、これまでもなかったし、これからもないであろう。ここでは、スターリンは、言語について論じただけではなく、言語学、言語の研究方法についても論じたのであるから、これはたしかに、「スターリン言語学」の名にあたいする。

しかし、ぜひとも避けねばならないのは、「スターリン言語学」を「ソビエト言語学」と混同してはならないということだ。「スターリン言語学」は、ソビエト連邦固有の言語学としての、ソビエト言語学を否定するために書かれたのであるから。

では、ソビエト言語学とはどんなものであったかといえば、ほかでもない、この一九五〇年の『マルクス主義と言語学の諸問題』で、スターリンが一つ一つ項目をかかげながら否定しているものがソビエト言語学だと理解すればいい。

もし「スターリン言語学」はソビエト言語学ではないという言い方に同意しない人がいれば——なぜなら、スターリンはソビエト連邦を作り、担った、当の中心人物なのだから——スターリン言語学とは、ソビエト言語学史の最後の段階で現われた、言語学の一つの方向づけだったと言いなおせばいいかもしれない。

スターリンの「言語学」も、さらにそれにずっとさかのぼる、かれの民族と言語に関する言説も、左翼勢力の思想、政治運動の中で、ほとんど教条（ドグマ）として唱えられてきた。とりわけ一九一三年の「マルクス主義と民族問題」以来、くり返し引用されてきた、いわゆる「民族の定義」は。

本章では、それらを教条としてではなく、その当時の、世界の民族・言語のどのような状況とかかわりを持ちながら、つまり、どのような歴史のコンテクストの中で発せられたかを明らかにしながらとりあげたい。特定の状況の中で発せられた言説は、決して教条ではない。それを教条にするのはコンテクストから抜き出し、普遍化してひろめる思想的、政治的運動家である。

また、特別に強調しておかねばならないのは、スターリンの民族・言語についての言説は、その折り折りの突然の思いつきや気まぐれの産物ではなく、すべての理論がそうであるように、それなりの思想的、学問的系譜をもっている。とりわけ「マルクス主義の著作」であることを意識して書かれたものはすべてそうである。スターリンの民族・言語についての言説を、そうしたコンテクストから切り離し、あたかも天才的予言者の神託として扱ったり、あるいはその悪業があばき出された後は、すべてが無価値なたわごととして、孤立させて扱う態度のいずれもが教条主義にほかならない。

本章はまた、スターリンが言語について、折々に発した言説を、とりわけその「言語学」を、同時代の正統的、アカデミックな潮流の中に置いてみて、それらと対比しながら論じるという試みを行ってみたい。それは残念なことに、今日まで一度も行われたことがなかったからである。

このような方法をとれば、出てくる結果は、スターリンについての個人的な物語ではなく、言語学、すくなくとも一九世紀から二〇世紀にかけての言語思想の世界的な流れの一部をなすものとして理解できるであろう。それはもちろん、スターリンを言語学者として扱うことを意味しない。スターリンを通して語られた、一九、二〇世紀言語学のコンテクストからみた、ソビエト・イデオロギーについて述べることになり、また、そうならざるを得ないのである。

このような方法によってはじめて、ソビエト言語学と、それに終焉を告げた、「スターリン言語学」の意味が明らかになるはずである。

## 1 「民族」の定義の構造

### (1) 予備的考察

二〇世紀は「民族の時代」であった。それまで名前も知られなかった数多くの民族が自治と独立を求めて、世界の政治に参加するようになった。この動きはすでに一九世紀のヨーロッパで大きなたかまりを見せていたが、それは、あとで見るように、正統のマルクス主義から見れば、革命運動の主要な流れにさからう有害な動きであった。

マルクス主義にとっては民族の解放は、あくまで二次的なものであって、階級の解放に従属すべきものであり、決してその逆ではなかった。それはたしかに西ヨーロッパの先進地帯では、政治闘争について描かれた妥当な図式であっただろう。そこに「民族」の問題を持ち込むことは、革命にとって足手まといの、じゃまものであるに過ぎなかった。

しかし、革命の舞台がロシアに移ったときは、このような方法では、革命を提起することじたいがありえないことであった。「諸民族の牢獄」は、最初オーストリア＝ハンガリー帝国について言われた形容だったが、ロシアに革命運動が移ってからは、まさに、ロシアのために作られた形容としてぴったりだった。マルクス主義の元祖、長老たちが、無視して扱わなかった民族の問題を、ロシアでは、誰かがマルクス主義者として引き受けなければならなかった。レーニンは、かなりこの問題に没頭したが、はやばやとスターリンにゆだねてしまった。

スターリンは、エンゲルスがあれほど嫌った、「ごみくずのように、ふみつぶされて行く運命にある」小さな民族が、革命を機に次々に名のりをあげるありさまを、次のように誇示しさえしたのである。

十月革命は、古い鎖をたちきって、わすれられた多くの民族を登場させ、彼らに新しい生活と新しい発展をあたえた。(一九二五年)

しかし、この「民族」のかげには、極めて微妙な仕方で「言語」がかくされていた。民族の問題の大部分は言語の問題である。西欧では言語の問題は、普遍的な「文明」を表わす発達した文明語の普及によって、言語の問題のみならず、民族の問題もおのずと解消することを当然と考える伝統があった。だから、この問題にかかわるかぎり、古典的正統マルクス主義者は問題を解決するのではなくて、もともと本質的に存在しないものとして解消させてしまう、「解消主義者」だと呼んで誤まりではなかろう。

ロシアではその逆に、民族と言語の多様性を解消するどころか、強調し、かれらの自立——民族自決を励まさなければならなかった。レーニンは正統な立場を守って「解消主義者」となった、そのスローガンが「諸民族の接近と融合」(сближение и слияние наций)であった。このスローガンは一九七〇年代に至って、やっと現実味を帯びて、ブレジネフ憲法の中にとりいれられた。しかしスターリンにとっては、そのように、いつまでも同じ教科書の文句をくり返すわけには行かなかった。民族、なかんずく手ごわい「言語」の問題から離れるわけには行かなかった。一九五〇年に『マルクス主義と言語学の諸問題』が、かれによって書かれねばならなかったのには、ある程度の必然性があった。

## (2) 文明語の普遍性

ところで、言語のありかたは、民族のありかたがそうであるように、どこでも同じというわけではない。西ヨーロッパの知的伝統の中には、言語はそれほどに多様であるはずはなく、また多様であってはならないものだとする強い信念がある。

ラテン語がそうであるように、知的な言語は一つでなければならない。それは、多様性を前提とする文化ではなく、人類の進歩の目標の普遍性を表わす文明に結びついているものだからである。進んだ文明とおくれた文明があるように、進んだ文明を担う言語だけが用いられ、他は消え去るのが当然のことである。いな、人はむしろ進んでそれを消し去らねばならない。これは方言駆除の心理を思いあわせるならば、ただちに理解できるであろう。

言語が多様を必要としない、いな、多様はじゃまものであって、本来単一のもの、あるいは、単一に収斂できると、当然のように考えられるとしたら、それは、言語がほとんど「論理」と同義語のように見なされているからである。言語は、論理にかぶせる、単なる外被であって、それはまずオト、次いで文字であることにつきる。

論理がいかなる言語によって表わされようとも、それは普遍的なものであるから、言語の相異による影響を受けてはならない。もし、あれこれの言語にそのような、論理からはずれずれがあるとするれば、当然、論理を表わすのに、ふさわしい言語と、そうでない言語とがあるということになる。そのような場合には、ふさわしくない言語を矯正するか、それとも、そのような、人類の進歩におくれた、まちがった言語は廃絶してしまうか以外に道はなかった。もともと矯正しなければならないようなまちがった言語は、はじめからできが悪いのであるから、やめにしてしまうのが正しい道だということになる。

近代をめざすヨーロッパ世界では、国家を単位に、自らの言語（母語）が正しく、できのいいものだということを正当づけるための手続きが着々とすすめられていた。こうした手続きの必要性は、それまで知的世界を支配していた非母語——すなわち、根本から徹底的に勉強しなければ全く理解のできない言語（外国語、古典語）であるラテン語に死を宣告するとともに、母語がいかに有能であるかを立証しなければならなかった。

他方では、競いあう有力な母語=俗語の中から、特別にすぐれた母語を選び出し、他は雑草を取り除くかのように、根だやしにしなければならなかった。根だやしにするとと言っても、母語は話されてはじめて母語なのであるから、まず、母語の話し手に、自分のことばを話すことがいかにはずかしいかという恥の意識をたたきこむことから始まった。言語の近代はこのようにして出発したのであるから、近代の知的心性の奥ふかいところには、すぐれて規範的で立派なものは、自分のところにはないという深刻な自覚を残すことになった。これがあらゆる、ことばを使う学問の底に横たわるどれい根性であり、そのために、知的活動は言語的教条主義ぬきでは行われにくくなったのである。

さて、この母語への排他的忠誠と信頼を確立したのは、まずフランス語であった。一五三九年のヴィレール=コトレの勅令が、公務においてラテン語の使用を禁じたのは、フランス語の母語としての一大飛躍を保証するための法的措置であったが、しかし、それらはすべて言語にとっては外的であり、充分ではない。もっと重要なことは言語そのものの質への信頼である。言語としてのフランス語の文法が、ラテン語その他現代の諸言語にまさることを証明しようとしてみせたのが、一六六〇年の、いわゆる「ポール=ロワイヤル文

法」と呼ばれるものであった。この、ランスロー、アルノーの『一般的にして理性的なる文法』の末尾は、次のようなことばで結ばれている。

我々の言語は明晰さと、もつとも自然で、かつもつとも支障のない語順をもって能うるかぎり事物を表現すること、とを格別に好むからである。それにも拘わらず、それと同時に、我々の言語は美しさと優雅さにおいていかなる他の言語にも劣りはしないのである。(南館英孝訳)

誰にとっても、自分にとって、もつとも自然で支障のないことばは自分の母語である。そうでなければ、フランス語人以外は、生れると同時に、支障に運命づけられることとなり、生涯をかけてこの支障から脱出する努力を払わねばならないことになる。

日本語人にとって、フランス語の語順はすこぶる不自然で、支障のあるものだ。しかし、ヨーロッパで(おそらく)最初に、母語を洗練し、それによって何でもできるようになったと考えたフランス語人がそのような確信を抱くに至ったのは、自然なことであった。

いな、フランス語の普遍性——世界のどこへ持ち出しても、どんな領域で使っても、必要なあらゆることが表現できる能力——は、フランス語人以外も、それを信じた。プロイセン王のフリードリヒ二世が、一七八四年にベルリン・アカデミーの懸賞論文を募集した際の課題は次のようなものであった。

「フランス語をヨーロッパの普遍言語 (la langue universelle) にしたものは何であったか？ フランス語がこのような特権に値いするのは何によってか？ その特権を維持するものと見なすことができるか？」

この課題に対する受賞作品は、「明晰でないものはフランス語ではない」という名句で知られるようになった、リヴァロールの『フランス語の普遍性についての論』であった。

ここで注目すべきことは、ポール＝ロワイヤル文法が、フランス語の美質としてあげた「明晰」さが、そのほぼ二〇年後も同じようになりかえされているのみならず、ドイツ語を母語とする国家の大王と称される人までが、その普遍性を前提として論文を募ったことである。

その頃、言語は特定の民族や国家と不可分のものでなく、すぐれた文明や道具を外から輸入できるのと同様に、言語には境界がなかった。すなわちフランス語は、ヨーロッパ文明を代表するラテン語の後継者の役割を引き受けたのである。

今日のように、すべての言語には、それぞれ対等の権利があるのだというような思想は、その当時であれば、全く異常であり、そもそも、生れようがなかったであろう。

特定の言語だけが、文明を担う資格があるという思想は、フランス語の中に「文明語」(langue de civilisation) という表現を生んだ。もつとも、この語の意味には「文字をもった、書きことば」という使用法もある。文字は文明だからである。そうすると、文明語は一つだけではなく、民族が新しく国家を形成し、固有の書きことばを発展させれば文明語になり、文明語はかぎりなく増えて行くことになる。そこで、「文明語はあまり増やしてはいけない」という、メイエのような使い方が生れることになる。

### (3) エンゲルスの「歴史なき民族」の言語

特定の言語だけに文明を担う力があるという考え方は、とりわけ一九世紀のヨーロッパで隆盛をみた。

文明を担う力がある言語とされたのは、屈折語型のインド・ヨーロッパ語族であり、他の言語に対する優越性は、その言語がそなえる文法構造という、内的な特質によって説明されたのであって、決して情緒的、政治的な外的要因によってではない。

インド・ヨーロッパ語比較言語学は、このような雰囲気の中で生まれ育ったものであり、そこに人種論的な偏見が加わっていることは、ルート・レーマーによって詳しくあとづけられ (Ruth Römer, *Sprachwissenschaft und Rassenideologie in Deutschland*, München, 1985)、また、オリエンタリズムの中核の一つをなすことは、サイードによっても指摘された。

一九世紀普遍文明思想の一つの典型としてのマルクス主義が、どうしてこのような制約から免かれることができようか。マルクス主義の創始者の中で、とりわけ、言語についてのみならず、当時の言語学 (たとえばヘルマン・パウルの) をよく勉強したエンゲルスは、そうした文明語・文明民族の指導性を強調する代表的な人物であった。

一八四八年革命の際に、中部、東ヨーロッパの諸民族の動きを見ながら、エンゲルスが『新ライン新聞』に発表した論評の中には、次のような文章が見られる。

固有の歴史を一度ももったことのない民族、最初の最も未開な文明段階を登りつめた瞬間に、もう異族の支配下に入ってしまったたり、あるいは異族のくびきのもとではじめて、文明らしき段階にむりやり引きずり込まれたといったような諸民族は生存能力をもたないし、決して独立なんかできないであろう。(強調はエンゲルスの原文)

エンゲルスにおいては、民族は「歴史を担うことのできる」民族と、そうではない「歴史なき」民族とに分類された。エンゲルスがこのような判断を示した一九世紀の中ごろにおいては劣勢民族は優勢な民族が作る国家の中に吸収されて消えて行く過程が進行しつつあった。そのようにして、今日で言う「民族問題」は階級闘争へとまとまって行くのであるから、これは進歩への欠かせない過程であった。

もしこの過程を言語にうつして言うならば、「歴史なき」方言の、「歴史を担う」中央語、標準語、文明語への統合過程になぞらえられるであろう。「歴史なき民族」への——おそらくまた「歴史なき言語」への——エンゲルス、したがって、正統マルクス主義の態度は、このように、ためらいのない、きっぱりとしたものだった。そして、この「歴史なき民族」はその存在じたいが反革命的であって、進歩した文明へと吸収され、消え去るべきものとされた。言語についても同様であることは言うまでもない。

こうした考えかたは、かれの行文にはっきりと表明されている。

ヨーロッパには、自分の国のどこかの片すみに、一つくらいは滅亡民族の残骸をかかえていない国は一つもない。これらはかつての先住民族の残党であって、後に歴史の発展の担い手となった国民 (ナツイオン) によって追いたてられ、制圧された。ヘーゲルの言うように、歴史の歩みによって、無慈悲に踏みつぶされたこれら民族 (ナツイオン) の残骸、民族の屑は、完全に根絶やしになるか民族のぬけがらになるまでは、反革命の狂信的な担い手であることをやめない。というのも、そもそもその存在そのものが、偉大な歴史的革

命に対する反抗だからである。

エンゲルスはこう述べたあと、さらに、「その存在そのものが」反革命的である「民族のごみくず」の実例として、「スコットランドでは一六四〇年から一七四五年にかけて、スチュアート朝を支えたゲール人であり、フランスでは一七九二年から一八〇〇年までブルボン朝を支えたブルトン人であり、スペインではドン・カルロスを支えたバスク人である。そして現在のオーストリアでは南スラヴ人である」と列挙する。

これらの民族のくずをまとめあげて、歴史的発展の道に参加できるようにしてやったのは、ドイツ人とマジヤール人であったという。これらの民族名は、反革命的であるという点からとりあげているが、スラヴ民族一般については、そもそも「歴史のない民族」に数えている。

ポーランドとロシア人、それにせいぜいのところ、トルコのスラヴ人を除いては、スラヴ民族に未来はない。それは次のような簡単な理由による。上にあげた以外のスラヴ人には、独立と生存のための、何よりも必要な歴史、地理、産業の条件が欠けているからだ。

日本の左翼の中には、マルクス主義は民族解放の思想であり、民族解放戦線のための理論的基礎を提供するものだという通念がひろめられているが、マルクス、エンゲルスという、マルクス主義の始祖たちには、そのような配慮は全くなかった。少なくとも、「民族自決権」を中心にして論じられた形跡はない。さきのエンゲルスの発言からは出てくるはずのないものである。

「民族自決権」(Selbstbestimmungsrecht)ということばがマルクス主義者の運動の中で、争点としてはっきりと公式に登場するのは、エンゲルスが没した翌年、一八九六年のインターナショナル・ロンドン大会においてである。

民族自決権——スターリンのことばによれば、「それは、他の民族と連邦関係にはいる権利をもつ。それは、完全に分離する権利をもつ。民族は主権をもち、すべての民族は平等である」——は、いったい、普遍文明論から見て根拠があるのかどうかという議論はいつでも生ずる余地がある。

だからといって、お前たちはその存在じたいが反動的だから、民族であることをやめろと言われても、すぐにはやめられないのが民族である。

ここは、スターリンの言語・民族理論をとりあげる場であるのに、こうしてエンゲルスをくわしく引用しなければならなかったわけは、エンゲルスの想像をはるかにこえた、民族のくずにすらなれない、はるかそれ以前の段階にとどまる、二〇世紀に入っても文字すら持たなかった諸民族——これをスターリンはナロードノスチと呼んでいる——を論じなければならなかった、スターリンのフィールドをありありと浮かび上らせるためである。

一九二一年にスターリンが書いた「民族問題の提起によせて」は、それまで西欧ですすめられてきた社会主義運動とははっきり画されたロシアの共産主義者がとるべき固有の立場を述べている。ここでは、まず、「部分としての民族問題が、全体としての植民地解放の一般的問題と融合したことである」と指摘している。この、「民族問題」を「植民地問

題」の一部としてとらえる考え方は、エンゲルスを含む、ヨーロッパ文明の白人秀才知識人には生れようのない考え方であった。

スターリンの次の一文はわれわれ非ヨーロッパ人の心に強くしみ込み訴えかけてくる、味わうべきことばである。

第二インタナショナルの時代には、民族問題は通常、もっぱら「文明」民族にだけ関係のある諸問題の狭い範囲にかぎられていた。アイルランド人、チェコ人、ポーランド人、フィンランド人、セルビア人、アルメニア人、ユダヤ人、その他二、三のヨーロッパの民族体（ナロードノスチ）、——これが第二インタナショナルがその運命に関心をしめした完全な権利のない民族（ナーツイヤ）の範囲である。もっとも粗野な残酷な形で民族的圧迫をうけている数千万、数億のアジアとアフリカの諸民族（ナロード）は、いつも「社会主義者」の視野のそとにとり残されていた。白人と黒人、「非文化的」ネグロと「文明化された」アイルランド人、「おくれた」ヒンドゥー人と「開化した」ポーランド人、——これらの民族を同列におく決心が、かれらにはつきかねたのである。ヨーロッパの完全な権利のない民族を解放するためにたたかう必要はあるにしても、「文明」を「維持」するために「必要な」植民地の解放をまじめに論じるのは、「お上品な社会主義者にとって」まったく不似合いなことだと暗黙のうちに考えられていたのである。これらの社会主義者たち——といっってははばかりがあるが——は、ヨーロッパにおける民族的圧迫の廃止は、帝国主義の圧迫からアジアとアフリカの植民地諸民族を解放しないでは考えられないこと、前者が有機的に後者と結びついていることは考えてもみなかった。

この一節は、ヨーロッパの研究者にも、日本の研究者からもあまり注目されていないようであるが、ここにはロシア革命の特質、そして、とりわけスターリンの、言語・民族理論にのぞむときの基本的立場を読みとくかぎがあると思われる。西ヨーロッパ産のマルクス主義とは異なり、スターリンには、まず、「搾取するヨーロッパ」と「搾取されるアジア、アフリカ」という対立があり、ヨーロッパの「文明」は、非ヨーロッパの搾取によって維持されているという認識があった。

そして、ヨーロッパで提起されている民族問題は、「文明」民族の立場から行われていて、そこで対象になっているのは、エンゲルスが掲げているところの、「民族のくず」にあたるアイルランド人、チェコ人等々である。

アジア、アフリカの植民地を忘れて、ヨーロッパだけに範囲をかぎって論じている「お上品な社会主義者」とは、まさに、エンゲルスのことをあてこすって言っているようにさえ感じられる。「お上品な」と訳されているもののロシア語は、порядочный（パリヤードチヌイ）で、この訳はうまい訳だが、さらにその語根となっている「パリヤードク」——秩序、規律——の意味から考えると、「規律からはずれないようにしつけられている」「行儀のいい」という意味にとると、なかなかよく利いた皮肉である。

ヨーロッパのマルクス主義にとっての民族問題はパリヤードク——きまった秩序、つまり「文明」の枠——の中で扱えるかもしれないが、ロシアにあってはそうは行かないぞという、スターリンがそこに立っている固有のフィールドを強調しているのである。

スターリンは、ヨーロッパのマルクス主義が、かつて、経験したことの無い固有のフィールド——それをユーラシアと言っておこう——に立って、理論を展開しようとしたとき、正統マルクス主義の経典の中には、ほとんど依るべきものがないことに気づいたのであろう。

ヨーロッパで、「歴史なき民族」、「民族になれないくず」をかかえていた代表的な国家は、オーストリア＝ハンガリー帝国であった。ここは、少なく見積っても一〇の民族から成り、言語問題はしばしば国家のわく組みを根底からゆるがす重要項目であった。

今日やっとアカデミックな言語学でもとりあげられるようになった、言語の地位、すなわち、言語ステイタスを表わす概念や、法律によって言語の権利を保障するための言語立法が、すでに一九世紀において最もさかんに論じられたのはオーストリアであった。複数の言語の使用を保障した上で、国家共通の業務語としての、シュターツシュプラーヘ (Staatssprache)、すなわち、「国家語」という概念が、はじめて議会で提唱されて議論になったのもオーストリアであった。それは一八四八年のことであったと言われている。そしてやがては、一八九九年のオーストリア社会民主党のブリュン綱領の中にもとりあげられることになるのである。

文明語の前に、他の劣勢民族の言語は滅びればいい、いな滅びるべきだと考えて何も問題もなしにすませたマルクス主義の始祖たちとは異なり、オーストリアの社会主義者たちは、この問題を避けて通るどころか、前面に押し出さざるを得なかったのである。

かれらがやったしごとの中で、最も注目されたのが、R・シュプリングァー (カール・レンナーの筆名) 『国家を求めるオーストリア諸民族のたたかい』 (一九〇二年) と、オットー・バウアー 『民族問題と社会民主主義』 (ウィーン、一九〇七年、第二版、一九二四年) であった。

スターリンは、これらの著作をロシア語訳で読んだことがその引用でわかる。シュプリングァーもバウアーも一九〇九年にロシア語訳が出ていたのである。

このオーストリアの論客たちは、あるべき民族政策を求めて、その基礎となる、民族なるものの概念をつかまえようとした。

日本の知識人たちの、伝統的なおきまりの話題の一つが、「民族の定義」である。その議論の大半は、どうでもいいような、サロン向きの、ひまつぶしの話題であることを経験によって私は知っているから、私はいまでは、そういう議論には乗らないようにしている。最近のモダンな、まったくどうでもいい話題として見出されるのが、「お上品な」「人類学者」という人たちのもとであって、そこでの議論をつきつめて行くと、民族という概念そのものが不要だというふうに話が落ちつくことすらある。私にはそうした「民族談義」は「バブル」談義のように感じられる。

しかし、オーストリア、とりわけロシアでは、そういう茶飲みばなしの議論で終わることはできなかった。その議論で出された結論は、問題になっている民族のステイタス (地位) にかかわるものであり、行政上の処遇を決定するものである。その民族の母語が、価値のないもの、あるいは固有のものでなく単に方言だとされれば、その独立の存在は認められず、母語の使用の権利も認められなくなるのである。だからこそ一九三七年、ソ連では、民族と言語の認定に関する党の公式見解に同意しない、数多くの民族学者と言語学者が亡き者にされたのだ。

しかしこのような議論に「自由世界」の言語学者はほとんどたずさわらなかった。こう

した議論に、真に聞くべき研究の方向を示したのは今世紀の後半におけるハインツ・クロスの一連の仕事である。

さて、オーストリアの理論的指導者の中で、執拗に民族問題を論じつづけたのは、オットー・バウアーであった。かれの一九〇七年に出された書物は、その後、カウツキーの批判に対する答えも含んだ新版が、一九二四年に刊行された。その新版が出たときには、ソビエト連邦という現実が成立していた。その現実を目の前にしながら、バウアーは「社会主義の多様性」が不可欠であることを説いたのである。「同じ資本主義的搾取というできごとに対して、イタリアの労働者階級は、スウェーデンのそれとは別の反応を示した」ように、労働運動にあつてさえ「民族的性格」のちがいが出るのであるから、「一民族の〔他国の〕党の独裁にゆだねてはならない」と説いたのである（一九二四年版序より）。

#### (4) カウツキーに学んだスターリン

バウアーのこのことばからその一端がうかがえるように、オーストリア・マルクス主義の、「民族」を決定する基本要素は、「民族的性格」である。ドイツ語ではナツィオナル・ハラクテル Nationalcharakter となっている。ここで、もとのドイツ語の形を示すのは、学問めかしくしたり、知識をひけらかすためのペダントリーではない。あとで見ると、こうした議論を行うばあい、いかにセマンティクスが重要な役割を演ずるかを見るであろう。セマンティクス、つまり、それぞれの言語に固有な意味世界は、民族的性格のちがいを知るための最も身近だが、客観的分析の手におえない領域である。

バウアーは、全体が五七六ページに達する大著、『民族問題と社会民主主義』の第一章を「民族」とし、その冒頭で扱われるのが「民族的性格」である。バウアーは、そこではあたかも生物学者、遺伝学者のようにして現われ、さらに心理学の学識をふんだんに用いながら、「ある民族を、他の民族から区別する、肉体的、精神的めじるしの複合体を、とりあえず民族的性格と呼んでおこう」というところから論をすすめて行く。そしてこの民族的性格は、その民族のものの考え方、感じ方を規定しており、学問、芸術、モラルはもちろん、革命運動の性質そのものにおけるちがいとしても現われるというのである。

このような民族のとらえ方は、政治的であるよりはるかに文化的であり、個人のレベルでみれば心理的である。だからバウアーの考えた、民族問題の解決法は、民族としての性格=文化を共有する人たちが、地域をこえた、一つの文化共同体として、国家の中で自治の単位をなし、行動することであった。

このような「民族」のとらえ方にただちに反論を加えたのが、カール・カウツキーで、その論文は『ノイエ・ツァイト』誌の別冊として、一九〇八年一月に発行された「民族性と国際性」である。日本語ではこのように訳すしかないが、原文は、Nationalität und Internationalität であるから、「国際性」というところをあえて原文に即して言えば、「民族間性」ということになる。

この論文は、わずか三六ページの短かいものであるが、緻密に書かれていて、後のソビエト言語政策の重要なものは、すべてここから出ていると言っていいくらいである。

もう一度くり返して言おう。ソビエトの言語・民族政策の原則は、ほとんどすべて、一九〇八年のカウツキーの、『ノイエ・ツァイト』別冊のこの論文から出ているのだ。

それにもかかわらず、現代のソビエト研究者もマルクス主義者も、そこにふれた人がい

ないのには——私だけが知らないのかもしれないが——いくつかの理由が考えられる。

第一には、ロシア・ソビエトの研究者が、ドイツ語の論文に親しまないという単純な理由からかもしれない（しかし一九一八年のロシア語訳があるということだ）。しかしこの理由は、一見そう見えるほどに単純ではない。ロシア・ソビエトの理論史を、それ以前、あるいは、周囲から切りはなして孤立させて扱うという、とりわけ日本の伝統になっている悪習のせいでもある。

しかし、私はもっと深刻な、救いがたい理由の方があっていると思う。それは、レーニンが一九一七年に書いて、ひろくひろめられた『プロレタリア革命と背教者カウツキー』という論文のせいだ。「背教者」と訳された、カウツキーにかぶせられた、このののしりことばのもののロシア語「レネガート」は、フランス語（イタリア語とも言われる）から借りてきたもので、renier（ルニエ）つまり「(神を) 知らぬ、認めぬ」という語から出たらしいから、宗教を否定した人としては、もっとほかの言い方がなかったかと思われるのだが、とにかくこの「烙印」によって、マルクス・レーニン主義信奉者の多くが、カウツキーは、マルクス主義とソ連を知るうえで有害かつ無用の人と考えてしまったことは充分想像できる。ましてや、わざわざそんな人の著作を読みたいなどという要求は、正常な活動家の中からは生れようがなかったのである。

ところが、ソビエト民族理論の中核部分は、まったく、このカウツキー論文を下敷きにしていることが、すなおに読んでみるとよくわかる。そのことを検討するに先だって、一九一七年にカウツキーを「背教者」（あるいは訳しようによっては、「裏切り者」「変節者」となろう）と呼んだレーニンが、その四年前には、いかに、この「背教者」に深く帰依していたかを示す読書ノートが残っている。

それは、ロシア語版レーニン全集第二四巻に収められている、「民族問題についての報告メモ」と題されているもので、レーニンが、バウアーとカウツキーとを対照させて、いかにカウツキーに多くの共感を見出したかが短かく、鋭いメモの中にはっきりと読みとれる。その中で、特に注目しなければならないのは、バウアーが、民族を「文化共同体」であるとしているところを、カウツキーが、それをより明快に「言語共同体」とし、さらに民族が「テリトリー」の所有によって特徴づけられるという点を、レーニンは見逃さなかったことである。レーニンは、このいずれをもドイツ語の原文で読み、とりわけ、「カウツキー」「言語」「テリトリー」と書き出し、その部分にNB（注意せよ！）のマークを印している。

さらに、その四ページあとには、「国家語、その不必要性」という書き込みがある。これはカウツキー論文に引用されている、オーストリア社会民主党のいわゆるブリュン綱領の第五条を要約したものである。

この、カウツキー論文からの小さな書き込みは、その誕生から消滅の最後に至るまで、ソビエト連邦の言語・民族政策の全行程を決定づけてしまったのである。「特定の言語に特権を与えない」との原則から「国家語を定めぬ」としたブリュン綱領の原則を、レーニンは生まじめに、そのままロシアに適用して、「強制的国家語は必要か？」（一九一四年）という一文を発表し、憲法の規定の中で、強制的国家語を定めてはならないと結んだのである。

ソ連では、ロシア語が事実上の国家語になっていたのにもかかわらず、理論上は国家語

の制定が厳しく禁じられていたのは、レーニンの、この三ページばかりの小さな論文の威力によるものである。

ソビエト初期の理論家指導者たちの、こうした理論上での潔癖さには、今読んでも敬服させられるところがある。ソビエト初期の指導者——そこにはもちろんスターリンも入る。そして、ここで見なければならぬのは、「ソビエト初期の」スターリンであって、四〇年前後から後のスターリンからは、とりあえず独立させて見て行くことにしよう。

#### (5) スターリンに見る母語の尊厳

レーニンがカウツキーの論文を読んでいた頃、スターリンは、一九一二年一二月末から翌年の二月中旬まで、クラクフとウィーンに滞在した。その間に、かれはあの影響力の強い、世界中に多くの読者を見出した「マルクス主義と民族問題」を執筆していた。とりわけ、その中に現われる「民族の定義」は、議論が錯綜してくると、人々はふたたびそこへもどってきて、もう一度議論を組みたてなおすのに用いられた。この論文の末尾には、「ウィーン 一九一三年一月」と、その脱稿の日付が記されている。

私は一九六五年、はじめてドイツに留学したときの翌年、ウィーンの観光バスに乗ったところ、イタリア語とドイツ語で陽気に説明するガイドが、ほら、ここにスターリンが住んでいたのですよと特別の注意を向けたので、その時、私はスターリンはウィーンに居たということをはじめて知ったのである。それは、市内からシェーンブルン宮殿に向う途中にあった。

今でもそのような案内をするガイドがいるのか、あるいはガイドブックに記されているのかどうか私は知らないが、今から三十数年前には、ごく普通の観光客でも、スターリンに関心があったのだらうと思われる。

レーニンが、バウアーとカウツキーを、ドイツ語のテキストをつき合わせながら読んだのが、全集の注記どおり、一九一三年の九月だとすれば、スターリンはそれより前に、おそらくレーニンから、「あれをちゃんと読んで、論文を書いてみろ」と宿題を与えられていたにちがいない。ヨーロッパかぶれで、やたらに英語やドイツ語をまじえて話すのが好きだったレーニン（そのことはセリシチェフの『革命期の言語』に書いてある）、「お上品な社会主義者」のまじめな生徒レーニンは、カウツキーをきちんとドイツ語の原文で読んだかもしれないが、スターリンは、たぶん、主としてロシア語訳を使ったであろう。

しかし当時、スターリンのロシア語を書く能力はどのくらいだったろうか。グルジア人であったスターリンは、一九〇五年頃までは、もっぱらグルジア語で書いていたというから、それほどさえたロシア語は書けなかったかもしれない。そのかわり、この論文には、グルジア語の新聞なども利用されていて、オーストリア式社会主義民族政策の単なるなぞりや焼きなおしではないぞという意気込みのようなものが現われている。

とにかく、その時、三三歳になったばかりのスターリンにとって、この論文は重い宿題であった。しかしその出来ばえは、レーニンが、ロシア社会民主党の民族綱領の基礎については、「まっさきに、スターリンの論文をおすことができる」（一九一三年一二月）として、民族理論の全体を、スターリン論文にゆだねているほどのものだったのである。

この論文を、「スターリン言語学」へつながって行く流れの一部を構成するものとする

べきかどうかという議論はここではくりひろげないでおこう。

しかし、スターリンには、まずロシアの民族問題——そこには、なによりもかれの故郷のグルジアの民族問題の体験があった——を解くという包括的な課題があり、その中で当然民族問題をなす中心的要素である言語の問題へとすすんで行ったものと解釈していいだろう。

このような見通しから、一九五〇年の、いわゆる「言語学に関するスターリン学説」と称されるようになった、『マルクス主義と言語学の諸問題』に至る時期を、実際の政策ではなくて、スターリンの発表した著作に沿ってたどって行ってみよう。

そうすると、私としては、四つの段階に区分するのが便利であろうと考える。

第一期は、「マルクス主義と民族問題」に代表される、民族と言語についての考え方が定まって行った時代。

第二期は、一九二五、二九年の演説に見られる、抑圧されていた少数民族語解放の進行を誇示した時代。

第三期が、N・Ya・マルと、それ以上に秀才で有能だった、イワン・イワノヴィチ・メシチャニノフの言語学「言語についての新しい理論」、もしくは「ヤフェティード言語学」をソ連の公認言語学として奨励した時代。この期に、スターリンはメシチャニノフには二度、マルには一九三四年、その没年に、スターリン賞を贈った。そして、

第四期として、一九五〇年にマルの理論を自らの手で全否定するために『マルクス主義と言語学の諸問題』を発表した時期をあてることにしよう。かれの論文の中で、正面から「言語学」をテーマに論じたものはこれ一つだけであるが——そんなことはたびたび起きることではない——、しかし、ソビエト言語学史の流れからみたその重みははかりしれないものである。なぜなら、言語問題ではなくて、言語理論、言語学そのものをテーマにかかげて論を張った党人はいなかったからである。その内容は、「理論」というよりも、理論についての政策、すなわち、イデオロギー批判と言うべきだろう。

この論文が、ソビエト・イデオロギー史のなかで、まともに論じられたことは一度もない。ドイッチャーの『スターリン』は、一九四六年で終わっているだけでなく、「一つの政治的伝記」と副題がつけられているように、それが、ドイッチャーにとっては、おそらく、とるにたらない、小さな学問領域である「言語学」までには配慮が行きとどかなかったからであろう。

しかしドイッチャーによる伝記の六一年の新版には、「スターリンの晩年」と題する追加の一章が加えられ、そこでは、この論文について次のように述べられている。

「スターリンは彼自身の貧弱な語学力を棚にあげて——彼は一つの外国語の初歩的基礎しか知らなかった——言語学理論、言語、スラング、方言間の関係、聾啞者の思考過程、遠い将来に現われる単一な世界語について詳論した。彼はかなり自由主義的なポーズで随所、うわべを飾りながら、マル学派がソヴェト言語学を独占したことをなじり、反対意見の弾圧に抗議する態度をとった。」(上原和夫訳)

この評価には、大筋において同意できる。しかし「貧弱な語学力」であったかどうかは別である。かれはロシア語で読み書き話す以前にグルジア語を母語に持っていた。ロシア語はスターリンにとって、いわば外国語であり、グルジア語をドイッチャーは、言語として認めなかったのかもしれない。しかしこのことは、スターリンの言語に対する認識を考

える上で、すこぶる大切なことである。「お上品な」西欧知識人が見逃しやすい点であろう。

「初歩的基礎」しか知らない「一つの外国語」とは何語を指していたのだろうか。もしかしてドイツ語だろうか。しかし、今日の日本にも、専門の言語学者であって、そのような人はたくさんいる。私も含めて。ましてや、政治家においておや。ゴルバチョフやエリツィンについてもスターリン以上であるとはとても言いがたいのである。

とにかく、このようなことを理由に、ある人物の仕事をおとしめようとするのは、「政治的伝記」の弱点であると言えるだろう。

以上で前置きと背景説明をきりあげて、第一期の「民族論」から順に見て行くことにしよう。

#### (6) 民族の定義における「言語」と「地域」

「マルクス主義と民族問題」（一九一三年）は、短かい前置きのあとで、まず「民族」からはじめられる。それは、あたかも、バウアーの『民族問題と社会民主主義』（一九〇七年）に、そのまま対応させて書かれたかのようである。

その書き出しは、

「民族（ナーツイヤ）とはなにか？」

とはじめられ、それは「人々の一定の共同体」であるが、「人種的、種族的な共同体」ではなく、「歴史的に構成された共同体」であるとする。これは正しい。民族は人種や種族をこえた単位である。

では、この「民族的共同体」は「国家的共同体」とどちらがうのかと設問をたてて、次のように答える。前者は「共通の言語なしには考えられないのにたいして、国家にとっては共通の言語は、かならずしも必要ではない」として、オーストリアとロシアの例があげられる。

この指摘は一見平凡で、当然のことを言っているようだが、そうではない。特に日本の読者にとってはよく考えてみなければならぬところである。ここで強調されているのは国家は当初から複数の民族、したがって、複数の言語を含み得るという原理である。さらに、国家内に複数の言語が存在することは、「オーストリアやロシアの統一をさまたげるものではない」と展開したあとで、

だから、言語の共通性ということは、民族の特徴の一つである。

というところに導かれる。

ところで、共通の言語による「長いあいだの共同生活は、共通の地域（テリトリー）がなければ不可能である」。

だから、地域の共通性ということは、民族の特徴の一つである。

「だから……は民族の特徴の一つである」という同じ定式を用いて、民族を規定する四

つの「特徴」あるいは特質が列挙される。

たしかにドイツチャーの言うように、スターリンの文体の、この単調さは「貧弱な語学力」の現われかもしれないが、こみいった紙の上でのエクリチュールになれない労働者大衆にとっては、とらえやすい表現だったかもしれない。

一説にスターリンの文体は、神学校に学んでいた頃身につけた、聖書の文体が形づくったものと言われる。それがほんとかどうかは別として、ロシア語の初学者にとっては、レーニンを読むよりもスターリンの方がわかりがよく、はるかに励みになることはたしかである。

このようにして「民族の特徴」には、言語と地域の共通性に次いで、「経済生活の共通性、経済的統合」と、「文化の共通性のうちにあられる心理状態の共通性」があげられる。

こうして、われわれは民族のあらゆる特徴をかぞえつくした。

民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあられる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である。

というふうに定義が示されるのである。日本では、左翼的な著作——とりわけ歴史学者の——で、何度この定義がくり返されたことであろうか。

いな、日本だけではない。日本で民族の定義を語ることは、いわば、左翼サロンの趣味の話題であって、それがどのように変わったとしても、大した問題ではない。

しかし、現実には、多民族を擁し、その一つ一つが民族であるか否かの資格認定を行うに際しては、この定義に合うか合わぬかで、民族としての認定がとり消されるおそれすらあるのである。今日、中国で公認されている、漢民族以外の五五の少数民族（中国では、この「少数」というのは、「数が少ない」という意味ではない。たとい、数百万の人口が数えられ、他の場所であれば、充分一国家を成す勢力であったとしても、漢民族以外は少数民族と呼ばれる）は、だいたい、このスターリンの「民族」定義によって行われたのである。

この定義は、素朴なスタイルで書かれているだけに、いっそう、「民族」の認定現場では、大衆的に使い勝手がよかった。ペダンチックな定義は、実務の現場では役に立たないのである。

しかし、「……心理状態」うんぬんのまわりくどい言い方はいったい何だろうか。スターリンにしては似つかわしくない文章である。

こういうまわりくどい言い方は、書き手がするっと通りにくい個所だからこのようになる。それがもっとさっぱり、すっきりと言えないわけは、bauerやカウツキーが同様なことを述べた文章とつき合わせてみればわかる。これについては、あとで述べることにして、ここでは、スターリンが、民族を定義するにあたって、いかにカウツキーに依存しているかを先まわりして述べておこう。このあたりの叙述は、カウツキーが、bauerを批判した「民族性と国際性」なしには生れ得なかったものである。しかし文中にそのことは述べられておらず、もっぱらbauerが、スターリンの考える民族の原理に反する批判の対象としてとりあげられている。

さて、その後「定義」として持ち出される、民族たる四つの特徴づけに、言語が持つ重さは言うまでもないことで、これもあとでゆっくり考えることにしていまはそれについてはふれないでおこう。

しかし特別の意味をもち、決して見逃してはならないものとして、まず「地域」をあげなければならない。

スターリン——そしてレーニンにとっても、「地域」は単なるかざりではない。そうではなくて、オーストリア社会民主党の「文化的自治」に対するきっぱりとした反論である。オーストリアのそれは、まさに個人単位の、民族=文化的所属を基準にしたものであって、そこでは、少なくとも理論上は、地域ぬきの民族自治が可能なのである。つまり、ペルゾナルプリンツィプ（属人原理）と呼ばれるものである。

民族の要件に地域の要件を入れることで、まず基準にはずれるのがユダヤ人である。

日本でも、アイヌ人は調査では確認できない、数万の人口が大都市などにかくされていると言われる。もし、北海道の特定地域に、ある程度コンパクトなアイヌ人テリトリーを持たなくなれば、アイヌ人はもはや「民族」としての資格を、この定義によれば失うことになるのである。

「言語の共通性」を消し去るのには何世代にもわたる執拗な努力が必要かもしれないが、「共通の地域」を奪うことは、極めて短期間に、暴力的に行うことができる。

ここに、一九四〇年代、対独戦争中に行われた、劇的な例の一つを紹介しよう。

ヴォルガの下流が、カスピ海に注ぐあたり、その右岸、つまり、ヨーロッパ側にあったカルムク自治共和国の例である。

カルムク共和国の基幹民族はカルムク人であり、かれらはモンゴル語の西部方言の一つを話している。もと、今日で言う中国の新疆ウイグル自治区のジュンガル盆地に遊牧していたが、一七世紀はじめ、大挙して、ヴォルガ河下流域に移住し、仏教を奉じたまま、ロシアの臣民となったものである。カルムク人は、モンゴル族のうち、ヨーロッパ部に住む唯一の支族で、それゆえ、ヨーロッパ人の探険隊や伝道団が最初に出会ったモンゴル族である。ナポレオンの軍がモスクワを攻めたときには、弓と矢で武装したカルムク人の騎馬の一隊が奮戦して、ヨーロッパの注目を浴びた。

カルムク人は常に先進的で、一九二〇年には、ソビエト政権下でいち早く自治区となり、三五年には自治共和国に昇格した。

しかし、第二次大戦中の一九四二年、ヴォルガ沿いの一帯が、ナチス・ドイツ軍の占領下に入ったとき、一部のカルムク人は、ソビエト政権の支配を脱する好機とばかりに、ドイツ軍に協力したと言われる。だが、ソビエト軍がドイツを追い出した後、カルムク人にはそのために徹底した懲罰が加えられた。

すなわち、自治共和国を解体し、約一〇万人のカルムク人を貨車に乗せて、中央アジア、シベリアに運んでばらまいたと言われる。このようにして、地図の上から一夜にしてカルムク自治共和国のテリトリーは抹消され、統計の項目から、カルムク民族も、カルムク人も消えたのである。一九四三年一月二八日のできごとである。

スターリンは、さきのように、民族を特徴づける四つの項目をあげた後に、これらの

すべての特徴が同時に存在するばあいには、はじめて民族があたえられるのである。

と述べている。カルムク人は、一九五八年に名誉を回復されて、分散させられていたシベリア、ウラル地方から故土に帰還し、再び自治共和国は再興され、ソビエト解体後は共和国となった。テリトリーは回復され、保証されたのである。

カルムク人は、全民族が流刑地にあったとき、相互の接触を禁じられて孤立して住んでいたときでも、親は子供に民族の英雄叙事詩ジャンガルをうたい、ことばを伝えた。ことばが生きのびるのに、極めて不利な状況であったにもかかわらず、簡単には消せなかった。しかし、地域、テリトリーは、この例で見るように一夜にしてなくすことができる。だから、この四項目を構成する地域の意味は極めて大きいことが、カルムク人の例からも明らかにできるであろう。

#### (7) 「心理状態」とは？

では次に、「文化の共通性のうちにあらわれる心理状態」という、ややこしい言いまわしの項目の検討にうつることにしよう。

ここに「心理状態」と訳されたスターリンの原文では、психический склад (プシヒーチエスキー スクラート) で、スクラートは、語源的にみると、「いろいろな材料から、ある一定の状況のもとで、できあがる、形成される」というような意味で、からだのつくり、心や性格のできぐあいを指すから、「心理的な状態」と訳すよりは「心理的つくり、心理構造」と言った方がよい。なぜなら、すくなくとも「心理状態」は「変化」するが、スターリンが表現しようとしたのは、「文化の共通性のうちに現われる」民族特有の「変らぬ心理的構造」を指しているのだから、「人の性格は変わらぬものだ」というときの「性格」を表わしている。

だから、まわりくどい言い方を避けて、簡明に意味を説明しようとした、オジェゴフの『ロシア語(露々)辞典』(一九五二年)は、「考え方や習慣のさま」とした後、これを、ずばり、「何かの характер (ハラクテル)」と言いかえているし、また、ソ連のすぐれた英語学者スミルニツキーが作った『露英辞典』(一九五二年)では、スクラートの見出し語そのものに続けて、かっこに入れて характер を添えている。いまこれらの辞書を用いたのは、スターリン論文が現われたのと同世代のものだからであり、とりわけオジェゴフの「ナーツィア」(民族)の項を引くと、スターリンによるこの語の定義がそのまま引かれているといったぐあいである。だから、この期のスターリンの論文を読むには、なるべくそれと同世代の辞書を見るのが適切な方法である。

さて、以上の辞書の記述が物語っているのは、スクラートは、ハラクテル(性格)の同義語だということである。つまり、この二つは、ほとんど等価でとりかえられるということの意味している。等価ではあるが、ただ一つ等価でない点がある。それは、ハラクテルの方は、オットー・バウアーが民族的性格(Nationalcharakter ナツイオナルハラクテル)というふうに用いたせいで、いわば汚れたことばなのである。

さらにもう一つの理由としては、ハラクテルが外来語であるのに、スクラートはロシア固有語だということもあるかもしれない。スターリンのテキストには、いろいろなところで、なかなか巧妙で神経のこまかい語彙の選択が行われていて、彼のことを一口に粗野だなどとは片づけられないところがある。かれは、表現においても、なかなかの戦略家だっ

た。

スターリンは、カウツキーにそのままならって、この民族的性格という表現を次のように攻撃している。

では民族とはなにか？

「民族とは、性格の相対的な共通性である」

だが、性格、このばあいには——民族的性格とはなにか？

……

バウアーは、もちろん民族的性格が天からふってくるものではないことを知っている。だから、彼はつぎのようにつけ加えている。

「人々の性格は、ほかならぬ彼らの運命によって決定される」。「民族とは運命の共通性にほかならず」……

というふうに話を運んで行き、結局、民族の特徴づけの中から、民族的性格ということばを排除しようというところにねらいがあった。

ところで、この日本語訳をよりよく理解するためには、「民族とは運命の共通性にほかならず」というところは、「民族とは、運命共同体にほかならず」と訳した方がわかりやすい。いな、そのように訳すべきである。ロシア語の *общинность* (オプシチノスチ) は共通性、共同体のいずれにも訳することができるが、ここでは、オットー・バウアーの原文 *Schicksalgemeinschaft* に言及しているのであるから。

スターリンは、「性格」を追い出すために、これだけの苦勞をしておきながら、

もちろん、心理状態、または——別の呼びかたをすれば——「民族的性格」は、それ自身では、観察者にはとらえがたい、あるものである。

というふうに、せっかく自分で築きあげた土台を、「別の呼びかたをすれば」などと妥協して、自らの手でめっちゃめっちゃにこわしてしまっているのは、根が正直だったからかどうかはわからないが、読者へのこのサービスは正直以上にうかつだったと言うべきだろう。つまり、これではバウアーの「性格」を認めてしまったことになるからだ。

オーストリア・マルクス主義の民族理論には、もともと生物学主義的物質主義の傾向が強く現われていて、バウアーの著作を読むとき、我々はそれにへきえきしてしまうことがある。たとえば、「自然の共通性と文化の共通性があわさって、＜ゲルマン的民族性格＞を作る」といったようなくだりには。

カウツキーが鋭くそこに注目し、より観念的でない「言語」に還元しようとした努力のあとをレーニンは見逃さず、かれのメモの中にしっかりと残している。しかし、スターリンは、「民族」の特徴づけに負わされた、「言語」のこの重い意味を、いわば当然のこととして見過し、レーニンのように理論的にそれを深く、深刻に受けとらなかつたのではないかと思われるふしがある。それにもかかわらず、かれの著作の随所にあらわれた「母語」が持つ意味の強調には大いに注目しなければならない。

## (8) 母 語

マルクス主義は社会の発展の普遍性を、おそらく、言語的思考の普遍性にも結びつけるだろう。このような普遍主義から出てくるのは、必然的に進んだ言語と、おくれた言語という認識を当然のこととして生むであろう。

そうすると、おくれた民族、エンゲルスのことばを使えば「歴史なき民族」は、歴史の発展の過程でその存在をやめ、「歴史を担う」大民族の中に合流し、融合するはずである。じじつ、世界史は、その黎明期から今日まで、たえまなく、この過程をおしすすめてきた。したがって、そのような「くずとなった民族」とともに、その言語も消し去ることによって、文明語を発展の武器として使うことができるようになる。

こうした認識からすれば、民族語の保護はあくまで過渡的な措置であり、いずれは消滅しなければならない。

しかしスターリンは、この点においては西欧マルクス主義者とは全く異っていた。この一九一三年論文の次の個所は特に注目すべきであろう。

自由な移転の制限、選挙権の取上げ、言語の圧迫、学校の縮小、その他の圧迫手段は、ブルジョアジー以上ではないとしても、それにおとらず労働者をいからせる。このような状態は、従属民族のプロレタリアートの精神的能力が自由に発展するのをさまたげうるだけである。集会や演説会で母語をつかうことがゆるされず、学校が彼らにたいしてとどざされているとすれば、タタール人だってユダヤ人だって、労働者の精神的才能の完全な発展などということをまじめに論じることはできない。

前半の、「……いからせる」までは、政策にかかわるだけで、言語の本質にふれるものではない。しかし後半部においては、母語の使用がなければ、「精神的能力」や「精神的才能」の発展が期待できないとしているところは、極めて本質的で核心にふれている。

いったい、スターリン以前のマルクス主義者で、このような経験と洞察に満ちた言語観を示した者がいるだろうか。エンゲルスならば、きっと、かれらの、おくれた、ひん曲った母語を、りっぱな文明語でとりかえなければ、民族の未来はないと言ったはずであり、げんに、オットー・バウアーは、「イディシュで教える、ユダヤ人学校に学ぶこどもの頭の中には、どんな思想が宿るだろうか」と言ったのである。バウアーはイディシュのことを、「腐ったドイツ語」(verdorbenes Deutsch)と呼んだ。ところが、スターリンは、ユダヤ人の母語の教育までも、「精神的能力の自由な発展」のために必要だとさえ述べているのである。

当時、バイリンガル教育の中で、たとえ外国語の獲得が目ざす目的であるとしても、その十分な獲得は、母語の土台があって可能になるのだ、母語の教育をおこたってはならない——というような議論があった。これは、今日の日本でも、子供に早期の英語教育をあせる教育ママたちをたしなめるための、いささか民族主義的トーンを帯びたことばとして利用されているが、スターリンは、少数民族の権利の主張の中で、母語の権利を必須なものとして認めていたということができる。このことは、政策面から、もう一度次のように強調されている。

少数民族は、民族的結合体のないことに不満なのではなく、母語をつかう権利がないことに不満なのである。彼らに母語をつかわせよ、——そうすれば不満はひとりでなくなるであろう。

少数民族は、人為的な結合体のないことに不満なのではなく、自分自身の学校をもたないことに不満なのである。彼らにその学校をあたえよ、——そうすれば、不満はあらゆる根底をうしなうであろう。

この母語とそれを教える学校を保障する、それが民族の解放につながるという考え方を、スターリンは一度もとりさげなかつただけでなく、一九二〇年代に入っては、それがソビエトの民族政策の顕著な特徴になったのである。

## 2 一九二〇年代のスターリン

### (1) 少数言語の解放者

私がこの章で扱おうとするのは、スターリンが特に「言語」そのものやその研究に限定して行った発言ではないので、ふつう「スターリン言語学」について論じたり語ったりする人の注意にはのぼらない。しかし、一九二〇年代という世界での状況を考えると、極めて重要な発言であり、もしかして、これがスターリンの全生涯を通じて言語についての発言の中で最も重要なものでないかと思われる。

その一つは、クートヴェ（KYTB）と略称される「東方勤労者共産主義大学」の創立四周年を記念して、その学生たちを前に行われたあいさつである。日付けは、一九二五年五月一八日である。

この大学は一九二一年一〇月にモスクワに開設され、アジア各地出身の若者を集め、革命運動の中核勢力を養成することを目的としていた。延べ七三民族の出身者がここで学び、モンゴル、ブリヤート、トゥバの「革命」を達成した勢力にはこの出身者が多く、日本からも数人学んだことが知られている。言語学者のポリヴァーノフはこの教授だったし、エスペランチストのエロシェンコも日本人学生のための通訳にあたった。また片山潜も、時々ここで教えていたという。

スターリンは、この大学に学ぶ学生には、すでに解放された、「ソビエト東方」出身者と、いまだ外国の植民地下に置かれていて、そこからやってきたのと、二種類の学生がいると指摘し、前者のグループの学生が負っている任務として、かれらの出身地に工業の基礎をつくり、農業を発展させ、共同組合を組織し、民族文化を発展させることであるとした。

このようなかれらに対して、ソビエト東方の諸共和国の民族文化とは何かを説明するにあたって、それは、

内容においてはプロレタリア的、形式においては民族的な文化——これが社会主義のめざす全人類的な文化である。

と規定し、さらに、「プロレタリア文化は民族文化をなくするのではなく、それに内容を与える」ものであり、また逆に「民族文化はプロレタリア文化をやめさせるのではなく、それに形式を与えるのである」と説明した。

この有名なスローガンは、後に、「プロレタリア的」が「社会主義的」と言い換えられ、ソ連邦のすべての民族語に翻訳されてひろめられ、ソビエト民族政策をひとことで説明するものとして、機会あるごとに引用された。そして、スターリンが「マルクス主義的民族政策の定式」と銘うったこのスローガンの原型は、カウツキーにあることは、また、あとでもどってき見て見ることにしよう。

この説明につづいて、次には、社会主義革命がもたらす、言語への影響という問題が次のように述べられている。

社会主義の時代には全人類的な言語が創出されて、その他のすべての言語は死滅するだろ

う、と論じるものがある（たとえばカウツキーのように）。私は、すべてを包括する単一の言語が生れるという、この理論をあまり信じない。経験は、いずれにせよ、このような理論に有利なことをかたらずに、不利なことをかたっている。今日までの事態の動きを見れば、社会主義革命は言語の数を減少させずに増加させている。なぜなら、社会主義革命は、人類の底の底までゆりうごかし、彼らを政治の舞台におしだすことによって、いままで知られなかったか、あまり知られていなかったいくたの新しい民族を、新しい生活へとめざめさせているからである。かつての帝政ロシアが、五〇をくだらない民族と民族グループとを代表していたなどということだれが考えることができたであろうか？ だが、十月革命は、古い鎖をたちきって、わすれられた多くの民族を登場させ、彼らに新しい生活と新しい発展とをあたえた。（傍点は田中による）

このことばは、一九二〇年代のスターリンの言語についての考え方を示すものとして極めて重要であり、それは四年後の一九二九年の「民族問題とレーニン主義」において、自ら引用しつつ、またもやカウツキー批判をつけ加えている。

ここに引用したことば〔さきの二五年の演説〕からわかるように、私はカウツキー型の人々に反対したのである。彼（すなわちカウツキー）はつねに民族問題においてディレタントであったし、またディレタントにとどまっていた。彼は、民族発展の機構を理解していないし、民族の堅固さの巨大な力を理解していない。また彼は、社会主義が勝利するはるか以前に、はやくもブルジョア民主主義制度のもとで、民族の融合が可能であると考えている。また彼は、チェコにおけるドイツ人の同化「活動」を卑屈にほめたたえて、チェコ人はほとんどドイツ人化されているとか、チェコ人は民族としては将来性をもたないと、軽々しく主張している。

ここに述べられているカウツキー批判は、カウツキーをねじまげた不当なものではなく、だいたいその通りであると受けとっていい。

カウツキーは近代社会における経済活動と言語との関係について興味ぶかい観察を行っている。スターリンが、カウツキーが「社会主義の時代には全人類的な言語が創出されて、その他のすべての言語は消滅するだろう」とか、「社会主義が勝利するはるか以前に、はやくもブルジョア民主主義制度のもとで、民族の融合が可能であると考えている」などとしているのは、カウツキーの「民族性と国際性」の次のような一節を指していると思われる。

ところが、二つの民族の全体が、密接に絶えざる交流共同性の中にある場合には、そこから生じるバイリンガル状態は移行段階にすぎないだろう。その各々がいずれの言語をも二つとも話すとき、結局はいつでも、その二つのうちの一方が、何らかの理由で——たとえば、より豊かで強い民族の言語であるとか、あるいは、他方には欠けている、より完全な、文学を提供しているとかの理由で——選ばれるか、それともたとえばフランス語や英語がそうであるように、二つの言語から新しい言語、つまり混成語が生じるだろう。古い方の民族（ナツイオン）が消えるのは、それが絶滅したり、その文化共同体がなくなるか

らではなくて、もう一つの言語の方がより目的にかなっているので、自分の言語を話すことをやめるからである。(一三—一四ページ)

言語が民族を決定するという考え方がよく出ている、カウツキーらしい文章であるが、ある民族は、「より目的にかなった言語」に移ることによって、もとの民族であることをやめて、その言語を話す別の民族になるという考え方は、当時はめずらしいものではなかった。典型的な「文明開化」思想である。

言語のとりかえによって、別の民族になるという考え方を、今日どう評価するかはおいておき、何らかの理由で、民族がみずからの言語を捨てて、もとの民族であることをやめれば、言語が統一にむかうという考え方は、一九世紀後半から、二〇世紀のはじめにかけての、ヨーロッパの知識人に共通する考え方であった。その筆頭が、「歴史なき民族」の、「歴史を担う民族」への統合の道を描いたエンゲルスであった。

ところがスターリンはこうした言語と民族の統合への道を否認したのみならず、逆に言語の数をいちじるしく増やしたのである。かれが立っていた舞台は、帝政ロシア時代でも「五〇をくだらない」少数民族、すなわち言語を数えたのみならず、ソビエト時代に入ってから、たとえば一九二六年には、一九〇以上の民族単位と、約一五〇の言語すらが登録されている、そのような舞台だったのである。

言語の数の増大は、スターリンの言う通り、革命によって、「いままで知られなかったか、あまり知られていなかったいくたの新しい民族」を歴史の舞台に登場させたことの当然の帰結であった。

これは、一八四八年にエンゲルスの考えたことの全く逆の現象が生じさせられたことを意味する。「歴史なき民族」は「歴史ある民族」に統合させられるどころか、続々と固有の歴史を持ちはじめたのである。これが、正統マルクス主義からの逸脱でなくて何であろうか。

この、言語の増大という過程は、ソ連にかぎったことではなく、近代の大きな流れであった。たとえば、政治学者のカール・ドイチュは、一八〇〇年から一九〇〇年までの一世紀をかけて、ヨーロッパの国語の数は一六から三六に増えたが、つづく一九三七年までの短期間には、五三にまで増大したと指摘した。こう述べているのは、一九四三年の論文である。

以上の話はヨーロッパに限ってのことであったが、この流れに並行してソビエト連邦のアジア部、さらに、第二次大戦後の非ヨーロッパ部における言語の数の増大は、ヨーロッパとは比較にならぬ巨大な動きであった。

## (2) 民族の自決と言語の自決

各民族に対する、「民族自決権」の保障は、ロシア・マルクス主義に、独得の風貌をそえている重要な項目の一つである。あるいは、西欧マルクス主義からロシア=ソビエト・マルクス主義を区別する最大の特徴であり、また西欧マルクス主義が決して許すはずのなかった、正統からの最大の逸脱、踏みはずしであると言うべきであろう。

ここで、本題に入るに先立って、このような問題とその用語にあまり親しまない、若い読者のために、このひびきのよくない「ジケツ」という日本語が指し示す内容を説明して

おこう。

ロシア語のマルクス主義文献では、この「自決」を「サモ・オブレデーニエ」と呼んでいる。「サモ」はロシアの有名な湯わかし道具、あの「サモワール」のサモで、「自ら、自分で」という意味である。だから、サモワールを強いて漢字でうつせば、「自沸器」となるであろう。「オブレデーニエ」は、「決める」という意味だから、「自分で決定する」ということになり、それを日本語では、短かく「自決」と言いきったのである。

ロシア語の長ったらしい「サモ・オブレデーニエ」は、同じように長ったらしいドイツ語の「ゼルプストベシュティムング」(Selbstbestimmung)を、ていねいになぞって訳したものだ。ドイツ語で民族自決権を言おうとしたら、さらに長い単語、ゼルプストベシュティムングスレヒト (Selbstbestimmungsrecht) となる。

このような政治用語は、たいていフランス革命の申し子であるフランス語から来ていることが多いので、さらにフランス語をたどってみるのが近代語しらべのきまった手順だからそのようにしてみると、フランス語にはオートデテルミナシオン (autodétermination) という、これまた、長ったらしくて、いかにも作ったようなことばがある。それで、これを『プティ・ロベール』でしらべてみると、この語の初出は一九〇七年で、生物学用語だったというが、どのように用いられたかは示していないし、日本の仏和辞典にも、これを生物学の用語として説明したものはない。

さて、これは意外なことなのだが、『プティ・ロベール』をさらに見ると、今日私たちが、「民族自決」というふうに使った「自決」が、フランス語ではじめて用いられたのが一九五五年 (!) だという。この語がどういう状況のもとで用いられるようになったかといえば、ちょうどこの頃フランスで高まってきた地域運動や少数民族の権利の主張が、この語の需要をひき起したのであらうと推定できる。

それでは、一九五五年以前に仏訳された、レーニンやスターリンの文献では「自決」はどうなっていたのだろうか。私はいまそれらをしらべる労をはぶいて、アントワーヌ・メイエが、「《すべての民族は自決権を有する》という原則が実施されるならば、ヨーロッパの文明を研究するだけでも二〇の言語の知識ではまだ足りないことになる」(一九二八年)と書いたときの、「自決権」がどう表現されているかを見ることにする。

そうすると、そこには *le droit de disposer d'eux même*、すなわち、「自分自身で好きなようにふるまう権利」となっていて、まだ自立して使える政治用語に熟していない感じがする。

試みに、ランゲンシャイトの『独仏辞典』(一九七七年版)で、ドイツ語の「民族自決権」すなわち *das Bestimmungsrecht der Völker* というところをさがすと、*le droit des peuples à disposer d'eux-mêmes* となっていて、メイエが用いた表現と一致する。したがって、この言い方のほうが、フランス語では一般的なものであることが確認できる。

以上のことから、一九世紀から二〇世紀にかけて叫ばれるようになった、政治スローガンとしての「民族自決」の本場は、フランスではなくて、ドイツ語地帯であったことが明らかになる。そこで、大がかりなグリムのドイツ語辞典にあたると、そこには、ゲーテやシラーの用例もあげているが、今日のような、政治的な「自決」の意味で用いているのは、フライタークの作品に現われる、一八五九年の用例である。

いちはやく国民国家を完成したフランスでは、「民族の自決」などは話題にすらのぼら

なかったはずだから、やはり、こんとんとしていたドイツ語地帯で生まれたものと考え  
ることしておく。

英語の self-determination もやはり、ドイツ語からのそっくりのなぞりのように見える  
ので、これも訳語として生まれた全く新しい語と一応考えておいて、これ以上のせんさくは  
しないでおこう。「民族自決」は、後進国のドイツでこそ問題になったのであって、先進  
国の英、仏では、話題にすらならなかったのである。

ところがロシアのマルクス主義者たちは、正統のマルクス主義からは決して現われるは  
ずのない、この民族の自決権を、すでに一九〇三年には、党の方針として話題にしたが、  
一九一三年に、はやばやとその綱領第九条にかかげて明記してしまったのである。いわく  
「国内に居住するすべての民族にたいする自由な分離と独立国家の創設の権利」を保障す  
ると。

これを読んだ、マルクス主義のもっとも正統で純真な弟子のローザ・ルクセンブルクが  
許しておくはずがなかった。

彼女は、「諸民族の自決権」は、「あらゆる国々で、あらゆる時代に宣伝されたブルジ  
ョア民族主義の合ことば、＜自由と独立に対する諸民族の権利＞の言いかえ」にすぎず、  
「今日の社会主義政党のいかなる綱領の中にも見出さない」どころか、「反動的な企てで  
ある」とさえきめつけた。私は、マルクス主義の正統をまもろうとした、ローザのいらず  
で涙ぐましい健闘ぶりに、感動をおぼえないわけには行かない。

ローザの批判に対して、レーニンは力をふりしぼって反論した。その論文が「民族自決  
権について」（一九一四年）であり、ここにロシア・マルクス主義の精髓が現われている。

この論文において、私たちは、レーニンの民族問題についての、決然たる態度を次のよ  
うに読む。

「民族の自決とは、ある民族が、他民族の集合体から国家的に分離することを意味し、  
独立の民族国家を形成することを意味している。」（傍点は田中がつけた）

この論文は一九一四年の二月から三月にかけて書かれたとされている。そうすると時期  
的には、レーニンは、自分がすすんで書かせ、前年に発表された、スターリンの「マルク  
ス主義と民族問題」を参照しながら、この「民族自決権について」を書いたにちがいない。

その時、レーニンのさきの文のしたじきになったのは、おそらくスターリンの、次のよ  
うな一節であろう。

自決権とは、民族は自分の希望どおりやってゆくことができる、ということである。民族  
は、自治の原則にもとづいてその生活をいとなむ権利をもつ。それは、他の民族と連邦関  
係にはいる権利をもつ。それは、完全に分離する権利をもつ。民族は主権をもち、すべ  
ての民族は平等である。（「マルクス主義と民族問題」）

スターリン—レーニンの線で、ロシア・マルクス主義において確立された、この民族自  
決権へのかかわりが、全体としてのマルクス主義の流れの中で、いかに特異なものであ  
ったかは、エンゲルスが、一八九一年に、ドイツ社会民主党が、エルフルトにおいて起草  
した党綱領を批判した次のような文章と対照させてみればよくわかる。

エンゲルスは言う。

「私の考えでは、プロレタリアートが用いることができるのは、単一不可分の共和国の形態だけである。連邦共和制は、広大なアメリカ合衆国の地域では、いまでもだいたいにおいて必要物である。もっとも東部では、これはすでに障害物になっている。……小国スイスでは、それはすでに久しい以前から障害物になっており……だいたいわれわれの〈連邦国家〉そのものが、すでに統一国家への過渡なのである。」(傍点は田中)

エンゲルスの忠実な弟子であろうとしたレーニンは、しかし一九一七年の『国家と革命』では、次のように書くに至った。「無政府主義の小ブルジョア的見解からは、原理的に、連邦主義が出てくる。マルクスは中央集権論者である。」(傍点は田中)

レーニンは、中央集権制と民族自決の上にたつ連邦制の両極のあいだを揺れ続けた人だ。この動揺は、すこぶる人間的なものだと私は思う。

スターリンも決して、このアポリアを無視したのではない。「一方にはマルクス主義者の義務があり、他方には種々の階級からなる民族の権利がある」と書いた。しかしかれは、形式上は民族自決のたちばを、最後まで教条のように守り続けた人だ。したがって、一九三六年のいわゆるスターリン憲法は、その第一七条で、「同盟(ソユーズ)構成各共和国は、ソビエト同盟(ソユーズ)から自由に脱退する権利を保有する」と規定した。しかしこの権利は保有されても、決して行使はされなかった権利である。

この規定は、一九七七年のいわゆるブレジネフ憲法のもとでも、その七〇条と七二条に、そのまま踏襲された。七〇条では、「諸民族の自由な自決」ということばさえ入れたのである。

ソ連邦(同盟)が解体した後には作られた現ロシア憲法は、どこの条項にも、「民族の自決」の規定がない。これは、ソ連邦憲法と比べても大きな後退だとして、ロシア憲法を承認していない共和国がある。それはモンゴルの西北辺につらなる「トゥバ共和国」である。トゥバ共和国憲法の起草者のバガイオールさんを、私は、比較法史学会が開かれるのを機に一九九五年に日本に招き、「民族自決とトゥバ憲法」をテーマに学会でのほか、京都大学、東京大学、一橋大学でも講演をしていただいた。

トゥバ共和国憲法はその第一条の冒頭で、「トゥバ共和国は、自決権と、全国民投票による、ロシア連邦への加入、脱退の権利を保有する」と規定している。バガイオールさんによると、チェチェンの憲法も同様の規定をもっていて、モスクワにはそれが気に入らない。トゥバは、かつてスターリンが確立した、民族自決権の原則を、チェチェンのように武器に訴えることなく守りつづけているのである。

さて、民族の自決はそれだけでは終らない。そこから生れる当然の帰結は言語の自決である。ローザも、このことをきびしい目で見つづけていた。

言語学は、こういう現象を、見て見ぬふりをするようにならされてきた。いや、そのようなつつしみをしつけられてきたと言うべきであろう。しかし、言語学者にも、その点をしっかりと見つづけていた人がいた。アントワヌ・メイエである。

### (3) 言語の増大への恐怖——アントワヌ・メイエのばあい

一九世紀末から、民族自決権が、人間の解放の一つの側面として、当然のことと見なされるようになった。しかし、民族の政治的自決は、必ず言語の自決を伴うことは忘れられがちであった。そして、この言語の自決は、政治的自決へのひそやかな準備の過程として

も進行する。

いな、民族の解放の目的の一つは、スターリンが言うように、母語が自由に使える状態を出現させることである。以上のような理由から、政治的自決は認めるが、言語の自決は認めないというわけには行かない。したがって、ある民族の自決は、その都度、言語の数を一つ増やすという文化の事実を念頭に置いておかなければならない。

エンゲルスは、このことによく気がついていた人だ。だから、自決していい民族と、そうではない民族とを、「歴史」によってきびしく選別したのである。

カウツキーはおそらく、文明の潮流による、おのずからなる教化によって、世界が三つか四つの普遍語 *Universalsprachen* へと収斂して行く道を考えていたであろう。

その際、残るべき言語と、統合されて消えるべき言語の選択には、常に普遍性の度合いや、話し手人口の大小による基準が無意識に、あるいは当然のこととして入っていたはずである。

スターリンは、一度も、そのようなしかたで、すぐれた言語と、貧弱な言語という区別をしなかった。これは、スターリンの目立った特徴であった。しかし、言語学者のアントワヌ・メイエにとってはそうではなかった。かれは、言語の質の問題を考えた人であった。

メイエは、一九一八年に『新生ヨーロッパの諸言語』という書物を刊行した。何が「新生ヨーロッパ」であるかという、その序文の書き出しに「今度のできごとがなかったら、この本は書かれなかったであろう」とあるところからわかる。「今度のできごと」とは、第一次大戦とその結果であり、そこにはロシア革命も含まれている。

「民族自決権」がもたらす言語の増殖という好もしからざる帰結を、メイエはしっかりと見すえていた。その序論に言う。「もしも各民族がその主張する自治を得て、くすべての民族は自決権を有する」という原則が実施されるならば、ヨーロッパのみの文明を研究するだけでも二〇の言語の知識ではまだ足りないことになるだろう。……全世界はただ一つの文明だけを持つとする傾向があるのに、そこで使用される文明語の数は増大の一途をたどっている・」

このように事態を見ているメイエの考え方には、民族は増えても、言語の数は増やさずにおけるという考え方があり、そのことは、こう述べられている。

民族というものは、あれこれの物質的な支えに結びつけられているものではなく、また言語にさえ結ばれているのではない。或る民族に属するか否かということは、感情 (*sentiment*) と意志 (*volonté*) の問題である。(傍点は田中)

ここには驚くべき思想が述べられている。民族が言語に結ばれていないということは、いつでもその言語をすてることができるということになる。この考えにしたがえば、朝鮮民族が母語をすてて日本語を選んだとしても、朝鮮民族であることに変わりはないのであるから、ことばにこだわるのは無意味だということになる。

このようにしてアルザス人は、たとえ母語がドイツ語であっても、フランス人でありたいという意志によってフランス人になるということが起き得るのである。

カウツキーが、民族を言語によって規定しようとしたとき、言語(母語)は選択できる

ものでなかったのに反し、メイエにおいては、言語は意志によって選ばれるものになっている。だからこそ、人類は、みずから母語を捨てて、「よりよい」言語を選んでそこに集ってくるのである。「言語の伝播が強制力によって行われることは稀である。しかしかの話し方を直接に強いることなぞあるものではない。個人に課せられた強制というものも、結局は集団各員の総体的意志（ただし、それが意識されないこともしばしばある）から出たものである。或る言語に文明の最良の形態が示されており、この言語の使用が狭く限られていないというような場合、個人はそれを話すことを利益とする。」（傍点は田中による）

このようなわけであるから、

「フランス語に比べればブルトン語は粗末な道具であるから、およそ常識あるブルトン人ならば、好んでブルトン語を用いようなどと考えるものはない。ブルトン語の弾圧を云々するのは、ちょうど<電燈がローソクやたいまつを弾圧する>と言うようなものだ。<刈取機械が手鎌を迫害する>と非難するようなものだ」ということになる。

メイエにとって、もはや時代に合わない、消えるべき、遅れた言語の生きのびに力のかすのは、いわば文明の法則にもとるものであったが、ロシア革命は、それまで存在しなかった、いわば、文明の外にあった言語に、わざわざ文字を与えて、次々に二〇世紀文明の舞台にのぼらせたのである。

メイエの『新生ヨーロッパの言語』は、その一〇年後の一九二八年には新版を出さねばならなかった。この一〇年間に、おそるべき大変化が生じたのである。一つは、オーストリア=ハンガリー帝国の解体によって、ドイツ語のかげにかくされていた諸言語が、いっそう独立の度合いを高めたこともあるが、人類の言語生活にかつてない激変をもたらしたのは、ソ連邦の中の、これまで世界に知られることのなかった諸言語が、くっきりとその姿をあらわにしてきたことである。

メイエは「スラヴ語派」を扱った章で、「スラヴ語諸民族」の文明史上の役割について、「彼等はヨーロッパ文明を蛮族に対して守ることによりこの文明に奉仕した。しかしそれゆえにこそ彼らは西ヨーロッパ人と同じ歩調でこの文明についてゆくことができなかったのである」と述べている。つまり、スラヴ民族は、蛮族から西ヨーロッパ文明を守る前面に立ち、みずからのぎせいにおいて、西ヨーロッパの文明を守ってくれたのだと。

この蛮族とは、モンゴル、タタールその他、文明の歴史にほとんど名を残さなかった非ヨーロッパの諸族である。かれらは、アジアから攻め入って、「スラヴ語諸民族の分裂を促し、その永続的な組織を妨げ、その文明化を妨げた」のである。それは「フィン=ウゴール語民族、テュルク語民族、モンゴル語民族」であると、メイエははっきりとその言語の名をあげている。

ところが、ロシア革命は、西ヨーロッパ文明世界へと攻め込む蛮族への防壁をとりくずしたにとどまらず、蛮族の言語を解放し、それらに西ヨーロッパ文明語と対等の地位をあたえてしまったのである。

二八年の新版で、メイエは、特に「ソビエト連邦内の諸言語」という一章を設けて、こう述べている。「連邦内の各民族は——政治的自由のない代りに——固有の言語を使用する権利を有する（この言語がいかに未開のものであろうと、また、これを使用する人がいかに少数であらうと）。いかに小さな言語集団もそれぞれの学校を持ち、その言語で授業を行う権利を有する。連邦内のほとんどの言語で教科書が編まれ、宣伝文書が刊行されて

いる・」

このメイエの叙述は、一九二五、二九年に表明されたスターリンの方針の実現のさまを、西ヨーロッパの鏡に写し出した、正確な像である。メイエのこの文章をスターリンが読んだら、こう評したであろうと、私は想像する。すなわち、「民族の自決がヨーロッパ人だけのものでないのと同様に、言語の自決もヨーロッパ人だけのものではない」と。

もっとはっきりと、言語の解放は民主主義に反すると述べた言語学者にアルフ・ソンメルフェルトがいる。かれは、第二次大戦が終結した一九四五年に、いち早く発行された言語学の専門誌『ワード』に、「言語問題と平和」と題する一文を寄せてこう述べている。

「ソ連邦のすべての民族は、かれら固有の言語で教育を受けている。……この政策は、ロシアおよびアジアの少数民族に対する特別な寛容さによるのでもなければ、ソビエト当局が民族学研究に興味を示したためでもない。新しい社会体制を受け入れさせるのに最も効果的な手段であるという確信によるものである。この政策はロシア化のための強力な武器である。」(傍点は田中)

ソンメルフェルトのこの論文は全体が矛盾に満ちているが、この個所は特にそうである。

たしかに少数民族の言語をあまりにも小さな単位に分けて、それぞれに固有の文章語を与えれば、かえって、大言語に対抗する勢力の結集をそぐおそれがある。ソ連の言語政策の中では、この方策を巧妙に用いた例がいくつもある。しかし、メイエもソンメルフェルトも関心はそこにはなく、ソ連邦全体の脱ヨーロッパ化への怖れをかくせなかったのである。

#### (4) 形式においては民族的、内容においては社会主義的

スターリンは、メイエのように、言語における文明度とも言うべき質の問題には一度もふれず、この点では、完全な言語同権主義者であったと、少なくとも書かれたものからはそう考えられる。

だから、イディシュはできそこないの「くさったドイツ語」だという言い方に、スターリンは全く耳をかさないどころか、ユダヤ人にも、その母語で教育を受ける権利があるという態度をとり続けたのである。

しかし、この「母語の完全解放、完全同権」という主張には、当然、その後に訪れるはずの「バベル」への警戒が生ずるはずである。この疑問はソ連邦その中にすらあって、スターリンはこの点についての、ありとあらゆる質問を受けたにちがいない。

政治家、策略家としてのスターリンにしては、すべての民族に母語をというスローガンは、あまりにも楽観的なナイーブさではないかという疑問が現われるのは当然であろう。

一九二九年の「同志メシコフ、同志コヴァリチュクその他への回答」の中で、スターリンは、ソ連邦内での文盲率が八〇—九〇%にも達する民族の場合をあげて、この問題を解決するためには、「母語による学校」「母語のよくできる教員」、「母語による出版、演劇、映画」の発展が不可欠であることを述べた後で、

なぜ母語によるのか、——とたずねる人がある。

と疑問を提示し、それにこう答えている。

それは、幾千万の人民大衆が、文化的・政治的および経済的發展において成功することができるのは、母語、すなわち民族語によるばあいだけだからである。

このことばには、理想主義だけでなく、経験にもとづく重みがある。とりわけ、高い文盲率にあえいでいた一九二九年という段階では。

二〇世紀最末年の今日、いたるところで、シンポジウムや論文集のテーマに好んでとりあげられる、「言語の多様性」の維持は、同じ二〇世紀のはじめには、克服すべき、人類にとっての障害であった。少なくとも、ふつうの方法では正当づけることのできない主張であった。そのことはさきほど、尊敬すべき、当時の代表的言語学者、アントワーヌ・メイエにおいて見たとおりであった。

スターリンの主張は、「これまで一度も歴史の舞台に姿をあらわすことのなかった、ユーラシアの、名もなき」「歴史なき民族」の母語の、「お上品な社会主義者たち」の文明語との完全に対等な価値と権利を認めるものであった。しかし、その民族じたいからでさえ、疑問が出てくるのも事実であった。

そのような疑問に対して、スターリンが用意していたスローガンは、「形式においては民族的、内容においては社会主義的な」文化の建設というスローガンであった。

この定式は、一九二五年のクートヴェにおける演説の中で、「母語による教育」の絶対的必要を述べたあとに、次のように現われる。

民族文化の建設、母語による学校と講習会の発展、土着の人々からなるカードル〔指導層〕の養成等を、社会主義の建設、プロレタリア文化の建設とどうやってむすびつけるのか？

ここには、乗り越えがたい矛盾がありはしないか？ もちろん、そんなことはない。われわれはプロレタリア文化を建設しつつある。これはまったく正しい。しかし、その内容において社会主義的なプロレタリア文化が、社会主義建設にひきいれられたさまざまな民族のもとで、言語や生活様式などの相違によって、さまざまな表現形式と表現方法をとるということもまた、正しい。内容においてはプロレタリア的な、形式においては民族的な文化——これが社会主義のめざす全人類的な文化である。プロレタリア文化は、民族文化を廃棄するものではなく、それに内容をあたえる。そして逆に、民族文化は、プロレタリア文化を廃棄するものではなく、それに形式をあたえる。（傍点は田中がつけた）

この一節は、スターリンが、打ち出したスローガンのなかでも、最も印象ぶかく、うまくできたものではなかったかと思う。しかしスローガンの後半部、「形式においては民族的」は、民族的なものを、あまりにも、表層面だけに限定するものではないかと、受けとられるおそれに対しては、末尾の傍点を付した部分に見られるように、「民族文化は、プロレタリア文化に形式をあたえる」としたところが、まことに秀逸なできばえである。

形式をあたえないかぎり、文化は文化として存立しえない。文化に形をあたえ、文化を文化としてあらしめるもの——それが民族文化であると念を押しているところは、このス

ローガンの信頼性をたかめている。

このスローガンは、一九三〇年には、

プロレタリアート独裁のもとでの民族文化とは何か？ 大衆を社会主義と国際主義の精神で教育することを目的とする、内容においては社会主義的、形式においては民族的文化である（傍点はスターリンの原文）

と言いかえられる。

この六年間の間に、「プロレタリア的文化」が、「社会主義的文化」となり、より普遍性を付与してひろめられた。その際、このスローガンは、百数十もの民族語に訳されて、ソ連邦諸民族のあいことばになったのである。

おそらく、ソ連邦の非ロシア語諸民族は、このスローガンにおいて、スターリンはかれらの母語と民族文化の安全に大きな保証を与えてくれたものと心強く感じたにちがいない。

私が、このスローガンに接したのは二〇歳の頃、モンゴル語を学ぶ学生として、モンゴル語版スターリン全集を通じてであった。とにかくそれ以来、私は、「言語は形式」ということの意味を考えない日はなかったといってもいいくらいである。

そうして、じつは、このスターリンの巧みなスローガンのモデルがカウツキーにあるということをつきとめたのは四〇歳近くになってからであった。

ちょうどその頃は、『マルクス主義と言語学の諸問題』が、いわゆる「スターリン言語学」としてひろく読まれている時であった。この小冊子の中にも、このスローガンは不動のものとして引用されている。

現在のロシア、ウクライナ、ベロルシア、その他の文化が、内容においては社会主義的な、形式においては、つまり言語においては民族的な文化であるとのマルクス主義者の周知の定式をわが同志たちが知らないなんてことがあるだろうか？ 彼らはこのマルクス主義の定式に同意するだろうか？（テキストは本書二〇四ページ、傍点は田中による）

このテキストは、一九二四年に誕生したと思われるこの「定式」がそのまま五〇年になっても維持されていることを示していると同時に、今度は、「形式」が、「つまり言語において」と具体的に言いかえてある点、理解するのに大変有益である。それが、ほかでもない、「言語学」を正面にすえた論文であったからだ。

カウツキーは言う。「進歩しつつある商品生産と共に、民族（folk）の中に、自分固有の言語を話す知識階級、つまり民族的（national）な知識人を所有する必要が生ずるので、言語文化への要求は形式において民族的文化への要求の形式をとり、その内容の方は、かなり国際的な性質のものであるだろう」（一八ページ、強調はカウツキー）と。

カウツキーはどうやら、自分でもこの言い方がよほど気にいらしく、「したがって社会主義のプロパガンダと組織は、内容においては国際的であっても、形式においては民族的（international nach ihrem Inhalt, national in der Form）でなければならない（二八ペー

ジ) という風に、くり返し用いている。スターリンの“социалистическая по содержанию и национальная по форме” が、カウツキーのこの得意なフレーズの直訳であることは疑いようもない。

このような言説が、カウツキー以前にも行われていなかったとは言えないし、当然ながら、一九世紀の末には、民族固有文化と世界文化との間に理論上、何らかの折り合いをつけようとする試みはいろいろあったにせよ、このような表現は、カウツキーの苦勞の末の勞作であったにちがいない。

皮肉なのは、スターリンが、多様な言語が次第に主要言語に収斂して行くとしたカウツキーを批判しておいた上で、その同じ文章の中で、カウツキーの「國際的」を、「プロレタリア的」、後に「社会主義的」と焼きなおして利用したことである。

#### (5) 未来の言語

しかし、社会主義とは、なにかんずく、より多く未来について考え、その展望を議論することを特徴とする。したがってあらゆる言語の解放によってもたらされた、その先のことを考えないですますわけには行かない。

一九二五年に、「社会主義革命は言語の数を減少させずに増加させている」と述べると共に、他方では「全人類的な言語が創出されてその他のすべての言語は死滅するだろう」という予想をしりぞけたスターリンは、この言明が、「社会主義の目的は、小国家への人類の細分化と諸民族の孤立性」を廃絶し、「諸民族の接近と融合」にあるというレーニンの命題に矛盾するのではないかという問題を、自らすすんでとりあげてそれにこたえなければならなかった。

スターリンの答えは次のようなものであった。ソ連邦一國だけの社会主義の状況と、「世界的規模における社会主義の勝利」の段階とでは状況が異なる。したがって後者の段階での、多様な「民族語は、一つの共通語と交替しはじめる」というレーニンの命題とは、区別しなければならないと述べる。

それでは、「一つの共通語」とは、既存のどれかの言語であるのか、それとも諸言語の融合によって生れる、何か新しい言語であるのかという問題は、一九五〇年の、いわゆる「言語学についてのスターリン論文」において、ふたたび、むし返されることになる。

諸言語の解放を誇ったとき、この「増大する言語」という成果を全世界にむかって、高々とかけたスターリンは、次のような感動的なことばで、それを栄光の中に包んだ。

問題はこうである。すなわち、全東方はわが共和国同盟を実験農場と見ている。われわれがこの同盟のわく内で民族問題を実践的に正しく解決するかどうか、すなわち、われわれがここで、この同盟のわく内で、諸民族のあいだに真に兄弟のような関係、真の協力をうちたてるかどうか——そのときには、全東方は、わが連邦こそ彼らの解放の旗じるしであり、その例にならわなければならない前衛部隊であることを見てとるであろう。そして、それは世界帝国主義の崩壊の発端になるであろう。

すでに述べてきた、西ヨーロッパの「歴史ある民族」の指導に革命をゆだねたすじがきから見れば、これは正統マルクス主義からの全くの逸脱、踏みはずしである。

スターリンがここで相手にして話しかけているのは、文字すら持たない、一度も、書かれた文学作品をもたなかった、「蛮族」にひとしい、東方のナロードノスチの出身者たちであった。スターリンは、エンゲルスから見れば、すりつぶされ、消滅すべき、かれらを前面にすえたのである。ここにおいて、マルクス主義——スターリン的に逸脱したマルクス主義——は、はじめて東方諸民族を、正当に社会主義革命に結びつけたのである。

しかし、スターリンの民族と言語についての発言は、ほとんど一九三〇年をもって終る。その後、かれが対峙したのは、西のナチズムと、東の日本軍国主義であった。

スターリンが、あたかも誇示するかのように、自信をもって、民族と言語の解放を説いたのは、言語学者の N・Ya・マルの活躍した時代とほぼ一致する。そして、マルは一個所だけスターリンを引用したことがある。それは三〇年の、あの第一六回党大会における発言である。この発言はマルの考えそのものであり、もしかしたら、マルの知恵によったのかもしれない。

その後、スターリンが、もっぱら言語の問題について、しかも「マルクス主義と言語学の諸問題」と題したテーマをもって登場するのは一九五〇年のことである。その三年後にスターリンは亡くなった。

この論文は、世界的に注目を浴びた。いくつかの国、その一つに日本も入るが、そこでは、センセーションを巻き起こした。それはなぜか。この論文は、言語についての思想史の上で、どのような意味をもっていたか、それを次の節で明らかにしてゆきたいと思う。

### 3 一九五〇年——マルクス主義と言語学の諸問題

#### (1) 動機—背景——一九二〇、三〇年代のソビエト言語学

この論文は、一九二〇年代以来、ソビエトの言語学界において、いわば「国教」となっていたN・Ya・マルの言語理論を否定し、ほうむり去ることを、ほとんど唯一の目的として書かれたと言っている。

他の学問もそうであるように、言語学もまた、自らの研究対象である「言語」という概念をどのように理解するかでは、言明されないさまざまな前提の上にたっている。言語学も自らを科学であると主張する以上、その前提は、ことばによって言明しておこうとするが、すべてのことがらが、そのように運ぶわけではない。

スターリンが時々、まじめくさって引用する、レーニンの、「言語は人間のもっとも重要な伝達手段である」という、何の特徴も描き出してない定義がある。この定義は、アリやミツバチのような、動物の伝達的手段と、人間の言語とはどちらがうかというふうに、問いをたててみる観点は全く入っていない。

そして重要なことは、このような定義によっては、たとえば、人類にとって重要であるはずのこの「伝達的手段」が、なぜ単一ではなく、集団ごとに別々の、通じない手段になっているのか——つまり、「伝達的手段」が、同時に「非伝達的手段」であるのはなぜかというようなことには気づかせてくれないのである。

このような、「言語とは」という問いに、ことばによって、なるべくなっとくの行くような答えをいくら列挙して、それをたとえば一冊の本に編んでみても、そもそも、そのような問いを発する背景までも明らかにするわけには行かない。

その「背景」の中に、たとえば、「言語は進化するものである」という前提があるとすれば、そこからは、進化にとり残された言語は、みずからその存在をやめた方がいいという考え方が出てくるかもしれないのである。そのような言語は、「言語は重要な伝達的手段である」という、言語の存在理由そのものに反するからである。

このように見てくると、「言語」についての定義そのものが極めてイデオロギー的なものであることがわかる。スターリンによる、「母語」の権利の強調、その無前提の尊重は、言語学者のメイエの、おくれた母語よりはすすんだ文明語をとという主張と鋭く対立する。

同様に、「母語」という概念が提示されたときすでに、それはさまざまな願望や主張を含んでいる。言語の研究の中で技術化されている部分は、今ここで考えているような「言語」の観点からすると、その極めてわずかな一部分しかとりあげていないことになる。——このような批判をかわすために、それぞれの言語学は、こうした質問の不意打ちにとりつかれないように、それぞれの枠組みの中で一貫性を作って、自らの体系を守ろうとするのである。

新しくは、そのような体系を、局限された定式として出発し、押しとおしてきたチョムスキーの生成文法理論がある。そこから得られた「言語」は、歴史と社会の、あらゆる文脈からきりはなされた自律の体系である。

学問の対象としての言語がそのような性質をもった、イデオロギー的存在、いな、イデオロギーそのものを作り出す存在であるとするならば、マルクス主義のたちばから組み立てられた言語学が、作られねばならないという要求があらわれるのは当然である。

しかし、正統のマルクス主義は、言語を論ずる点では極めて単純で、とりわけ言語の多様性の問題については経験がとぼしい。それは何よりも人類の文明と思考の普遍性を前提にしているから、言語は論理を運ぶための手段、——言いかえれば、論理はそのままでは形あるものにならないから、それを形あるものとするための外被にしかすぎないということになるのである。このようにして、言語は論理に従属する。

このような立場にたつならば、——論理はもちろん単一、普遍のものであるから、言語の多様性は単に見かけのものにすぎなく、むしろとり除くべき余計なものであり、言語学の存在もまた無用になるであろう。そこで行われるのは、論理の外被としての研究以上のものではない。チョムスキーの言語学はそこに到達しようとしている。

言語研究が、論理から自立した、固有の意味を持ち得るのは、背景に、「言語の多様性」と、それぞれの言語の異なる構造——すなわち価値——の意義を認めているからにほかならない。

ところがソビエトにおける、マルクス主義的言語学の建設を目ざした探求は、マルクス主義から出発しながら、ある点では、マルクス主義の教義に反した、極めて非マルクス主義的な地点に到達してしまった。そのような言語学を、マルクス主義的言語学から区別されるべき「ソビエト言語学」として、固有の内容をもったものとして位置づけてみる必要がある。

言語学も、またそれと密接な関係にある民族理論も、正統マルクス主義には欠けている、ソビエト・マルクス主義において、はじめて大きな意味をもつ、ソビエト固有のものとして形成されたのである。これまでに何度かふれた、スターリンの「多様な母語」の開花が、社会主義革命の成果の一つだとする立場も、マルクス主義の正統な道を、より正確に言えば、西欧マルクス主義の道を完全に踏みはずした、一九二〇年代のソビエト・イデオロギーの現われだったのである。

私の考えるところによれば、ソビエト的学問の出発にあたっての教科書になったのは、エンゲルスの『アンチ・デューリング』であった。特に問題となったのが、生物学、遺伝学、言語学の三つの領域だった。生物と無生物、有機物と無機物との境界をとり除き、遺伝学では、生物は遺伝子によって固定されたものではなく、「獲得形質の遺伝」によって、種間の障壁はとり払われなければならなかった。同様に言語学では、「ブルジョア言語学」との対決の核心は、言語と言語の間に滲透を許さない壁を設ける血統主義、系譜観の解体であった。

マルは、自分が演ずるべき役割と責任を、十分に自覚していたと思われる。しかし、そこから生れる仕事は、それまでの言語学の伝統を全く無視した奔放なものだった。とりわけ正統派の反感を買ったのは、当時としては、言語学の水準を示す、最大の財産だと目されていた「印欧語比較言語学」の原理を全否定したことであろう。しかし、じつはそれをマルの発明だとするのはほめすぎであろう。正統言語学にてらして、異様と思われることは、すべてマルのせいにはされたが、言語学史の流れに置いてみると、H・シューハルトの「音韻法則について、青年文法学派に反対する」（一八八五年）にヒントを得たか、それを下敷きにしたものと考えべきである。シューハルトは、マルの著作の中で言及される、数少ないヨーロッパの言語学者の一人だった。

マルはやがて、ソビエト言語学界を完全に独占するに至った。そのありさまは、スター

リン自身が次のように述べている。

ソビエト言語学の状態をすこしでも批判したり、言語学におけるいわゆる「新学説」にたいしてごくひかえめな批判をやっただけでも、言語学の指導層から迫害をうけたり阻止されたりした。エヌ・ヤ・マルの遺産に批判的態度をとったり、エヌ・ヤ・マルの学説にすこしでも不賛成をしめせば、言語学界の有能な働き手や研究者が職を追われたり地位をおとされたりした。言語学の活動家たちは、その実力の有無によらないで、エヌ・ヤ・マルの学説を無条件でみとめているかどうかによって、責任ある地位に登用されてきた。

スターリンは、このような状態を、「言語学界にあらわれたアラクチェエフ的支配」と呼んだ。アレクセイ・アラクチェエフ（一七六九—一八三四）は帝政時代の悪名高い陸軍大臣で、過酷な軍隊制度を導入した。一九世紀のロシアの歴史家クリュチェフスキーは、アラクチェエフは「ロシアを兵舎に作りかえた」という当時の人のことばを伝えている。

ふしぎなことに、スターリン批判後、スターリンの発言のほとんどすべてが信用できないものとして否定されたにもかかわらず、スターリンのマルに対するこの非難と評価だけはそのまま受け入れられ、定着している。そして『マルクス主義と言語学の諸問題』に示された、言語学における基本路線もまた。

とりわけ一九九一年には二冊のマル批判の書物が刊行された。一つはアルパートフの『ある神話の歴史——マルとマル主義』であり、いま一つはゴルバネフスキーの『はじめにことばありき……』である。

これらの書物では、一九三八年に処刑された言語学者ポリヴァーノフが、「マル主義」「アラクチェエフ体制」の直接のぎせい者であったような描きかたをしている。こうした第一級の言語学者を、マルの説を受け入れなかったゆえに、死に追いやったのはマル一派だという印象を一層強固なものにするのに役立っている。——じつは、マル自身は、一九三四年には、この世に居なかったのであるが。この種の、今では紋切型になってしまった、マル主義のぎせい者についての記述はいくつもある。

しかしその一方で、私には特に興味ぶかい、別の証言もある。それは、モンゴル学者のニコライ・ポッペの回想である。

ポッペはソビエト・モンゴル学のすべての分野にわたる指導者であったが、粛清の危機がせまってくるのをひしひしと感じていた。一九四一年、カルムク人のいるヴォルガ下流のエリスタに移り、翌年ヴォルガ下流域一帯がドイツ軍の占領下に入ったのを機に、ドイツに脱出し、次いでアメリカに移り住んだ。その後ポッペは、日本にも数度、研究のためにやってきた。私は日本でもドイツでもポッペに会って話をする機会があったが、マルのことについては一度も質問しなかった。たぶんマル一派に追われてソ連を脱出したポッペの答えは聞くまでもないことだと思っていたからだ。だから、この回想録の中で語られるマルの姿は、私にとって全く意外なものだった。

一九二〇、三〇年代のソビエト言語学、東洋学のただ中に身を置いていたポッペは、マルの授業も聞いていた。マルの授業とその人がらについては次のように回想している。

「一九二〇年代後半にマルは<新言語学>の創始者として有名になった。彼の考え方によると、世界中の言語の語彙は、四つの基本要素が様々に組みあわさってできているとい

うのである。この説が熱狂的に迎えられた当初、ウラディーミルツォフはマルのゼミのクラスにほとんど出席した。そして私もウラディーミルツォフと出ることにした。しかし、後に私たちはマルの授業は言語学とは関係がないことに気づいた。そこでは彼一人が熱心に得々と話をするだけなのである。それで私たちはこのクラスに出席するのをやめた。にもかかわらずその後も、明らかに紳士であり立派な尊敬すべき人であったマルとは親しく交際を続けた。しかし彼の説を支持する人々、それに精通していた人々の大部分は、無節操な悪漢のような連中で、マルと意見を異にする人々のことを反革命分子、反マルクス主義者呼ばわりしていた。マル自身が非常に多くの人々を秘密警察の容赦のない悪の手から救い出すことができたのは彼のたいへんな名誉である。グルジア人を母に持つ混血児であり、グルジア語を非常にうまく話すということで、マルはスターリンと知り合いになり、スターリンの母語で会話をした。彼がスターリンに非常に好かれていたことは間違いない。」(『ニコラス・ポッペ回想録』下内、板橋訳、七〇ページ)

ポッペの考える言語学と、マルが構想する言語学とは全くそりがあわず、そのことがここには興味深く描かれている。また、かれが先輩のウラディーミルツォフのことをよく思っていなかった感情もよく出ている。かれをおべっか使いと言いたかったのであろう。

しかし、この回想の中で最も注目すべき点は、マル一派の指示で、ポリヴァーノフの身にふりかかったのと同様の粛清の危険を感じて、ソ連を脱出したポッペが、マルの人がらに温かい気持を抱き、またかれが多くの人々を秘密警察の手から救ったと証言していることは、スターリン自身が作ったマル像のみから、今日の脱スターリン、脱ソビエトのロシアの言語学者たちが描き出しているのとは大へんちがうということである。

さらに、マル一派のぎせいになった、いつも「天才的」という形容詞をつけて呼ばれる言語学者ポリヴァーノフについては次のように述べている。

「(ペトログラード大学では、偉大な人々と近づきになったが) 残念なことに、あまり立派な人とは言えない人々も何人かはいた。このようなよくない部類の人に、エウゲニー・ドミートリエヴィチ・ポリヴァーノフがいた。彼は才能のある言語学者であり、日本語、トルコ語、アルタイ比較言語学、その他の分野で第一級の著作を残した人である。十月革命後すぐに、トロツキー政権のもとで外務大臣代理になった。ポリヴァーノフが最初に行なったことの一つは、外務省の官舎に住んでいた二人の非常に高齢の学者をそこから追い出すことであつた。」(同上、七一一七二ページ)

ポッペは一九七六年にもポリヴァーノフについての思い出を書いているが、その時よりも、この八三年の回想では、彼に対する批判的な見方は、さらに強められている。

マルの「新学説」と称するものの中には、尋常の言語学には、とうてい納得のできないものがいくつか含まれている。五〇年の論文でスターリンが「真に観念論的な四要素による分析」と呼び、「回想」で紹介している、この四要素説や、音声言語が現われる以前は「手ことば」「身ぶりことば」しかなかったという説などである。もっともすなわちこの後者は、ルソーの説でもあるのだが。

かれの書いたもの、それに対する正統の言語学界の反応からみるところ、マルは次々に奇矯な思いつきをだまじめに学説として、情熱をもって説く人だったらしい。

そしてまたかれは、ペトログラード大学、後のレニングラード大学では、当時のソビエト学問を代表する、けんらんたる同僚たちにとりかこまれていた。仏教学者のオリデンブ

ルク、シチェバツコーイ、東洋学者のバルトーリド、シナ学のアレクセーエフ、一般言語学のシチェルバ等であった。

とりわけアレクセーエフは、マルについて、心あたたまるような数々の思い出を残している。と言うのも、マルが本来の専門ではないシナ語に並々ならぬ関心を寄せ、一九二六年には、シナ語について短いながらも四つも論文を書いたからである。アレクセーエフは言う、「ふつうの研究者なら、シナ語を知らないとはじろぐものだが、マルは自分の専門領域と同じように、新しい着想を示して専門のシナ学者たちを感心させた」。そして、「シナ語を知らずして、一般言語学の正しい建設などあり得ない」と言ったというから、シナ学者のアレクセーエフをすっかりいい気にさせたことは充分想像できる。

マルにとってシナ語の知識は、かれを独得の「古生物学的意味論」の世界にさそって行く強い駆動力になったことはたしかである。

## (2) 「スターリン論文」はいかにして発表の運びとなったか

ふつう、「スターリン言語学」と呼ばれているものは、これまで第一章と第二章で述べてきた、スターリンの言語をめぐるすべての発言を含んでそう呼んでいるのではなくて、一九五〇年に『プラウダ』紙上に、三回にわけて掲載された発言だけを、後に『マルクス主義と言語学の諸問題』という、五五ページの冊子にまとめたものを指している。

そして、おそらく、スターリンの著作の中で最もよく知られ、スターリンの著作に何の価値も見出さなかった人々の関心をも引きつけたこの著作は、ソ連で刊行されて、日本でそのまま翻訳、刊行された『スターリン全集』全一三巻の中には含まれていない。『全集』は、一九三四年一月までの著作で終わっているからである。

その上、一九五六年の第二〇回ソビエト共産党大会の秘密報告で、フルシチョフが、スターリンの悪業を思いっきり暴露したために、スターリンの著作は、すべて紙屑同然になってしまった。三四年以降の著作をさらに後続の三巻にまとめ、全集を完結する作業を続行したのは、アメリカのフーバー・インスティテュートである。今日、「スターリン言語学」を全集版で読めるのは、ひとえにアメリカの、このフーバー・インスティテュートのおかげである。

それでは、「スターリン言語学」は、日本では何によって伝えられてきたかといえば、「国民文庫」の『弁証法的唯物論と史的唯物論他二篇』の中の「他二篇」におさめられているものと、いま一つは、『全集』のいわば補遺別巻として刊行された『スターリン戦後著作集』（一九五四年第一刷）におさめられたものである。私の手もとにある国民文庫版は、一九五三年の第三版である。学生諸君から、どこでこの論文が読めるかと、問い合わせを受けるたびに、この国民文庫版をすすめてきたが、それにめぐりあうことのできた人はまれであった。国民文庫は、七〇年代のはじめには、これを絶版にしてしまったふしがある。

スターリン論文の最も新しい版は、一九七二年に、ミュンヘンで現われたドイツ語版ではないかと思われる。このドイツ語版は、スターリン論文と、マルの『言語起源論』（一九二六年）とを抱きあわせて一冊とした、ふしぎな刊行物であって、私はこれを愛用している。

このスターリン論文、すなわち『マルクス主義と言語学の諸問題』は、五〇年六月二〇

日、最初に『プラウダ』に発表された主論文「言語学におけるマルクス主義について」と「言語学の若干の問題について」「同志諸君への答え」の三篇からなる。

スターリン論文のうちの最初的一篇、六月二〇日の『プラウダ』への掲載は、突如はじまったものではなく、それへと導く前段階があった。この前段階を経た後、スターリン自身が登場し、この論争に決着をつけるという筋書きが作られていたのである。

ところが、「スターリン論文」としてまとめられた『マルクス主義と言語学の諸問題』そのものは、

「言語学の諸問題、とくに言語学におけるマルクス主義にふれた部分について、新聞紙上で私の意見を述べるようにとの青年同志諸君のグループの申し出があった」とはじめられているだけなので、その青年同志諸君がどのような問題を議論したのかは省略されていて、明らかではない。しかし、そこへ至る道のりを理解しておくことは、「スターリン言語学」の背景と意味を知るうえで欠かすことができない。

スターリン論文発表直後に、時をうつさず当時の状況をくわしく述べたものに、東郷正延「スターリンと世界語の問題」（一九五一年）と村山七郎「ソヴェト言語学」（一九五一年）とがあるので、いまはそれにもとづいて整理しておこう。

まず一九五〇年五月九日付、全ソ連共産党機関紙『プラウダ』は、「編集部から」として、ソビエト言語学の沈滞を克服するために自由な討論をまき起すことが必要だと認め、毎週二面を割いて、言語学の諸問題についての討論を掲載すると発表した。その第一回としてこの号がのせたのは、その後一貫して、脱マル化の陣頭指揮をとることになる、A・チコバーワの「ソビエト言語学の若干の問題について」であった。

チコバーワはスターリンにとっても、マルにとっても同郷人であり、グルジアの首都トビリシの大学の言語学の教授だった。五〇年のソビエト言語学論争が、当時はすでにこの世にいなかったマルを含めていずれもグルジア人を主役にしてはじめられたことは興味ぶかい。

次の週一六日には、マルより一九歳若く、ハイデルベルクでヴィンデルバントのもとでも学んだことがあり、奔放なマルの発想に、冷静なやり方で事実上の肉付けを行った、当時科学アカデミーの副総裁だったI・I・メシチャニノフが登場した。かれの論文は「アカデミー会員、エヌ・ヤ・マルの遺産の創造的発展のために」だった。この連続紙上討論は、メシチャニノフを、ソビエト言語学界から追い落すためのものだったとも言える。かれについてはあとで再びふれるだろう。

次の週、二三日は、S・チェモダーノフの「ソビエト言語学の発展の道」、B・セレーブレンニコフの「エヌ・ヤ・マルの研究方法について」、G・サンジェーエフの「前進か後退か」が一挙に掲載された。私は後二人の論文については比較的親しんでいる。セレーブレンニコフは、一九七二、七三年に刊行された、二巻本の『一般言語学』の責任編集者にもなった。サンジェーエフは、かなり日和見的なブリヤート・モンゴル出身の言語学者で、『諸問題』すなわちスターリン言語学の中で、スターリンから直接回答を受けた一人である。かれの故郷のブリヤート・モンゴル語は、この頃、モンゴル語から切り離される決定的段階を歩んでいた。スターリンとのやりとりは、それをすすんで正当化するためのように見えて、私には甚だ不愉快である。

続いて三〇日は、F・フィーリンの「ソビエト言語学の停滞を排し、その発展のために」、

G・カバンツァンの「エヌ・マルの若干の一般言語学的命題について」、A・ポホフ「ソビエト言語学の緊急問題」が登場し、六月六日にはアカデミー会員、V・ヴィノグラードフが「ソビエト言語学をマルクス・レーニン主義の基礎の上に発展させよ」で、メシチャニコフの方法論を批判した。

月がかわって六月一三日には、さらに二つの論文が掲載され、合計すると、五月九日にはじまって、一篇の論文が発表されたことになる。

私は、緻密に書かれた東郷論文に記録されているものを、ここにすべて再録した。その中で、私はサンジェーエフには、当時のブリヤート・モンゴルの言語政策にかかわって、かれのふるまいに特別の関心があるし、その他の人々の言語学者としての立場と、その後の身のふりかたを観察すると、学問と権力という、興味ぶかいテーマで一つのドラマを見ているかのような思いがする。

チコバーワは、マル時代の空白を埋めるかのように、スターリン論文発表のすぐあとにつづいて、はじめての『言語学入門』（第二版、一九五三年）を書いた人で、その内容は、マルに全面的批判を加えながら、スターリン論文（スターリン言語学）を解説し、それに肉付けをして行くという方法をとっている。私がこの本を読んだのは一九五四年で、モンゴル語を専攻する、二年生の学生であったが、私がマルの学説を本当に知ったのは、このようしかたによってであった。この『言語学入門』の表紙は布装で、奥付を見ると、一二万五〇〇〇部刊行された。チコバーワは、マル批判の口火を切り、またその後も、この教科書を著わすことにより、脱マル、脱ソビエト言語学を主導したのである。固有のソビエト言語学を作ったマルがグルジア人なら、その批判の幕開けのきっかけを作ったのもグルジア人チコバーワで、その上、ドラマをしかけた張本人のスターリン自身もグルジア人であったから、いわば一篇のグルジア劇として、独得の雰囲気はただよっていた。

セレーブレンニコフの論文を終りとし、これら一篇の論文が発表された後、次の週、六月二〇日に、総まとめとして、スターリンが「言語学におけるマルクス主義について」を以て登場した。

次いで七月四日に「言語学の若干の問題について」が、八月二日「同志サンジェーエフへ」をはじめとする「同志諸君への答え」が掲載されて、ここで、国家的レベルにおいて、正しい言語学と間違った言語学の裁定が下されたのである。

いわゆる「言語学についてのスターリン論文」という時は、この「同志諸君への答え」を含めて、『プラウダ』に掲載されたものを一まとめにして呼ばれる。その全体につけられた題名は、『マルクス主義と言語学の諸問題』であった。

### (3) 解放の儀式としての「カテキズム」

『スターリン全集』を見ると、「同志〇〇への手紙」というタイトルを持つものが少なくない。この「スターリン論文」も、同志諸君の提起した問いに答えるという形をとっている。

あとでふれる時枝誠記は、それを初めて見たとき、スターリン論文は「全篇カテキズムの形式をとっている」と、うまい表現をしている。

ここでは、問いは四つにまとめられているが、核心部分は、

一、言語は上部構造であるか——否

## 二、言語は階級的であるか——否

の二点である。いずれも答えは否定であって、政治家がネガティブな回答ばかりを連ねるというのは、あまり世のならいにそぐわないことである。

しかし他の二つの問いは、ポジティブで、具体性のある内容をもって答えねばならない性質のものであった。すなわち、言語の文法構造と語彙、その変化と発展、言語の混こう（まじりあい）、言語の意味論、将来の言語（全世界が社会主義社会となった時点における）、などのテーマが論じられる。

言語が上部構造であるかどうか、階級的であるかどうかは、いわばたてまえに関する部分であって、このたてまえを一応認めておけば、具体的、実証的言語研究の場では、かなりの部分が、たてまえから自立して行うことができる。

もっと具体的に言えば、ある言語、たとえば、いま、現に話されているアイヌ語の発音や文法構造はこのようなものと示すにあたって、言語一般が上部構造であるか、階級的であるかを論じることとは切りはなして行うことができる。むしろ、あれこれの言語の発音を説明するのに、階級性と結びついて論じなければならないとすれば、説明する人も聞かされる方も困惑してしまうにちがいない。

しかし言語学が確立している「比較言語学」の方法が、言語の本質論の上にたった、正しい方法であるかどうかは、言語学固有の問題として論じることができるし、また比較言語学の前提になっている、言語の骨格部分はまじり合わないものであるというような前提は、せまい意味での言語学、本来の言語学の中心的な問題でもある。

じつはこの点こそ、それまでの正統言語学と、マルの言語学の争点の中心をなすものであって、この問題については、マル自身よりも、かれの一派に属するアバエフが、今日でも読む価値のあるいい論文を書いている。しかしスターリンは、「比較史（比較言語学のこと）的方法はマルの四要素による分析よりはまだまし」だと簡単にかたづけただけでそこには足をとどめずに、この言語の混こうを未来の言語の問題と結びつけて論じる方向に行ってしまう。

したがって、この論文一問答集は、「言語学の諸問題」と題されてはいるが、固有の言語学よりは、むしろ、哲学、歴史学、経済学の分野の関心を引いた。それは一つには、言語学に隣接する諸学が抱いていた、孤立して閉鎖的な言語学との接点を求めようという潜在的な関心を刺激する面をもっていただけからだ。その上、この問答集の題名は、「マルクス主義と……」となっていたから、なおさらのことである。

同じことが言語学の側からも言える。今日のような、「社会言語学」ということばさえなかった時代に、言語の本質を、社会現象と結びつけて解き明かしたいと願う人たちにむかっては、その方法のための何らかのヒント、できればその体系的な取り扱いの方法を見出すきっかけがあるかもしれないという期待を抱かせた。

しかし、この論文は読者のそのような期待に応ずるようなものではなかった。そこでは、かなりの無理をしながら進められてきた、「言語学のマルクス主義化」の努力が、すべて、ばかげた、無意味なものとして捨て去られ、正統であるのみならず、凡庸な、伝統的言語学の道にひきもどされたからである。

とりわけ厳しいイデオロギー闘争の最前哨にあった東ドイツでは、『プラウダ』での紙上討論から一年を経た五一年の六月、ドイツ統一社会党中央委員会の主催で、「同志スタ

ーリンの言語学にかんする著作の諸科学の発展にたいする意義」と題する理論会議が開かれた。その議事録は日本語にも翻訳され、『唯物史観の諸問題』の題名で、三〇〇ページを超える大冊として五三年、三一書房から刊行された。そこには言語学のほかに、自然科学、社会科学、法律学、道徳、歴史、科学論哲学、芸術、党活動の分野から報告が寄せられた。五〇ページばかりのスターリンのテキスト——それはこの章に続けて収録してある——に一〇倍をこえる解説と討論がなされたことは、そのテキストや討論の内容に意味があるのではなく、長年そのために苦悶してきた、いましめからの解放を記念する、うやうやしい儀式として行われたのであった。この解放の記念が、そのまま祝賀のセレモニーにならなかったのは、無理をして、そのいましめのわくに自らをあわせて来た人たちにとっては、半ば教条の側に身を置いていたのであるから、単純な祝賀ではすませることができなかったのである。

#### (4) 言語は上部構造ではない

スターリンがこの論文で、まず手はじめに否定したのは、「言語が上部構造に属する」という論である。「土台」、「上部構造」とその二つの関係について、スターリンは次のように説明している。

土台というのは、ある発展段階における社会の経済制度である。上部構造とは、社会の政治的・法律的・宗教的・芸術的・哲学的な見解と、これに照応した政治的・法律的その他の機関である。あらゆる土台は、それに照応した特有の上部構造をもっている。封建制度の組織の土台は、自分の上部構造、すなわち、自分の政治的・法律的その他の見解と、これに照応した機関をもっており、資本主義の土台は自分の上部構造を、社会主義の土台は自分の上部構造をもっている。土台が変化し、なくなると、これにひきつづいて、その上部構造も変化し、なくなり、新しい土台がうまれると、これにひきつづいて、それに照応した上部構造がうまれる。

この一節は、マルクス主義、よりくわしく言うと、唯物論、マテリアリズムの、文化についての具体的な観点を示している。経済制度も宗教も芸術も科学も、すべて、人間があつてはじめて生れた現象であるという意味で文化である。その文化の中に、よりモノ、物質にかかわるものと、より価値、観念にかかわるものとが区別される。前者が経済の諸関係であり、肉体という物質の維持にかかわる活動であるから、たしかにそれを「土台」と呼んでもいい。もっと俗な言いかたをすれば、「先だつものはカネ」というばあいのカネは土台であり、「ハラがへってはいくさができぬ」というばあいの、「いくさ、戦争」は、「ハラをいっぱいにする」という「土台」の上に立つ「上部構造」である。

「土台」はハラやカネにかかわるから、これはたしかに、なくてはならない、生活、生命維持のための「土台」、前提条件であつて、宗教も芸術もそのあとにやってくる。大学の学部の分類で言えば、経済学部はより多く土台にかかわっているが、文学部や芸術学部の活動は上部構造にかかわっているのである。

スターリンは、この「土台」を「経済制度」と言いかえている。経済制度のちがひ、すなわち、封建制度の経済構造という土台は、封建的な価値観にもとづく文学、芸術、道徳

が生まれ、資本主義、社会主義という経済構造の土台は、それぞれの価値観、道徳、芸術を生み出すのである。だから、土台が変れば、価値観、道徳も変ることになる——このような見方は、だれでも理解し、受け入れることができるであろう。

ここで大切な点は、大すじにおいては土台が上部構造を決定するという考え方である。うんと単純に言ってしまうと、モノやカネが作り出すシステムが、人間の精神領域を決定するという見方である。だから、こういう考え方を提案したその当人が、自分の考えを「モノ主義」、「物質主義」と特徴づけたのである。ヨーロッパ語では、この「モノ」「物質」を「マテリア」とか「マテリアル」と言うので、このような「モノ主義」をマテリアリズムと呼び、それを日本語では「唯物論」と翻訳したのである。

しかし、人間という動物はモノ、カネ、ハラだけに支配されているのではなく、信仰や道徳は、そうしたモノを拒否し、それを越えていとなみを続ける。すなわち人間は、モノではなく、より多く、オモイやネガイによって生きていて、これらヨーロッパ語で「イデア」と呼ばれているものが、人間を介して、かえって、モノの世界に影響を与えるのだと考える立場をイデア主義、イデアリズム、それを日本語に翻訳して、「観念論」と呼んできたのである。このような、人間は第一義的にモノ的な存在なのか、いな、より多くオモイ、ネガイ的存在なのかといった論争もまた、上部構造に属することは言うまでもない。

ところで、ここでスターリンが、「あらゆる土台は、それに照応した上部構造をもっている」（ロシア語の原文では *Всякий базис имеет свою, соответствующую ему надстройку*）とか、「新しい土台がうまれると、それにひきつづいて、それに照応した上部構造がうまれる」（*рождается*）とかと言う言い方にとどめて、土台が上部構造を限定するとか支配するとか、決定するとかと言っていないのは、土台と上部構造とが、一方的な関係でないという含みをもたせているのである。

土台は比較的単純に扱えるとしても、上部構造についての論は、はるかに複雑で手ごわいことは、数かぎりない議論が生れたことからわかる。スターリンは、その問題の手ごわさを充分承知していて、ことばじりをつかまえられて、当面の議論以外のやっかいな問題に引きこまれるのを避けたのである。この問題は、あとで「言語は上部構造には属さない」と言う必要が起きた際に、あらためてとりあげられる。

この、「土台」「上部構造」論が、このことばを使ってはじめてとりあげられたのは、カール・マルクスの『経済学批判』（一八五九年）であって、その「序言」では次のように述べられている。

「人間はその生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した関係、生産関係にはいる。この生産関係は、彼らの物質的生産力の一定の発展段階に照応する。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造、つまり実際の土台（*die reale Basis*）を形成する。そしてこの土台の上に法律のおよび政治的な上部構造（*Überbau*）が立ち、そしてそれに一定のさまざまな社会的意識形態が照応する。物質的生活の生産様式が社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。人間の意識が人間の存在を決定するのではなくて、逆に彼らの社会的なありかたが、彼らの意識を決定（*bestimmt*）するのである。」

私が最後の傍点をつけた個処は、マルクスが、人間の意識、観念が、完全に物質の支配

下にあることを念を入れて強調した点である。日本のマルクス主義文献のほとんどが、bestimmt を「規定する」という風に、いささかやわらげて翻訳しているところを、私があえて「決定」と訳したのは、マルクスが決然と、断乎と ‚bestimmt ‘ と言ったところを、ごまかしてはならないと思ったからである。

この一節は、スターリンの無視できない力作、「唯物弁証法と史的唯物論」（一九三八年）にも引用されている。

マルクス主義、一般的に言って一九世紀の自然科学主義は、人間の社会的生産関係が、「人間の意志から独立した (von ihrem Willen unabhängig) 関係」であることを重視する。

同じような表現は、エンゲルスの『アンチ・デューリング』、したがって、『空想から科学への社会主義の発展』（一八八〇年）においても同様にくり返されるが、そこではより強く、「生産者から独立して、生産者の意志に反して、盲目的に作用する自然法則として」貫徹すると、さらに一層、自然法則に近寄せた表現に煮詰められて登場する（傍点は田中）。この表現は、言語学における「音韻法則」について言われた表現と相談しあって作られたのではないかと思われるほど一致している。いわく、

「諸言語の音韻法則はまさに盲目的に、盲目の自然必然性をもって作用し」、「例外だの、見逃しだのは、全くないのである。」（オストホフ、一八七九年。傍点は田中）

一九世紀自然科学イデオロギーは、経済学にも言語学にも、自然科学まがいの同じ法則概念を、その表現ともども共有したのである。

#### (5) 言語の脱イデオロギー化

土台と上部構造、またそれらの相互関係について、以上で考えるべきことが終わったというわけではないが、それをひとまずは終えたことにして、それでは、言語はどこに属するのかという問題が生ずる。いったい、土台と上部構造の区別を行った一八五九年のマルクス自身はどう考えていたのだろうか。

言語が土台に属さないことは明らかである。それはモノやカネとは何も関係がない。ことばはいくら消費してもなくなる。

とすれば、言語は上部構造なのだろうか。しかし、土台が変れば言語が変わるわけではない。封建制度から資本主義へと土台が変わったからと言って、日本語の本質が変わったわけではない。少なくとも、シナ語のような文法から今のような日本語の文法に変るという変化があったわけではない。——しかし、それではこのようなことを認めて、言語を上部構造からはずすと、いったいそれでは、どこに位置づければよいのだろうか。

土台が変わっても変わらないものは、水、空気、土、火のような自然である。しかしたとえば、水は封建時代でも社会主義時代でも物質としては——自然科学の対象としては——同じだとしても、社会におけるその意味には変化があり得る。たとえばアントワーヌ・メイエは、インド・ヨーロッパ語における文法的性（ジェンダー）の問題を扱った論文で、水を表わすラテン語のアクア (aqua)、ロシア語のワダー (вода) などが、いずれも女性であるのに対し、ギリシャ語のヒュドール (ἵδωρ)、ドイツ語のダス・ワッサー (das Wasser) が中性になっているのは、かつて水が生きものとして、女性的観念でとらえられていた神話的世界が、ギリシャ語とドイツ語になったときには単なる無生物の物質に転化し、ついでに女性性も失って、単なる中性となったという、いわば脱神話化の発展を想像している。

つまり、「水」は水であることには変りはないが、「水」の意味は変わってくるというふうに理解してもいいだろう。

人間の作り出した文化全体を、土台と上部構造との関係で把握しようというのは、すばらしいアイデアにちがいない。少なくとも、革命による社会の変革は、土台だけでなく、人々の精神も一新するのであるから、その人々の精神活動と一体であり、それを支える言語は全く変らないとすれば、言語というものは、まことに奇妙なものであり、理論を作ろうとする人にとっては厄介なものである。

その際、言語は「道具」であると言ってしまえば、少しはなっとくできる点もある。たとえば、革命があろうとなかろうと、革命側が使おうと反革命側が使おうと、カナヅチはカナヅチで、ノコギリはノコギリだというふうに。

また、どうしても「ことばも変る」と言いたければ、「変る」ということは、どのような言語現象のことを指しているのか、また、言語について変ると言うばあいに、どのような現象をさしてそう言っているのか、などなどの問題を整理して限定しておかねばならない。だからスターリンは言う。

言語はこの点で上部構造と原則的にちがっているが、生産用具、たとえば機械とはちがわない。機械は言語と同じように、どんな階級であろうとかまわず、資本主義制度にも社会主義制度にも同じように奉仕しうるのである。

しかし、革命によって言語の基本的骨組みは変らないにせよ、やはり、一つ一つの言語をとりあげて、そのなかみを見れば、人々は、それなりの変化に気づく。

スターリンもその名をあげている、ポール・ラファルグの『革命の前と後とのフランス語』（一八九四年）が関心を向けているのは、大革命の前と後での、社会層のフランス語への参与のしかたにおける変化である。興味ぶかいことに、一九一二年にこのドイツ語への翻訳を自ら行い、刊行したのがカウツキーその人であり、「革命と言語」という問題が、かれの関心を強く引きつけていたことを示している。

言語学者は、音韻体系や文法の記述だけが自己の神聖な職務と考えて、こうした、ことばの社会的局面には関心を向けないように訓練されているが、日本の言語学徒は、この訓練を受け入れるのに、とりわけ従順であった。

カウツキーがラファルグを訳した年の翌年の一九一三年には、ロマニストのカール・フォスラーが、『言語発展の鏡に写し出してみたフランス文化』と題して、総合的なフランス語史を描き出そうと試みている。

大筋において、いつもフランス革命をモデルとして考えていたソビエトでも、やはりラファルグの著作の意図を、ロシア革命に適用して、実現しようとした人がいた。それは言語学者のA・M・セリシチェフで、一九一七―二六年の間のロシア語の観察にもとづいて書かれた『革命期の言語』（第二版、一九二八年）である。

革命の指導者たちがどんな言語を使ったかについては、たとえば、『レーニンの言語』のような、おべっか使いの著作はあるが、しかしこのセリシチェフのように、冷徹に、客観的に、言語学者の目をはたらかせてそれを観察した人はいない。かれは、レーニンがいかに西洋語かぶれで、英語やドイツ語の知識をふりまわし、それを演説の中にちりばめた

か、そしてそれをまねた党の活動家が、農民たちの前で延々と話したが、農民は何も理解しなかったというようなことが述べてある。

一九六八年にセリシチェフの著作集の中にその一部分が収められたが、私がここに述べている興味ぶかいことがらのある部分は、注意深く除かれていた。レーニンのイメージをこわすかもしれない、ぐあいの悪いところだと判断されたせいかもしれない。

とにかく、この書物は、革命がいかに関言語を変えるかという面から観察され、書かれており、そうした指摘が、政治的にぐあいの悪い現象であるかどうかにはほとんど気を使っていない。

ソビエトの同類の著作で私がおもしろいと思ったのは、N・M・カリンスキーの『ロシア農民の言語のあらまし』（一九三六年）で、一九三二年にヴァニロヴォという農村に行った現地調査にもとづいている。

この農村の村ことばについては、著者がすでに一九〇五年に行った調査があり、革命をへだてた三〇年間に、ことばがいかに関変化したかをつきとめるためであった。

著者はこの本の冒頭に、この調査にあたった方言委員会は、マルの発案によって組織されたものであり、その活動に不断の注目を寄せてきたマルの思い出に捧げたものであるとの献辞を寄せている。マル没後二年目の刊行である。

マルは、もちろん、こうした言語変化と社会階層との関係に関心があり、この種の研究を激励し、期待したことは明らかだと思われるが、かれには、言語の変化を全人類史に結びつけることの方に関心があった。

すなわち、セリシチェフやカリンスキーの研究が、現代の、いわば社会学的な関心からのものであったのに対し、マルのは本来の意味で言語学的であった。つまり、マルの前には、言語の類型論、言語の親縁関係、言語の比較研究方法などの領域で、一九世紀言語学が作った枠組みを破り、言語変化、言語の系統についてどのようなモデルを対置するかという問題が大きくのしかかっていた。

こうしてスターリンが社会構造の変化と言語変化の相関関係を否定してくれたおかげで、一九五〇年代のソビエトの言語学者たちが、脱社会的、脱イデオロギー言語学のぬるま湯につかっていたそのさなかに、西ドイツでは、言語が、いかに強力に、イデオロギーの磁場の中に置かれているかを示す研究が生れていた。

ドイツではすでに一九四五年に、シュテルンベルガーらの『非人間の辞書から』、一九四六年には、ヴィクトル・クレンペラーの『第三帝国の言語』などが現われて、ナチズムがいかに言語を変えたかの、言語批判的研究がはじまっていた。しかし、それらはまだ、語彙使用の領域における、セマンティックなストラテジーを論じるにとどまっていた。

ところが、一九五五年になってH・イーバツハが、非人道的独裁政権のもとでは、文法の用法すら変ってしまうことを示すために、実例を示しながら説明した。

当時、西ドイツの言語学界で影響力の強かったW・ヴァイスゲルバーは、この論文に触発されて一九五八年に、『ヒトとモノの言語による評価の変遷』という独立の書物を刊行した。

そこでの主張は、「対格（目的格）に立つ人間」あるいは「人間の対格化」というキャッチフレーズによって有名になった。それはたとえば、

**dem Soldaten Waffen geben**

兵士に武器を与える

という言い方から、

**den Soldaten bewaffnen**

兵士を武装する

と言い方に移りつつある。それは、人間が、ますますモノとして扱われる方向にすすんでいることを示すものだというのである。

スターリンが、ソビエト言語学を脱イデオロギー化したのに併せるようにして、ドイツ語世界では、イデオロギー的側面の観察に関心のまが移ってきた。その背景には、東西ドイツの言語が分裂しつつあると意識され、それを実証することへの関心が高まったからである。つまりここでは、ソビエト言語学の武装解除とは対照的に、言語を上部構造と不可分なものとして見る関心がたかまっていたのである。

#### (6) 言語は階級的ではなく、「全人民的」

マルが地道な実証研究から離陸するにあたってどのような過程があったのか、今のところ、充分なつとくの行くようなくわしい説明はされていないが、とにかく、かれは、言語の変化を一挙に、社会の発展段階にむすびつけたのである。それと同時に、変化のもとになる変異を、階級の差に関係づけた。

今日地球上に存在する多様な言語の中に、いくつかのタイプを見出し、そのタイプに属する諸言語が、もし、文法構造や語彙の点で相互に共有する要素が多ければ、それぞれが共通の起源をもつものと考え、今はなくなっていて、直接見ることはできないその元祖にあたと推定される言語を考えて、その「祖語」を「再建」する。これが、一九世紀に確立した、「比較言語学」の目ざしたところであった。その結果描き出されたのが、今日誰でも口にするようになった、インド・ヨーロッパ語族、セム・ハム語族、シナ・チベット語族、あるいはウラル・アルタイ語族などと称される系譜集団である。それぞれは、別々の血統に属し、いわばエスニックな相異に対応している。

マルはこのエスニックな相異にもとづく、言語のそれぞれ異なる、系統ごとの起源を否定して、人類諸言語の小さな群ごとの起源を想定したのである。語族の形成はずっと後の段階でのできごとであると。では、これほどにも異なる、諸言語の質的ちがいは何にもとづくのか——それを説明するために、マルは、発展段階のちがいを持ってきた。このようにすれば、言語の相異は、発展段階という、普遍の人類史の中に位置づけられる。

マルは実証の段階を省略して、言語を人類史の全コンテクストの中で理解するための図式を作りあげようとした。それは、ソ連邦にふさわしい「マルクス主義言語学」を構築するようにとの要請に応じようとするものだった。

しかしそこで、マルが、一挙にとびこえた、途中の段階の実証を行おうとした時、奇妙なものとなった。

私の考えでは、言語の問題には実証できない、いな実証を求めることじたいが論理的に

誤りであるような種類のことが多い、いな、むしろほとんどそうであると言ってもいいくらいである。なぜそうなのか、今、私は答えることができないでいる。ほんとうは、マルはそのような領域に踏み込むべきではなかったのである。

ところがマルは、根が大変実証的な人で、革命以前の若い時代の研究にそれが現われている。かれがソビエト時代以前におこなった、カフカス諸語やアルメニア語についての実証的な研究は、その後のマルの奇論、奇行にもかかわらず、多大の信頼と賞賛を受けている。

いずれにせよ、マルが提出した理論によれば、言語の相異は、全面的に社会の発展段階に依存しているのであるから、それが上部構造に属しているのは当然であって、そのことを問題として提起することじたいが無意味であったはずである。

ところが、スターリンは、言語は「道具」であって、社会の変化に対応するような上部構造ではないと、きっぱりと否定したのである。

言語がいかに上部構造ではないかということ、言語が「土台」の変化に対応するようになしかたでは変化しないことによって説明する。

ロシア社会とロシア語を例にとってみよう。最近の三〇年間に、ロシアでは古い資本主義の土台が根絶され、新しい社会主義の土台が建設された。これに応じて、資本主義の土台のうえに立つ上部構造は根絶され、社会主義の土台に照応した新しい上部構造が作りだされた。したがって、古い政治的・法律的その他の機関は新しい社会主義にいれかわった。だが、それにもかかわらず、ロシア語は基本的には十月革命前と同じであった。(傍点は田中)

いや、ロシア語はやはり変ったという異論の出るのを前もっておさえるために、スターリンは、「新しい単語や表現が多量に補充されたり」「単語や表現の意味が変化」しても、「基本単語のたくわえと文法構造」は変化しないと、オーソドックスに説明する。そして、言語はすべての階級の利益を代表するために——「なにかある特定の階級の要求を満足させるためにつくられたものでなく」て、

言語は、社会にとって単一な、社会の全成員にとって共通な、全人民的言語としてつくられているのである。(傍点は田中)

とする。ここの「全人民的」と訳されているロシア語のもとのことばは *общенародный* (オプシチエナロードヌイ) である。この語に対する「全人民的」というこの訳語はまちがっていない。ドイツ語でも、ここは *Volk* (フォルク) と訳されているし、そう訳すしかないが、しかし、この「人民」とはいったい何だろうか。

「言語は階級的ではない」と言っているのだから、この「人民」が、「人民革命」とか、「人民の敵」とかという場合の用語でないことは明らかである。階級的ではなく、一つの言語を共有している社会集団は、ふつうは「民族」と呼ばれるものにほかならない。だから、このナロードを「民族」と訳すべきか否かは別として、その内容は、民族そのものにほかならない。

そのこと、つまり、スターリンの言う「人民」が、「民族」の言いかえであることは、それに続く文章で明らかになる。すなわち、ロシア語が「ロシアの資本主義やロシアのブルジョア文化にりっぱに奉仕した」という事実は、だれにとっても秘密ではない」と述べたあとで、ウクライナ語からトルクメン語までの一四の言語名と、「その他各ソヴェト民族についても同じことをいわなければならない」とした上で、

これらの言語は、新しい社会主義制度に奉仕しているように、これらの民族の古いブルジョア制度に奉仕したのである。

とまとめている。ここの「各ソヴェト民族」、また、「これらの民族」は、いずれもナロードではなく、「ナーツィア」(нация)ということばで表わされている。

すなわち、スターリンは、言語が「民族」のものであることを、ここでははっきりと認めたのである(たとえばメイエのように、言語は民族からきりはなせるというのではなく)。この個所を読む人は、スターリンのこの発言が、ごくあたりまえのことだと思っはならない。なぜなら、それまでの「ソビエト言語学」にとどまらず、ソビエト科学全体がたたかい求めてきたのが、言語、文化、そしてあらゆる点における「脱エトノス性」、「脱民族性」であったからだ。

一九一三年の「民族問題」においては、言語が民族のものであることは、あらためて問題にもならなかったが、ソ連邦成立後の三〇年の間に生じた新しい理論的要請は、あらゆるエトニスム(民族性)の強調や、その絶対化を掘りくずすための努力であった。

この三〇年間は何のためだったのか。これこそ、古典的マルクス主義の順調な発展の線上に、当然獲得されねばならない理論的成果であった。ところがスターリンは、言語における階級性を否定した上に、これだけは何としてもソビエト理論の成果として守らねばならない「言語の脱エトノス」理論をむぞうさに捨て去ってしまった。その後に来るものは、次のような、まともに凡庸な、「言語=道具」論である。

言語は、この点で[「人間の交通用具として社会全体に奉仕し……社会の成員の階級的地位のいかにかわらず彼らにへだてなく奉仕する」という点で] 上部構造と原則的にちがっているが、生産用具、たとえば機械とはちがわない。

次には、この道具、機械が、どのような構造をそなえているか、語彙と文法の二つの部門から成り立っており、語彙は「建築素材」であり、「文法は、単語の変化の規則や、単語をくみあわせて文を構成する規則」であるから、

文法(形態論(モルフォロギア)、文章法(シンタクシス))は単語の変化と文中の単語の組合せの規則の集成である。

と、非のうちどころのない、教科書的な説明が続く。ここをソシュール的な用語でいえば、文法は「パラディグマティックな関係とシンタグマティックな関係によって」作り出されるということになる。

このくだりは、不釣合にていねいに書かれているように思われる。なぜだろうか。それは思考の発達と文章法（シンタクシス）の関係に、特別の関心をもって論じてきた、マルの盟友メシチャニノフに敬意を払ってのことではなかろうかと思われる。

あとで述べるように、スターリン没後、さらに五六年のフルシチョフによるスターリン批判が行われた後、マルをなつかしみ、「外国の理論に依存しないソビエト固有の言語学の建設に従事してきた」点で、その業績を再評価しようという動きがあらわれた。しかし、マルの著作は、ほとんど復刊されることがなかったが、スターリン言語学の嵐の中でも動じることなく、マルの没後も一九六七年まで生きのびたメシチャニノフの著作は七〇年代に入って復刊された。そのメシチャニノフの言語研究の中で、シンタクシスの研究は特別の重みをもっていたのである。

すばらしい言語学史『言語学——古代から現代までのその発展の歩み』を書いたハンス・アーレンスは、メシチャニノフのために特別の一節を設けて、かれの研究の特徴を、モルフォロジーよりもシンタクシスの研究に置いたと特徴づけている（一九六九年、第二版）。メシチャニノフには、私がみるところ、すでに一九四〇年代からチョムスキーを先どりするような方向づけが現われているなど興味ぶかい点が見られるのであるが、ここではアーレンスが注目した、メシチャニノフの『言語についての新学説』から、特徴的なテキストを引いておく。それは、「言語は自ら変化するのではない。その変化はむしろ、伝達のために不可欠な手段が用いられるところの社会的環境を通じて生れる……」ではじまる一節であり、その内容を「社会言語学」であると特徴づけている。

一方、ソビエトにおける言語学批判も、一六年前に没して、もはやこの世にはいないマルにとどめ、まだ生きているメシチャニノフにまでは及ばないように、しかも、その業績を否認しないようにとの配慮があらわれているように感じられる。これはおそらく、メシチャニノフが、マルのような子供じみた語源いじりに耽溺せずに、ひたすら文の分析と、文法カテゴリーの発達の歴史を中心にすえたからであろうと思われる。

一九七一、七二年には、言語学者たちによる、「メシチャニノフ記念連続講座」が開かれた。それに次いでかれの著作が三冊も刊行された。

#### (7) 意味論の研究は有害か

「言語学の若干の問題について」の、同志クラシェニンニコワが出した第二の問いは、「あなたの考えでは、どの程度に言語学は、言語の意味の側面、すなわち意味論（セマンチカ）と歴史的意味論（セマシオロギア）と文体論（ステリスチカ）を研究すべきでしょうか。それとも、言語学の対象は形態だけに限るべきでしょうか？」となっている。

言語は意味を表わし伝えるのが役目だから、素朴な読者にとってこの質問は全く無意味なものだと感じられるだろう。意味を本命とする言語の研究が、意味を除外して研究されるなどということは考えられないことである。しかし、ここには、ソビエト言語学に特有な、また、言語学にひろく一般的な、意味の研究に際しての問題がある。

言語についてのあらゆる比較・歴史的研究は、A言語のa語と、B言語のb語とが「比較できる」、そのような対応語を求めなければならない。つまり、a語とb語とが一つの同じ語xにさかのぼり、同じ起源を持つと主張するためには、a語とb語とが、オトの面でも、意味の面でも対応することが説明できなければならない。

たとえば英語の deer (ディア) (鹿) と、ドイツ語の Tier (ティア) (動物) とが、同じ一つの語から由来したと説明するときには、英語の語頭にたつ d- がドイツ語の t- と対応する。たとえば door, drink, dry 等々が、ドイツ語の Tür, trinken, trochen ……にあたる——そう言うためには、それぞれ対応する単語の意味も一致していなければならない。そうなると、「鹿」と「動物」とは、あまり無理なく同じ起源である——もとは同じ一つの単語だった——と言えそうだが、そうであるならばどのようにして、このような意味のひらきができたかを説明しなければならない。これは個々の単語の意味の研究にかかわることであり、言いかえれば歴史的セマンティクスにかかわることである。

この問題は同じ言語の中にさえある。身近かな日本語の例で説明するために、大野晋さんたちの作った『岩波古語辞典』を見ることにする。そこには、方角を表わす日本語の「キタ (北)」は、「キタナシ (汚)」の「キタ」と同じ起源であって、その両者に共通するもとの意味は、「黒い、くらい」であったとされる。北の方角を「キタ」と呼ぶのは「キタない (暗い)」からであったとする説明だ。これも、歴史的セマンティクスの一例である。

このくらいのことであれば、まだ信じることができる。あるいは、それを信じて大発見をした気持ちになれる人もいるだろう。しかし、この説明にほんとうになっとくするためには、「北」と「汚」という二つの意味が、どのようにして一つであったのか、なっとくできるように歴史的な説明をしなければならない。その場合、長年その言語の研究に没頭してきた専門家にしてはじめて可能な、カンの発動には敬意を表さなくてはならない。

よく引かれる例に、ラテン語のホस्पス (hospes) が、「もてなす人 (主人)」と「もてなされる人 (客)」とを同時に意味するとか、あるいはフォルトゥーナ (fortuna) が「幸運」と「不運」とを同時に意味するとかのように、同じ語が正反対の意味をもつことがある。このような例を応用して、何かの語を、全く異なる語に結びつける手法もよく用いられるところである。マルもまた、原始人にそのような心性を仮定して、原始の意味世界を開いて行こうとする。

マルはこのような、正統言語学の意味論が蓄積した財産も利用したが、かれ独得の、マルクス主義的観点による、原始の意味世界を開拓して行った。

それによると、「手」と「労働」とは言語の上でも同じ起源をもっている。たとえばロシア語の「手」を意味する「ルカー」(рука) は、「切る、木を切り倒す」の「ルビーチ」(рубит) と同じ起源である。この「ル」というオトは、たとえば「ルシーチ」(こわす)、「オルージュエ」(道具) などにも含まれている。

ではなぜ「手」が「切る」と同じ起源なのかといえ、音声器官がまだ未発達時代の原始人は、「手ことば」で、「さあ働け！」ということをして、「手のひらで」「切る」身ぶりをしたからであるという。つまり、「手」と「切る」はおなじ意味世界を作っていたのだと。

これは、一見素朴な起源論のように見えるが、その背後には、エンゲルスの「手は労働の器官であるばかりか、手は労働がつくり出した産物である」という、あの有名なテーゼが横たわっているのである。

しかし、このような意味の結びつけは、次第にファンタジイの領域に入って行く危険にさらされている。こうした説明のしかたは、語源解釈学 (エティモロジー) となるが、エティモロジーの成果は、一定の規則にまとめることはほとんど不可能なので、科学の体裁

をとなえることが大変むづかしい。とって、ことばを歴史的に研究しようとするれば、このような語源解釈の作業を避けることはできない。そこで私は、エティモロジーは「言語研究の女王様だ」と考え、この言い方が気にいっているが、もしかしたら、誰かの言いぐさを知らず知らずに、自分の言い出したことだと錯覚するようになっているのかもしれない。とにかく、エティモロジーは、重厚な知識の上に培われた、独得のカンによって開かれる、詩的で芸術的な名人芸世界なのである。日本でいえば折口信夫がそのような世界を逍遥した、ことばの科学をめざす言語学からは最も遠い世界なのである。

マルのいわゆる四要素説——すなわち世界のすべての言語は、SAL, BER, YON, ROŠ の四つの要素が、さまざまに変容し、結合して作られた結果であるとする説——は、このような変幻自在の語源解釈と結びついて、異系統と考えられてきたさまざまな言語の間を媒介し、ついには、ヤフェト語族という、言語群を作り出してしまったのである。

マルのよく知られた、歴史的意味解釈の例は、たとえばグルジア語の mukha 「榧」を mu と kha に分解し、mu はシナ語の「木」、モルドヴァ語の pu 「木」、グルジア語の pur-i 「パン」、ギリシャ語の bal-a-nos 「かしの木の実、ドングリ」の bal、メグレ語 ko-bal-i 「パン」と同源であり、kha はグルジア語の khe 「木」、tke 「林」等と同源である。したがってグルジア語の mukha の mu は「木」—「ドングリ」—「パン」という意味の連関を作る。「ドングリの実」は粉にひいて「パン」を作っていたから、「ドングリ」と「パン」という意味はつながるといふ。

語源解釈というものは、こうだと提示されたら、そうかもしれないし、そうでないかもしれない、という性質のものだ。よほどのことがないかぎり、「そうでない」と否定するのはむづかしい。

日本語が、アルタイ諸語、タミール語など、ありとあらゆる言語と比較される場合にもそのようなところがあって、そうだと同意してもいいが、そうでないと言えなくもないという性質のものである。だから、言語の系統に関しては、さまざまな説が出されて、それが完ぺきに否定されることなく宙に浮いたままになっているのは、a 語と b 語との対応が、歴史意味論つまり、語源解釈によらざるを得ないからである。

マルもメシチャニコフも、考古学に偏愛があったので、悠久の太古にまで、歴史意味論の想像のつばさをのぼした。ただ、かれらのやり方の特徴は、印欧語のような屈折語の起源を、金属器の利用の時代に帰するというように、技術史や社会史に結びつけた点である。これらすべてのことは、同じ時代に、アメリカ言語学が、メンタリズムを排するあまり、意味を直接論ずることを自らに禁じ、人間の行動を経てのみ意味にアプローチしたのとはいい対照をなしている。

マルは人類社会の発生以来の言語史の復元を、ソビエト言語学の重要な課題と考えた。失われてしまった原始の意味世界に分け入るためには、現代の意味感覚をこえて、別世界の意味の連関を復元しなければならず、マルはトーテムのシンボリックな意味を言語の意味解釈と結びつけたりした。かれは、言語学が定めた禁を破ったのである。

このようにしてとにかく、ソ連の言語学界には、マルの歴史意味論の奔放な解釈によって、秘儀的な雰囲気はただよった。そこで歴史的意味解釈、ひいては意味論そのものが悪名高いものとなった。同志クラシェニンニコワの質問にはそのような背景があったのである。

#### (8) 「未来の言語」の現代性

スターリン論文で、最後にとりあげられている問題は、人類の言語は将来どのようなのか、——つまり、今日見るような個々の言語、民族語の併存状態が依然続くのか、あるいは、何か一つの言語にまとまって行くのかという問いかけである。

この問題は、いままさに、世界規模において論じられるようになったので、ほとんどの人が、たちどころに、この問題が切実な、現実にかかわる性質のものであることを理解するであろう。私たち日本人は、このような多数の国家や民族の言語の併存状態を、まず「国際的」規模の問題、すなわち、「国際問題」として理解するであろう。

ところがソビエト連邦にあっては、その国家そのものがすでに「国際社会」のミクロコスモス（小宇宙）であった。それは、どこかで例えば国連のような特定の場所とか、国際会議のような、日常生活からへだたった場所ではなくて、ソ連邦全域のいたるところで生じ、普通の多くの人々も体験していた国際問題であった。

しかし、ソ連邦という一国の中での問題を「国際」と言うのはおかしい。そのために、いわば「国内の国際」を呼ぶためのロシア語が必要であった。この必要を満すために生まれたのは、

メジドゥ・ナロードヌイ      МЕЖДУ-НАРОДНЫЙ に対する  
メジ・ナツィオナーリヌイ      МЕЖ-НАЦИОНАЛЬНЫЙ

という用語である。メジドゥ・ナロードヌイというロシア語は、インター・ナショナル（inter-national）をモデルにして作られた。ナシオン（ネイション）にあたるロシア語はナロードであるが、「民族」にあたるロシア語はナーツィア（ナシオンに由来する）である。

私は、したがって、メジ・ナツィオナーリヌイは、「国際」ではなく、「民族際」であるから、これをちぢめて「族際語」と訳して使い続けてきた。この「族際」を表わす、メジ・ナツィオナーリヌイということばじたいはもしかして新しいものではないかもしれないが、それが自覚的に用いられはじめたのは一九七〇年代のブレジネフ時代であった。このことばが一九七〇年代、すなわち、全ソ連史の末期において担った意味ははなはだ大きい。そのことは、あとであらためて述べるであろう。

ソ連邦は出発の当初から、諸言語の全くの同権、平等という原則から出発した。しかしロシア語以外の言語は日々爆発的に生れる、行政機構や科学技術を受容するために必要な語彙をまだそなえていなかっただろうし、正書法も定着せず、文字をそなえていない言語では、困難はさらに大きかった。

実際には話し手人口の多さによって、それらの言語には印刷手段の保障や出版において等級がつけられたであろうが、原則は、基本的には同等であった。行政、文化の用語としてのロシア語の普及は、当然であったし、避けられないことであった。

しかし、ロシア語の全連邦的規模での使用を法的措置によって義務づけることを固く禁じる文書があった。それはまだ革命前、一九一四年に発表された、「強制的な国家語は必要か？」という、わずか四ページほどの短い、レーニンの論文である。

新聞『プロレタールスカヤ・プラウダ』に発表されたこの論文は、次のような文章で結ばれている。

「必要なことは、すべての地域のことば（местный язык）によって授業をする学校を住民に保障し、また諸民族のうちのある特定の民族に特権を与えたりすることも、少数民族の権利のいかなる侵犯をも無効と宣言する基本法を憲法に入れることによって、強制的な国家語を定めないことである。」

ここに言う「国家語」（государственный язык）とは、多言語状態に直面していたオーストリアで、一八四八年頃に提案された用語で、一八九九年に、ブリュンで採択された、オーストリア社会民主党の民族綱領に現われる。

その第五条では、「我々はいかなる民族的特権をも認めない、したがって国家語（Staatsprache）を〔定めよという〕要求は退ける」と規定している。

このテキストは、カウツキーの論文「民族性と国際性」に引用されていて、レーニンはこのくだりを、ノートを取りながら注意ぶかく学んだのである。そしてレーニンはこの規定に共感して、国家語の制定を禁ずる特別の論文を書いたために、ソ連邦は、遂に、崩壊のその日まで、ロシア語を国家語の地位につけることができなかつたのである。

一九二〇年代を通じて、スターリンが楽観的な、無条件の母語解放を誇示しつづけたのも、特定の言語に特権を許さないという、この伝統にそったものである。

ところが、一九三〇年に入ると、「単一の共通言語」が話題になりはじめる。すなわち、六月の、第一六回党大会での報告演説の中で、スターリンは中央委員会報告としてこう述べている。

将来諸民族文化が単一の共通言語をもつ単一の共通文化（形式においても内容においても）に融合することを支持するわれわれが、それと同時に、いま、すなわちプロレタリアートの独裁の時期に民族文化の繁栄を支持するのは、奇妙に見えるかもしれない。しかしここには不思議なことは何もない。諸民族文化を、全世界にわたって社会主義が勝利する時期に、単一の共通言語をもつ単一の共通文化に融合させる条件をつくり出すためには、これらの民族文化を発展させ展開させて、そのすべての潜在力を発揮させなければならない。一国におけるプロレタリアートの独裁という条件のもとで、形式においては民族的、内容においては社会主義的な文化を繁栄させること——それはプロレタリアートが全世界で勝利し、社会主義が日常的なものになったときに、諸民族文化を、単一の共通言語をもつ単一の共通な社会主義的（形式においても内容においても）文化に融合させるためである、——まさにこの点に民族文化の問題のレーニン主義的な提起の弁証法性があるのである。（ゴシックは原文、傍点は田中）

この第一六回党大会の報告文の、言語と民族にかかわる前半部は、スターリンが前年も述べていた諸民族の自由な発展が、その結果として、「単一の共通言語をもつ、単一の共通文化」へと融合することを念頭におき、それを目的としていることを述べたくだりである。その目的に到達するまでの、「一国におけるプロレタリアートの独裁」の段階においては、諸民族語の思う存分の発展が必要であると。

その実際の過程がどのようにすすめられるのか、具体的に想像してみるのはたやすいこ

とではないが、理念としては理解できないことではない。しかし、「一国におけるプロレタリアートの独裁期」が終って、「全世界的規模で社会主義が日常になった段階」に入ると、傍点を付しておいたように、「諸民族文化が融合」して、「単一の共通言語をもつ、単一の共通社会主義的文化」があらわれるとしている点は、矢つぎ早の質問にさらされることになる。

それではいったい、この時の「単一共通の言語」とはどんなものなのだろうか。それは、全世界にわたる社会主義の勝利の結果として生れるのだから、「全世界の単一共通言語」という名称だけは理解できる。

それはそれでいいとして、その「単一世界語」は、現存のいずれかの民族語、たとえばロシア語や英語、あるいはそれを核とした言語になるのであろうか、あるいは全面的に発展、開花した世界の諸民族語が混合しあって、「単一の世界共通語」が生れるのだろうかという問いが現われるのは当然である。

ところが、それから二〇年を経た、一九五〇年のこの論文は、言語の混合、「交配」ということが、まったくあり得ないことだとして、こう述べている。

二つの言語の交配の結果、交配された言語のどれにも似ていない、まったく質のちがった新しい第三の言語ができる、と考えることは、まったく誤りであろう。(傍点は田中)

とすれば、「社会主義が日常的なものとなった」時代の「単一の共通言語」とはどんなものであろうか。少なくとも「交配」「混合」の結果生れるものではない。言語においては、「交配、混合」はあり得ないとしているのであるから。

そうでなければ、今日ある言語のどれかが勝利者となって、それが、すなわち、ロシア語とか、英語とかが、「世界共通の単一言語」になるはずである。

この問題に疑問を抱いて質問を発したのが、「同志ア・ホロポフ」で、「同志諸君への答え」の最後のところに置かれている。スターリンは、同志ホロポフの質問をこう引用している。「あなたの論文を読んで、私は、言語の交配からけっしてなにか新しい言語が生じるはずがないことを理解しましたが、この論文を読むまえは、ソ連共産党第十六回大会でのあなたの演説にもとづいて、共産主義のもとでは諸言語が一つの共通語に融合するものと確信していました。」(傍点はスターリンのもの)

ところが、ホロポフは、今回のスターリン論文を読んで、そこに述べられた「言語は混こうしない」というテーゼと、現われるべき共通言語が「大ロシア語でもなければドイツ語でもなく、なにか新しい言語になるだろう」というところで解きがたい困惑におちいつてしまった。言語は混こうしない、まじり合わないと言っておきながら、生ずる共通言語は、既存の特定言語ではないと言うのであるから、いったい混こうによらずして、新しい言語はどのように生れるのだろうかという当然の疑問である。

ことばは、その基本構造は混りあわないというのが、正統言語学的前提である。そのようにしておかないと、比較言語学は成り立たない。ところがマルのように、人類の言語が、相互の血統のちがいによる系譜的発生ではなく、無数の群(種族)のそれぞれの言語に起源をもつと言いたいのであれば、言語が変化して行くには、それぞれ分化した言語が、たがいに混じりあい(交叉する)統合して行くことが不可欠に近い条件になって行くのであ

る。

だから、マルを否定するスターリンの立場としては、ことばは、基本的にはまじりあわない、「一方が他方に勝利する」と言わなければならないし、その方が正統言語学の道にも合っており、何よりも、健全な常識ある人々の実感にも、無理なく合致するところである。そもそもこの五〇年論文は、「ことば（民族語）はたがいにまじりあわないものだ」というテーゼを確認することが目的の一つだったと言ってもいいくらいである。

ところが、ホロポフから、この解きがたい矛盾の指摘を受けたスターリンは、「あきらかに、同志ホロポフは、これら二つの定式のあいだに矛盾を発見し、この矛盾を除去しなければならないことをふかく確信したので、どちらかのまちがった定式をなくしてもらい、そうでないほうの定式に、あらゆる時代、あらゆる国にあてはまるものとしてそれにしがみつくなければならぬ」と考えた。だが、いったいどちらの定式にしがみついたらよいかわからなくなっている。一種の出口のない状態がおこっている。同志ホロポフは、この二つの定式のいずれもが、それぞれの時代にとってあてはまるのだということに気づきもしないと、威丈高にのぞんでいるが、ほんとうのところは、スターリン自身にとっても、解かねばならない難問だったのである。

そこで、「世界的規模で社会主義が勝利するまへの時代」には、言語の「交配」は起きないが、それとは異なる「別の時代」、「世界的規模で社会主義が勝利したのちの時代」には、第一六回大会の演説で述べられたように、「諸言語が一つの共通語に融合すること」が起りうるというのである。

併存する諸言語のうちの一つの、一方的勝利と、全く異なる言語への「融合」という、異なる結果へ導く条件のちがいは、世界を社会主義がおおう以前と以後に分けられる。それは、諸言語のあり方に、どのようなちがいを生むのか。前者にあっては、

民族的孤立と諸民族の相互の不信が国家の区別によってつよめられており、また民族の同権がなく、諸言語のうちの一つが支配をめざして闘争するというかたちで言語の交配が行われ（傍点は田中）

ている状態である。それに対して、社会主義の勝利ののちには、

もはや世界帝国主義が存在しなくなり、……民族的・植民地的圧迫が廃絶され、……民族語が協力の形でたがいに自由に豊富にしあう可能性をもつようになる。……われわれが問題とするのは、闘争の結果一方が敗北し、他方が勝ちのこるような二つの言語ではなく、何百という民族語のことであって、それらの民族語のなかから、永続的な諸民族の経済的・政治的・文化的協力の結果として、まずもっとも豊富になった、まとまった地帯ごとの言語（единые зональные языки）が現われ出て、次いでそれらの地帯ごとの諸言語が、単一の共通国際語へと融合するであろう。この言語は、もちろん、ドイツ語でもロシア語でも英語でもなく、民族語や地帯言語から最もすぐれた要素をとり入れた新言語になるだろう。

以上の引用は、今、これから私が論じようとすることのために必要なところだけを取り

出して、あとは無視したものであるが、これらの行文を見ると、まったくの出まかせの思いつきで書かれたという印象を抱く人がいるかもしれない。しかし注意ぶかく読んで行くと、やはり、マルクス主義と、ソ連邦ならではの配慮がなされていることがわかる。

まず社会主義以前の言語について考えておくべきこととして、言語が何よりも民族の言語として考えられていることである。これが「スターリン言語学」の主要骨格の一つであって、この裏には「階級語」が否定されているということがある。その民族語間の相異が、「国家」の障壁によって、より一層強化されているという指摘であって、私はこれに対しはまったく異論がない。

民族語はただの民族語であるだけではすまされず、「国語」となることによって絶え間なく国家の監視をうけ、自由な発展を妨げられる。そのことによって言語間の差異は拗げられ、固定される。さらに「民族の同権」がなければ、国語にならない民族語は、国語の支配のもとで征服される。もしそうであれば、このような形での言語の接触を、「交配」(スクレシチェヴァーニエ)と呼ぶのはふさわしくないが、一步ゆずって、征服も、「交配」の一種としておこう。

次に「社会主義が勝利した後」ということを、ことば通りに受けとれば、その状態では、レーニンをはじめ、正統ソビエト・マルクス主義にしたがえば、何よりも、国家がなくなるということであるから、その段階では、「国語」「国家語」というような、特定言語に与えられる特権的なステイタスがなくなるのであるから、もはや、政治的には、ヒエラルキー(支配・被支配の関係)のない、民族語(ナロードの言語)も、前民族段階の集団の言語(ナロードノスチの言語)も、対等に併存する状態となるのであるから、そこには、各地域に言語の中心ができて、それらがさらに統合過程をくり返して、単一の言語が、地帯(ゾーン)規模で生じるというものだ。ここに現われる「地帯(ゾーン)」という用語は、「地域」よりは大きくまとまったものを指そうとしているのであろう。

言語の統合がすすめば、それによって民族も統合され、やがて、言語が単一になったときには、民族の別も消え去る。民族のちがいを作り出しているのは言語だからである。

このような考えは、じつは、マルの考えるところとそれほど大きなへだたりはない。

ほとんどただ一つのちがいはといえば、マルが、このエスニック(民族的)なちがいを言語の起源の時点において排除しておいたものを、スターリンは、すべての言語はエスニックなものだとしておいて、その消滅を社会主義の勝利の後という、いまだ存在しない、遠い未来にずらしたことである。ということは、当面は、エスニックでない言語は考えられないのであるから、そのような、脱エスニックな言語の存在を否定したことになるのである。

#### 4 スターリン言語学と日本

##### (1) 『思想』、『文学』、民主主義科学者協会言語科学部会

「スターリン論文」が一九五〇年六月二〇日の、ソ連共産党機関紙『プラウダ』に発表されると、その訳文を最初に掲載したのは、日本共産党の理論誌『前衛』だったらしい。その動機は、もちろん、日本共産党が、特別に言語学に関心を寄せていたからではなく、単に世界の共産主義運動の総本部の、しかも最高指導者の書いたものだったからだ。しかしそれは、予想もしない「言語学」についての発言だった。

いったい世界のどこの国で、その国の大統領や首相が、言語学の理論や、言語の本質について語ることがあるだろうか。言語学などというものは、大学の中だってほとんど認知されておらず、せいぜい、精気のない閑人のこりやが、世間のかたすみで、こせこせとジビキでも引きながらやるものだというのが、当時の日本での、ふつうのイメージではなかっただろうか。だから「同志スターリンの言語学の諸問題についての発言」は、にわかにならざるに、知識人や学者の注目をあつめることになった。

ことによると、その頃から今日に至るまで、日本では、言語学が諸学の中で、その空虚な実体に比べて不釣り合いに高い評価を得るようになったのは、この「スターリン論文」、言いかえれば、「スターリン言語学」の意外性と衝撃によるものではないかとさえ思われる。

スターリン首相が、言語学について論文を書いたというニュースは、戦後まもない当時の、すくなくとも今よりは知的で意欲的だった若いジャーナリストの心をとらえたにちがいない。スターリン論文への関心をひろくかきたてたのは、決して言語学者ではなかった。当時、言語学という学問は、今日のようにひろい読者大衆を持っておらず、専門にそれに従事する人は、東京と京都などのもと帝国大学の数少ない言語学の講座に関係をもつ、教師と学生くらいしかいなかったはずだ。ところがその人たちには、スターリン論文とはいったいどんなものか、一度目をとおしてみようという気持すらなかったのではないかと思われる。言語学はそんなうわついた学問ではないと。

いずれにせよ、当時の月刊雑誌がすすんで特集号を組み、スターリン論文を執筆者に読ませて感想文を発表させたことが、「スターリン言語学」をひろく世間に知らせる上で、主導力を発揮した。私は、その二年後から、学生となって、スターリンにたよりながら、ソビエト言語学、一般に言語学の壁をよじのぼって行くことになるのだが、高校生になったばかりのこの五〇年当時のことはほとんど記憶にない。記憶にはっきりしているのは、この年、朝鮮戦争がはじまったということである。

そのようなわけで、「スターリン言語学」が、突如天から降ってくるようなしかたで日本に現われた、その時の状況を、私たちが今日ふりかえてみることは、ひとえに当時の雑誌の編集者たちが、学者や研究者たちのところをまわって訳文を示し、かれらにそれを読ませ、原稿を書かせ、雑誌に発表させておいてくれたおかげである。

日本語訳を最初に見せられたであろう一人、小林英夫は、スターリン言語学の訳稿を一読して、「一ばん先に考えざるを得なかったことは、これは果たしてスターリンその人の意見なのだろうかということだった。じじつ読んでみれば、多少なるほどとうなずけないふしもないのであるが、それにしても、一国の元首が、たといいかに博学多識な人物であったにせよ、言語の本質についてまとまった見解を述べるほど余ゆうがあるものだろうか」

と、まずはスターリン自身の筆になるものかどうかと疑いつつも通読して、最後に、「子どもはかつて、ただちに「ソヴェト言語学」と銘打ったマールの言語学の紹介をよんで、その態度の不遜なのにあっけにとられたことがあったが、いまソ連邦の代表者からこのように謙虚な態度を示されたことを、言語学のために、そして又すべての真理探求のためにうれしく思うのだ。願わくは、これがたんに政治的な身振りでなく、文字どおり信じられるものであってほしい」と結んだ感想は、西欧言語学に親しんだ小林の眼には、「スターリン言語学」が健全で常識ある言語学としてうつったことを示している。

雑誌のほかにも、私も大学生になるとすぐに、その研究会に参加した、「民主主義科学者協会言語科学部会」の活動があった。

ところで、雑誌の編集者たちが、はじめて執筆者たちに見せた日本語の訳文は、どんな形で発表されたものだったろうか。

水野清は、一九五一年二月号の『文学』で、「言語学におけるマルクス主義について」と「言語学の若干の問題について」がまとめて『前衛』八月号に訳載され、「同志への回答」は、「非売品としてプリントが出ている」と述べている。この『文学』の同じ号に、さきほどの「スターリンの言語観」を寄せた小林英夫は、「民主主義科学者協会の言語問題研究会から謄写刷りで出された」ものに拠って書いたことを示唆している。

これらのことから、「スターリン言語学」は、雑誌のようなまとまった形ではなくて、小規模な謄写刷りの小冊子などでひろまっていたのではないかと想像される。当時はワープロなどなかったから、これらの謄写刷りは、すべて手書きだったはずだ。

また、スターリン論文をめぐる議論は、単に誌上に発表された文章によってだけでなく、種々の集会でも行われたらしい。

たとえば寺沢恒信によれば、一九五〇年「九月三十日（土）」の午後一時から、東大法文経二十九番教室で、民主主義科学者協会東京支部の主催によるシンポジウムが開かれた。論題は「スターリンの言語論」であって、これをめぐって、言語学、哲学、歴史学その他の研究者多数の活潑な討論がおこなわれた。まず、大島義夫、石母田正、三浦つとむの三氏の報告があり、つづいて、「史的唯物論の公式の検討」「言語の本質、階級性、発展の仕方」「民族問題」「民族語と国際語」の諸テーマについて逐次討論をおこなった」という。（寺沢恒信「スターリンの言語論をめぐる」『文学』五一年二月号）

このシンポジウムの主催者と報告者の顔ぶれからみて、『理論』別冊の『言語問題と民族問題』はこの討論をまとめたものと思われる。

この段階での読まれかたは、まだ左翼の活動家や研究者の小さなグループの中にとどまっていたが、一〇月になって『中央公論』が時枝誠記の「スターリン「言語学におけるマルクス主義」に関して」を発表するにおよび、「スターリン言語学」はひろく言論界の話題として登場するいとぐちをつかんだ。

しかし、それは、「スターリンと言語学」という、この予期しない結びつきに支えられたセンセーションに乗ったものであり、ソビエト言語学というものの性格、その背景の中で、スターリン論文がどのような意義をもっていたかについて注意を喚起するところまでには至らなかった。

しかし次の一月に、『思想』が村山七郎の「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」を発表することによって、スターリンの批判の対象となった「ソヴィエト言語学」とは何

であるかが、まとめて説明された。

もっともそれに先立つ四年前の一九四六年、すなわち敗戦の翌年には、ブイコフスキー『ソヴェート言語学』という訳書が現われていて、「ソヴィエト言語学」についての知識を提供していたが、いったいソビエト言語学の、どこに問題があるかということは、スターリン論文が指摘する「誤り」と対比してみることによって、よりよく理解されたにちがいない。いずれにせよ村山論文は、議論になっていることがらを、ロシア語の文献にもとづいて、ソビエト言語学のコンテキストの中で解説したはじめてのものである。

次の年、一九五一年の二月の『文学』の特集号「言語と文学」は、小林英夫「スターリンの言語観」をはじめ、「スターリン言語学」をとりあげた数篇の論文を掲載した、事実上の「スターリン言語学」特集号の観を呈していた。

以上のような一般誌や総合雑誌ではなく、文芸誌や大学の紀要類にもスターリン言語学をめぐる感想や論評が発表されていたはずである。そのようなものの中から、私が今なお所蔵しているのは、一九五一年一月刊行の『東京外国語大学論集第一号』で、そこに掲載された東郷正延「スターリンと世界語の問題」は、スターリン論文発表の前後の状況を、よく整理して述べた有益な論文である。

スターリン論文がほとんど忘れられかけていた末期のソ連で、三七年の言語学者の粛清劇と、スターリン論文が発表に至る頃の舞台裏を語るような内幕物として、M・ゴルバネフスキーの『はじめにことばありき……——ソビエト言語学のあまり知られていないページ』（一九九一年）や、V・アルパートフの『ある神話の歴史——マルとマル主義』（一九九一年）が、多くの資料や風評にもとづいて出版されたが、これらの比較的若い時代の著者たちは、おそらく、自らがその時代を経験していないだろう。

この点ではむしろ、自ら、その同時代の中でスターリン論文を受けとめた、あるいはマル主義とスターリン言語学との間の板ばさみになって困惑した、当時の日本人たちのこれらの文章の方が、むしろ緊張感と魅力にあふれているのは当然のことである。

翌一九五二年一二月には、季刊雑誌『理論』（理論社刊）の別冊第二集として、民主主義科学者協会言語科学部会の監修で『言語問題と民族問題』が刊行された。その中心テーマには「スターリン論文の影響」が掲げられていた。

スターリン論文に注目し、この種の刊行物に執筆した人たちの多くは、この論文からカナモジ運動、ローマ字運動など、日本語表記の改革運動への励ましを期待したらしいが、スターリン論文は、この点では何も寄与しなかった。いな、それどころか、逆に民族語を唯一の言語の存在形態であると確認するなど、全般的に言語への保守的な態度を正当化する効果すらもっていたのには、日本の左翼知識人たちは困惑した。スターリン論文が励ましを与えた、そのような言語問題における保守主義の効果が特に著しく現われているのは、『文学』二月号の、蔵原惟人の「今日における言語の問題」である。スターリン言語学の中に表われた、民族主義的な保守の感情を、直観的に受けとり、そこからまた、日本の「国語問題」への保守的な態度への励ましを見出した敏捷さの例として興味ぶかいものである。日本共産党の幹部であった蔵原の言語的保守主義はまた、党の言語的保守主義でもあった。

## (2) 注目すべき時枝誠記の「感想」

以上のように、スターリン言語学は、『プラウダ』に発表されてから、ただちに日本に

も知られ、注目を集めた。日本は、スターリン言語学に敏感に反応した国の一つであろう。スターリンが何を批判したかを、ロシア語の文献を用いてその背景の説明をし、それによって、「ソビエト言語学」がいかにか誤まっていたかを説く人もあれば、スターリンにあわせて、誤まって追隨していた「ソビエト言語学」からの離脱の努力を表明する人もいた。

いずれにせよ、スターリンは、言語の階級性を否定して、「単一の人民（民族）の共通語」の強調を以て、それを真にマルクス主義的な立場だと言ったのであるから、その保守性は、マルクス主義的言語学建設の道を求めていた人たちへの痛打となった。この人たちの中で、とりわけ炯眼な人は、スターリン論文がソビエト言語学に終えんを宣告したものだと察知したのである。この保守性は、スターリンがヒトラーとの間に結んだ、独ソ不可侵条約の反動性にもたとえられるかもしれない。日本のジャーナリズムがスターリン論文をテーマに特集号を組んだのは、日本の左翼の言語学者、歴史学者、哲学者などが、言いしれぬとまどいを感じた、その表現だったのである。かれら、とりわけ上記の雑誌、『文学』、『思想』の編集者たちは、「スターリン言語学とは何か」という問いを自らたてて、その答えを有識者に語らせて、当時の思想状況を後世に残すという、まことに貴重な役割を果たしたのである。

そのような状況の中で、『中央公論』の編集者が、時枝誠記に感想を求めたのは、いい着眼点であったと言える。

時枝はその論文の書き出しで、それを執筆するに至った動機を次のように記している。

「中央公論の編集者が、スターリン氏の「言語学におけるマルクス主義について」と題する論文の日本語訳を持参されて、これについての私の意見を求められた」と。

この「日本語訳」は、『前衛』に掲載されたものか謄写刷りのものだったのか、あるいはその他の、もしかして何らかの手書きの訳稿だったのかは明らかでない。

とにかく、この「日本語訳」を読んだときの時枝の感想は次のように奇妙なものだった。

「ありのままに云つて、私はこの感想文の執筆を承諾したことを、何度も後悔した。それは、原著者の援用した言語理論と言語に対する見解として多くの疑問が感ぜられる一方、彼が政治的立場から言語に課した多くの重要な意義について、好意を寄せることが出来るやうに思へたからである。」

これは奇妙な文章である。「好意を寄せることが出来るやうに思へたから」、「この感想文の執筆を承諾したことを後悔した」というのであるから。ひょっとして『中央公論』の編集者は、スターリン論文に対する全面的な批判、もしくは反論を時枝に期待し、思いっきりたたいてくださいなどと言って、この原稿の依頼をしたのではないかと想像される。

時枝は、とにかく、少なくとも左翼人のようには、スターリン論文をありがたくおしいただくようにして受けとる義理はなく、それまで述べてきた自らの言語観が、スターリンからいぢるしく背反することを恐れて、つじつまを合わせる努力をする必要もなかったはずだからこそ、編集者はこの人を選んで、「感想文」の依頼をしたのであろうし、時枝もいくぶん構えてスターリン論文に対して向ったのであろうが、そこに見出したのは、意外にも「好意を寄せることが」できる多くのことであつたらしい。

時枝はこの「感想文」で、自らいくらかは言語政策論にかかわったというたちばから、同じく、言語政策の掌にある人としてのスターリンの「理想」を検討するという態度でのぞみ、他方では、言語の本質論にかかわって、疑問点を指摘している。そして、この指摘

にはなかなか鋭いものがあり、「スターリン言語学」に対して表明された「感想」としては、その頃の日本で最も適切ですぐれたものであったのではないかと思われる。

私が、時枝の指摘が、鋭く、すぐれていると感じるのは次の二点である。

第一に、時枝は、スターリンが、言語を上部構造に属さないときっぱり言いきって、この面倒な問題そのものの存在をもみ消したことに疑問を呈した点。第二に、そのことから当然帰結する、言語は「それ自体の内的発達法則に従って」発達するとした観点に同意できないと表明した点である。

第一の点について、時枝は、言語が上部構造に属さないことになる、それは文化にも属さないことになるという。そのことを時枝は、「言語を人間の文化とは質を異にした別物のやうに考へてゐることに多くの疑問を持つてゐる。言語は、いはゆる上部構造ではない。しかし人間の文化以外の何ものでもないといふことは、マルクス主義理論にとっては都合の悪いことかも知れないが、問題はそこにあるやうである」とするどく指摘する。

また、言語が上部構造に属さないということから、言語は階級的でなく、民族のもので単一だということにスターリンが論をすすめて行ったことに対しても時枝は反対している。いわく、「言語の階級性は言語の必然であつて、これを否定して〔民族語の〕単一説を主張するのは、希望と事実を混同した一種の観念論にすぎない」とかえってマルクス主義者をたしなめるほど、ラジカルである。

もっとも、時枝がここで念頭に置いている言語の階級性は、たとえば「平安時代の源氏物語や枕草子の言語が、宮廷サロンに属するこれら作者の物の考へ方や感情を反映して、当時の庶民階級の言語とは異なつたものであつた」という理解にもとづいている。

ここで時枝が理解している「階級」は、より「階層」に近いものであるが、しかしここで歩をとめず、さらに「同一社会内に異つた物の考へ方をし、風習を持つ階級が対立すれば、当然言語も対立せざるを得なくなるのである」と、いっそうラジカルな一歩をすすめている。

私が時枝の指摘の中で、言語学の方法論にふれて最も重要だと思うものは、上部構造から外された、それ自体としての言語の内的発達法則を考えるのは、「いはゆる言語有機体説の援用」と考えられるとした点である。

このことを時枝はこの長くはない文章の中で三度もくりかえして強調している。その中の一つを引用すると、「この論文の著者が、言語をことさらに文化の範疇から除外して、民族の思想交換の用具として見たのは、伝統言語学の言語有機体説がそれに便宜を与へた結果ではあらうが、文化をブルジョア文化とプロレタリア文化とに截然と分けなければならないといふ見解が、言語の所属を困難にさせたのではないかと考へられる・」（傍点は田中）時枝はここで、スターリンがマルスを批判するにあたって、「伝統言語学に支持を求めている」こと、言いかえれば、マルクス主義を裏切るか、少なくとも骨抜きにした上で伝統言語学を復権していることをするどく見抜いている。この「伝統言語学」を、当時のソビエト用語で言いかえれば、「ブルジョア言語学」ということになるであろう。

ここで「伝統言語学の言語有機体説」と、時枝が言うとき、一九世紀言語学の言語有機体説はもとより、ソシュールとその後の構造主義すらもすべて含めて言おうとしていたことは明らかである。

時枝は全体としては、スターリン論文に次のような感嘆とも言える評価を送っている。

「蛇足ながら私は思ふのであるが、言語政策論を展開するのに、ス氏がこれほど大がかりに言語学の理論を批判し、援用したことは、多とすべきであつて、日本に於ける国語政策論者の深く学ぶべき点ではないかと思ふ」と。自らもそれにかかわっていた日本の言語政策が、いかに場あたりの一人よがりの、浅薄で貧弱なものであったかに、時枝は深く思いをいたしていたことであろう。

ここで若い世代の読者のために、時枝誠記が、当時日本でどのような地位を占めていたかを私自らの回想として記しておこう。時枝は、いまのソウルにあった京城帝国大学の教授であったが、一九四三年東京帝国大学に移り六一年に定年退官した。私の高校、大学生時代には、国語の文法教育は、ことさらに「時枝文法」と称されていた。それは、時枝教授を頂点とするその信奉者や弟子たちのピラミッド状のネットワークが全国に張りめぐらされ――と高校生、大学生の間でもまことしやかに語られていた――、単に「国文法」を教えるのではなくて、「時枝文法」が教えられていた。熱心な国語の教師は、中学、高校の教壇上においてすら、時枝の名に言及せずして国文法を教えることはなかった。今のような時代には想像するさえむつかしいことかもしれないが、今日の生徒がサッカーや野球の話をするくらい熱心さで、橋本文法と時枝文法のちがいを、教師の口うつしに語り伝えたのである。ちなみに私の高校での国語の先生は旧派、すなわち橋本文法派であり、共産主義者だった。私はこの人の授業で、ただちに音韻の概念を理解したので、大学に入ったときには、難なくトルベツコーイの音韻論も理解したのである。

私はそういうような話から、ピラミッドの頂点にボスとして君臨する時枝さんには前もっていい感情を持っていなかった。これこそが、かのスターリンの言うアラクチェエフ的体制ではないかと。

しかしあるとき、当時一橋大学大学院における私の先生、亀井孝が、「キミ！ 時枝さんに会わせてやろう」と言って、私と東京駅で待ちあわせた。時枝さんと言われる紳士は、冬のオーバーを着ていて、九州行きの寝台車に乗り込むところであった。九州大学での集中講義に向うためであったと聞いていた。私の先生は、そこで時枝さんに声をかけて列車から降ろし、プラットホームでしばらく立ち話をしていた。私を時枝さんに紹介すると、「キミは遠くから見ている」と言って私を追いやり、二人で何ごとかヒソヒソと話していた。その時私がなぜ東京駅に行ったかと言うと、安保反対のデモの場所からそこへ行くのに便利だったからである。私は機動隊との乱闘を覚悟して、ひどい服装をしていた。

時枝さんは、私の先生に比べればはるかに常識ある温厚そうな人柄に見えたから、それ以後はあまりアラクチェエフだとは思わなくなった。それは安保闘争が高揚した六〇年頃のことだったと思う。時枝さんは六一年に東大を退官し、六七年に亡くなられた。

私が今のような研究をやるようになってから、亀井先生は、時枝さんがもう少し長く生きておられたらキミと論争させたかったなあ、残念だと、しばしば口にされるたびに、私は心のうちでまっぴらだと思っていた。しかし、今回あらためて、時枝論文を読むに及び、亀井先生の思いつきは、理由のないものではないと感じるようになった。これからもスターリン論文が話題になるときは、時枝誠記が書いた「感想」を忘れてはならないと思う。

時枝論文にすぐ続いて、『思想』一月号に村山七郎「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」が現われた。村山論文は、時枝論文を受けて書かれたとはその発表時期からして考えにくい、――村山がこの論文を執筆していた頃、時枝論文を見ることはできなかつ

ただろうから——しかし、その頃、言論界には、スターリン論文の背景と目的を知ろうという需要があったはずであるから、村山論文はその需要に応ずるためのものであった。

村山氏——私はこの人のおかげで、ドイツに留学できた——は、ソ連からの亡命モンゴル語学者ニコライ・ポッペによるソビエト言語学の評価を手がかりに、主として、スターリンの批判の対象になった、マルのヤフェット語理論を批判的に紹介した。氏は、一九五二年に、民主主義科学者協会が一種のスターリン論文特集として編んだ『言語問題と民族問題』に、「ソヴェト言語学」と題して、今度は主として、『プラウダ』紙上にスターリン論文が発表されるに至った事情について述べている。

村山氏は、本物の言語学者でアルタイ語学者でもあり、かつロシア語の文献に即して、ソビエト言語学を紹介したから、当時としては大変重要な役割りを果たしたのである。

### (3) スターリン言語学に力を得た保守主義

マルの名と結びついた「ソビエト言語学」は、戦前、戦中の日本でそれほど有名なものではなかった。それを有名にしたのはスターリン論文であって、スターリンはそれを否定するために、まずマルを有名にしなけりならなかった。しかしそのことある以前、すでに日本に知られていたことはたしかである。戦争中（一九四四年）に刊行されたタカクラ・テルの『ニッポン語』は、マルの名はあげていないが、この本がマルの説にもとづいていることがあきらかにわかる個所がある。それはとりわけ、話しことばに先立って、「手コトバ」「身ぶりコトバ」があったと説いているところ、また、日本の封建時代の身分によることばのちがいは、「単語だけでなく、文法から発音にいたるまで、大きくちがっていた」として、言語の階級性を強調しているところにあられている。

しかしタカクラ・テルのために特に言うておかなければならないのは、この『ニッポン語』は、ソビエト言語学を下敷きにして、その宣伝のために書かれたのではなく、言語の進化についての、オットー・イエスペルセン、ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツなどの研究を、その名にきちんと言及しながら、学問的に述べているところだ（いったい、いまの日本の職業的言語学者のうち、上田万年の先生でもあったガーベレンツをきちんと読んだ人、読みこなせる人がどれくらいいるだろうか）。そこに述べられている、「私たちは、おのずからではない、もっと積極的な批判をヨーロッパの言語学に加えなければならない時に立ち至っている。しかし、そのためには、何より、まず、私たちのニッポン語そのものの本質を、底まで明らかにしなくてはならない」という愛国的語調は、戦時中のことでもあり、いくぶん強すぎるように思われもするが、しかし、当局にこびているわけではない。

思うに、タカクラ・テルの、このヨーロッパ言語学への批判的な立場を築く上で、マルの言語学が大いに貢献したと思われる。マルの「ヤフェティード言語学」誕生の大きな動機の一つが、インド・ヨーロッパ語比較言語学の解体というところにあったからだ。しかし、タカクラは、どこから、マルの著作を読んできたのだろうか。チェーホフやロシアの民話の翻訳もしているタカクラだから、きっとマルを原文で読んだにちがいない。またそうでなくとも、マルの著作は、ヤフェット理論に関するものは一九二三年にライプツィヒから、言語起源に関するものは一九二六年に、ドイツ語で出ていた。

また、スターリン論文が現われて、ソビエト言語学を否定するよりも四年前に、日本で

はソビエト言語学を紹介した、グイコフスキー著『ソヴェート言語学』が刊行された。奥付によると初版は四六年一月一五日、再版はその二年後である。再版は、「ソヴェート言語学」を副題とし、題名は「唯物論言語学」と改められて、そのような新しいカバーをかけて発売されたが書物の本体そのものは同じである。訳者の序文によれば、一九三六年には訳稿ができていて刊行するはずであったという。この訳書には、表題に出ている著者のほか、戦後も生きのびて、マルの言語学を支持しつづけている、アバエフのすぐれた論文が二篇おさめられている。私が最も学ぶことの多かったのはアバエフからで、かれが得意とした語源研究の方法論に関する論文などは、七〇年代にもアカデミックなリーディングズとしてドイツで刊行されている。

スターリン論文があらわれる以前に、マルの言語学が、いくぶんでも日本に知られていたとしたら、この訳書を通じてであろう。しかし、タカクラ・テルは、この翻訳を介さず、ロシア語、あるいはドイツ語のテキストでマルを知ったことは充分あり得たことである。

タカクラ・テルにとって、マルの「ソビエト言語学」がどのような形で影響していたかは、敗戦の前の年に出版された『ニッポン語』（北原出版）に見ることができる。この本は、決してマルの学説を教条として書かれたものではないが、それを理論的な励まし、精神的なささえとしていたことは、随所に見ることができる。

タカクラ・テルの文章は、たとえば次のようだ。「ニッポンは、アスカ朝時代に、シナからカン字を輸入し」、「エド時代の末までつづけた」「シナの教育法のエイキョウを受け」てきたため、「かんじんのニッポン語そのものを教え、クンレンするためには、ごくわずかの努力しか払われなかった。」

タカクラの国語教育論は、表面的なアジテーションではなく、当時の、国語学や、世界の言語学の状況をよくわきまえた上で行われた。そして、世界の言語学の中に、ソビエト言語学を代表するものとして、マルの新言語学説も入っていた。しかし、それは戦争中のこととて（当時は、出版物は必ず当局の検閲を受けた上で、紙の配給を割りあてられないと、陽の目を見ることができなかった）、「ソビエト」、「マル」の名は当然言及されなかった。

タカクラ・テルの日本語と日本文化への批判が、いかに、マルの学説から励ましを受けていたかは、敗戦から九年たって刊行された『ニッポンの女』にもっとはっきりと見られる。

——ニッポンの封建制にわ、ひじょーにきびしい「身分層」の区別があつて、その「身分層」により、それぞれ、ことばがちがわなければならなかった。そこで敬語という、よその国にわめずらしいことば使いが生まれたものだ。

敬語わ、話しかける相手の「身分」によって、それぞれ、ことば使いおかえなければならぬという、とくべつの「文法」で、文明国のことばからわ、も一、ほとんど、姿お消している。しかし、今の文明国のことばも、古代にわ、多くのものがそ一いうわずらわしい形式おもっていたものだということが、ソ同盟の言語学者で、「ヤフェチート言語学」の創立者である、マルの研究であきらかにされた。

そ一いう、わずらわしい形式わ、やばん時代のことばの特長だから、ことばが進化するにつれて、おのずから、消えてしまう。ただ、とくべつのことばのばあい、海のなかの小島のよ一に、それおもったまま、ぼつんと、とりのこされる。たとえば、フランスとイ

スペインとのさかいのピレネー山脈のなかに住んでいる、バスク人のことばわ、この「敬語」の形式お、かんぜんに、のこしている――

タカクラ・テルが、このような確信をもって、言語のいわば階級論を展開した背景には、マルの、「言語は階級的である」というテーゼのささえがあったからである。

今私の手もとにある『ニッポンの女』（理論社）は一九五四年の刊行である。スターリンによるマルの否定が全面的に行きわたったこの年になっても、タカクラは、マルの名を出しながら言語をかたることにはためらいを見せなかった。それだけでなく、「スターリン論文」には一度もふれたことがなく、何ごともなかったかのように過ぎて行った。「スターリン言語学」を特集した雑誌にも、一度もタカクラ・テルの名を見出すことはできない。

しかし、『文学』の一九五一年二月号に、蔵原惟人は「今日における言語の問題」を寄せ、そこで、マルを批判したスターリンの所論をほとんどすべて歓迎して受け入れるとともに、タカクラ・テルを攻撃した。

スターリンが、「マルクス主義を単純化し、卑俗化したもの」であるとしたマルのヤベテ言語学説よりももっと単純化され卑俗化された「マルクス主義的」な言語階級論の例として、タカクラ・テルの『ニッポン語』がとりあげられたのである。

蔵原は、この『ニッポン語』が「日本語は世界でもっとも進化した言語だと」書いているのは「民族主義的」だとし、また、タカクラの「言語進化論」が、「言語はひたすら単純に、ひたすら「易しく」「わかりやすく」ということにつきていて」、その「ブルジョア的急進主義はかえって人民から遊離する結果」になると批判している。

蔵原は、スターリンを使ってタカクラの階級的言語観を批判し、「豊富にされた多くの表現や言葉は、それがいかなる階層によってつくられたものであっても、すでに民族語としての日本語の基本的な蓄積のうちにはじまり、民族全体の共通の財産になっているのである」と、スターリンにすっかり同調し、「我々がわが民族の言葉を破壊や歪曲から護り育てるためにたたかう覚悟がなければならない」として、タカクラを強く批判し、戦後日本の言語的保守主義の基礎を作ったのである。

スターリンは、日本の言語的保守主義者に心強いはげましを与えた。戦後日本の言語的保守主義、復古は、スターリン言語学を受容とともに最初の一步を歩みだしたのである。

おしなべて日本の左翼歴史家やいわゆる進歩勢力が拠っていた階級観は、かれらがイメージしていた「マルクス主義言語学」の核心部分をなすものであったが、スターリンは「諸問題」において、そのすべての土台を一方的につきくずしてしまったのである。

#### (4) 読みつがれるマル

スターリンによって「ソビエト言語学」が否定された後、より常識的で受け入れやすい「スターリン言語学」の方に人々は移って行った。スターリンの述べるところは穏当で、小林英夫の表現をかりれば「謙虚」であったから、いささかも「マルクス主義的」であるとか、「ソビエト的」であるだのの修飾語をつける必要はなくなった。

そもそも、科学は普遍的なものであるから、それに国家や、セクトの名を冠することが異常なのだという主張にはそれなりの根拠がある。しかし、社会や意識の革命にとって、言語の理論に固有の立場や目的がないというのもまた奇妙なことである。何よりも、言語が異なるというこのことじたいの中に、それに従事する学問の一〇〇パーセントの普遍性

をはばむ要因がひそんでいるからである。しかし人々は、ここで心ゆくまで、脱イデオロギーの自由を満喫したのである。

しかし、それが手放しで受け入れられないものであることを、かえってマルクス主義の全く圏外に立つはずの時枝誠記が鋭く問題点を指摘することによって表明したことは、すでに見た通りである。

ところがマルの学説は、こうした、「ソビエト言語学」そのものとしてではなく、それとは全く別に一般の、あるいは子ども向けの書物の中で読まれ、今も読みつがれている。

それはイリーン、セガールの共著『人間の歴史』においてである。この、興味ぶかく書かれている科学ものごたりは、日本ではいくつもの翻訳が出ている。今見ることのできるものは、岩崎書店の「イリーン・名作全集」版（和久利誓一訳）、岩波少年文庫版（袋一平訳）とその愛蔵版、そして角川文庫版の三種類であるが、私が中学生であった四七、八年頃読んで、その装丁までおぼえているのは別の出版社のものであったらしい。どうやらそれは、一九五三年の角川文庫（八住利雄訳）の前身だったと思われる。

そこには原始の言語について、このように書かれている。

「人間にはまだ口をきく特別な器官がなかった。だからからだを使って話したのである。顔の筋を動かして話し、肩で話し、足で話したが、いちばんよく話をしたのは手だ。」「原始人もやはり舌で話すことはできなかった。しかし手があった。これを使って他の人びとと話しあった。げんにかれは手で仕事をして、舌は仕事には必要でなかったのだから。そしてことばは、労働から生れた。」「いっしょにする労働は、人間に話すことを教え」たからである。

ここで「人間にはまだ口をきく特別な器官がなかった」という意味は、口はあったが、きちんと言語音を発するまでには、舌も声帯も発達していなかったという意味である。こう理解すると、ことばが今日のように口から思いのままに出る以前は、からだ全体で、手で、身振りで話すしかなかったというマルの説がよくわかるのである。

この子供むけの本には、マルのみならず、メシチャニノフの研究が紹介されている。

メシチャニノフの研究が、こども向けにどう紹介されているかを示そう。

「ことばの発掘をつづけて、研究家たちはいちばん古い音声言語のかけらをみつけた。そのようなかけらについて、メシチャニノフ博士はその著書のなかでこう言っている。

たとえば、シベリア北東部に住んでいるユカギール人には、文字どおりにほんやくすると、<ニンゲンシカコロシ>という一つの単語がある。こんな長い単語は、発音するのもむづかしいが、その意味を理解するのはもっとむづかしい。

これでは、だれがだれを殺したのか、さっぱりわからない。人間がシカを殺したのか、それともシカが人間をころしたのか。それともまた、人間とシカがいっしょになって、べつのだれかをころしたのか、あるいは、誰かほかのものが人間とシカを殺したのか。だがユカギール人にはわかっている。<人間がシカを殺した>といたいときに、この単語を使うのである。……

人間がじぶんのことをまだ「わたし」と名のらなかつた時代、働き、狩をし、シカを追って殺すのが、自分だ、ということはまだはっきり意識していなかつた時代、そういう時代にこの単語が生まれたのである。かれはシカを殺したのはじぶんではなくて、部族全体であり、いや部族でさえもなく、世界を支配している目に見えぬあのふしぎなものであ

る、と考えていた。……

＜ニンゲンシカコロシ＞という言いあらわしかたには主役がない。それにまた、人間とシカのどちらが主役なのか、原始人にはまだわからなかった。何しろ、かれは、シカの先祖でもあり、人間の先祖でもある、何かふしぎなまもり神が、人間にシカをめぐんでくださる、とっていたのだから。」

ここで、右に示した訳文について、ことわりをしておかねばならない。和久利、袋の訳には、それぞれ誤りとは言えないまでも、意味がよく汲みとれていない個所がある。前者が、「仕事をするのは手であったが、仕事のためには言葉も必要なのであった」と誤っているところを、後者は「かれは手で仕事をして、舌は仕事には必要でなかった」と正しく訳しているかと思えば、前者が「＜ニンゲンシカコロシ＞という単語」と適切に訳しているところを、後者は「＜人間シカ殺し＞ということば」と、メシチャニノフの意図をつかみ切って訳せていないといったぐあいである。そこでこの訳文は、二種類の訳文のいいところをとって、わかりやすいように私がまとめたものだ。

長い引用をあえてしたのは、ここに子供むけにやさしく語りかけられているスタイルの中に、マル、メシチャニノフが人間の言語の歴史を再構しようとした手法の特徴がよく表われているからである。

しかし、幼い読み手は、これがソビエトの言語理論にもとづくものだということなどには関係なく、一般的な読み物として悠久の太古の世界に思いをはせたのである。今、私の手もとにある岩崎書店全集版は一九六九年の、岩波少年文庫は一九五九年の、愛蔵版は一九七一年の刊行で、角川文庫版に至っては、一九八〇年に一六版を数えている。スターリンがマル、メシチャニノフの言語学をほうむったあとも、その理論は、子供たちに読みつづけられていたのである。

ところで私はいま、その原作の発行年代を知りたくて、二つの日本語訳の訳者あとがきを見ると、いずれも一九四〇年だと書いてある。スターリンの否定した、マル、メシチャニノフ理論全盛時代である。

私はさらに確かめるために、ソビエト百科辞典第三版（一九七二年）でイリーンの項目をしらべてみた。そこには、かれの代表作が列挙されているが、一九三六年までの作品で終っており、『人間の歴史』はあがっていない。また『岩波西洋人名辞典』のイリーンの項目には、一九五〇年までの著作があげてある中に、『人間の歴史』が出ていない。ふしぎなことである。『人間の歴史』は、イリーンの著作の中では「一番の大作」（袋一平の解説）のはずだからである。

これは偶然そうならただけのことだろうか。それともソ連では、この作品が、否定されたマル、メシチャニノフ理論によって書かれているために、ソビエト大百科はこの作品を無視したのだろうか。そして日本の人名辞典もそれにならったのだろうか。

それにもかかわらず日本では、私がそうしたように、知識欲の強い子供たちによって、中学校の図書室で、村の公民館で今なお読みつがれ、原始の人間のことばに思いをはせるきっかけを作っているのであろうか。私は人類の歴史を見はるかすパノラマを与えるこのすばらしい名作が、ロシアでは消えても、日本では消えずに読みつがれてほしいと願っている。

おわりに スターリン論文とは何であったか

ソビエト体制に自由をもたらしたのは、一九五三年のスターリンの死であったと、通常は考えられている。なるほどその翌年には、それに合わせるようにして、エレンブルクの『雪どけ』が発表され、この名で象徴的に呼ばれる新しい時代がはじまり、五六年には、フルシチョフの秘密報告によって、スターリンとその時代のすべてが否定された。このようにして、自由の時代がはじまったのであると。

しかし、ソビエト・イデオロギーを自らの手で否定し、それに終えんを告げたのは、スターリン自身であった。それを、じつにいていねいな方法を用い、学問体制批判という形で行ったのが、五〇年の『マルクス主義と言語学の諸問題』であった。

この論文によって、ソ連邦の言語学界の上に暗く垂れ込めていた暗雲は一挙にとり払われて、明るい自由の陽ざしがひろがって行った。この陽ざしは、言語学と呼ばれる小さな一角を照らしたのみならず、哲学、歴史学、民族学など関連する諸学にも恵みを及ぼして行った。

学界は、歓呼と拍手をもって、同志スターリンの学問的「偉業」をたたえ、その後発表された論文のどれをとってみても、スターリンの名と、この「言語学」についての著作が引用されないページをさがすのはむづかしいほどであった。

このスターリン論文発表の数年後には、かつて「ブルジョア言語学」と称されていた欧米の言語学の紹介や翻訳が、ソ連邦の言語学市場にあふれ出し、またたく間にそこを満たした。五六年には、もはや、スターリンの名に言及する著作はめったになくなり、五七年には完全に消えた。次いで、スターリンの名前と、この論文も忘れ去られて行った。

スターリン論文の役割は、言語学にマルクス主義を適用することが無効であり、ソビエト言語学が敗北したことを宣言することであった。ソ連の言語学に自由を与えたスターリンの役割はそこで終り、そして、あれから五〇年たった今、かれの「言語学の論文」は、想起されることさえなくなったのである。

忘れてはならないことは、ソ連邦で三〇年間にもわたって演じつづけられた「ソビエト言語学」劇に幕をおろし、その終結宣言を行ったのは、スターリン自身であったということである。これによって、ソビエト言語学は終結はしたが完結はしなかった。

それではなぜ、一九五〇年というこの時をえらんで、ソビエト・イデオロギーの敗北宣言とも言えるこの論文が発表されたのであろうか。それは、マルの追随者たちに抑圧されていた、大多数を占める健全な言語学者たちがスターリンにとり入って、かれらの意見を代弁させたからであろうか。「新聞紙上で意見を述べるように」すすめた「青年同志諸君のグループ」に一方的に利用されて、アラクチェエフ体制のとりこわし役を演じたのだろうか。

もちろんそうした背景もあっただろう。だが、ソビエト言語学が、いな、世界の言語学が、その役割を大きく変えねばならないことを迫る予兆はすでにあつた。それは、ソ連におけるサイバネティクス——ロシア語ではキベルネチカと言う——への大きな、さしせまった需要と期待である。

一九四八年に、アメリカではウィーナーが、サイバネティクスの理論を発表すると、ソ連ではこの方面におけるアメリカへのたちおくれが深刻に意識されるようになった。それ

は情報処理からはじまって、機械翻訳、コンピューター開発へと発展して行く技術革新に結びついて行くものであった。

ソ連がアメリカに対抗し、時には先んじることができ、五七年にははやくもスプートニク一号を打ち上げることができたのは、この方面での劇的な速さでの進歩があったからである。

「マルクス主義言語学」は、こうした技術開発にほとんど何物をも寄与しないばかりでなく、マルやメシチャニノフの「言語古生物学」への没頭などは、かえってそれにブレーキをかけるくらいであった。新たな状況のもとで、ソビエト製「マルクス主義言語学」は、もはや、ソビエト自体にとって負担になってきたのである。

こうした背景を視野に置いてスターリン論文を読むと、言語は上部構造ではなくて、単に機械のようなものだということだが、じつに現実味をもって迫ってくるのである。「言語は機械と同様に階級性がなく、資本主義であれ社会主義であれ、同じように奉仕する」のであると。

言語を上部構造からはずし、それを文化とは別の「機械」か「道具」のようなものであると言明したときに、言語学におけるマルクス主義は敗北した。スターリン論文は、言語は文化ではないという、まさにこのことを言うために書かれたとさえ言ってもいいくらいである。

このことに関連して、大変興味深い事実注目しておかなければならない。スターリン論文が発表されたのと時を同じくして、アメリカでもまた、言語は通常の文化とは異なるものだという見解が発表された。当時そのことに強い関心を示した石田英一郎は、アルフレッド・クローバーの論文を引きながら、次のように述べている。

言語は文化構造の全体の中にあって、技術的=経済的な「実在の文化」にも、規範的な「価値の文化」にも属せしめることはむずかしい。クローバーは前記の三分法の提出にひきつづいて、「社会的文化・実在の文化・価値の文化の三分区分は明らかにすべてを尽しているものではない。言語は疑もなく第四の主要成分と認められるべきものだ。言語が他の三者と異なっているのは、その特質が言語にそれ自体一つの目的としてではなく、むしろ他の三者に奉仕するメカニズムとしてのはたらきを与えている点にある」と述べている。ところがそれとまさに時を同じくして、一定の言語は下部構造=上部構造の変革をこえて独立した生存を保つという事実から、言語は唯物史観における基礎構造にも上部構造にも入らない独自の領域を形成するという断定が、マルの言語理論を批判したスターリン名義の論文「言語学におけるマルクス主義について」に発表された。

ここに引用されているクローバーの見解がはじめて発表されたのは一九五〇年四月のことだという。スターリン論文もまたこの年の六月からプラウダに登場した。このことから石田は、「文化理論の上で究極的には相一致するこのような見解が、言語をめぐって米ソ両国の学界で同時に問題とされたということは、科学における真理と進歩について考える上にも、示唆に富んだ興味深い事実であろう」と述べている（『唯物史観と文化人類学』『東洋文化研究所紀要』第九冊、一九五六年）。

戦前はマルクス主義から出発し、ウィーン学派の民族学を経て、戦後はアメリカの文化

人類学に近づいた石田としては、心なごむ思想的合流の風景であったにちがいない。しかしそれは、今の時点で振りかえってみると、不気味な符合であった。

スターリン論文が発表されてから、ちょうど五〇年になろうとする今日、私たちがこの論文を読みなおしてみても考えさせられることは、人間と社会にとって、言語の持つ意味は、歴史の中で、いつも同じではないということである——一九世紀は、人類の言語が単一であることを願い、言語学もまたかつて存在していた単一の祖語を仮設し、現実にも世界語、国際語を求めたこの伝統は、二〇世紀に引きつがれた。そして世紀の末にいたって、にわかには「多言語主義」の主張がおどり出てきた。その一方で、地球上に残された言語のうちの半数がいまや絶滅への道を歩んでいる。その絶滅を歓迎するのも嘆くのも、人間にとって、言語とはなにかという根源的な問いに深くかかわっている。

ソビエト言語学は、全人類史の過程における言語のありかた、とりわけ意味の世界を復元する作業をすすめるうちに、重大な事実気がついた。それは、言語的意味の外被をなす、呪術的、宗教的、イデオロギー的要素が刻々と失われ、中核をなす技術的意味がますます重きをなして行くという事実である。マル派のアバエフが、「イデオロギーとしての言語と技術としての言語」でこのことに注目し、「言語は物質文化に近づきつつある」と鋭く指摘したのは、一九三四年のことであった。一九五〇年のスターリン論文はそのことを確認し、言語を上部構造（文化）からはずすことによって、一つのイデオロギーに終えんを告げた歴史的記念碑であった。